THE CENTRAL REVIEW

中央公論

大正六年一月廿九日印刷納本
大正六年二月一日發行（毎月一回一日發行）

1917
no. 2

二月號

第三十二年第二號　第三百四十號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ





逝ける文豪を記念すべき不朽の金字塔

‖漱石先生全傑作の精粹此一巻に在り

夏目漱石傑作選集
色鳥

‖増版出來‖

▼中版五百五十頁
▼特製箱入極美本
—津田青楓氏装畫—
▼定價壹圓參拾錢
—小包料八錢—

本書の巻頭數十頁に亙れる「倫敦消息」の一篇は先生が滯英中の傑作にして、曾て如何なる集にも掲げられず、未だ發掘せざりし寶玉とも稱すべくまことに本書の異彩也。

『我が輩は猫である』以前の『倫敦消息』に溯り、爾後十數年間に亙れる漱石先生の著作中より**最も代表的なるものを選び**、その短きは都べてを採り、長きは最も要所切所を含める部分をとりて其の前後を解說し、而してこれを歴史的に排列し以て一冊となす。堂々五百五十頁、漱石先生全傑作抄と呼ぶ可し。匆忙の世の營みに携はりて、先生が等身の作物を讀破するを難しとする人は、須らく本集に就け。我が文壇の巨匠夏目漱石先生が**藝術の精粹**は卽ち凝つて此の一巻に在る也。

東京牛込矢來中の丸
振替東京一七四二番

新潮社

電話番町長八〇九番
電話番町二二三番

津田左右吉先生著（貴族文學の時代續篇出づ）

（最新刊）

文學に現はれたる我が國民思想の研究

武士文學の時代

菊版六百七十餘頁　布製函入　定價貳圓五拾錢　送料拾六錢

鎌倉時代から江戸時代の初までの文學と國民の內生活、特に武士の思想の無遠慮なる解剖、同情ある批評である。斷片的の感想ではない。組織的の解釋である。表面の事實の考證では無い。內部的精神の透察である。別々の問題や時代々々の局部觀察ではない。一切の文化上の現象を包括し各時代を貫通した批評である。乾燥無味な學究の仕事や疎漫放縱な文士の作では無い。眞率なる研究と生彩ある描寫との綜合である。

新城和一氏新譯

ドストイエフスキイ

四六判四百頁　布製函入　寫眞九枚　定價壹圓卅錢　送料八錢

大ドストイエフスキイは全宇宙の隱れたる靈魂の秘密を洞察したる偉大なる文學者であつたのみならず全人類の愛を體現し其永久絕へざる苦痛を救はんとしたる救世主である。本書は著者が年來の努力を傾注して此深酷にして悲痛極まりなき天才の藝術、思想、人格を研究したる評傳である。地獄の苦を嘗め或は天國の光を味ひたる彼の底知れぬ力、限りなき愛は熱烈な筆を以て描かれてゐる。

（前付一の四）

發行所　東京市麴町區平河町五丁目　振替東京二〇九一四番　洛陽堂　（電話番町四二五八）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

サンデン電氣帶

電氣帶發明者
サンデン博士之像



主治効能

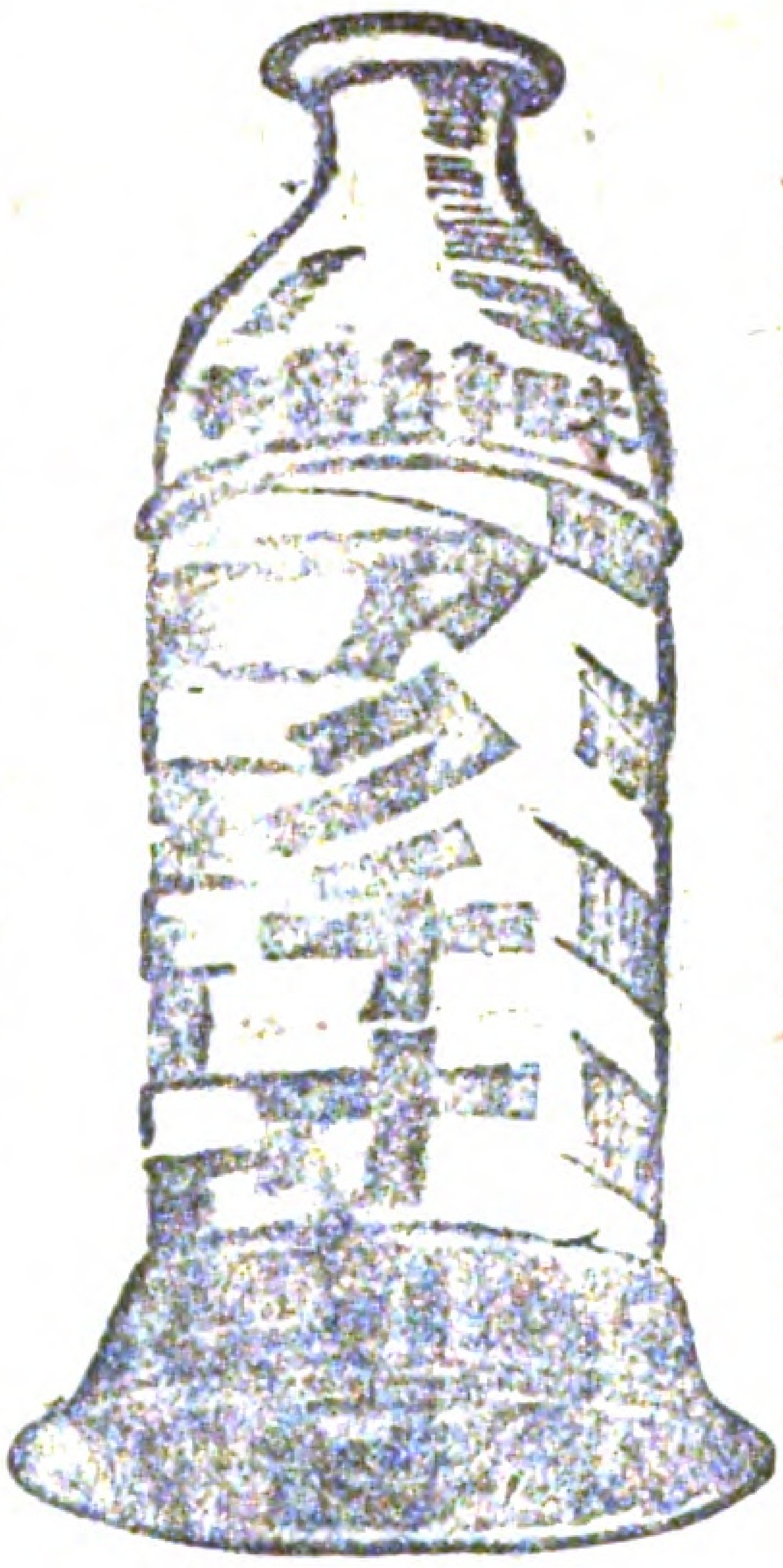
神經衰弱諸症、不眠症、胃腸病、習慣便秘、生殖器衰弱及無氣力、遺精、夢精、早漏、遺尿、慢性腎臟炎、糖尿病、一般内臟の衰弱、諸神經痛、リユーマチス、脚氣、婦人諸病、ヒステリー、貧血、月經不順、子宮病、憂鬱、脊髓、中氣、產後及病後一般の衰弱(說明書無代進呈)

●定價

和製　五圓　七圓　九圓　十一圓　十三圓

舶來　八圓　十五圓　二十圓　二十五圓　三十圓

奇効可驚



主治効能(眼、耳、鼻、咽喉、船暈、頭痛)に奇効を奏す(說明書無代進呈)

定價拾貳圓



電氣醫療感電機(一名あんま器)

●定價(大形拾六圓　中形八圓　小形六圓)荷造費送料内地五十錢　領土八十錢

本器ハ「リユーマチス」、神經痛、痲痺、腰痛、中風、頭痛、神經衰弱、肩凝等一般筋肉ノ疲勞血液ノ不循環等ニ特効アリ其他美顏術用トシテ「バイブレーター」ト同様ノ効果ヲ有スルヲ以テ電流ナキ地ニ於テ紳士淑女ノ愛好ヲ受ケツツアリ(說明書進呈)

▲凡て代金引換は前金二割御送を乞ふ

營業品目―●電話●電鈴●表示機●避雷針●醫療感電機●電池類●電球類各種●探見電燈●電線類●サンデン電氣帶●アクチナ其他電氣に關する器具材料一式直輸入卸小賣工事請負設計

●本店(東京市京橋區尾張町二丁目(銀座通東側)電話新橋二四二二番　振替口座東京一八四七三番)

●支店(大阪市東區心齋橋筋博勞町南入西側　電話南二二〇五番振口座大阪七三四四番　横濱市吉田町一ノ二九　電話一九三一番)

サンデン電氣商會

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

黒岩涙香先生譯

最新刊

縮刷

正史實歴

鐵假面

（歌三氏裝）

粗面布製表紙木版數度刷
天金美麗函入
總ポイント組
紙數六百卅餘頁

實價金壹圓卅錢　送料拾錢

小説「鐵假面」！是れルヰ十四世王朝存亡の大史實を背景として共間起伏せる**最**も**悲痛**なる**革命**の**快擧錄**也。吁何故の鐵假面、烙附の刑、人は誰、罪は何？文豪ヴォルテール始め諸史家の屢々之に想を凝したるも、其見地區々にして臆説を出でざる事永年。然るに此快擧の眞相を摑み、**巻頭**之を**史實**に**考證**し更に幾多潤節琢磨の後、**絶好**なる**讀物**として一世を驚倒したるもの卽ち本書也。加ふるに涙香先生天來の妙筆は曩に出版界を驚倒したる『巖窟王』『噫無情』に比し優る共決して劣らず自ら涙香三大名譯を成す。明治三十七年來缺本中の所、今や新裝されて縮刷版成る。是れ眞に六年新春劈頭に輝く出版界の**最驚異**にして讀書家**愛好の焦點**は必ずや**本書**の上に**結**ばれん

黒岩涙香先生譯

縮刷 巖窟王	縮刷 噫無情	縮刷 野の花	縮刷 幽靈塔	縮刷 捨小舟
定價壹圓六拾錢 送料金拾錢	定價壹圓廿錢 送料金拾錢	定價壹圓卅錢 送料金拾錢	定價壹圓卅錢 送料金拾錢	近刊

東京京橋北槇町
發兌 **扶桑堂**
振替東京壹五四七七

東京神田表保町
發賣 **東京堂**
振替東京二七〇

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中付一ノ六）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

本邦空前の佛教大辭彙第二巻出づ

各宗碩學朝野名士廿八大家題序

佛教大學編纂

賜天覽

佛教大辭彙

全部四巻 索引共

四六倍版四千八百頁挿畫精巧カット千五百各種美術製版六十葉

第二巻（サより セまで）背革天金千五百頁**挿畫**カット百五十圖版二十葉**特價金八圓**正價金拾圓

◎**第一巻（アよりコ）**此際**特價金七圓五拾錢**（正價金拾圓）郵税各巻廿八錢台棒五十錢鮮支六十錢

本書は本派本願寺が宗祖大遠忌追修記念として同佛教大學に編纂せしめ、前後十數年を經て完成したるものなれば、尋常一様の辭書と選を異にし、一事一項と雖も敬虔愼重なる詮考を以てせざるはなく、**解義の如きも一宗一派に局せず、佛教その物の解明に全力を盡されたるものにして全項目三萬、紙數四千八百頁、名實形神共に完全且つ普遍なる佛教大辭典也。**隨て内容は教義教門、宗派寺院、儀軌典禮、歷史傳記、地理制度、經論註疏の解題、佛像佛具、法會伎樂、建築法衣、動物植物、靈地靈場の説明を始とし、和漢文學に散見せる有ゆる梵語、佛語の解釋、神道、儒教及西洋哲學と交渉する佛教思想、波羅門其他各種の外道哲學に至る迄、苟くも佛教に關する事項は細大一切漏す所なし。**宗教家、學者、教育家**は固より、**文學者、美術家、音樂家、政治家、實業家、**其他**何人を問はず、**職業上の求安の上に、且つ日常生活の上に有形無形、直接間接、得る所の利益は無限大なるべく**各學校**は無論壹部を藏す可き也、本書第一巻の出づるや世界唯一空前絶後の佛教大辭典たる誠意的讃評を博し、僧侶學者其他各階級の隨喜歡迎絶頂に達して各方面の申込雲集し出版界未曾有の盛況を呈せり。今や第二巻出づ、内容の豐富精緻、印刷装幀の鮮麗高雅一層の光彩を增す。尚第三巻も印刷に着手し本年十一月發行、以て全部を完成すべし。茲に謹み第一巻の購讀者諸君に稟告し併せて未だ本書に接せざる大方諸彥に推薦す。

見本進呈（往復葉書申込）

東京神田 **富山房** 振替一〇五

賣捌 全國書店

（前付一の七）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

クライブ・ベル著

文學士 鈴木禎二譯

新刊

新藝術論

四六版四百頁コロタイプ拾枚寫眞版貳拾枚入

定價壹圓五拾錢　送料八錢

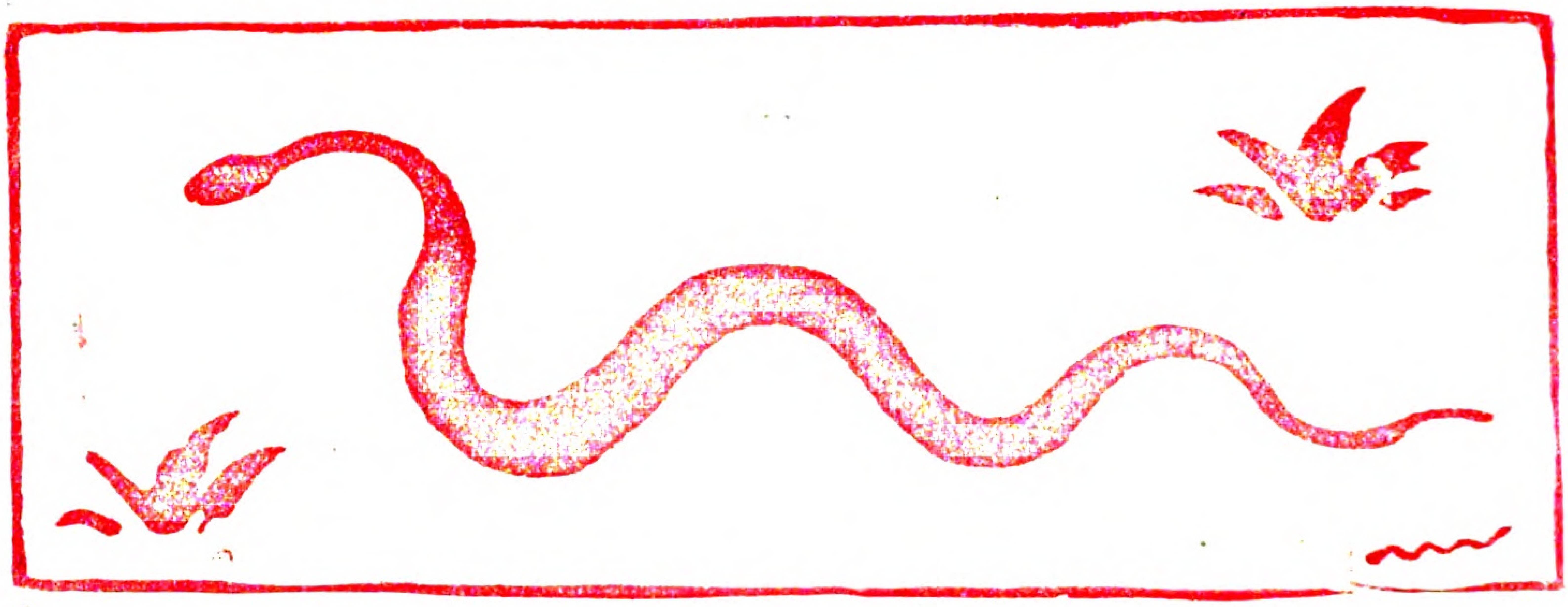
原著は泰西の批評界に於て新ラオコーンとせられ或はラスキンが美術論に比せられて騒壇の驚異となりしもの。所論的確。其新美學説を提唱するやカントに據りて實在を説きベルグソンに則つて直覺的創造を語る。又汎く宗教歴史倫理に亙りて其説論を開展し二十年の美術史を説き進んで繪畫の技巧を詳述して印象主義を解剖し、更に藝術の保護奬勵を切言す。苟くも美術文學哲學教育等に志す士は本書に依りて藝術の根本問題を解明悟得すべきなり。

發賣元　東京神田南神保町　岩波書店　電話本局五四二〇番　振替東京二六二四〇番

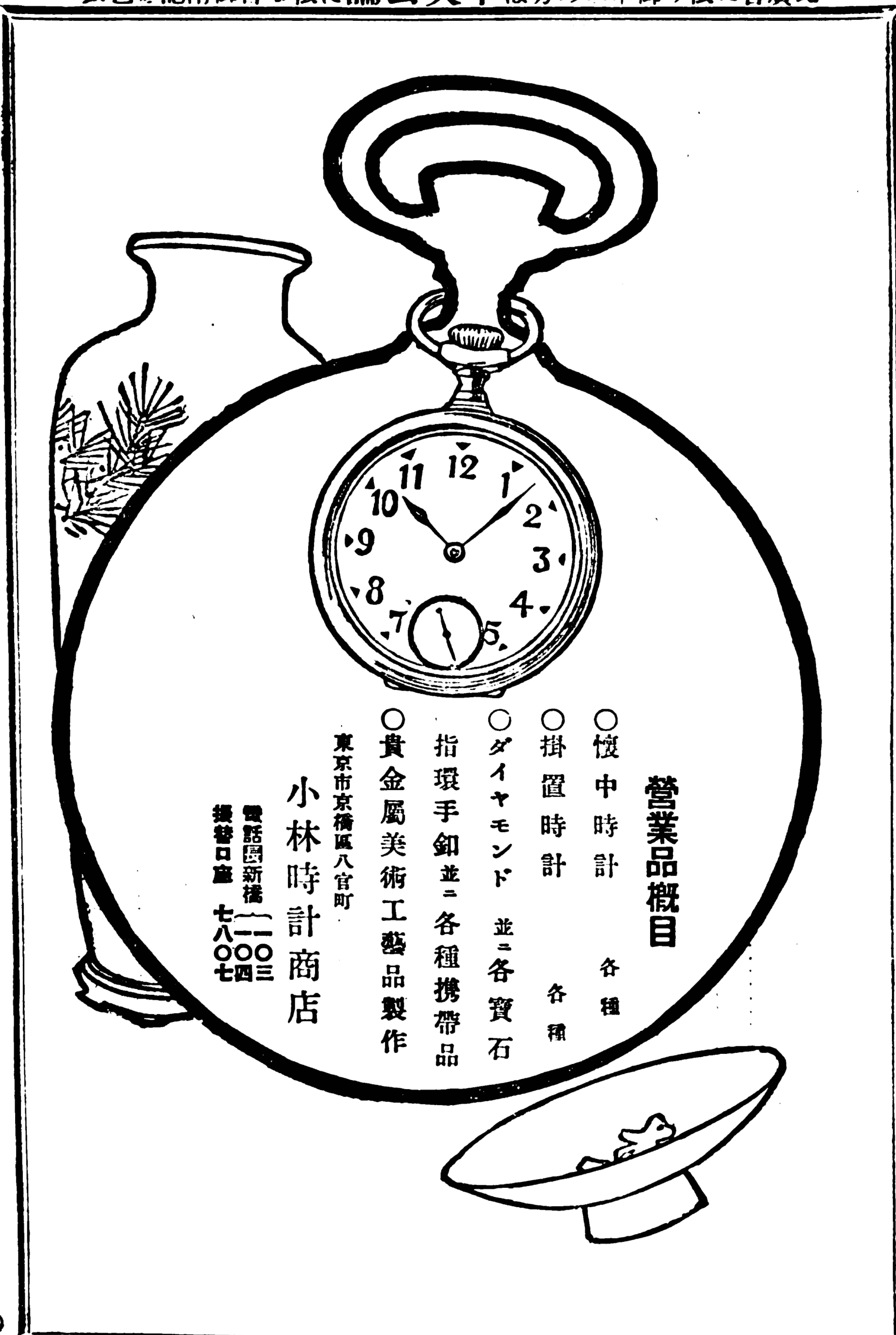


中央公論第卅二年二月號目次

▼公論



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



"'MARY GAINSBOROUGH, AFTERWARDS MRS. FISCHER.''

BY THOMAS GAINSBOROUGH, R. A.

PRINTED BY YABUKI-KOSHODO.

毎月一回 一日發行

婦人公論

定價二十三錢 郵税一錢五厘

中央公論社

二月號要目

女と東京

■東京の公園……田村俊子
■私の觀た東京……小野美智子
■誘惑的魅力の東京……尾島菊子
■飽かぬ都の望め……長谷川時雨
■この頃の東京……岡田八千代

■アメリカの空から日本の空へ……スチンソン
■支那の女子教育難……上田萬年
■家庭科學 燈火の話……近藤高師教授
■このダイヤモンドは眞か僞か……小川教授
■近代劇に描かれたる離婚問題……本間久雄
■時勢を知れ……石川半山

女子容姿美增進法

生理學（永井醫學博士）美學（澤木教授）美術（新海竹太郎）體育（永井高師教授、木内女子大學教授）舞踊（花柳吉登代）化粧（マリー ルイズ）の各方面より研究せる女子必讀の好讀物

■乳兒の保護……永井博士
■離縁實話 愛兒を奪はれて……東雲閑人
■新お伽噺 長鼻物語……鈴木三重吉
■迷信の科學的説明 幽靈の生體……生沼曹六
■ひゞ、あかぎれ、しもやけの療法……古宇田病院長

小説

■蹂躙られて……正宗白鳥
■捨兒……森田草平
■嫉妬……中村吉藏

中央公論



二月號
第卅二年第二號
第三百四十號

政黨界の近狀と我國憲政の前途

大山郁夫

一、反動的傾向

我國の政治思想の上に近來反動的傾向が著しく勢力を占むるに至つたことは、注意して觀察すべき現象である。我國の短き憲政史を振り返つて見れば、波瀾重疊、起伏高低の複雜なるリズムを呈せる間にも、自ら進歩向上の一路が開かれてあつて、大勢は次第に政黨政治に向つて移動しつゝあつたが、最近に於てそれが急に行詰りとなつた觀がある。昨秋大隈內閣が瓦解して一介の武辨たる寺內元帥を戴ける

超然内閣が出現した當時は、世論俄に喧囂を極め、立憲非立憲の論が盛に戰はされ、討閥運動の如きも一部の政黨者流の手に依つて試みられたが、結局取り立てゝ言ふ程の反響を齎さず、先年の憲政擁護運動の如き盛況を呈するに至らなかつたことは言ふに及ばず、一般社會は何かの期待を裏切られた樣な拍子拔けの感じを抱いた。素より政界の活況はこれから開けるので、殊に國民黨が去る十日に、新議會の劈頭に於て内閣不信任案を提出する決議をなし、憲政會が之に響應する氣勢を示してより、議會解散の豫感は一層の確實性を加へ、雲か雨か、その前途は轉た暗澹なる模樣となつた。併し乍ら過去二三月に渉る政界の鎮靜期に於て、一種の反動的思想が芽を吹いて、短時日の間に比較的急速に社會の一角に地歩を占めたことは事實である。即ち之を政府側に就て見れば、首相始め内閣諸公は大權論を楯にして自家の存立の合法的なる所以を辯護し、議會に對して所謂秉公持平の立場を表明し、國民に對しては善政主義を宣言し、表面上は飽くまで超然主義を立て徹さうとして居る。又之を民間の一部の政論家に就て見れば、民主政治の缺陷を指摘するに餘念なく、或は政黨の道德の低劣を罵り、或は民衆の理智の淺浮を嘲り、新時代の政治は畢竟一般國民の任意的推戴とは關係なき少數の賢者に依つて運用せらるべきものであると言ふ樣な議論を唱へ、人をして坐ろに普露西の明君フリードリッヒ大王の顧問學者たりしクリスチャン・ヴォルフの『賢明なる專制主義（アフウゲクレアター、デスポチスムス）』の主張を其儘現代の日本に於て聞くが如き思ひあらしむるものがある。

斯の如く世界の文明國の政治的實驗が時勢の要求に適合せぬものとして、疾くの昔に『思想上の博物館』へ仕舞ひ込んで置いたものが、今更事新しく再び取り出され、超然内閣の根本原理として世に時め

かんとして居ることに就ては、閣僚中の二三者の積極的施設もあつたことであらうし、又政論家のある者の自家の物質的利害の見地よりする迎合的行動もあつたことゝ察せられるが、それにしても日頃より立憲主義を謳歌して居た國民中に、さりとは餘りに早く豹變して斯の如き復舊的政治思想に共鳴する者を生じたのは果して何のためであるか。之には種々樣々な複雜なる精神的及び物質的原因があらう。而して我等は一々之を指摘し說明し得る能力を有して居るとは思はないが、今茲に之に就て思ひ當る節を少しく開陳して見やうと思ふ。蓋し之を究明することは、我國憲政の前途に取つて甚だ重要なる意義を有することであると思ふからである。

二、憲政と國民性

立憲政治は我國民生活に於ては極めて新しい實驗である。明治聖帝が御卽位の始めに當つて天地神明に祭告し、五個條の御誓文を立て給ひしは、我國の政治に取つては、正に是れ國民の國家共同經營時代の黎明を告ぐる曉鐘であつた。爾來此聖誓に現はれたる雄大なる皇謨は、次第に深く國民意識中に浸透し、明治七年には板垣伯等の民選議院開設の建白の事あり、續いて民權論の勃興や志士の國會期成運動あり、明治十四年には國會開設公約の詔勅の煥發あり、明治二十二年には憲法發布の大典あり、直に翌二十三年より議會が召集せられ、それより我國の立憲政治は議論の時代を離れて、直に實行の時代に入り、國家政治の上に一新元を劃し、それより烏兎匆々二十有六年を閱みして、以て今日に及んだのである。

二十六年の星霜は個人の生活に於ては相當に長い期間であるに相違ないが、國民の生活より見れば素

より短少なる時日である。而して此間に於て立憲政治は國民の尊重の標的となり、且つその信條となつたとは言へ、幾千百年間專制政治の下に於て陶冶せられたる國民性をして、全然之に適應アヂヤスト せしめることは、一朝一夕の事業ではない。無論目的論の立場より見れば、立憲政治はそれ自身が結局目的ではなく、從つてそれ自身に絕對價値を包有する譯でなくて、それが現今の國際的及び國家的環境の下に於て國民精神をして順當に開展せしめ、國家生活に生氣と調和とを與ふるに於て最も有効なる手段たるが故に始めて意義あり生命あるものであるに相違ないが、而も之を完全に適用し、之をして其理論上附與せられたる効果の總てを現前に發揮せしめんためには、必ずや先づ當該國民の國民性中にその準備的素質の十分に涵養せられてあることを必要條件とする。然るに公平に觀察すれば、我國民性中には、他の方面に於て如何に多くの美質を有するにせよ、獨り憲政運用の方面に於ては餘り高聲に誇稱することを得る多くを持たないのは、一般に認識せられて居る事實である。夫の希臘の古賢アリストテレースが善良なる公民の資格として擧げたる『善く治めると同時に善く治められる』ことの出來る素質は、我が大和民族の最も缺如して居る所である。所謂『善く治める』素質とは、一定の秩序組織を經て各人各個の意志を國家の意思たる法律の上に影響せしめ得る能力である。又『善く治められる』素質とは、斯の如き國家意思たる法律に自ら進んで服從する心意氣である。是等の素質は適當なる意義に於ける政治意識の內容を構成するものであり、立憲政治の因つて以て完全に行はれ得る基礎條件であつて、共に是れ各個人の國家政治に對する共同責任の觀念より迸り出づるものである。而してそれが我國民性に缺けて居る所以のものは、一は我國民の祖先が永世『據らしむべし、知らしむべからず』を根本義とする封建的專制々度

の下に受働的服從を專一として生活し來た結果でもあらうし、一は我國古來の家族制度が個人的責任の觀念を扶植するに適しなかつたことの當然の歸結でもあらう。斯の如き事情の下に養はれた習性は、平時に於ては因襲傳統を過度に尊重する情勢に導き、獨創工夫の精神を殺ぎ、常軌を脫して新機軸を出だす者を寛容せざるが如き弊風を生じ、又亂世に於ては直に英雄崇拜の氣運を促し、偉大なる指導者の下に於ては偉大なる功業を遂ぐることを得るも、一たび之を失へば忽ち烏合の集團となつて、復戢拾すべからざる慘狀に陷るのである。故に我國の歷史に於ては、民衆が大手腕を有する英雄に追從して偉業を成就したこともあり、或は强硬なる專制政府の下に三百年の平和と秩序とを樂んだこともあり、或は明君賢相の支配の下に鼓腹擊壤して泰平を頌したこともあり、或は暴主虐吏の苛政收斂の下に不平怨嗟の聲を放つたこともあるが、未だ曾て民衆が一團となり、其創意に依つて秩序あり統一ある運動をなして政治上に建設維持の事業を企てたことがない。夫の封建時代に於て時々見たる義民の犧牲的行動の如きも、壯烈は則ち壯烈なりと雖も、畢竟特定の個人の單獨的行爲たるに止まり、之を民衆の政治運動と見るべきではなく、將又その目的より見るも、君侯の虐政を彈劾するに在つて、人民の自由のために戰ふのではなかつた。斯の如き事情であつたから、中央の政治にしても地方の政治にしても、强者の命令は完全に行はれ、支配者の意思は遺憾なく徹底したけれども、一般民衆の要求が一定の機關を經て能働的に政治の上に影響を及ぼすと言ふが如きことなく、只上の命ずる所下之に從ふより外に途がなかつた。故に世は王政復古、明治維新となり、廢藩置縣は行はれ、四民平等の制は打立てられたが、是等は民衆の要求より發したのではなく、在朝者の海外模倣の精神より實現せられたものである。憲法要求の運動

は激烈であつたけれども、それは政權の爭奪場裏に於ける敗者が育成したものであつて、國民全般の已み難き信念より迸發したものではなく、從つて憲法は發布せられ、代議制度は設定せられるに至つても、國民は只譯もなく之を尊重すべきものであることを敎へられた丈けで、眞に之を尊重する所以を體得せず、憲法尊重の表皮の下には、依然として專制治下の民としての眞骨頭が殘存して居ると云ふのが實情である。

憲政の運用上より見たる此國民性の缺陷を補救する使命を有し、而して既に幾分此使命を果たしつゝあるものは、近代的科學敎育が釀成しつゝある合理的精神と、機械主義の產業組織が實現しつゝある因襲打破の氣勢である。人は環境を創造しつゝ、その創造せる環境に依つて支配せられるものである。此理由に依つて、實驗的精神を以て終始する科學思想と、明瞭なる因果關係の基礎の上に立てる機械主義の雰圍氣の間に育つた現代人に取つては、祖先が尊重し執着し來つた舊慣、傳習、思想、乃至、迷信と雖も、之をその儘無批判に認容し繼承することは不可能である。明治政府が敎育を宗敎より分離し、科學的智識を注入したことは、我國の憲政の將來に取つては重要なる意義を有することである。思ふに我國民性中の神秘的、傳統的、不合理的要素に依つてその顯要なる地位を維持し來つた我國の特權的支配階級が、その傳統的權勢を喪失するのは、新時代の科學的精神及び產業主義の洗禮を受けたる現代の青年が、社會生活に於て有効なる活動をなし得る時に於て始めて來るであらう。我等は我等が日常接近して居る多數の青年學生の言動に徵して、大勢が日々暗默の間に此方向に移動して居ることを察せずには居られないのである。併し乍ら現代社會の大局の上より觀察すれば、因襲傳統の勢力が尙ほ實驗的精

神の勢力より強く、神秘主義不合理主義の要求が尙ほ產業主義合理主義の要求を壓倒して居ることは否むべからざる事實である。近時の政治思想の上に見る反動的傾向は、一面より見れば前者が後者に對する一時的勝利を反映したものである。我國の憲政の不動の基礎を作り上げんとする者は、先づ斯の如き鞏固なる歷史的根柢を有する神秘的勢力と戰はねばならぬのである。

三、政治的倦怠

近代人の活動を支配する最も强烈なる刺戟は、その創造的精神である。近代の科學は工業、商業、交通業等の方面に於て、過去の二三千年を以て成し得ざりし變革を、僅々一世紀の短日月の間に完成した。近代の啓蒙的思想は、宗敎の方面に於て良心の自由、人格の獨立を宣し、政治の方面に於ては在來の權威の崩壞及び新民主々義の實現を齎し來つた。而して斯の如き大變動は、今後と雖も社會の各方面に於て益す頻繁に起らんとして居る。現代人は環境が人類生活を支配することを知れるが故に、刻々舊環境の改造、若くは新環境の創造を試みて居るのである。現代の社會を過去の社會よりも善美にし、將來の社會を現代の社會よりも更に善美ならしめんとする所に、現代人の活動の精力の泉源は潛つて居るのではないか。此現象は藝術、哲學等の精神的方面にも、農工商業等の物質的方面にも、兩者の結合點たる文物制度の上にも、明瞭に之を看取することが出來るのである。都市は各時代に於ける文化の集中點であるが、近代各國の都市を觀察すれば、其精神的及び物質的方面に於て、現代人の創造的努力の如何なる程度に進んで居るかを、容易に了解することが出來るのである。更に生物學の發達に伴ひて起れる優生學が、民族人種の改良を策畫するが如きを見れば、現代人の創造的意氣が那邊に奔放するものなるかを

測定するに苦しましむるものがある。

併し乍ら現代世界には、一方に於て旺盛なる創造的意氣が現はるゝと同時に、他方に於て靡爛したる頽廢的空氣が漂うて居ることも亦、一般に善く觀察せられたる事實である。希望は創造の豫感より生じ、頽廢は創造の絶望より起る。過去の偶像を破壞して新しき憧憬の標的を建設する能はざる所に、そこに頽廢の生ずる素地がある。創造は破壞に始まり、建設に終る。破壞があつて建設がない時には、人は再び舊偶像に復歸するか、否らざれば頽廢倦怠の氣に包まれて、無中心無方針無主義無意義の生活に沈淪するのである。

我國政治界の近況を概觀すれば、舊偶像に復歸する反動的傾向と、新建設に絶望せる倦怠的傾向とが、相合流して居るのが目に着くではあるまいか。憲政の上に新生面を開かんとする努力は絶えず行はれ、其極點は先年の憲政擁護運動とまでなつたが、新時代の蓋を開けて見れば、多年望みを屬して居た政黨も案外に詰らないものであつて、其經綸上の識見に於て低劣見るに足るものなく、加ふるに情實の外殼が主義綱領の上に蔽ひ冠ぶさつて其活動を鈍ぶらし、野に在れば黨勢擴張のためにあらゆる陋策を敢行し、朝に交れば秕政弊習相次ぐと言ふ有様であつて、斯の如き粗惡なる材料を以てしては、國政の上に何等の見るべき成績を擧ぐることも覺束なくなつた。素より政黨と雖も國民の監視の下に立つものであつて、國民の意志に背反しては永久に存立し得るものではないが、現行制度の下に於ては直接政黨に對して監視を行ひ得る選擧有權者の數は、我國全人口の中に僅々百五十萬餘人を算するに過ぎず、而かも是等の選擧有權者は、私情を先にし公義を後にし、錙銖の利に眩んで國家の利害を思はざる徒輩其多きを

占め、到底有効なる監督を政黨の上に施すことが出來ないと言ふが如き有樣である。斯の如き事情の下に於ても、執着心の强き歐米人ならば、例の『デモクラシーの救濟は、更に一層多くのデモクラシーである』と云ふ決心に到達するであらうが、印度より傳來の宿命的觀念に囚はれて、何事にも諦めのよき我國民の憲政上の改革的意氣は、玆に忽ち其鋭鋒を挫かれ、どう見ても只合法的と言ひ得らるゝのみで、素より憲政の本義とは相容れざる超然內閣と云ふものゝ再現を認容し、或者は『英國流にも非ず、獨逸流にも非ざる日本流の憲法政治』として、進んで其前に拜跪し、或者は嘗て破壞した偶像に今更復歸することもならぬが、さりとて現狀打破、新境開拓の希望もなきより、早くも絕望の聲を漏らし、無抵抗を最良の處世法と見做し、倦怠の餘り拱手無爲の間に一時の安易を求めて居るのであるまいか。

四、歐洲戰爭の影響

今次の歐洲大戰亂が間接に我國に於ける政治思想の上に反動的傾向を助長するに與つて力のあつたことも亦、爭ふべからざる事實である。之に關して先づ我國人の眼底を射たものは、官僚內閣を戴く獨逸が常に戰場に於ける優者であつて、議院政治を有する聯合諸國の多くが始終敗戰の運命に陷つて居たことであつた。是に於て我國の軍國主義者は、直に此事實の證明に力を得て、急に議會萬能主義の缺點を指摘するに務めた。此解釋は一面より見れば極めて正鵠を得たものゝ樣であるけれども、我等の見る所を以てすれば、獨逸の强さは國民の精神的及び肉體的に健全なるためであつて、此健全は日耳曼民族に固有の性質であつて、官僚內閣が作製したものではない。素より獨逸の官僚內閣は、國民の物質的及び精神的諸勢力を統一して、豫てより軍國の急に應ずる準備を十二分に充實し、一旦戰端の開くるや、迅雷

疾風の如き速度を以て平素蓄積せる精力を傾倒し、隨處に豫定の計畫を行つて偉大なる功績を樹てたことは疑もなき事實である。併し乍ら是は同國の官僚内閣が歷代好指導者を得たと言ふ偶然の事實に基くものであつて、官僚内閣が如何なる時代に於ても、將又如何なる國に於ても常に好指導者を得べきことを證明して居るものでもなければ、議院政治が如何なる時代に於ても、將又如何なる國に於ても好指導者を得ることが出來ないことを證明して居るものでもない。同じ官僚内閣の下に於ても、露西亞や墺太利の政府は、獨逸のそれとは大に其强弱の度を異にして居ることは、眼前の的確なる事實ではないか。要するに官僚内閣の下に於てビスマークを出だし、ビユーローを出だし、ベートマン・ホルヴエツヒを出だすのも、議院政治の下に於てグラツドストンを出だし、ソーリスベリーを出だし、アスクイスを出だし、ロイド・ジョージを出だすも、一は國民の素質如何の問題に歸し、一は時勢の必要に歸するのである。

歐洲の大戰亂は一方に於て國防充實の必要を敎へたと同時に、他方に於ては國民的協同の必要を敎へた。超然内閣は敏捷にも此戰爭の敎訓を利用して擧國一致を唱へ、以て自家の存立を辯護し、且つ反對者の氣勢を挫かんとして居る。併し乍ら眞の意義に於ける擧國一致は、國民の各個をして國家の運命に對して共同利害を感ぜしめ、國家の經營に關して共同責任を感ぜしむることに依つて實現し得べく、而して此目的を貫徹せんと欲せば、敎育的事業としては健全なる國家觀念の養成に務むべく、實際的事業としては選擧權を出來るだけ廣き範圍に普及せしめることを圖るべきである。國民の多數が國家の施設に對して共同責任を感じない所には、動もすれば否認的傾向（ニヒリスチツク、テンデンシー）を助長し易いのは當然の理數である。此

點に關しては、我等は我國の官僚も政黨も共に淺慮短見を示して居るのを慨歎せずには居られない。獨逸の如き官僚主義の國に於ても尙ほ、帝國議會（ライヒスタフへ）の選擧に關しては普通選擧制度を採用して居るが故に、同國內地人口六千餘萬人に對し、一千二百二十六萬餘の選擧有權者を有して居る。我國に於ては內地人口五千三四百萬人に對する選擧有權者の數は、百五十萬餘を算するに過ぎず、之を獨逸のそれに比すれば、全人口數に於ては大差なきに拘らず、選擧有權者數に於ては殆ど十分の一を算するに過ぎない。然るにビスマークの短所のみを學んで其長所に目を塞ぐ我國の官僚は、僅かばかりの選擧權擴張をも非常に危險視するのは、抑も何に因つて然る乎。是れ彼等が國民の誠意に信を置かざるが故である。苟くも國民を信ぜずして擧國一致を說き、民衆の協同を促すは、矛盾に非ざれば狡猾である。又我國の各政黨にしても、單に現制度の下に於ける有權者に媚ぶることを以て能事とせず、眞に全國の民心の支持を贏ち得んとするならば、誠心誠意を以て選擧權の根本的擴張に從事すべきである。無論、憲政會も政友會も國民黨も、昨冬世に公にした政策案又は決議に於て、選擧權擴張を其一項目として加へることを忘れなかつたが、事實に於ては彼等は眼前の政爭に逐はるゝに急にして、此問題に對してそが當然要求するだけの注意と熱心とを向けて居ない。而して一般國民も亦、此明白なる事理を無視し、此點に關して眞面目に官僚及び政黨の反省を促す者あるを見ないのは、反動的傾向に祟られてその一旦棄てた偶像に再び拜跪せんとするためか、但しは倦怠的氣分に浸潤して苟安無爲を貪らんとするためであるか、我等は我國の憲政の前途に關して、輙く樂觀することを得ないのである。

五、哲人政治の要求

是も歐洲戰爭の影響の一であるが、哲人政治とか、賢者政治とか言ふ聲が、そこゝに聞え始めた樣である。其主意とする所は、代議制度は畢竟輿論を基礎とするものであるが、輿論とは民衆の信念より發した聲である。而して民衆はその中に如何に多くの優秀なる個人を包含するも、民衆として行動する時には、畢竟萬人共通の理性感情に依つて導かるゝものである。然るに萬人共通の理性感情は拔群の個人のそれに比較する時は、到底遙に低劣粗硬たるを免れない。故に斯の如き素質を有する民衆の信念より發したる輿論に依つて國家政策の方針を決するは、危險千萬なことである。是を以て國家の政治の局には優秀なる個人――即ち哲人若くは賢者を置くべきものであつて、而して斯の如き哲人若くは賢者を選擇任用するには、必ずしも民衆の意向や思想感情を眼中に置くべきものでない――と謂ふに在るらしい。素より我等の知れる範圍內に於ては、近來の哲人政治を說く論者の多くは、未だ明確なる言葉を以て其旨意を科學的に陳述して居ないけれども、彼等の言はんと欲する所を概括すれば、畢竟右の見界を出でぬものらしいのである。要するに是等の論者は代議制度を全然否認せんとするか、否らざればその當然の發達の上に一大制限を置かんことを主張するものである。

才幹識見拔群の優秀者をして國家の政務を統括運用せしめんとする主張は、極めて平凡なる眞理であつて、苟くも常識を有する者の異存を挾む餘地のない所であるが、斯の如き人士を選擇任用するには毫も民衆の意向や思想感情を顧慮するに及ばぬと言ふは、歐洲諸國が曾て『賢明なる專制主義』の名の下に於て經驗したる歷史的失敗の跡を再び繰返さんとするものである。斯の如きは政治歷史の智識を有する者の一顧に値せぬ說であるが、併し乍らそれが尙ほ相當の追從者を有する原因の一は、歐洲戰亂開始

後の聯合國、殊に英國の政變に對する皮相的觀察より出でゝ居るものと見られるのである。如何にも英國に於ては、開戰後間もなく政黨内閣主義の常習を離れて、首相アスクイスの下に聯立内閣が成立し、更に又昨年十二月中の政變に於ては、一切の軍事上の決議及び施設を有効にするために、軍事會議（ウォー、キャビネット）に參加する人員を四名に減縮すべしとするロイド・ジョージの主張が勝を制し、同氏を首相としてミニストリーの大改革が行はれた。即ち軍事會議はロイド・ジョージ（自由黨）、ボナー・ロー（統一黨）、カーゾン伯（同上）、ミルナー子（同上）、アーサー・ヘンダーソン（勞働黨）の四名に依つて組織せらるゝことゝなり、又ミニストリー全體は、以上の四名を始め全部三十三名より編成せられ、自由黨員が十二名、統一黨員が十五名（若くは十四名）勞働黨員が三名、無黨籍者が二名（若くは三名）の内譯を示して居る。斯の如く軍事會議が少數者の手に移つたのは、行政は集中を要し、殊に軍政は民政よりも更に多く集中を要する主意より出でたもので、別に前段に述べた樣な特殊的意義に於ける哲人政治の要求より出でたものではない。事實上彼等四人者は皆それ〴〵黨籍を有し、今までに國民の信任的推戴に依つて其地位に上り來つた者のみである。又聯立内閣なるものは、其名の明に指示する如く、政黨の外に超然として孤立して居るものではなく、只單一の政黨より成立する代りに、二個若くはそれ以上の政黨より成立して居るものである。從つてそれが政黨の儼然たる存在を無視して居るものでないことは、玆に改めて言ふまでもないことである。されば去る十二月の政變に於ても、自由黨のアスクイスを首相とする聯立内閣が辭職するや、新内閣組織の大命が先づ當時に於ては反對黨の地位に在るべき統一黨の首領たるボナー・ローに下り、而してボナー・ローがそれを拜辭するに及んで、始めてロイド・ジョージが大命を拜受した譯で

ある。斯る慣習に拘泥することの是非に關する價値判斷は今姑く之を措くとするも、只英國現下の聯立內閣——而も明に國家の危機に於ける一時的變象たる聯立內閣——を以て國民の信任及び政黨の後援に緣も因りもなき超然內閣に比し、而も兩者を均し並みに哲人政治家の一團として論ずるは、蒙に非ざれば、則ち陋である、と論斷せねばならぬ。

哲人政治の要求を解釋して、單に國家の政務の首腦部に才幹識見共に優秀なる民衆の指導者を置かんとするの主張なりとするならば、そは何れの時代にも存在する極めて合理的なる要求であると謂はねばならぬ。併し乍ら斯る指導者の拔擢を民衆の意向と引離して考ふるは、假りに舞臺を憲政思想の猶ほ幼稚なる日本の政界に取るも、尙ほ甚だしき時代錯誤と謂はねばならぬ。社會の幼稚時代に於ては、一般人民の理性の光が迷信の雲に蔽はれ、殊に超自然力に對する恐怖心が甚だしかつたが故に、才幹拔群の輩は神意に托して自己を民衆に推擧して其將師となり、名を託宣に假りて自己の意思を民衆に强行し、之を道具に使つて功業を成し遂げたものゝ多くあつたことは、各國上古の歷史に於て常に見る所である。夫のイスラエル族の蒼生を率ゐて埃及のパロの暴虐の虎口より脫出し、山には橄欖實り野には乳汁流る美なる迦南の舊鄕土を指して長途の征旅に上つたモーセが、シナイの山に上つて神意を受け、山を下り民衆に面してその命令を行つたと言ふ舊約聖書中の傳說は、此點に關する最も特徵的のエピソードである。此外東西各國の建國創業時代の偉績——例へば我國の神武帝の大業の如き、日本武尊の東征の如き、羅馬のロミユラス兄弟の生ひ立ちの如き、獨逸のカール大帝の征戰の如き、若くは英國のアルフレッド王の覇業の如きものに關する古代の記錄は、悉く皆神怪不思議の靈力と結び附けられてゐないものは

ない。是等は何れは後人の附會に相違ないが、それにしても原始人の假想的超自然力に對する簡單なる恐怖心を利用した古英雄の民心總攬術を物語つて居るものではあるまいか。併し乍ら時代が推移するに從つて、理智の光は迷信の雲を破つて益すさやかに輝き出で、殊に近世紀に入つてよりは、科學の發達は超自然力に對する不合理なる恐怖心を教養ある人士の腦裏より一掃し去り、社會を今は最早不便不利となり下がれる古來の因襲傳統より次第に解放しつゝある。此意味に於て、近世紀は權力崩壞の時代であり來り、又益す此氣勢を高めつゝある。又此意味に於て、現代に在りては、神も英雄も共に昔ながらの偶像的意義を失ひつゝあるものと謂ふことが出來る。今も昔も英雄に對する翹望の念には變る所がないが、只現代の英雄は、往時の英雄とは異つて、民衆が任意的に推戴した英雄でなければ、到底偉業を樹つることが出來ないのである。彼は自ら進んで民衆の意識中に磅礴する思想感情、乃至その抑ふべからざる願望を具體的に實現する責任を負擔するものでなければならぬ。ロイド・ジョージが如何に大手腕家であればとて、彼が南阿戰爭當時に於て採りたるが如き戰爭否認的態度を今日に於て持續するならば、到底時局を救ふ第一者として英國政局の先頭に擁立せられることが出來る筈はない。又トルストイが如何に世界的哲人なればとて、彼の思想が時代及び國家を超越し居たがため、最も彼を尊信仰望して居た者と雖も、眞面目に彼をして國民の實際的指導者たらしめんと考へた者はなかつたのである。是に由つて之を觀れば、現代に於て内治外交の上に偉大なる功業を遂げ得る指導者は、何よりも先づ國民の思想感情に接觸を保つ哲人たり、英雄たるものでなければならぬ。故に我等は哲人政治を翹望する點に於ては人後に落ちぬ者であるが、同時に國民の信任及び推戴を離れて哲人政治を說くことを欲せざる者

である。而して國民の信任及び推戴と言ふことを現代の政治的術語に飜譯すれば、即ち『選擧』そのものである。

併し乍ら如何なる場合に於ても、右に述べたる意義に於ける哲人政治は、一時的方便としての價値を有するものたるに過ぎずして、永遠的理想としての價値を有するものでないことは、特に玆に之を一言せねばならぬ。事實上社會に或は哲人（無論相對的の）あり、或は凡夫ありて、一の差別界を形づくつて居ることは、不完全なる人事に於て已み難きことであるが、社會の理想は、個々人を悉く哲人とする平等界を現出するにある。國家が教育事業を以てその最も重要なる職務の一とする所以のものは、智識及び道德の普通化即ち社會化を企圖するからである。國家教育の目的は一方に於て少數の智者を作り、他方に於て多數の愚者を作ることではなく、智者愚者間の隔壁を撤去し、兩者間の平衡化を計ることである。社會の各層間に於ける智識道德の不平均は、富の分配の不平均と同じく、國家に取つては弊事でこそあれ、決して慶事ではない。無論國家教育が智德の社會化と言ふが如き大使命を實現するが如きことは、人事の不如意不完全を必然のことゝ決めて仕舞へば、永久に望み得べからざることであるかも知れない。併し乍ら此使命の完全なる實現が到底望み得べからざるものとするも、而も尙ほ國家教育は此方向に面して勇猛精進することを怠るべき筈のものではない。一切の個々人を哲人となし、而して國家の政務は是等哲人中より互選せる委員會に依つて行ふことが、國家の終極目的より見たる政治の當然の理想であつて、少數の哲人を上に立てゝ多數の凡夫を統治せしめるのは、何事も不如意不完全勝ちなる人生の現實に即する方便である。而も哀別離苦が常道である人生に於ては、理想の到達が異常であり、

合目的性の方便が常道であるのは、只避くべからざる數と謂ふべきのみで、決して望むべき境界と謂ふべきものではない。

又政治社會を單に群衆現象としてのみ觀照するのは、現今の如く印刷業が發達し、智識普及幷に報道供給の機關が完備せる時代に於ては、決して當を得た見界と謂ふことが出來ぬ。街頭の群衆は偶然突發の暗示の衝動の下に、善にも惡にも盲目的行動を敢てする可能性を有するものであるが、政治社會は常に反對の各方面の報道を綜合知悉する便宜を有し、多數の異りたる意見を彼此參照したる上にて、各問題に關する態度方針を定むる餘暇を有して居るものである。此點に就ては、新聞紙雜誌及び書籍の社會教育上の効果は極めて著大なるものであつて、而して此効果は國民教育の普及幷に交通機關の完備と相呼應して、將來益々增進する傾向を有するものである。近代の科學が憲政の進步の上に貢獻し得べき境地は、此方面に於ても今後益々開拓せられることであらう。政治社會の輿論は事實上常に少數の選ばれたる識者の意見に追從し、兩者を疎隔する距離を次第に短縮することに依つて、進步向上の一路を發見するであらう。輿論は何時までも愚論ではない。從つて如何なる哲人が政局に立つても、輿論を無視して事業をなすことは到底不可能となり、又國民の信任推戴を贏ち得ずして、之に向つて擧國一致の押賣をすることは、竟に望み得べからざることゝなるであらう。

六、政黨の死中活を求むる途

近年に於ける政黨の鼻向けのならぬ現實曝露も亦、實際政治の上に於ては超然內閣出現の氣運を釀成し、政治思想の上に於ては反動的傾向を助長した一原因と見るべきである。政友會が多年閥族と結托し

て橫暴を逞うし、殊にその山本內閣との關係に於て遺憾なく醜狀を天下の廣居に晒け出した時には、國民の反感は主として政友會のみに向けられたに止つた。然るに山本內閣が倒れて大隈內閣が立つに及んで、其與黨たる同志會は、その橫暴を極むることに於て政友會と異る所なく、其醜態を演ずることに於て政友會と選ぶ所がなかつた。是に於て乎國民の反感は、單に政友會と云ふ一黨に向けらるるに止らず、政黨全般に波及するに至つたのは、誠に是非もない始末である。

(3)政黨は憲政には必然的に附隨するものである。政黨は憲法上所定の制度ではないが、事實上何處に於ても憲政の運用に伴ひて自然に發生する社會現象であつて、如何なる手段を以てしても、之を禁遏すべからざるものである。既に其發生が不可抗的のものでありとすれば、それをして健全なる發達を遂げしむることは、單に望ましきことであるのみならず、政治的必要上最も緊急なる事業である。

且つ政黨は單に憲政上の必然的產物たるに止まらず、それが正當に行動する時は、誠に重要なる職分を盡くすことを得るものである。議會の有する最も肝要なる職責は、法律及び豫算を審議すること及び政府の施設を監督牽制して其專制を豫防することであるが、議會內に個々人たる議員達あるのみで、個個人の組織節制ある團結なき時は、そこには種々樣々なる單獨意思の表示があるのみで、何等の決議を成し得る能力なく、從つて法律及び豫算の審議をなすことに不便を生じ、政府を監督牽制することに支障を來たすべきは、言ふを須たぬ所である。政黨は多くの單獨意思の間に調節を求めて單一の意思を作り、議場に於ける『然り』若くは『否』を表明する投票採決に依つて議事を進行せしむることを可能とし、是に因つて以て法律及び豫算の審議を快速にし、政府の監督牽制を容易にすることを得るものであ

る。是れ實に憲政論の初歩の教訓であつて、同時に政黨の存在の根本的理由である。

政黨は憲政の上に於て斯の如く重大なる使命を有するに拘らず、國民が之に向つて極めて冷淡なる興味を維ぐに過ぎざるは、一は國民が憲政に對する理解と熱心とを缺くに依ることではあるが、一は政黨自身も亦、許すべからざる多くの罪過を犯して居るからである。

第一に我國の各政黨は、口癖の樣に國民の意思を代表して居ると稱し乍ら、其實行に於て常に此主張を裏切つて居る。抑も國民の各階級の意思を代表することは、只普通選擧の制度の下に於てのみ、比較的精確に之をなすことを得るのみである。然るに我國の現制度に於けるが如く、選擧資格に關する財產上の制限の高い所に於ては、選擧權の行使に由つて政黨の上に作用し得る者は、國民中の僅少部分に過ぎないのである。試みに之を大正四年の統計に徵するに、衆議院議員選擧有權者は全國に涉つて僅に百五十四萬六千三百四十一人を算し、人口千に付き二十八・八一の比例を示して居る。斯る狀況の下に於て民意代表と言ふが如きことは、名あつて實なきものに外ならざるは、當然の成行である。之に加ふるに政府の選擧干涉あり、當事者の投票賣買、若くは情實或は强迫に依る投票があるのであるから、民意代表は益々當てにならぬことになる。各政黨にして眞に民意を代表する誠意あらば、極力選擧權の擴張と選擧場裏の廓清とを計らねばならぬ。是れ政黨が國民の後援を得る上に於て、永遠の大策とすべき所である。且つ普通選擧制度及び上院改革の行はれざる間は、純然たる政黨內閣の實現は到底之を期することを得ざるべく、縱しや一時出現することあるも、直に破滅の悲運に陷るべきことは自明の理である。

近時各政黨は、其政策案若くは大會に於ける決議に於て、選擧權擴張の企圖を表明して居るが、果して

之に對して誠意を有するや否やは、之を其今後の行動に見なければならぬ。

次に各政黨は常に自黨の私利を國家の公利に從屬せしむることを主張して居るが、其爲す所は必ずしも其言ふ所と符合して居ないのである。殊に外交を黨爭の外に置くと言ふことは、外國に對して國家の威信を維持する上に於て誠に必要事であることは政黨者流と雖も之を認めて居るが、彼等は終始一貫して之を實行することをしない。夫の大隈内閣の對支交渉後の議會に於ける政友會議員中の或者の外交上の詰責的質問は、反對黨の支持する政府を苦しましめんがために、對岸の袁政府を利するを辭せざりし觀がなかつたでもない。是は『反對のための反對』の最も惡性なる實例であつた。又憲政會成立の當時に於て、在朝の結黨主唱者が地方的利益を好餌として數名の議員を釣らんとした形跡があるのは、釣る者も釣らるゝ者も共に皆、公利をして私利に殉ぜしめんとした譏を免るゝことは出來ない。政黨は國民の公僕となることに依つて始めて生命を得、國民を私僕とすることに依つて其存在の意義を失ふものである。

次に政黨にして國民の信任を贏ち得んと欲せば、其進退を公明にし、各問題に對して其去就を明瞭にすべきものである。我國の政黨は、餘りに合目的性（ツウエツクメーシヒカイト）を重んじ、一時的方便に傾き、永遠の主義理想を曖昧にするに過ぎはしまいか。政友會が現内閣に對して『主義に於て反對であるが、政策に於て是を是とし、非を非とすべし』と言ふが如きは、慥に其好例である。其主義を守ることの不忠實、其進退去就の公明を缺けることとは、軈て來るべき解散後の總選擧に於て自家頭上に何等かの責罰を齎らし來るであらう。之に反して國民黨が不信任案提出に關し、年來の怨敵たる同志會の後身たる憲政會と提携を企

てたるは、其動機の那邊に在るかを問はずして、單に其表面上の形式を見れば、亦快擧たるを失はぬ様に思はれる。

更に政黨が將來に於て多數國民の同情を維がんとするならば、單に現制度の下に於ける選擧有權者に媚ぶることを以て能事となさず、國民生活の上に於て廣汎なる重大意義を有する社會問題の解決に向つて突進しなければならぬ。我等は我國の政黨が、農工商業者の歡心を得んがために、廢減稅を說き、經濟的發展を策するを聞くが、彼等より中流社會の生活問題、勞働問題、民族衞生問題、國民教育問題等に關する的確なる成案を示されたことがない。而も是等は各政黨が一時も早く開拓の手を下すべき原野ではないか。

且つ又政黨は國民の思想生活に緊密の接觸を保つに非ざれば、完全に其職分を盡すことを得られるものでない。然るに我國の政治家は大抵政爭に沒頭することは日も亦足らずして、思想上の修養を怠るが故に、此方面に於て時代に後れることの最も甚だしいことを見るのである。ウッドロー・ウイルソンや、ロイド・ジョージや、ブリアンなどのことは姑く問はずとするも、我國の政治家にして倫敦タイムスの如き大新聞に屢ば投書して意見を發表する普通の議員輩程の識見を有する者、果して幾人かある。我國の政黨が時代の思想生活に對して甚だしく無理解なるは、亦因つて來る所がないではない。併し乍ら是は此儘に打捨て置くべき問題ではないのである。

我等は政黨が代議制度に附隨する必然的產物であることを知り、其重大なる職分を有することを認め、

政黨内閣制がその自然的發達の順序であることを悟り、其前途の進步を祈るが故に、此際我國の各政黨が共に自ら戒飭して其弊習を除去し、其長所を發揮し、時代の要求に順應し、適當なる國民意思の代表機關たる實を擧ぐるに至らんことを希望するものである。一般國民をして眞個の立憲的公民たらしむるは、之を國家敎育の効果に俟たなければならぬが、政黨の改善に至りては、政黨自ら責任を意識し、自發的にその措置を取るに至るに非れば、到底之を期待することを得べからざる譯のものである。(六・一一・一二)

▼次號卷頭論文豫告▲

帝國之危機……………大谷光瑞

其長さを以てすれば堂々二萬言にして老蘇の「審勢」「審敵」の二大論文を併せたるに數倍し。其内容を以てすれば一代の柔弱偸安を警醒して與國濟世の途を講ぜる一大經綸策。其態度を以てすれば恰かも日蓮を地下に起して其大獅子吼を聽くが如し。蓋し我が大谷光瑞師にあらざれば決して書き能はざる一代の大文章大論策として切に江湖の熟讀を乞ふ。

經濟上より觀たる日支兩國の關係

法學博士　神戸正雄

一

日本の國民經濟は原料の不足を根本の憂とする。日本が自給經濟を營まうとしても其は覺束ない。是れが經濟上よりいつて日本の經濟の恒久的の弱點である。日本は之あるが故に、經濟上からしても英國と同盟關係を維持し、聯合與國との共同關係をも尊重しなければならない。日本は現下漸く此等の關係に依りて其經濟を運轉し發展さすることの出來る譯であるが、併し又永く此の關係に依賴して安心のみして居ることを許さぬ事情もあるから、之が代りを日本の勢力の最も良く及び得る所の支那に求むるの外はない。支那は從來とても少からず日本に原料を供給し、就中日本の金屬工業は主として其原料を支那に仰いで居た所であるが、將來は右の外、從來英領諸地より仰いで居た所の纖維工業の原料をも支那に仰ぐことゝならなければならぬ。詳しくいへば主として英領印度より得たる綿花、主として濠洲より得たる羊毛は之を支那に仰ぐことゝならなければならぬ。但だ此等の材料にして從來支那で產出したものは日本の要求に適はなかつたが、之を日本の必要に適ふ質と量とに進めなければならない。而も此が一朝一夕に能くし得る事業でないから、他日日英關係の不良となる其前に即ち今日よりして、日本人の力によつて此改良事業に手を着けなければならない。

二

右は日本の稍恒久的なる必要であるが、更らに日本の現下に於ける一時的の問題としては、今日益々增加して已まざる資金を何處に放下するか、之が適當なる

放下の場所を必要とすることが重大である。而して之につき最望ましきは内地で生産的に利用することではあるが、內地で之に適當なる生產事業は左う多くはなく、右の增資を總べて收容するだけのものは之を發見すること洵に困難である。のみならず凡べて之を彼處に向けやうとすれば投機助長に陷るの弊もあり、又此が通貨膨脹、物價騰貴を助くるの弊もあるので、此外に又此と並んで日本の勢力の最も良く及び得る所の外國、例之支那の如きに放資することが肝要で、之によつて前にもいふ所の日本の國民經濟の痼疾たる原料の缺乏を矯正することも出來、更には我販路を擴張することにもなり、隨つては內地の輸出工業を發展せしむることゝもなり、而かも夫の通貨膨脹等の弊に陷らずしても濟む。而して支那も此回の大戰開始以來歐資の來なくなつたに就いては、常に外資を必要とする彼としては、此の日本よりの放資を歡迎せざるべからざる筈である。

三

然るに實際には支那が日本を排斥して、日本の支那放資を喜ばない。歐米人をして放資せしむるとも、日本人には放資を爲さしめないやうな態度を採る。日本人の方へは借金を返へして、其代りに歐米人から借入を爲し、又は歐米人に事業をやらさうとする。此勢であると、又は此障礙の存する間は、日本が切角今日增加しつゝある所の正貨(月々四千萬圓宛といふが)即ち切角の寶を持ちながらも、持腐となつて利用することが出來ず、永遠に亙つては日本の國民經濟上の必要をも充たすことが出來ざることゝなる。日本からいつて洵に困まつた事であるが、支那に取りても亦愚なる事である。今日支那が其經濟上の發展を計らうとするに就いては、米國か日本かの外には彼に資本を供給して之を助成するものなき事情に在るのであるから、彼としては日本の資本を排斥せずに、切角此を入れて利用するが得策である。勿論支那の立場からいへば日本の資本のみを入れては愚である。日本のも入れるが、米國のも入れる。併し米國のみから入れないで日本からも

入れ、日本と米國とを公平に競爭さすれば、支那の爲めには最公平且つ最有利なる條件にて資本を借入るゝことが出來、日本の資本を排斥して米國資本のみ入るるよりは得策である。然るにも拘らず支那が日本の資金の入込むのを歡ばずに之を排斥するとは愚も亦極まる。前年來は日本の商品を排斥したが、近頃は資本に及んだ。而して此愚なることを支那が敢てするのは抑々亦た何の爲めであらうか。

四

之に對する答は簡單明瞭である。其には畢竟支那人が日本は支那を併呑する野心ありと思ふのが根本の原因を成す。で支那人の間でも却つて日本人に近き筈の者共、日本の孰れかの方面より軍資金の支給を受けて居る連中が、一方に若干は彼等の内情を我に傳えたりして應報はして居ても、他面に先方に於ては窃かに日本の野心を吹聽して居る。表面日本人に媚びつゝ、裏面日本人を惡口する。支那人の心理は到底日本人の心理を以て推すことの出來るものではない。併し彼等をして玆に立至らしめたのには日本人にも罪なしといふを得ない。日本人は時に支那人を厚遇もし彼等に金を與へても、之と同時に彼等をして日本人に野心ありと思はしむることを露骨に言ひもし、又日本の新聞雜誌の論說記事からしても支那人に斯かる推測を下さしむべきものゝ多い所である。勿論日本人の中にも、眞に支那を尊敬し之を平和なる隣人として親切に助けやうといふ氣分の者もあるが、併し又機會あらば支那を取らう、支那の領土を併せやうといふ考のものも少くないことは確であり、最近加藤外相の對支交涉などは益々以て日本の誠意を疑はしむるものがあつたのである。特には又日本が嘗て朝鮮を併合した實例もあつて、此疑を深からしめて居るのである。斯かる危險なる國民に支那に於ける放資を許すのは、支那を併呑せしむるの第一步也との心配こそ、我が支那放資の彼より排斥せらるゝ主要なる原因である。

五

一體支那人は右の如くにして日本を恐るゝ所である

が、又之と同時に日本人を嫌ひ且つ若干は馬鹿にして居る。少くとも日本人と親しむとか日本人に懐くとかいふことがない。其は彼等が日本に學問しに來ても、日本人が彼等を好遇しない。歐米に於けるが如く家庭に入れて呉れず、下宿屋の無味乾燥なる處で暴利のみ絞らるゝ。支那人と見るとつい日本の一般民衆が輕蔑の態度を示す。其が痛く支那留學生には不快に感ぜられて彼等が日本嫌にならざるを得ぬ。而も日本は支那本國の事については先輩振つて色々と干渉し、箸の上げ下しにまで彼是いふ。其癖せ、支那に於て西洋人程に社會的事業に貢献もしない。唯だ支那人を馬鹿にして威張り散らすのみである。特に支那浪人といふ特殊階級の者があつて暴らし廻はつて居るから、愈々以て支那人が日本人嫌となる。特に今でこそ日本が西洋文明を先きに消化して先生振つては居るが、勿論西洋よりの受賣に過ぎないし、日本も其の前には支那を師としたこともあるから、支那人からは左う日本を尊敬する氣分になれない。更には又日本人が支那人に對しては威張るが、米國等に行けば、矢張り白人對等扱をせられない所からしても、亦た日本人を左う尊敬する氣分になれないのである。

六

で十分に支那人をして日本を尊敬せしむるのには、先づ以て日本が西洋式の科學的文明に於てもつと〳〵多大なる貢献を爲して、獨り支那人だけでなく、歐米人をして來り學ばしむるまでに進まなければならぬのみならず、更らに日本人の米國に於ける待遇等についても白人對等の處まで進めなければならぬが、此等は一朝一夕に出來ることではない。近き將來に其處まで達する見込はない。併し日本も此等の點に於て段々向上しつゝあつて、日本人の米國に於ける地位の如きも白人對等ではないにせよ、兎も角既に支那人よりは一段に高い。又此度の戰爭によつて日本の歐洲に對する相對的地位も良好となり、米國有識者の一部には之を承認して、之を利用しやうといふ意嚮さへ萌して來た位ゆゑ、支那人も此を理解して日本を尊重しなければ

ならぬ。少くとも日本を輕視してはならない。歐洲諸國は此戰爭により不利となつたとて而して米國が此により日本以上に大儲をしたからといふて、支那が米國にさへ依頼すれば可也、米國にさへ頼よれば日本は必ず抑えらるゝものと思ふは間違である。支那に勢力を及ぼし得る點からいへば何といつても日本が最優勢であり、米國の識者も之を認めて支那にては日本と提携しやうといふ考を懷くに至つた程ゆゑ、支那人にして日本を輕視し度外視する態度に出るが如きは危險である。米國の力能く日本を抑ゆるを得るや未だ容易に斷言することを得ない。假りに米國が日本を抑ゆるを得たりとしても、米國が支那にて優勢となれば、矢張り日本人以上に支那人に向つて横暴を行ふことゝなるであらう。日本を抑ゆる爲めに米國を借りるとすれば、米國を抑ゆる爲めに日本を借らなければならない筈である。米國も今でこそ支那人を好く遇するかも知れぬが、他日優勢となれば支那人を壓迫することは火を見るよりも明かである。墨西哥人が何故に米國人を嫌ふであらうかを考へたら直ちに解かることである。

七

一體米人のみならず西洋人が支那人（上流の支那人だけであるが）を遇することと日本人が支那人を遇するよりも良きが如きの感あらしむるのは、西洋人が支那人を尊敬するでもなければ親愛するのでもない。若しも其れ程に支那人を尊敬し親愛するものならば、何故に白人國が一體に支那人排斥を爲すであらうか。此謎を解けば支那人たるものも決して晏如たる譯に往かないではないか。所詮白人は支那を利用しやうといふに止まる。支那人にして若しも其好遇に甘んじて、支那の國内の事を擧げて白人に任すならば、其れは永久に白人の奴隷となることを豫期しなければならなくなる。斯の如きは支那の自滅であるのみならず、日本に取りても大に迷惑であるから、日本も之を阻止しなければならぬが、支那自身も斯かる自滅の運命に立至らしめざる爲めに、折角日本を利用し日本と提携して進まなければならぬ。之を以て永遠の大計としなければなら

ぬ。尤も支那では日本に於けると齊しく又は其以上に、國内の政權爭奪が烈しくて、一方の者が日本親交と出ると、他方には歐米信賴が起り、國民永遠の大計よりは、目前自黨の利益の爲めに、外交問題をも捕へて紛爭を事とするが、其が宜しくない。彼等も支那人全體として永遠の大利益から熟と考へ直ほさなければなるまい。

八

尚ほ日本に於て支那の留學生を、歐米に於けるが如くに家庭に入れて親切にしないといふ不平に對しては、日本の家庭と西洋の家庭とが意義の異ること、隨て此點のみから日本人不親切とのみいふべからざることを以て辯解しなければならぬ。日本の社會では家庭又は家族が丁度歐米の個人に當るもので、此が即ち日本の社會の單位である。此家庭に異分子を入るゝことは家庭の平和を害するものとして最も其嫌ふ所である。勿論書生とか奴婢とか不對等なる主從關係をもつ者は必要上包容もする所ではあるが、對等なる異分子を入るゝことは其最喜ばざる所である。然るに歐米では一家庭の間にも澤山なる單位が集合して居つて、親子兄弟の間にすら一家庭生活を營みながら、別なる經濟財産關係をもつ程ゆゑ、外國人などを住はしめることを何とも思はぬ。家の構造からいふも歐米では一家庭内にて各人別室に住つて各々鍵をもつ所であるから、一家に住ふて居るといふても、恰かも隣人と共に居るといふ位の心持である。日本の家は全く之と異り、各室の間には鍵がない。全然開放である。斯かる家に異分子を收容することは不對等なる從者ならざる以上は出來ない。日本人が支那人の留學生を家庭に置かぬといふが、此は支那人だけに對する待遇ではなくて、何國人に對しても同一である。內國人に對しても同一である。支那人が之を理解せずして日本人不親切を唱ふるのは皮相の觀察といふべしである。

九

又日本人か支那に往つて社會的事業に貢獻する所の少いのは確であるが、勿論全くしないといふのではない。而して其の少いのは一は日本の資力の乏しきに因

るのであり、又一には日本人が大體此種の事業に興味をもつことの少きにもよるのである。で日本人は支那に往つて此事業を多くやらぬが、日本内地にても多くやらぬのである。或は日本人が殊更ら支那に行つて之をやらぬのが悪いといふて責むるものがあるかも知れないが、却つて日本人が殊更ら支那に行つて之を多くやるならば、其れこそ日本人が爲めにする所あつて之を爲すものとして責められなくてはならぬではないか。此事業が歐米人の手に成るもの多く、日本人の手に成るもの少しとするならば、其は却つて日本人が支那に勢力を作る爲めに政略的の事を殊更にしないのだとも見らるゝことが出來る。西洋人の其等の事業は半ばゝ政略的に出て居るから、支那人が之に隨喜して國を賣るに至ては愚や及ぶべからずである。支那人も西洋人の此種の事業に就きて十分愼重に考究しなければなるまい。

十

他方日本としても從來支那問題を政爭の具に供し來つたが、其の爲めに此對支關係を不良と爲し、今は之が解決容易ならざることゝなつたから、此問題許りは此際お互に十分注意して、向後は擧國一致して態度を定めて進むことゝならなければならぬ。大體對支關係を不良にしたのは、日本人が支那を政治上に取らうとするのだといふ疑惑の支那人に存するが爲めに外ならぬ。此考が實際にも一部の日本人に在る。其が良くない。此考が我に在ると、到底日支關係を良くすることは出來ない。支那の人心をして益々日本より去らしめ、日本の資本を排斥し、日本の貨物を排斥し、更に日本の人才をも排斥し盡さゞれば止まずといふことゝなつて、日本は之が始末の爲め奔命に疲れ、日本の經濟の發展は順調なるを得ざることゝなる。之を避くる爲めには日本は斷じて支那を取らぬといふことを宣明し、以て支那人に安心を與えなければならぬ。

十一

日本は支那を經濟上利用することが出來れば其れで良い。支那を政治上に取ることは日本の必要ではなく

利益でもない。或は之を一時我物とすることも出來ないことではないと思ふが、永く之を持つことは負擔に堪へない所であらう。日本は朝鮮を取り之を持堪へては居るが、支那を持堪えることの困難は到底朝鮮と同日の談ではない。朝鮮は日本の國防の第一線であるから、之を取り之を維持するのに非常なる負擔を爲しても辭せなかつたのであるが、其以上支那の領土に於て之を敢てするには及ばない。今日滿洲を租借はして居るが、之を日本の領土の如く振舞つて、漸次警察權をも併せるといふ風に押掛けて往くのは正當でない。餘り度を過ごすと、日本の厄介を増すことになる。其地に於ける行政は日本に取り好都合となるとも、一般に對支關係を不良にして常に困難を感ぜざるを得ざることゝなる。其は採らぬ方が良い。滿洲は唯だ露西亞の此方面へ出て來ないやうにする爲めに日本が其抑さへとして租借して居るといふことに解すべきもので、其以上に日本が此にて我儘を振舞ふべき筋合のものではない。勿論傳承的に之に附帶したる利權を拋棄するには及ばないが、益々此處に日本の政治上の權力を張るが如きの計畫は避けた方が全體上宜しい。

十二

日本人の一部の者の間に支那を取らうといふ考の行はるゝのは、一は日本自身の力を過信し、一には又外界の勢力を輕視するより生ずる所である。中には日本を神秘的に解釋するもあるが、其愚や及ぶべからずである。日本を以て神惠的の國として世界統一又は東洋統一などを說くものゝ如きは全く痴人の夢である。獨逸などにも此に類した空想が行はるゝが、隨ては又此回の戰爭をも引起したのであるが、其實現は到底六ヶ敷い。日本よりも數倍の實力ある獨逸にして然り。日本は斯かる空想を懷くことを止めて、唯だ〳〵實力の養成を努めるべきである。日本人に右の如き空想があり其が言動となつて現はるゝので、之に對しては支那人のみならず、其他の東南洋人も漸次日本を恐れ嫌はんとしつゝある、更らに西洋人も其の特に東南洋に利害を持つ所から、日本を危險視しつゝあつて、隨て極力

日本の此に於ける經濟上の發展を阻礙し、爲めに日本は其政治上の野心を達することが出來ないのみならず、切角の平和なる經濟上の發展をも達することが出來ないこととなりつゝある。政治上の希望が實現し得るものならば一時の經濟上の不利も忍ぶことゝするも良いが、其れの實現困難なるものなる以上は洵に愚なる遊戯といふべきである。今日は歐洲の勢力が支那に及ばぬから、日本の政治上の野心を充たすには絶好の機會といふものもあらうが、其が爲めに永く累を日本の經濟に遺す以上は之を敢てしてはならぬ。決して一時の快を貪るが爲めに永遠の不利を受くるが如き愚を爲してはならない。

十三

今假りに日本が小さな理由を口實にして支那を蹂躙し以て之を我配下に置くとして、其事自身は今日の時世ならば、出來ないこともあるまいとも考へらるゝ。米國といつた處で東洋に出て來ては大して之を妨害する實力はあるまじく、歐洲諸國が如何に煩悶しても國命に係る大戰爭を有邪無邪にして置いて東洋に出て來て事を構ふることは出來まい。故にするならば今が時といふこともあるが、併し一旦之を日本の物としたとて、何時まで之を維持することが出來るであらうか。彼の内部の紛爭も朝鮮よりは大で、之が制禦は到底容易の事ではあるまい。支那人は善政さへ布けば何國の政府にも從ふ民ともいふが、日本が第一彼等をして善政と思はしむる政治を布くことの出來るかゞ疑問である。日本が之を取るとして彼等の滿足するが如き輕い税を負はすことが出來るであらうか。永い間消極的に税の輕からんことのみ計つて來た人民に、税は重くするが人民の福利を增進するが如き政治を理解せしむることが出來るであらうか。之が理解には餘程長年月を要することゝ思ふ。第二には今日の皮相的には自覺したる而も本來自尊心厚き支那人を日本人といふ彼等の輕視する所の者によつて治めることが出來るであらうか。成程支那の前代には屢々夷狄より起つて國を建たものはあるが、今日の時勢に於て此筆法にて日本が其

政權を握ることが平穩に行はるゝであらうか。特に又外部からの故障が大に之を妨ぐるでもあらう。此支那といふ大なる經濟上の利益を日本が政治上から獨占しやうといふに於ては、米國が先づ相當に邪魔するであらうし、歐洲諸强國も戰後、其疲弊より囘復すると共に、聯合して其利權取戻の大運動を日本目掛けて爲し來るであらう。此に對抗するには日本は非常なる困難を感ぜざるを得ないであらう。此内外腹背に受くべき大敵に對しては到底永く日本の堪へ得る所であるまい。

十四

特に又日本が支那を取るといふのは、其名正しくない。其名の正しからざる事を行ふといふには餘程實力の大なるものがなくては駄目である。日本の實力大ならずして名の正しからざることを敢てするに於て、到底永持の出來るものでない。否な之が實行其ものも困難であらう。夫の朝鮮併合の如きは若干外國をしても日本の自衞上已むを得ずと思はしむる點もあつたから事なきを得たが、今度は其がないから外國が承知しない。日本人自身としても自衞上避くべからずといふ場合ならば本氣にならざるを得ない。隨て强烈なる力として妨害物を排除することになるが、其程でなく、名の正しからざることになると、力が出ないことゝなるを免れない。此點からしても實行が困難である。其も朝鮮の場合には外國の此に於ける利益小であつたから大した問題とならなかつたが、支那となると外國の利益が重大であるから、到底容易に彼等が承知をすまい。勿說日本は支邦に於て他の歐米諸國よりも相對的に大なる利益をもつが、併し此利益は支那を領土としなければ得られないものではなく、却つて支那を領土とすれば、之が爲めに内外の紛爭を多くして屢々我經濟上の利益を阻害せられ、重き負擔に堪えざることゝもなるであらう。日本の經濟上の利益は爲めに進められずして、却つて之が妨害せらるゝことゝなるであらう。

十五

斯くて日本は支那を取らぬといふことゝするが、之

と同時に他諸國をしても之を取らさぬといふことを主張しなければならない。又之を主張し且つ維持することは日本に於て出來る。其力は日本にある。此場合には日本の名正しい。正しきことを行ふ段になると、日本の多少小なる力を以てゞ能く强敵を抑ゆることの出來ることは日露戰爭の証明する所である。名正しきことを主張し實行する以上は、野心をもつ他の國も遂に賛成しない譯に行かぬ。又假令之に反抗して來てゞ、彼等の力ゞ鈍らざるを得ない。勿論此場合には多くの外國も日本を助け日本をして之を行はしむるであらう。支那人自身も勿論日本人に信賴せざるを得ないので、前にいふた日本の支那に於ける放資も行はれ易くなり、原料の供給販路の擴張も支那に於て容易に達せらるゝことゝなるであらう。日本は自ら支那の領土を取らざると同時に他國をしても取らしめずといふことに因つて、一方支那人をも信賴せしめ、他方外國をしても信賴せしむることゝなる。此が日本にとり最小の勞資を以て最大の實益を擧ぐる所以のものである。

十六

抑々日本は支那に於ける利權爭奪戰の一員としては寧ろ後進國である。滿蒙に若干特殊の利益をもつことになつたが、支那全體から見れば、日本のもつ特殊利益といつたとて洵に貧弱なるもので、支那の中の最も良き處はむしろ他の諸國の勢力範圍である。楊子江流域といへば支那の寶庫であらうが、此には英國が主要なる地位を占め、若干は他諸國が割込んで居る。日本が益々支那に於て經濟上發展するのには、滿蒙の小利益に甘んぜずして、支那の全體に特に楊子江流域にも活動しなければならぬ。日本が支那を政治上我物としやうとして能はず、漸く貧弱なる北方の一小部のみを收めて、此が動機ともなつて各國をして支那を分割せしめ、豐饒なる南方支那を英國等に取らせるとゝなり、此からして日本が排斥さるゝことになつては大變の損失である。小利益を確保してゞ大利益を逃がすやうでは愚である。此點からいふても、日本は支那を一部にても全部にても取るといふ事を初めるのは得策では

ない。飽迄自ら取らず人をしても取らしめざることゝし、支那の全區域は之を各國の自由競爭場裡と爲すことを主張し、以て支那の主要利益に參加することゝしなければならない。

十七

支那全國を列國經濟の自由競爭場裡とするとは、日本に取り最重大なる利益であるが、隨ふては滿蒙の日本勢力圈にても日本のみ其利益を獨占することなく、努めて外人を迎え、外資をも引入れて從業せしむることにすべきである。此點に於て日本の態度にも從來排外の氣味がある。此處に日本のみ獨占せんとしつゝ、他の支那の地域にて日本に割込を認めさすることは餘りに自分勝手である。日本自らも滿蒙に外人及外資の來るを許し、之と同時に日本人が支那の如何なる方面にも行き得ることを他諸國をして認めしめなければならぬ。又此方が日本に取りて一層有利である。日本が一層重要なる支那の地域に於て發展するを得る所以である。加之滿蒙に外國の勢力を入れて置かないと、他日露國と衝突した場合に、其は日本のみの利益の問題として、他國の同情援助を受くることが出來ないのみならず、却つて日本の不利にまで妨害を爲さるゝこともなる。で此處に諸國の利益を若干入れて置く方が日本の爲めに有利に問題の解決さるゝことゝなる所以である。

十八

又滿蒙に外資を入れると、其れだけ日本の利益を失ふやうにも見ゆるが、左樣ではない。此地方が之により發展すればするほど結局日本の利益ともなる。日本は若干は其から原料の得らるゝことにもなり、販路を擴張することにもなり、日本の滿鐵等の利益をも大にすることゝなる。假令若干日本の事業と競爭することになつても、之に刺戟せられて日本の事業が奮勵することになれば、獨占的利益を收めて安閑として居るよりも良い。外國の刺戟のないのは眞に自ら發展する所以のものでない。假令此地方にて自由競爭をしても、日本は既に相當に根柢も固くなつて居るから、日

本の勢力の侵しくなることはあるまい。又此競爭に於て敗るゝやうならば、自らの實力足らざるものとして諦めるの外はない。又支那の他の地方では、滿蒙ほどに、日本の基礎が固くはなからうが、其にしても日本が自由競爭で活動し得るならば、歐米よりも距離の近き處にあつて、文字思想に類似があつて事情を研究するに便利をもつだけでも一層有利で、日本人が此にて經濟上發展の出來ないことはあるまいと思ふ。而して日本も資本を此に入れ、外國もドシ／＼之を入れることになれば、其外資も日本を利することになるであらう。動もすると日本人は支那に外資の入ることを心配するが、成程此に於て日本が排斥されたり、外國が之を土臺として獨占的利益を收めたりしては日本も困るが、さうでない限りは、其資本は最多く日本を利することゝなる。米國や英佛等が支那に資本を入れても、米國などは自國に豐富なる原料を有つから、態々支那の原料を遠い本國に持行くを利としない。歐諸國も支那以外に於て支那よりも本國に近い處に原料の供給地をもつから、支那より多く之を仰がうとするものでない。支那が開けて原料の供給が豐富なればなるほど其は近き原料渴望の日本の最多く利用する所となる。支那に資本が入つて購買力が增大することゝなれば、英米佛等の優等品が多く行くよりは、むしろ日本の廉價品が益々多く行くことになる。勿論外資の輸入に伴ひ其事業に要する機械類を放資國より供給するといふが如き特約あるだけでは、日本が之に與るを得ないことにはなるが、矢張り材料にしても若干は近い日本より供給せしむることゝならうし、賃金等として支拂はるるものに至ては廉價なる日本品への需要となつて現はるゝことでもあらう。日本人さへ努力すれば歐米資本の支那に入るのは日本の爲めに大なる利益ともなる。勿論此放資を日本自身も力の許す限り適當なる物體の見附かる限りどし／＼實行して、其利益を收むべきである。

十九

で米國の支那に投資するのは、彼が支那に獨占的政

治的勢力を樹てざる以上日本としては毫も心配はない。むしろ歡迎すべきことであると同時に、日本が露國と協定して滿蒙に於て政治權の擴張を計るが如きことありとすれば、其こそ却つて日本自身に取りて患ふべき事を敢てするものである。又日本が先頃の對支交涉に於て英國の妨害の爲め南支鐵道の敷設を成功しなかつたことは、却つて原則上英國の地位を認めたやうにも見えて望ましからざることである。又目下鄭家屯事件に關聯して支那の主權を侵すが如き警察上の要求を持出しつゝあるが如きは寧ろ不穩當であり、斯かる事は支那人の日本に對する疑惑を益々大ならしむるもので、結局日本の支那に於ける經濟上の大發展に有害也と思ふ。膠州灣の如きは平和克復の際に相當の對償を得て支那に返還するも差支はなからう。卽ち此は日本自身も取らざると同時に他國をしても取らしめざることとすべきものであらう。從來日本人は支那の政爭に干涉して、或は甲黨を助け、或は乙黨を助けて居るが、此も日本人に對する疑惑の原因となつて居るから、彼の國內事は一切支那人自身に任かせ、日本としては唯だ時の政府に政府として敬意を拂ふべきものであらう。此方は切角親切に助けて居ても、助けられた人自身が助けた日本人を疑ふといふのであるから、彼等の政爭は之を助けないことゝするのが得策であると思はれる。

二十

對支放資につきては日支銀行が今日問題となつて居る。此は日本の支那に於ける放資を爲すには必要なる機關とも考へらるゝが、併し目下提案せられたるが如き政府の保護の下に立つ銀行では、成行上生じて居る支那人の疑惑を益々深くして好果を擧ぐることは出來難いであらう。で已むを得ぬ。むしろ民間に於ける資本家の自由なる投資團を幾つも作つて此にて行くが良からう。其れでは政府の補給利子なんかは得られぬであらうが、併し日本の資本家も今日は支那に於ける事業位は十分吟味研究して關係し、一旦相當に良しとの見込が附けば、多少の損失の危險を冒しても、大膽に

投資すべきである。此が出來ぬやうでは仕樣がない。之を躊躇し居るやうでは、そして政府保護の銀行位で投資して居るならば、投資の進捗覺束なきのみならず、戰後歐洲品がどし／＼支那市場に來る時ともならば、歐米諸國民の使嗾と相待つて、日貨排斥が續出して、日本の支那に於ける經濟上の發展は困難となるであらう。夫の使嗾の本を絕つことが肝要であると考へらるる。

二十一

一體日本の對外問題としては對支問題の外に、對米問題が重大であるが、此が近き將來に日本を困迫したる地位に陷れずやとの心配もある。併し此も目下の處對支關係に累る所が大で、此方にて日本が誠意を以て侵略主義を採らずといふことを明にすれば、餘程良好となると思ふ。支那に於て米國にも自由競爭にて行動することを承認するならば、彼と雖も日本を敵視することは出來なくなるであらう。米國は日本の大顧客國であるのみならず、白人各民族の寄合國であるから、日本が彼とは出來るだけ衝突を避くるのを得策とするが、其が爲めにも此對支關係に於て日本の公平なる態度を示すことを要する。其他東南洋の諸地特に印度の如きに於ても、近頃は土人が日本人に親しむよりは日本人を敬遠又は嫌惡するの風を生じつゝある。以前日本が勃興しつゝあつたときには、白人に苦しめられつゝある彼等として大に喜んで見たが、漸次日本の侵略主義を感知するに至りては、日本人に勢力を張られて彼等を救濟することにはならぬ。日本人に治めらるゝも、よりは白人に治めらるゝ方が良いといふ風に考ふるとゝなり、隨つて此方面に對する日本の貿易の發展が思はしくない。今日は歐洲品が來ぬから已むなく日本品を買入るゝが、戰後歐洲品の來る場合ともならば、此儘であると日本品の賣行は困難であらう。此等も畢竟は日本の對支態度からして感知せらるゝとゝなつた所のものである。で此方面への貿易關係を進むるが爲めには日本の對支態度を改めなければならぬ。又支那人は本國以外の東南洋各地に少からず散在し發展して

居るから、日本が支那本國を侵略するとは、此等の連中の好感を得る所以でもなく、此方面に於て日貨排斥を頻出せしむることゝもなる。日本は何れの關係からいふても對支關係を良好にすることが肝要である。

二十二

日米の關係は近年憂慮すべきものであつたが、最近米國に於て日米提携して對支放資を爲さうとの聲がある。此は洵に日本に取り好都合のことであり又好機會でもある。之により日米關係を密接にし良好にすることを計ることが肝要である。此が出來れば日米貿易も益々發展し、日米間の紛爭、隨つては戰爭の危險は一掃さるゝこととなり、遂には日本人の米國に於ける地位なども改良さるゝことになるでもあらう。日本は支那に於て米國よりも特殊の重大關係を有つけれども、何にも支那を我物視するものではない。米國が支那に於て日本を利用することを利と思へば、日本も米國に利用せられても良い。其代り日本も米國を利用したらば良い。日本獨り支那に於ける利益を占めては、他の諸外國よりの嫉視反抗に遇はなければならぬ。米國と共同するとが出來るならば、此を緩和することも出來る。支那人自身の思惑も良くなる。日本として得策である。特に日本は戰爭中は資本益々增加して放下の道に惑ふ有様ではあるが、戰後になつては斯ることが必ずしも望まれぬであらう。此時に當りて日米提携の關係が存して居るならば、日本の資本の比較的乏しくなつた場立合にも日本は幸にして支那の事業に直接の關係を有つとが出來るであらう。要するに日本の對支態度は向後支那と平和的經濟的に密接なる關係を作ることを標榜し、全支那に於て領土の不可侵、機會均等主義を以て進み、我れも侵さず人をして侵さしめざることゝして行動すべきものである。日本は之によつて初めて其經濟上の發展を對支關係に於てのみならず、對世界關係に於ても遂ぐることを得るものと考ふる。（一月二日稿）

朝鮮人の敎化について日本宗敎家の奮起を促す

京城ソウル・プレス社長　山縣五十雄

一

朝鮮の宗敎界は恰も其國土と同樣である。其山野が荒廢して開拓を要するが如く、其靈界も荒廢して、光明の導き入れらるゝを待つて居る。近年朝鮮が次第に衰頽に傾いて、遂には日本が之を併合せざるの已むを得ざるに至つたのは、多年の惡政が其最大原因をなしたることは無論であるけれど、宗敎が衰へて、人民の間に希望なく、信仰なく、理想なきに至つた事も一大原因を爲したに相違ない。

何人も知れる如く昔は佛敎が此國に於て全盛を極めて居た。高麗朝時代に於て、佛敎は殆ど國敎の位置に在り、上下これに歸依して、國內各地に宏壯なる寺院殿堂が建てられ、社會上萬般の事物を支配したのみならず、政治上にも偉大なる勢力を及ぼしたのであつた。

然るに五百年前李朝が高麗朝を覆へした以來、從來佛敎が餘りに多く政治に立入りて種々の弊害を釀生した事實に鑑み、李朝は非常なる壓迫をこれに加へた。即ち禪宗の他總ての他の宗派は禁止せられ、寺院及び僧尼は其所領其他從來有し居たる特權を奪はれ、僧尼は社會上の位置を墮されて、賤民となされた。其迫害の甚しき、僧尼は首府なる京城に足を入るゝことすら禁ぜられたのであつた。斯くの如き壓迫の下にさしも全盛を極めたる佛敎は遂に衰へて、大小無數の寺院は次第に倒れ、昔は王族名門の子弟が僧籍に入つたに反し、今は佛弟子となる者は孤兒其他貧民の子弟のみとなつた。今日其風景の雄大絕美を以て有名なる金剛山は、昔は佛敎の淵叢であつて、高麗朝時代には山中に建立されたる宏壯なる寺院八百八の多きを數へたそうであ

るが、今日殘る所は僅に四十許に過ぎず、而も其多くは荒廢の姿にある。此一事如何に佛教の衰へたかを明白に示すのである。

總督府最近の調査に據れば今日朝鮮全道に存在する寺刹の總數一千三百八十五、これに住する僧六千九百七十二名尼一千一百九十八名であるといふ。數字の上からのみで推察すると、佛教はさほど衰へて居ないやうに思はれるが、實際に於ては靈界と殆ど沒交渉で、朝鮮人の思想、信仰等に何等の勢力を及ぼして居ないと言つても過言でない。何となれば此等八千名に近き僧尼は文字通りの世捨人であつて、時々喜捨を乞ふ爲めに里に出る以外、全く寺内に屏居し、讀經念佛に日を送つて居るのみである。彼等は說教も爲ない、冠婚葬祭の如き儀式も司らない、況んや慈善博愛の事業に於てをや。のみならず、新政以來彼等の社會上の位置は上げられて、平民と同じになつたが、以前は前に述べた通り常民の下にあつたのであるから、彼等は今猶ほ一般人民より輕蔑され、賤民として遇せられ、信用も勢力も殆ど之を有して居ない。

且つ又彼等の大多數は無學無智で、而も迷信が深い。彼等は經を讀むを得れど、恐らく何が書いてあるか分つて居る者は殆どあるまい。宗教の意義や使命を解して居る者は皆無であらう。彼等の信仰は迷信に過ぎず、彼等の多くは唯口を糊する爲めに僧尼となつて居るので、偶々眞に佛に歸依せる者も無きにはあらねど、自己の極樂往生を求むるのみで、救世濟民を志せる者は一人もなく、唯念佛を唱へ、經を誦し、修行を積めば極樂に行くことが出來ると考へて居るらしい。其修行なるものも亦笑ふべきもので、例へば幾年かの間山中に籠り、無言の行を爲すといふの類である。

二

朝鮮に於ける佛教の現在は先づ斯の如き有樣であるこれに對して基督教の現勢は如何なるものであるか。

基督教が初めて朝鮮に入つたのは豐臣秀吉の朝鮮征伐の時で、小西行長の率ゐた軍隊には基督信者が多く加はり、ジェスウイト派の外國宣教師が一人從軍して

居た。此宣教師は朝鮮人の間にも傳道したやうであるが、大なる結果なかりしが如く、日本軍の退去と共に基督教は半島から消滅したやうである。其眞に半島に勢力を扶植し始めたのは約百年前よりの事で、其興隆は最近五十年以後にある。最初は天主教の宣教師が滿洲より、鴨綠江を越えて、朝鮮に忍び入り、傳道を始め、次第に信者を增加して、侮るべからざる勢力を作つた。これが爲めに政府の忌む所となつて遂には保守派の首領たりし大院君の手によりて大なる迫害を加へられ、數名の宣教師と數千の朝鮮信者とが虐殺された事もあつた。然もこれ等の迫害に關はらず、天主教は益々半島に擴がつた。次で米國から新教が献身的なる數名の宣教師によりて導き入れられ、これ亦燎原の火の如き勢を以て擴がつた。今日では新舊兩教共に牢乎たる地盤を有するに至り、信徒の總數三十萬を越え、彼等の間に働く外國宣教師の數は五百名の多きに及んで居る。而して此等の宣教師は只基督教を傳ふるに止らず多くの學校や病院を經營し、孤兒、癩病患者等の救濟にも努力し、それが爲めに朝鮮人の間に大なる信用と勢力とを有て居る。

實際日本が朝鮮を其保護の下に置き、統監府を設け次で總督府を置く迄は、此國の教育醫療、博愛濟衆の事業は殆ど皆外國宣教師の手に收められて居たと言つてもよい程である。今日でも彼等の經營の下にある大小の學校は其數總監府所管の官立公立の學校よりも多く、病院の如きも其規模の大と設備の整へるとに於て總督府經營の病院にも劣らぬものがある。貧弱なる南大門停車場に對して巍然として立ち、京城を訪ふ旅客の注目を最初に惹く宏莊なる煉瓦の建物は即ちそれで、セヴランス病院の名を以て弘く世に知られ、醫學校をも附屬せしめて朝鮮の醫學生を養成しつゝある。癩病患者の救濟は總督府に於て遠からず着手する筈であるが、外國宣教師は夙に此事業を起し、釜山及び光州に救養所を設けて、多少の患者を收容して居る。孤兒の救濟盲啞の教育の如き事業に於ても先鞭を着けたのはやはり宣教師で、實業教育の如きも天主教宣教師

に經營されつゝある學校の中には頗る見るべきものがある。

宣敎師の傳道に努力する實に至れり盡せりである。其上に彼等は献身犧牲の精神を以て其事に當つて居る。彼等は朝鮮に來るや、此國を以て墳墓の地と定め、永住の決心を以て、先づ朝鮮語を學びこれに熟達し、朝鮮の人情風俗を研究し、其衣食住に慣れ、然る後傳道に從事するのであるが、其熱心と勉强とには實に感服せざるを得ぬ。如何なる寒村僻地と雖も、彼等の足跡を印せざるはなく、不自由を忍び艱苦に耐へ、勇往邁進、斃れて後已むの氣慨を以て努力するのである。彼等の多くは既に二十年三十年の久しきを此國に暮し、中には父子相傳へて其事業を繼承して居る者も少なからずある。

北メソヂスト派の最初の宣敎師中にアッペンツェラーといふ豪い人があつた。三十年程前に初めて朝鮮に來て、新敎の地盤を開拓し、今日の隆盛の基礎を築いた人であるが、先年木浦沖で難船の不幸に遭ひ水底の藻屑となつたが、其遺兒四名は一度米國に歸りしも、父の志を繼いで、朝鮮に於て傳道事業に從事すべく敎育を受けつゝある。其長女は既に之を卒へて二年程前に歸り來り、現に働いて居る。其他の三名も遠からず相續いて歸る筈である。又平壤にホールといふ女醫がある。其夫たりし人はやはり醫師で、醫療を施しつゝ傳道に從事して居たが、幾年か働いた後傳染病に襲はれて命を失ふた。寡婦となりしホール夫人は夫の遺業を繼ぎて婦人病院を經營する既に二十五年の久しきに及び、其上其唯一人の男の子をしてやはり父の遺業を繼がしむべく、米國に於て醫學を修めしめつゝある。昨年の秋米國に於て病死した長老派の宣敎師アンダーウッド氏の如きも亦宣敎師として模範たりし人で、只に其才幹人格の優秀なりしのみならず、其勉强其熱心は常人の及ぶ所でなかつた。氏は遺言して、其遺骸を畢生の力を盡して働きたりし朝鮮の土となすことを希望したそうで、近く氏の子息は之を携へて歸り來ると共に、父の遺業を繼ぐ筈である。

斯の如き例は幾らでもある。つい先日も若き宣教師夫婦が米國より來り、鴨綠江畔滿洲の國境に近き所に於て傳道に從事すべく出發した。聞けば夫婦は共に良家の子で、結婚したばかりであるそうだ。彼等の永住せんと志せる地は朝鮮中でも最も不自由なる僻地で、冬は酷寒氷點下三十度に下る珍らしからざる難儀なる處である。故郷に留まれば何不自由なく暮すことの出來る身でありながら、勇み進んで斯る僻地に基督の福音を傳へんとする其熱心は寔に感ずべきものである。

近年朝鮮に於ける基督教傳播の速かなるは歐米に於て奇蹟を以て目せらる程であつた。それには種々の原因もあるが、宣教師の非常なる熱心と努力とが其一因なる事は否むことが出來ぬ。

三

日韓併合の年の前後、米國の宗教界に於て、朝鮮に於ける百萬人傳道なる一大運動が盛に行はれた事があつた。即ち大擧傳道に由り、一朝にして百萬の朝鮮人を改宗せしむるを目的とし、之に要する資金を募るの運動であつた。實際其頃の朝鮮に於ける基督教傳播の勢は驚くべく盛なるものであつて、百萬人の改宗者を得ることはさして困難なる事業と思はれなかつたのである。然し此運動は大なる結果を現はさずして、有耶無耶のうちに消滅したが、其斯の如き終局を見たると、近頃に至りてさしもに盛なりし基督教傳播の勢が多少衰へたるかの觀あるとは、興味ある講究問題である。

愚見を以てすれば初めに基督教が速に朝鮮人間に擴がりたるは二つの原因ありしが爲めである。其一は、既に述べたる如く佛教衰頽して朝鮮人の信仰を繼ぐ能はざりしが故に、彼等は靈に於て飢えて居た。此時に當りて基督教が入り來りしにより、彼等は手を廣げて之を抱擁したのである。其二は基督教に入る事に由りて、彼等は腐敗したる彼等の政府の壓制より脫れんとしたのである。元の韓國政府は治外法權と軍艦とを背後に有する外國宣教師を憚る所が多かつた。此故に基督教を信奉すれば自然外國宣教師の掩護を受くる姿と

なるより、苛斂誅求を事とする韓國官吏も信者に對しては自ら其手を弛めざるを得なかつた。其上に日本に對して好き感情を有たざりし朝鮮人は、多少面當(つらあて)の意味を以て外國宣教師に縋る場合もあつた。救世軍の朝鮮に入りしは併合に先だつ一二年なりしが、軍の名あるより無知の朝鮮人は軍隊と之を誤解して、排日の傾向ある朝鮮人の之に加はる者續出し、後其軍隊に非らざる事が分るに及んで、急に脱退する者が多かつたといふ滑稽なる現象もあつた程である。

然るに併合後强固なる政府の支配を受くるに至り、外國宣教師の掩護の効無なきを知るに及ぶや、靈の要求よりも物質上の利益の爲めに基督教を信奉せんとする者が次第に消滅した。今日朝鮮に於ける基督教傳播の速度が、以前の如く顯著ならざるは、蓋し斯の如き原因に基くものと思はる。

然しながら朝鮮に於ける基督教の勢力は偉大なるもので、到底母國のそれに比ぶべくもあらぬ。平壤京城等に於ける教會へ日曜日に參集する信者の數は夥しきもので、千名以上の信者の集まる教會はいくらもある。京城を除き、何處の都邑に行きても、一番立派なる建物は基督教の教會、學校若くは病院で、此盛なる勢を、佛教の火の消えたる如く全然無勢力なるに比ぶれば實に雲泥の差である。

斯く盛なりとはいひながら、前に述べしが如く朝鮮に於ける基督教信者の總數は三十萬內外で、佛教徒の總數は更に其下にあり、侍天教と稱する一の宗派ありて、其歸依者少なからざれど、いまだ大なる勢力を爲して居るといふ事は出來ぬ。されば朝鮮の總人口は約一千四百萬なりといへば、大多數の人民は無宗教であると言つても差支が無い。上流及び儒生の間には儒教が行はれて居るけれど、儒教は嚴格なる意味に於て宗教でないから、彼等も亦無宗教である。多數の人民は迷信に拘はれて、何等靈の歸宗すべきものを有たず、或は神仙を想像して之を崇拜の目的となし、或は妖精を信じて總ての幸福總ての災禍は其手によりて頒たるものと考へ、之を祭りて多少の安心を得て居るのであ

る。之を要するに朝鮮の靈界は劈頭既に言へりし如く全く荒廢して開拓を要する事急切なるのである。

四

其開拓事業には既述の如く主として外國宣敎師が當つて居る。然し之を悉く彼等の手に委ねて置いてよろしきかは一の重大なる問題で、愚見では朝鮮が我帝國の一部となり、朝鮮人が我　陛下の臣民となれる今日に於ては、彼等の敎化を我々日本人が主として企つべきものであると思ふ。其理由につきては玆に多く言ふを要すまじく、識者の多數は同樣に考へらるゝと信ず。

玆に多少心强きは此事業が既に一部の日本基督敎徒によりて着手された事である。朝鮮に在住する日本人間に成立てる宗派はメソヂスト、長老、組合及び聖公會の四派であるが、此中朝鮮人間に傳道をして居るのは組合敎會のみで、他の三派は其活動を日本人間のみに止めて居る。組合敎會で朝鮮人間に傳道を開始したのは今から約六年前の事で、初めのうちは其勢頗る微微たるものであつたが、今日では顯著なる發展を遂げ、其敎會は全十三道中九道に擴がり、敎會員總數一萬七千名に達し、二名の日本人六名の朝鮮人敎師の他に約百名の朝鮮人傳道者が働いて居て、活動の中心たる人は朝鮮人の敎化に多年の經驗ある渡瀨常吉氏である。昨年中此事業に要したる費用は一萬七千圓で、其中三千五百圓は朝鮮信者の寄附にかゝり、殘餘は在朝鮮及び在母國の敎會員及び有志より醵出したものである。

此事業は組合敎會の頭目たる海老名彈正宮川經輝の二氏が久しく計畫されたもので、前述の如く六年前に開始せられたが、衝に當れる渡瀨氏は初めのうちは種種の困難に遭遇し、事業の進歩は頗る遲々たるものであつた。然るに日韓併合と時勢の氣運は著しく其發展を助け、今日では京城のみでも七つの敎會が維持され其本營ともいふべき立派なる敎會が、一萬餘圓を費して建立され、先日其獻堂式が行はれた。

佛敎の方では東西本願寺の手で多少の敎化事業が朝鮮人間に試みられつゝありと聞けど、いまだ大なる効果を擧げたのを耳にせぬ。天理敎も亦朝鮮人間に傳道

を行ひつゝあり、相應の成績を擧げて居るとのことなれど、詳細を知らぬは遺憾である。兎に角、日本人の手に由りて行はれつゝある朝鮮人敎化の事業はいまだ甚だ發達せず、之を外國宣敎師のそれに比ぶれば頗る幼稚なるものである事は誠に遺憾なる次第である。我國の基督敎徒も佛敎徒も共に大に奮發して、此事業を遺憾なく發達せしめ、遂にはこれに付きて外國宣敎師を煩はすの要なきに到る迄に爲ねばならぬ。

殊に望ましきは佛敎徒の奮發である。既に言ひたる如く、朝鮮の佛敎は今や衰頽の極にある、之を現在の儘にして捨ておかば亡滅する他はない。之を再興せしむるは一に日本佛敎徒の責任である。思ふに日本の佛敎徒は朝鮮の佛敎の亡び行くを見殺しにしたくはないであらう。然らば彼等は非常なる奮發、非常なる努力を爲さねばならぬ。

現在朝鮮の主要なる都市には佛寺が建立されて居て日本の僧侶が之に住居し、都市在住の日本人間には多少の敎化事業を行ふて居る。けれど彼等が朝鮮の僧侶と提携して朝鮮人を敎化するについては殆ど聞く所が無い。前に言ひしが如く本願寺派で多少の傳道を朝鮮人間に試みつゝありと言へど、顯著なる効果はまだ擧つて居らぬやうである。日本の僧侶で、朝鮮語に熟達し、直に朝鮮人に向ひて說敎し得る者は殆ど一人も無いと言つてもよい。之を外國宣敎師の先づ朝鮮語を學びて然る後傳道を始むる熱心と用意とに比ぶれば如何。

朝鮮在住の日本の僧侶の多くは只に朝鮮人の敎化を努めぬのみか、朝鮮內地に移住せる日本人の慰問すら怠り勝ちであるやうである。鐵道沿線の交通便利なる都邑に於ては、彼等の姿を見ることを得れど、一步深く內地に踏み入れば、彼等は雨夜の星の如く全く姿を現はさぬ。內地に移住せる日本人の多くは農民で佛敎の信仰深き者である。從て彼等は僧侶に接せぬ事を深く心寂しく感じて居る。殊に家族のうちに死亡ありて、遺骸を荼毘に附し、若くは埋葬する時に當り、僧の讀經回向を得ぬ事を、死者に對して一の罪惡の如く感じ、

いたく心を痛むるのである。斯る人に不幸が偶然重なり來るが如き場合に於ては、彼等は之を逝ける者の恨に歸し、失望落膽して郷里に引上ぐる事もある。

斯の如き次第であるから、僧侶は義務としても時々僻地に移住せる日本人を訪ふて慰め勵ます所がなくてはならぬ。然るに之を爲す特志の僧侶は殆ど絶無である事は如何にも慨はしき次第である。併合以來既に六年の歲月を經たるに、日本人の朝鮮に移住し來る者今猶ほ比較的少なきは、種々の事情あらんなれど、僧侶の活動足らざる事が一因ではあるまいか。

日本の僧侶は外國宣教師の千里を遠しとせずして渡來し、あらゆる艱難辛苦に耐え、道の爲め、信徒の爲めには如何なる僻地と雖も訪ふを辭せざる獻身的熱心に對し、不自由なき都市に於て悠々閑遊しつゝある事を恥しく思はぬか。朝鮮の佛教が將に滅びんとしつゝある事に對して平氣であるのか。昔の高僧が法の爲め如何に健闘したかを忘れたのか。

然しながら在鮮の日本の僧侶が不活動なるは彼等ばかりの罪ではない。日本一般の佛教徒の氣力なく、熱心なく、信仰の足らぬ事が、彼等に反映して居るのである。大に奮起せよ、奮起して彼等を後援し、奬勵し、鞭撻せよ。獨り佛教徒のみならず、基督教徒も奮ひ起てよ。朝鮮人の教化は我々の手で之を遂行せねばならぬ。荒廢せる朝鮮の靈界に光明を導き入れ、暗黑の裡に彷徨しつゝある朝鮮人に信仰を與へ、希望を與へ、理想を與ふるは彼等の兄弟となりたる我々日本人の責任であり、義務である。

政局如何か收拾すべきや

松井柏軒

（一）

一月二十一日の日曜日を以て、憲政、政友、國民の三政黨、一齊に大會を開きて其の態度を決定したり、即ち國民黨の提議せる内閣不信任案は、政友會嚴正中立の趣旨を以て、之を拒絶したるも（主義としては超然内閣に反對すと稱しながら）、憲政會は全黨を結束して之に同意したり、而して公正會の多數また不信任案を賛助すといへば、該案は少くも二百四十名前後を以て衆議院を通過すべく、殊に政友會中現に不信任案賛成論を唱ふるもの若干あるを以て、反對者は恐らくば百人内外に過ぎざるべき乎。

内閣は之に對して、二十二日臨時閣議を開きて其の對策を凝議する筈なりといふ、玆に於てか議會解散の外なしとは、萬口一齊に傳ふる所にして、而して解散後の歸結如何は苟くも政局を視るもの丶最も注意し商料する所たり。

然れども未來を知るものは鬼神なり、人事を豫言するは人の能くする所に非ず、唯だ既往を推して理を尋ね義を考へ、勢ひ斯の如くせざる可からずといふは、是れ議論にして、何人も之を敢てし得、試みに少しく玆に之を述べん。

（二）

時局をして今日に至らしめたるには、大隈内閣或は與つて責あるべし、然れども單に大隈内閣のみを咎めて、勢ひの玆に至るを究めざるは是れ徒らに死屍に鞭つ陋者のみ、政友會が今尙ほ之を敢てするは、是れ世間識者の以て卑しとする所以ならずや。

有體にいへば、事をして今日の如くならしめたる責

任の大半は、全く元老に在りと斷ぜざる可らず、大隈侯が首相として彼等に對する措置中には、若干の機略を弄する所と、例の放漫、手に任せて濫發する所とありしは論なかるべく、隨つて元老等の對大隈感情の險惡となれるや當然のみ、然れども裏面に於て如何なる曲折あるにせよ、大隈侯既に首相として骸骨を闕下に請ふに方り、其の後任として或る者を公然上表して奏薦したる以上、御諮詢を受けたる元老等は、先づ詳らかに首相の奏薦の當否を熟議し、理を推し情を備へて答奏するを當然とす、然るに事夙くより傳はりしといふと雖も、元老等が首相の辭意を奏上して未だ幾時間ならざるに、早く已に首相奏薦以外の人物（寺内伯）を推擧したりしが如きは、何人も多少の疑ひを挾むの餘地あるべし、乃ち大隈侯の機略に酬ゆるに又機略を以てして、玆に一種の感情より或る逆手を用ゐたりと判斷するも、誰か之を失當とせんや、蓋し當時の官僚派が大隈内閣を倒さんとして鋭意したるの極、竟に玆に至りしや否む可らず、然かも其の間、手段の辛辣を極めて、勢ひを激したる形迹昭々たり、斯くして來れる新政局に於て、初めより風氣の險惡なるべきや必然のみ。

假令此等の事情なしとするも、元老等が一氣に寺内伯を推薦したりしとは、決して時代の趨向に順應したるものとは稱す可らず、官僚に材幹多くして、而して一種の大勢力たることは、公平なる士人の齊しく認むる所なりと雖も、單に之のみを以てしては、到底政治を圓滑に運行し得ざることは、議會開設以來の經驗にして、如何なる雄材大略を以てするも、政黨の勢力を無視する能はず、或は時に純良ならざる手段を用ゐても之を懷柔し、若くば妥協し、若くば提携せざるを得ず、然かも其の弊害の多きや、伊藤公は自から政友會を組織し、桂公まで同志會を創立するに至れり、且つ彼の憲政擁護の運動に徴するも、人心の歸趨略ぼ察すべく、大正の今日、國民を基礎とせず、形式的には政黨の後援を有せずして、政機の運用を敏ならしめんとするが如きは、實に時勢を辨ぜざるもまた甚だしと爲

さゞるを得ず。

元老等が忠君愛國の至情餘りあること、何人も否定する者莫しと雖も、少くも時代を理解するに缺くるあるや惜むべし、現に政黨に交涉なき寺内伯を起し、有らゆる政黨の感情と相容れざる閣僚を羅致せしめながら、擧國一致を唱へて寸毫の効果を擧げ得ず、却つて竟に超然主義を標榜するに至らしめしが如き、是れ啻だに政黨の說ばざる所たるに止まらず、世論の多くも視て以て藩閥官僚の復活と做し、而して國民の多數また動もすれば然かく解せんとす、是れ政局をして今日に至らしめたる主要原因に非ずして何ぞ。

凡そ政治家の局に當るや一切の責任を負ひ、黨人を率ゆる者、亦黨に關する總ての責任を負ひて、間接直接に其の應報を受けざるなきに、獨り元老のみは總理大臣奏薦の如き大事を敢てしながら、寸分だも其の責任を負ふなしとするは、寧ろ不條理ならざらんや、世間元老を難ずるもの多きも偶然に非ず。

（三）

政黨と內閣と衝突して、議會解散となる結果如何といはゞ、總ての者皆傷き損して、一も勝て益する莫しと斷ぜざるを得ず。

第一に損するは內閣也、折角元老に推薦されながらも、議會の大多數より不信任を表彰せられ、而して唯だ僅かに不信任に反對する一の政友會と雖も、主義としては超然內閣に反對なりと高唱す、乃ち幾んど擧國一致の反對を受くる狀態となりて、內閣の聲譽最も大に損傷すべきこと多言を要せず、殊に內閣の主として責任を負ふべき豫算の成立を看ずして、爲めに緊急なる海軍の建造にも少からざる頓挫を來し、陸軍の最も必須の事業として經營せんとする重砲の增設、及び航空事業等また少からざる支障を免かれざらんとす、況んや經濟上に及ぼす人心の沮喪に由りても、亦大なる損失をも看るべきをや、解散に由て內閣の受くべき負傷の大なる幾んど名狀す可らざる也。

（四）

解散のため、孰れの政黨も皆苦痛を受けざるは莫

し、獨り政友會は現在より少くも二三十人を増加し得べく、若し內閣の援助を得ば、四五十人を増し得べしと做すが如きも、其の不徹底なる態度は、却つて輿論の非難を受けて、益々民望より遠かる掛念なきにあらず、詮ずる所、再撰を爭ふべき候補者をして、多大の苦痛を受けしむるに止まらん乎。

憲政會が再び絕對多數を受くるの至難なるは天下何人も認むる所にして、憲政會自からも亦百七十人內外を擧げ得るに過ぎざらんと爲すに似たり、思ふに其の黨の大なる丈け、黨の負擔すべき撰擧費亦大なる可く、總裁加藤子は頗ぶる鞏固なる決意を有するが如きも、其の受くる痛苦の小ならざるや推測に餘あり。

國民黨は最小黨にして、現に有する議員三十人に達せざるも、多くは是れ資力乏しき人々にして、其の痛苦最も大なるべし。

假りに總選擧に際して、一千人の候補者出づると視做し、一人平均八千圓宛費すとするも、總計八百萬圓に上るべく、之に要する取締費と、選擧者の要する費用と勞力とを加算せば、少くも一千萬圓を下ること莫かるべし、一千萬圓を浪費して、而して政府政黨共に傷き損せざるは莫し、却つて一の勝者なしといふ、果して何と評すべきや。

若し强ひて何物か贏ち得る所ありとせば、蓋し政黨の援助あるにあらずんば、到底政柄を把持しがたしといふ一の敎訓(レツスン)のみ、然り、是れ唯一無二の敎訓也、然れども此の敎訓や識者の夙に認めし所にして、今更總てを損傷せしめて始めて得べきものに非ず、果して然らば、議會の解散は、結局總てを損失して、一の益なき愚擧といはざる可らず、嗚呼是れ忍ぶ可んや。

思へ、歐洲大戰より來るべき大勢に順應して、我が興國の氣運を振作せんとせば、官民一致、全力を傾けて事に當るも幾んど足らざるを憂ふるに非ずや、此の時に方りて無用有害なる此の政戰を敢てす、眞に憂國愛世の士は、別に之を匡救する所以を思はざる可らざる也。

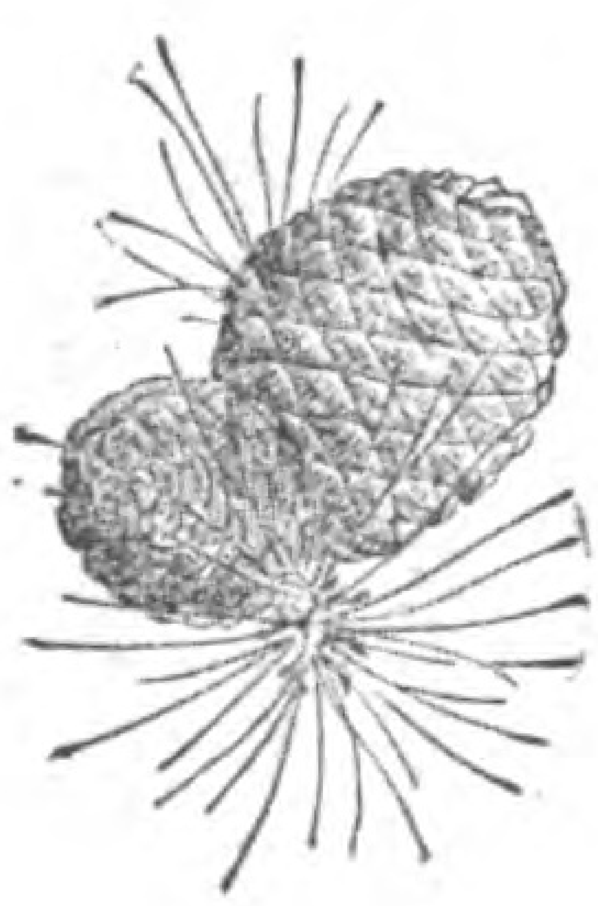
（五）

然らば則ち其の匡救の方途如何、曰くなし、若し强ひて之を求むれば第一には元老をして罪を闕下に謝して爾今以後政局に容喙せしむべからず、第二には寺内伯自から其の地位を捨てゝ、加藤子、原氏、犬養氏等をして、相携へて鞏固なる内閣を組織せしめて、眞に擧國一致の實を擧ぐべし、若し此がため首相其の人の寺内伯たるを便とせば、伯は留まりて其の任に當るべし。

是れ蓋し至難事なるべし、則ち至難事なりと雖も、今日是れ以上の方途ありや否や、至難なりと雖も能はざるには非ざる也、之を爲さゞるは未だ眞に憂國愛世の志なきのみ。

此の方策を行はんとせば、今の政府政黨を超越せざる可らず、一切從來の行懸と感情とを放棄して、眞に至誠を推して事に當らざる可らず、僅かに平田子の建策をすら容るゝ能はざりし寺内伯に取ては、是れ實に意想外の大難問ならん、然れども之を措きて時局矯救の途果して孰れに在る、局に當りて最も重責ある寺内伯

其の人は、殊に考慮を要す。



今後に於ける 寺內々閣と憲政・國民聯合軍との政戰批判

△要するに烏の雌雄論

冷眼居士

憲政會は現內閣が超然主義なるが故に、之と兩立することが出來ないから殪すと云ひ、寺內內閣は飽くまで秉公持平でやつてゆくと云ふ、共に大義名分を明かにしやうとする純理論である。超然內閣が今日の時勢に適せぬからと云つても、政治は實際問題で、唯理論許りでは行はれない。議會開設以來今日まで果して政黨內閣が行はれたか。憲政が施かれた以上、政治の理想は政黨政治で、又實際もさうなつて行くのが大勢であるが、時勢はさう早く進歩するものではないから、今日ではまだ純然たる政黨內閣は出來ない。今後とても何時出來るか分らない。それは餘程考へものである。然し寺內內閣が超然主義であるとて大事を托するに足るか否かは、首相其人の人物や技倆や仕事を見なければ判らない。然し憲政會が超然內閣を否認するのは可い、けれども憲政會の成立は如何であつたか。今日絕對多數を有する大政黨も、前年桂公が政府にゐた時急に造つたもので、集まつたものと云へば、大浦の率ひてゐた大同俱樂部、一名猿多村と云つて如何なる政府にも近からうとして世間に餘り香ばしく思はれてゐない人々と、苦節十年で通つて來ながら、其苦節を捨てて桂公の政權に近づかんとして國民黨を脫した人々であつた。政見の上からは兎も角、個人の德義上甚だ面白くない人々が集まつたのである。そんな人が全體主義や政見を爭ふ資格があらうか。後に加藤が率ひて憲政會を形造つた。加藤は英吉利流の立派な政治家であるが、大隈內閣と憲政會の前身同志會との關係は如何であつたか。憲政の主義から云へば有り得べからざる瀆職、選擧干涉、政黨の進退としては辭職すべきに留任して、政黨の本義を全うせるものと思つてゐる大隈內閣を擁護した憲政會が、現內閣を目して憲政の常道に反するの、憲政の逆轉のと、然う大きな口は利ける筈のものではない。局外から之を觀れば、早く政權に有り付きたがつてゐるとより外には思へない。大隈內閣當時の有様を見れば、憲政會も亦官僚と少しも變はらない非立憲をやつてゐたのである。

要するに今度の戰は、政黨主義を唱へる官僚と、超然主義を唱へる官僚との爭であつて、其結果が如何なつても、憲政には何の關係もない。或は憲政會が多數を占めた所で、政黨主義を楯に非立憲な事をする第二の大隈內閣が出來る位で、別にエライこともない。又政府が政友會と提携して多數を制し、內閣を維持するとしても、有象無象を集めて唯政權

を維持するのでは、これ又感服が出來ない。要するに今日の爭は政權に渇して早く取りたいといふ處から來てゐる。取つたら其後どうするかといふに、今日までの經驗で分りきつてゐる。人の性質は即日に改まるものではない。これまでの經驗で、成り行は大概分る。であるから勝敗は何れにあつても、憲政の上には大した變動もない。元來斯の如く官僚が跋扈して超然内閣を作るのも、國民に十分の氣力がないからであり、又政黨が眞に國民の意思を代表してゐないで、單に政權に有り附からと焦るからである。日本に眞に憲政を確立するには、も少し眞面目になり、篤實に進まなければ駄目である。今は其時機である。唯一時に、超然内閣とか政黨政治とか騷いでゐる外に、堅實な考を以て國民一般が進んで行かなければならない。(一月二十二日)

△民黨必ず勝たん

濱口雄幸

今度愈々憲政會は國民黨と聯合して、現内閣不信任案を提出する事となりたるが、世の中には、こは憲政會が好んで寺内内閣に挑戰したるかの如くに思ひ居る者なきに非ず。又政府及び其與黨側は左樣に言ひ居るやうなれども、斷じて然らず。此挑戰者は全く政府にして、そは現内閣成立の事情其他に依て明瞭なる事也。即ち現政府こそ官政内閣超然内閣として、憲政の常道に向つて挑戰したるもの也。我等は即ち憲政の常道の爲めに正當防衛の戰を起すに過ぎず。憲政を危殆に陷れんとするを、防ぐものに他ならざる也。而して此防戰の方法なる政府不信任案は、無論議會の三分の二内外の多數を以て通過するは疑ひなき事なり。然らば、其際政府は如何にすべきかと言ふに、こは已に我輩の本誌新年號に於て述べたるが如く、不信任案の議會に提出さるゝと同時に潔く辭職を爲さゞるべからざる也。これ現内閣成立の意義よりして正理に叶ひたる當然の事也。然るにも拘らず解散を敢てせんとするか、そは全く此内閣存立の意義を失ひ不合理至極の事となる也。而して其上、解散せんとするには相當の抱負なかるべからず。猶又議會に於て相當の與黨を有せざるべからず。然るに現内閣は政策上に於て何等の抱負なく、議會に於て一人の與黨を有せず。即ち我が憲政會は言ふまでもなく國民黨も亦之に反對し、肝腎の政友會は嚴正中立を標榜したるを以て、理論上に於ても亦實際上に於ても潔く辭職するより外に其道無之也。然れども、現政府は世人の能く承知せる如く有名なる向ふ見ずの内閣にして、憲政の常道の何たるやを解せざるものなれば、暴力を敢てして解散を行はんとも計られず。之に對しては我等民黨に於ても相當の覺悟を必要とす。即ち假令不幸にして解散行はるゝとも、國民の輿論は我等白票組たる民黨に歸して、總選擧の結果は必ずしや我等白票組の最大多數を以て再選せらるゝことは疑ひなき事なりとす。其時に及んでは憲法の破壞者にあらざる限りは、如何に無謀なる現内閣と雖も、必ずや辭職するに至るべし。惟ふに現内閣

が辭職を爲すべき場合に三時期あり。第一の時期は即ち本議會に於て不信任案の提出せらるゝと共に辭職するものにて、第二の時期は本議會を解散して後總選擧の將に來らんとする前に臨んで辭職するものにて、こは誠に卑怯千萬なる行動なれば、まさか左樣な事は爲さゞるべし。第三の時期は總選擧後の議會に於て爲さるべきと思ふ。然し孰れにしても、其後に來。べき內閣は國民の多數を基礎とせるものなるは當然のこと也。即ちそは現在の民黨（在野黨）に依つて組織せらるゝものならざるべからず。之を要するに、抱負なく基礎なき現內閣の如きは、國民の糾彈なくしても早々にして倒れざるべからず。而して一日も早く根柢あり威力あり、國民の大多數の信望を双肩に擔ひ、陛下輔弼の任を完うし、且つ多事多端なる現今の時局に處し十分に國運の發展を計るべき內閣を建設せざるべからず。予は此理想の早晩必ず行はるゝ事を信じて疑はざるもの也。

されば萬一現政府に於て解散を斷行し、其結果として總選擧の時に至らば、此時こそ國民は悉く所謂秋霜烈日の如き態度を以て、政府當局者及び候補者を監視し、何等の不正手段なからしめ、以て眞正なる方法に依つて其代表者を選出するやうに心掛けざるべからず。而して解散による國務の澁滯及び世道人心の惑亂其他此解散より生ずるあらゆる不祥事は、總てこれ其挑戰者たる寺內々閣の責任に歸せざるべからず。而して憲政治上最も重大なる罪惡——不合理なる解散を行ふたることを現內閣自身をして等しく自覺せしめ、將來寺內伯をはじめ其他の閣僚は何人も政治家として再び廟堂に立つの機會を絶無となさざるべからず。これ我が六千萬民國民の最も緊要なる權利にして又義務なりと信ず。

（一月廿二日）

△飽くまでも公明正大なれ

鎌田榮吉

寺內內閣と憲政會とが戰つて、此議會が果して解散になるか、解散になつたならば其後に來るべき總選擧は何うなるかといふ問題に就ては、私は今玆に豫言することは出來ない。解散にならうがなるまいが、又何方が勝たうが敗けやうが、それは全く勢であつて何うも致方はない。只私の大いに希望するところのものは、政府の方も憲政會の方も、苟も正理に外れないやうに總ての行動を執らねばならぬといふことである。即ち敵味方共に正理を能く守つて、或は選擧干渉或は其他の不正手段を執らぬやうに、大いなる注意を拂はねばならぬといふことがある。此前のやうな選擧干渉は斷じていけない。そんな事では益々憲政の逆轉といふことになる。元來善政を布く爲めには選擧干渉をも忍ばねばならぬと言ふのは、實に大いなる誤である。善政といふ文字の中には、選擧界の覺醒——選擧界の腐敗を改革するといふ事が、最も重大なる意義を以て含まれて居る。故に、寺內々閣が總選擧の結果假令敗戰するやうなことがあつて

も、其選擧の際に最も公平な所置を執つて正理に外れないやうに行動したならば、即ちそれが選擧界の改革にといふ最も秀れた善政を布いた事になるから、寺内々閣は全く大きな仕事をした譯で、其使命を果し其能事終れりである。之に反して善政を布くと稱して選擧干渉の如き不正手段をするのは、これ取りも直さず惡政を布くに外ならない。されば、今後寺内内閣も憲政會も、何處までも正しい道を通つて共戰を決せんことを、くれぐれも希望する次第である。(一月十九日)

△三黨聯合の成らざりしを憾む

松田源治

大隈内閣秕政百失し、遂に倒壞を見るに至り、玆に寺内内閣出現せり。寺内内閣は所謂官僚超然内閣にして、政治上の主義政見を豫め國民に公開せず。從つて國民を基礎とせず、又國民の機關たる政黨を無視し、單に官僚中の一部を以て内閣を組織したるものなれば、憲政の常道より各政黨は大いに其威力を發揮して之に反對せざるべからず。故に本議會は官僚と政黨との一大決戰場にして、官僚對政黨の關ケ原の役とも名付くべき憲政上實に重大なる議會也。されば政友會、國民黨、憲政會の三派は、各々從來の感情を一洗して相提携し、以て寺内内閣を彈劾する時は、假令解散の暴擧を敢てするとも、總選擧の結果は現政府の一大失敗たるや言ふを俟たず。玆に於てか官僚に致命傷を與へ、今後内閣を組織せんとする者は是非共政黨を基礎とせざるべからざる結果となり、官僚にても官吏にても亦實業家にても學者にても、苟くも政治に志す者は各々其好むところの政黨に入ることゝなり、立憲政治は愈々進歩の域に進み、初めて眞の政黨政治行はれん。然るに政友會は幹部に於て其策を誤り、國民黨よりして現政府に對して總括的不信任案を提出するにつき其提携を求めたるに、『理想としては超然内閣に反對なるも、直ちに總括的信任案を提出するは時期の宜しきに非ず、暫らく現政府の政策を見て、然る後其是非を決せん』との回答を與へ、國民黨の提携を拒絶したるは誠に遺憾至極にして、三派聯合を以て官僚に對して致命的の打擊を與ふること能はざるは、憲法政治の爲めに實に痛嘆に堪へざるところ也。苟くも理想として超然内閣に反對なれば、國民黨の提携に向つて承諾をなすこそ其理論に徹底したる行動なるに、矛盾せる論法を以て之を拒絶せるは如何なる思意なるか其解釋に苦しむところ也。

扨て國民黨に政友會に其提携を拒絶せらるゝや、直ちに憲政會に向つて同一の交渉をなし、現内閣に對して總括的不信任案の提出を聯合して決議せんことを以てしたり。玆に於てか憲政會は如何に回答するや、大いに世間の注意するところとなれり。抑々憲政會は一昨年大隈内閣の選擧干渉により選擧せられたる議員の多數が團結せる政黨にして、今回解散を蒙らんか其黨員の數は非常に減ずるの悲境に遭逢するを以て、同黨の策士連は何とかして解散の厄を避けんものと、頻りに軟化運動に努め

たれども、前内閣辭職の際大隈首相は總裁加藤高明を推薦したるに、元老が加藤子を首相として受認するを好まず、寺内伯を推薦したる結果、加藤子遂に首相たるを得ざるに至り、其後憲政會は加藤子を初め黨の領袖等大いに元老を打撃し盛んに排閥を叫び、官僚内閣は國民の敵、超然内閣は國家の進歩を阻害するもの也と絶叫したる關係あるを以て、國民黨より其提携を申込まれたるを拒絶するが如きに至らんか、加藤總裁及び其他領袖の面目に關する事あるを以て、假令黨員減少するの恐れありと雖も、其面目にかけても解散を賭し、國民黨より交渉し來りたる總括的不信任案に賛成するや明か也。又國民黨と聯合して不信任案を提出する時は、假令其軟派たる代議士が落伍するとも、彼等は大多數を以て議會を通過すべき大勢なるより、必ずや國民黨と轡を揃へて突進する事となり、其結果政府は解散を斷行すべし。

總選擧の結果は如何なるや、今玆に判斷するを得ざれども、憲政會は百五十人位に減じ、國民黨は現狀維持なりと思ふ。而して政友會は現今の代議士より多數を得るや否やは頗る疑問にして、若し政友會にして國民黨の交渉に應じ、即ち三派連合して現内閣に對して不信任案を提出し、自ら民軍の中堅を以て議會に於て奮闘せんか、國民の同情は政友會に集りて選擧に有利となり、多數の代議士を當選せしめ得るも、若し嚴正中立を標榜して此聯合より脱出したる時は、『憲政を毒するものは政友會也』と非難され、包圍攻撃に會ひ、遂に多數の當選は困難となる故に、先づ現狀維持と見ざるべからざるに至るべし。又其上、所謂無所屬議員は、若干多數となり、現政府が議會を操縦する上に頗る有利となり、長へに閥族對政黨、官僚對民黨の決戰の時期を失ふを以て、これ實に國家國民の爲め頗る遺憾に堪へざるところ也。（一月十九日午前）

△解散後の政局私見

臼井哲夫

今議會開會の劈頭に、憲政會は國民黨と連署して、現内閣に對する不信任案を提出すると云ふから、二十五日には解散と極まるであらう。さうなれば、解散は覺悟の上であるから、憲政會は陣容を新たに整へて、早々選擧の準備に着手するであらうが、其選擧の策戰には既うチヤンと成算が立つてゐる事と思ふ。改選は四月であらうが、さて其結果として憲政會が如何なる成績を收めるかと云ふことは、見様にも據ることだが、然し先年政府の與黨として、有力なる選擧權を利用して獲得したやうな結果を、今度も期待するは六つかしからう。不信任案も國民黨と連署の事であるから、選擧も共同動作を採るやうに豫期してゐやうが、果してさう豫期通りの結果になるや否やは疑問である。國民黨の成績を自己の憲政會と同様にして、共に多數を制し得るやうに、自黨を牽制するやうな行動を、憲政會は果して豫期し實行し得るだらうか。政友會は此前不自然な壓迫を蒙つてあの通り失敗したが、今度は選擧法も自然に復

して其秤平が保たれやうから、政友會も自由な行動が取れて、相應な成績を收めやうと思ふ。少くとも現狀よりは五六十の增員を見るであらうと考へる。又今度の改選には中立の候補者が出て、之れも可成の成績を收め得やうと思はれる。而して此派は概して云へば、時局關係から政府の政策を助けて、此派と政友會の勢力とは自然或程度までは、政治上の行動の趨向を同じうするであらうと思はれる。

斯くの如くであるから、來るべき選擧は、如何なる形勢を馴致するか。之れは、各自見やうに據つて異なるであらうが、政府反對黨が多數を占めるやうな事があつても、政府が公平な立脚地に立つて、至誠國事に膺るやうであり、而して幸に其政策が政友會並に中立派の容るゝ處となれば、此二黨は現政府と共に國家の憂ひを俱にして、肝膽相照すと思ふ。少くとも私はそれを期待して、千載一遇の危機に立つてゐる國家を、其危地から救ひたいと思ふ。憲政會を初め國民黨、政友會等の主張意見に對しては、批評すべき點もあるけれども、それは他の人々が既に批評し盡してゐる處であるから、今更ら我々の贅評を加へることもあるまいと思ふ上に、何と云つても今度の改選の結果が、双方の主張の判決となる譯であるから、今は默して其判決命令を俟つより外はないと思ふ。(一月二十三日)

△選擧干涉以前に還元

床次竹二郎

寺内内閣と憲政會の決戰か、それはもう解散に極つて居る。選擧干涉といふ不正手段で出來上つたものが、これですつかり遣り直しになるのだ。約り還元するのだ。還元といふ言葉は此場合に全く適當した言葉だよ。アヽ……。

總選擧の結果か。それは今玆で豫言することは出來ないが、憲政會がいくらか減り、政友會がいくらか多くなると思つて居れば間違ひはなからう。(一月十九日)

△在野黨として堂々として戰はん

安達謙藏

解散は最早や疑ひないものとして、解散後の狀況はどうなるかと云ふと、政府は解散後も尙秉公持平方針を變ぜずに依然として行くか、又は暗默の間に政友會と接近して之に同情し援助するかと云ふ問題がある。我等にとつては政府はどう云ふ態度を採つても無論差支ないと考へて居る。政友會は此際前年の大失敗を恢復せんと大努力する積りであらう。

それで選擧は各地大いに火花を散らして戰ふに違ひないが、之について政府は干渉しようとは我等は思はない。然しながら若し干渉がましき事があつたら細微な事と雖もそれは直ちに内務大臣の大なる負傷になる。又我等も如何に細微な事でも干渉がましい事は放棄つて置かぬ積りである。政友會も世人も今日はまだ、政府側になれば選擧は爲易いやうに思つて居る。然し我等の見る所では、如何に立憲思想を幼稚だと云つても、民論は年一年に進みつゝある。輿論の大なる反抗を受けては如何に政府側に立つて選擧をしても有利と思はない。殊に憲政の運用上超然内閣の不可なることは國論一定して居ると云つてよい。此不可なりと國論の一定して居ることを政友會自身も認めながら、只時局に籍口して、其所信を遂行する能はず、遂に此閥族と接近し握手すると云ふ事は非常に國民の感情を害したに違ひない。世の中と云ふものはさう御都合主義や打算ばかりで行くものではありやしない。それだから政友會は非常に有利な位置に立つて競爭すると云ふ其有利の程度と云ふものは、政友會自ら期待して居るとは違つて、却つて不利の狀況に陷りはせぬかと思ふ。

憲政會の立場から云ふと、世間では我黨を以て恰かも烏合の衆若くは寄木細工であるかの如く思つて居つた。併し此觀察の違つて居つた事は不信任案の討議且夕に迫つた今日に於て殆んど落伍者を見ざることを以て明かに立證して居るではないか。成程憲政會の產聲を擧げたのはつひ近頃であるとしても、反政友の聲は殆んど十年前からの事で、殊に大隈内閣に至つて翕然として天下を席卷したのである。斯くの如く根柢もあり、基礎も堅い上に出來たるのであるから今日の如き一糸紊れざる結果が出來たのである。實際我等の結束の基礎は淺薄なる世人の考へて居るよりも遙かに鞏固なるものがある。此鞏固なる基礎の上に立つて在野黨として堂々たる戰をして見たいと思つて居る。我等は飽くまでも言論戰によつて此千古未曾有の時局に方り、かゝる孤立無援の内閣、無能爲すなきの内閣に向つて不信任を表白した事がよいかわるいか、大いに國民の輿論に訴へんとするのである。我等は我國民が必らず我等の主張を容るゝものなることを確信して居る。（一月二十三日朝）

△萬事は議員改選の後に

岡崎邦輔

先づ國民黨は其年來の主義主張なる閥族打破、官僚撲滅、超然内閣反對の旗幟を振翳して、あのやうな少數黨を先頭に立て而かも巧みに大政黨たる憲政會を率ゐて、此形勢を作つたのであるから、これには多少の意味はあるであらう。又國民黨自身に於ても大いに滿足して居ることであらうと思ふ。

政友會は、大隈内閣の選擧干渉なる不正手段で出來上つたところの不自然なる大政黨――憲政會を崩壞して、新たに國民の自由意思によつて

本當の選擧を行ひ、玆に元の地盤を回復するのである。これ即ち黨勢の復活である。

憲政會は、只此大政黨たる勢力を作つたのは、國民の眞の輿望によつて爲されたもの〻如く誤解し已惚れて政權は必ず己れの手に來るべきものと堅く豫期して居つたところ、案外にもそれは他人の手に移つたので、非常に失望落膽し大いに憤慨したる結果、玆に柄にもない內閣の性質論を持出して相迫り、頻りに內閣の更迭を促して居る。そこで議會は早速解散となる。此時彼等は今まで有つて居つた大なる勢力を失墜して了ふ結果になるであらう。

政府は又內閣成立の當初に於て、大隈前內閣の失敗せる政策を踏襲することを斷つた結果、下院に於ては何等の助けなき事を承知して以て成立した內閣であるから、今日の此險惡なる形勢は初めからの覺悟であらねばならぬ。而して解散の結果は元來自黨なき故、又超然內閣の性質上、政府黨の生ずべき理由もない。若し偶々あるとすればそれは無所屬議員の少數に過ぎないと思ふ。

之を要するに、現在の議會で最大多數を有すところの憲政會は、大隈內閣の大干涉により又其爲め大なる犧牲を拂つてまで成立したる官選議員の大集團であるから、一日も早く解散を斷行して國民の自由意志による正當なる選擧を行ふて、而して後其結果を見たいものである。其結果によつては或は內閣を更迭するも可也、或は內閣を改造するも可也である。孰れにしても其時になつてこそ初めて議會政治を論ずべきである。

吾々は今日の世界の形勢から考へて見ると、此際內地に於て紛爭の甚だしく起るのは面白からぬ事とは思ふけれども、實際前述のやうな有樣であるから、解散の一日も早く來らんことを希望するものである。

（一月二十三日午前）

△政黨同志の內輪喧嘩は愚

松山忠二郎

今度の政府と憲政會の喧嘩の元は、大隈內閣の瓦解した原因に遡つて研究しなくてはならないと思ふ。實は大隈內閣の倒れたのは、我々の觀る處では山縣公の計畫の結果であると思ふ。言ふまでもなく山縣公は非常な政黨嫌ひで、殊に政友會が嫌であつた。それで政友會を壞したい希望をもつてゐた。また二個師團擴張の希望をも有つてゐた。此二目的を達する爲めには大隈侯を利用するのが最も便利だと考へた。其處で三年前に山本內閣が倒壞した時、山縣公は年來の政敵であるに拘はらず、大隈侯推薦に合意した。それで以上の二目的を達する迄は、大隈內閣に好意を表してゐたのである。處が首尾好く總選擧の結果、政友會の絕對過半數は壞れ、二個師團擴張の目的も達せられたから、山縣公から觀れば、もう大隈侯を利用する必要はない。此上は大隈侯の勢力の衰へる事を希望してゐたのである。然るにも拘はらず、衆議院に於て大隈黨は益々盛に

なり、改選の結果同志會は百五十名内外であつたが、其外に中正會、公友俱樂部も全然大隈黨となつて、衆議院で絶對過半數を占めたのみならず三派が合同して結束するやうになつた。そこで政黨嫌ひの山縣公は、先に政友會を壞したと同じやうに大隈黨を壞す必要を感じた。そこで今現に其手段を廻らしつゝあるが、其手段が最も巧妙に出來てゐる。之は或は僕の邪推と云ふ人もあるかも知れないが、自分は固く信じてゐる。されば山縣公は如何なる手段を以て大隈黨を破壞せんと考へたか云ふに、大隈内閣を倒す爲めに支那問題を利用した。元來山縣公は支那に對して穩和な意見を持てゐた。惡く云へば無爲無能かも知れないが、消極的に何事にも手出しをしないと云ふ方針を有つてゐた。そこで例の對外硬の連中、支那に對して强硬な態度を取らんとする連中とは、意見が全く相容れなかつた。對支强硬論者は山縣公の態度を全く意氣地なしとして非常に憤慨した。大隈内閣の閣僚も大體に於て支那に對して强硬な意見を把持する人が多かつた。故に山縣公の優柔不斷な態度には頗る憤慨してゐた。然るに僅か一昨年の暮頃かと思ふが、山縣公の意見が俄かに一變した。今日の模樣では何時まで支那に對して消極的政策を取つてゐては不可であると云つて、進んで積極的方針を採る事に同意した。そして其部下たる陸軍系の軍人に對して、種々の積極的方針を採らしめた。大隈内閣は大に之を喜んだ。支那に對して積極的意見を有つてゐる在野の政治家も大に之を歡迎した。而して外務省は袁世凱の政府に對して、帝制延期の勸告をすることになつた。參謀本部や陸軍系の軍人達は、支那の各省に活動した。南方は無論の話、山東省でも、滿洲でも、蒙古でも大に活動した。處が之が山縣一派の手であつた。大隈は山縣公が自分の方針に同意して吳れた事を喜んだのは愚で、山縣公は此方法で大隈内閣の破壞を企てたのである。即ち山縣公は一方に部下の軍人をして斯かることをなさしめると同時に、他方に於て自分の幕下の政治家をして此對支積極方針を痛く攻擊せしめた。山縣公の指圖か否かは知らぬが、少くとも山縣公の意を迎へた政治家の内には、此顚末を詳しく引說して天下に發表したものがあつた。而して大隈内閣の對支外交は日支親善を誤るもの、極めて不安心なものと云ふやうな批難をさした。之が貴族院邊で大隈内閣に對して反感を持つた主なる原因で、又世間が大隈内閣に反對した主な理由も此點にある。大隈内閣は圓滿辭職と云ふが、實は政治上の行き詰りで餘儀なく辭職したのである。而して行き詰りの第一の原因は、對支外交に對する山縣系の政治家の反對であつた。然らば大隈内閣は、詰り山縣公のペテンに引掛つたものである。殊に袁政府の帝制延期勸告の時、山縣公が同意して吳れたと云つて喜んだ大隈侯は、全くお人好しである。大隈侯は演壇に立つて辯論を戰はす時には、當今の日本に於て何人も及ばないけれども、斯かる策略に於ては山縣公の脚下にも及ばないのである。矢張り政治家としては山縣公の方が數等上である。

大隈内閣の破壞したのは斯樣な理由に基ゐてゐたのである。或は此說を以て僕の獨斷に過ぎぬと云ふ人があるが、私は之を信じて疑はない。して山縣公は其目的を達する爲めに寺内を利用した。憲政會は國民黨と

共に不信任案を提出して今の内閣に肉迫するが、其結果は無論解散である。政黨嫌ひな山縣公の考は、解散の結果は必ず憲政會が少數になつて、衆議院に於ける大隈黨の勢力が大に減ずるものと見てゐるに違はない。之は事實となつて現はれるかも知れない。然し近頃の國民の政治思想は非常に進歩してゐるから、大勢に從應して言つた憲政會が、何處まで減ずるかは疑問である。が多少は減ずるであらう。そして山縣公の希望通り大隈侯の衆議院に於ける勢力は、それ丈け減ずるに相違ない。

改選の結果何れの政派が大數を占めるか分らないが、今後如何なる政黨派が大數を占めても、政黨嫌な山縣が元老の地位に在る間は、種々の策略を以て打撃されること丶思ふ。憲政會が多數を得れば、山縣公は更に種々の方法を以て破壊せんと企てるであらう。若し政友會が絶對過半數を占めるやうな事があれば、政友會は更に以上のやうな手段で山縣公に打撃されることになる。故に廣く云へば長閥政治家、狹く云へば其本尊たる山縣公は、此意味から云つても、政黨の共通の敵である。然るに憲政會と政友會とが内輪喧嘩の爲めに、此共同の敵を殪さうとせず、甲が反對の地位に立てば乙が之を擁護せんとし、乙が反對の地位に立てば、甲が之を擁護せんとするは遺憾である。今度の不信任案については政友會が長閥擁護の地位に立つた。之れは憲政會が反對の地位に立つたからである。從來政友會が長閥擁護の地位へ立つた時には、大隈系の政治家は長閥反對であつた。最近大隈系の政治家が山縣公と接近してゐる間は、政友會は長閥反對であつた。斯様な内輪の感情の爭の爲めに、長閥政治家をして双方を操らしめ、双方を傷けしめると云ふのは遺憾である。(一月二十三日)

△我國民黨をして政界の指揮權を握らしめよ

相島勘次郎

此議會は何うしても解散になると思ふ。それにしても解散を避ける手段は一つもないかと言ふに、其方法はいくらもある。然し肝腎の内閣が解散を望んで居るし、就中後藤男が解散を此内閣の第一目的でもあるかの如く求めて居る。元來内閣は其内閣の政策を行ふを以て第一義とせねばならぬのであるが、此内閣は憲政會を打破するといふ事を第一義として居るやうである。即ち解散を避ける方法手段はいくらもあるのであるが、政府は之を求めないのである。

扨て解散後の總選擧の結果は何うなるかと言ふに、先づ政友會では其黨員が餘程増加するやうに言ふて居るが、我輩はさうは思はない。それでは前内閣の遣つたやうに選擧干渉をしたら何うかと言ふに、それでもなかなか六しい。即ち第一に若しそんな不正手段を行ふたならば、之を行ふた人——後藤男に對して、どんな事が湧いて來るかも知れぬ。恐らく大浦の二の舞を演じて、同一の運命に陷ることであらう。第二に前内閣は世間の輿論を支配するところの新聞と一致して居たから、まだ〱よ

かつたが、現内閣は殆んど新聞に於て一つの味方をも有つて居らぬのですから、若し少しでも不正手段を遣つたならば、新聞が決して承知するものではない。直ぐ樣に攻撃を受ける譯けである。第三に前内閣は世間に多くの味方を有しながらも、其干渉でケチをつけ、多大なる犠牲を拂つたといふ直ぐ眼の前の例があつて、『惡い事をしたものは假令誰れにも知られぬやうに巧に遣つても終ひには何うしても其應報を受けるものである』といふ公々明々なる天の制裁が示されて居るから、國民も之れについては能く注意してうか〳〵と其不正手段に乘らぬ事と思ふ。即ち此三つの理由で後藤内相も十分其腕を揮ふ事が出來ず、從つて政友會もまア百五十名内外になる位で、到底も絶對過半數に達するやうな事はあるまい。

そこで憲政會は何うかと云ふに、加藤男がいくら資金を出したところで、元來が烏合の衆であるから、これまた多くて百五十名内外といふことになろうと思ふ。次ぎに中立黨は何うかと言ふに、これは今よりは多少增加することゝ思ふ。元來此中立黨といふものは何うも政府の味方即ち御用黨になり易いものであるが、然し何方にしも大した事はなからう。

最後に殘るものは我が國民黨であるが、これこそ今後政界のキャスチングボートを握つて、國民黨の赴くところに國民の輿論が從ふて行くといふやうにせねばならぬ。其爲めには何うしても其所屬議員を五十名以上に選出せねばならぬ。此事は黨自身の利益から言ふても、國家國民の幸福からいふても、吾々の唯一の理想である。

今日の政界は其表面に於ては政黨政派の主義主張の問題であるが、其實際に於ては人間の問題である。即ち何んといふても政友會は原の政友會で、憲政會は加藤中心、國民黨は犬養のものである。故に政友會の如き政黨の主義主張としては隨分立派な事を言ふて居るが、假令何んと言ふても原總裁は寺内内閣を助けるのである。超然内閣といひ政閥内閣といふも、其形式の名前は別として、實際に於ては何うしても政黨の助けがなくては成立するものではない。超然内閣は其性質上政黨の助けを必要としないが、其議論は別として政友會を有つて居る原なるものがあるからこそ、寺内内閣も出來上つたのである。

扨て寺内内閣崩壞後の内閣組織者は何人であるか？政友會の原か、憲政會の加藤か。勿論何方もエライには相違ないが、然し一番政權病に罹らず又黨派根性に囚はれず眞に國家國民の爲めに計る我が國民黨の犬養氏には及ばない。實際國民黨は今まで重要なる政策上の問題では總て先鞭をつけて居る。例へば兵役短縮問題といひ、對支問題の解決といひ、選擧權擴張案といひ、教育費國庫案及び稅制整理等悉く我國民黨が最初に唱へたものであつて、それを内閣が後から實行するといふやうになつて居る。今日に於ても第一に南洋方面に着眼して、其計畫政策を確實に計企して居るのは實に我が犬養氏ではないか。而して先づ東洋及び南洋に渡つて其平和を確立し、世界に向つて我が國威を益々發揚せしめんとするの人は、犬養氏を措いて他に其人がないではないか。又犬養氏は軍人

社會にも實業社會にも多くの友人を有つて居るから、其方面の事を詳しく知る事が出來る。殊に支那問題の如きは犬養氏の獨壇上で、寺内内閣の如きはそつくり其儘之れを採用した譯けになつて居る。世人の或者は犬養氏は空論家の如くいふけれども、それは全然誤解であつて、犬養氏こそ本當の實際家ではないか。されば之を要するに將來の政界は、此偉大なる我が犬養氏の團扇を揚げた方が勝つ譯けになる。そこで我々は其具體的の直接の力を作る爲めに、國民黨員を何うしても五十人以上選出せねばならぬ。即ち今までは犬養氏は間接に政界を支配して居つたのであるが、今度こそは直接に其指揮權を握らねばならぬ。今や歐洲の戰亂酣にして國事多端の秋であるから、斯ういふ時こそ犬養氏を中心とする我國民黨に、政界の眞の指揮權を渡さねばならぬ必要が愈々大となるのである。（一月二十四日）

△解散後の政界廓清

江藤哲藏

寺内内閣と憲政會とは已に各々其陣容を整へ、互に運命を賭して一大決戰を試みるの外なきに至つた。今此決戰の勝敗を豫想し、前途の事をトせんとするには、溯つて大隈内閣崩壞し寺内内閣出現するに至つた前後の事情より考諮するの必要がある。

大隈内閣は言ふまでもなく秕政百出、殊に對支外交に於て行詰つたる結果、到底其内閣を支持する能はず、後繼者として大隈侯自ら勅許を得て朝鮮より寺内伯を招き、政權授受の交渉をなし、同志會を基礎とせる加藤子との聯立内閣を勸めた。然るに寺内伯は之に應ぜざりし爲め、政權授受の私議は遂に纏るに至らなかつた。茲に於てか當時政府の與黨たる憲政、公友、中正の三派は、大隈内閣の持續し得ざる運命を自覺し、直ちに三派合同して衆議院に於ける過半數黨を組織し、大隈侯辭職するも猶政權を手に收めんとした。故に、昨年の十月始め大命一度寺内伯に下るや、駭然として其色を失ふたのである。

今大隈内閣の二ケ年有餘の間に於て爲せるところを觀るに、或は憲法の大義を沒却し、或は世道人心の大本を破り、内外の失政實に算ふべからざるものがある。即ち公平なる第三者の眼より觀れば、政黨革新の名に依つて自己の反對黨を破壞し、獨り政權を壟斷せんとするの私心に驅けられたので、極言すれば己れの政黨あるを知つて國家あるを知らずといふ批難を免れぬ。而して大隈内閣の失政は總て此點から來つて居るのである。

そこで寺内内閣の起つてより後、憲政會の有力なる某領袖が演説して『寺内内閣の起つたのは、鳶に油揚を奪れたのと同じであるから、其鳶を打ち或は殺すのが吾々の最大急務である』などゝ頻りに言つて居る。蓋し其意を含味すれば、口には閥族打破を叫び、超然内閣は憲法の大義に叛ける内閣也などゝ主張するとも、其内實は主として徒らに政權爭奪の念に

葬られて、名を好題目に藉るに過ぎぬ。

此憲政會と寺内内閣との決戰に當つて、若し眞に憲政會が民意を代表する多數黨であり、而して其精神本領が憲法の大義に法つて居るものなれば、衆議院に何等の根據を有せざる寺内内閣の如きは、鎧袖一度び觸るれば忽ち壞滅するといふ勢でなければならぬ。然るにも拘らず、世人をして此決戰の勝敗如何を問題せしむるといふのは如何なる故であるか。其處には何か憲政會に弱點がなければならぬ。然らば其弱點とは何んであるか。憲政會の多數は謂はゞ空中の樓閣沙上の城壁である。其多數は我が國憲法實施以來未曾有の惡辣陰險なる手段を弄して、極端なる選擧干渉によつて生れ出でたる官選議員である。即ち其多數は不自然不合理の多數である。換言すれば眞に民意を代表する多數ではないのである。彼等は實に大隈内閣を助けて憲政の大義を破却せんとせる所謂憲政の敵である。又内外の失政若くば黑政により殆ど國運を危殆に陷らしめんとせし大隈内閣と共同責任を負ふべきものである。彼等が如何に排閥の旗幟を立て、口に憲政擁護を叫ぶも、以て自己を欺く事は出來やうが、多數の國民を欺く事は出來ない。これが約り憲政會が戰ひの上に於ける最も大なる弱點である。

然るに憲政會の領袖等は假令大隈侯辭職するも、政權は己等の手に歸するものと確信して居つたところ、遂に他に歸するに至りしが爲めに、失望はやがて憤怒となり、忽ち各地に於て盛んに排閥の旗幟を翻し、頻りに超然内閣反對を呼號したるが爲めに、勢の赴くところ遂に一大決戰を辭する能はざることゝなつた。

此際憲政會黨員の意見と其心裏とを解剖して見れば、其一部には眞に憲政の爲めに戰ひ、憲政の爲めに倒れて後止まんといふあつぱれ健氣なる覺悟を有する人もあるであらう。然し同じく硬論を唱ふる人の間にも、衆議院に於ける各派の勢力を統一して寺内内閣に當れば、寺内々閣は解散する事能はざる爲め直ちに倒れ、政權再び己れの手に歸せんとするであらうといふ所謂政權病に囚はれて、其單なる策略として硬論を唱する者も決して少くなからう。甚だしきに至つては大隈侯辭して寺内伯に内閣組織の大命下りし際も、猶寺内伯と妥協苟合せんと企てた者もあつて、其系統に屬するものも少くない。又多數の議員は自己の如何にして選擧されたかと言ふ選擧干渉當時の事を知つて居るから、即ち自己の運命は自己が一番よく知つて居るところから、政府の内助なき總選擧には到底當選の見込なしといふので非常に解散を恐れて居る。されば前述せる如く其幹部領袖連が憤怒のあまり排閥熱を鼓吹し、固く結束して寺内内閣に當らねばならなくなつたのは、これ全く主義の爲めと言ふよりも自然の勢と言はねばならぬ。然し繰返して言ふて置くが、多數は斯くの如き有樣であるが、其中の少部分には眞に敵ながらも之れをあつぱれと認識するに足るものがある。我輩は敵黨なればとて徒らに之を罵倒するのみではない。良いものはよいとして決して賞讃の辭を惜しむものではない。

そこで一面寺内内閣の立場を觀察すれば、政黨に向つては一視同一、

此世界の變局に際し、内外多事の時局に鑑み、至誠を以て事に當り、善政を施する以て念とし、所謂秉公持平を標榜して居る。世之を稱して政然内閣といふ。即ちそれは孰れの政黨にも何等の關係なく、其礎を衆議院に有せず、政黨の外に超越して立つといふの義である。元來立憲治下に於て政黨を離れて所謂超然主義を以て立たんとする事は至難の事であつて、これが寺内内閣の憲政會に對する最も大なる弱點である。我々が中間より觀察すれば、超然内閣は其形式の上に於て吾人の理想に合せず、世人をして憲政の逆轉なりと信ぜしむるの弱味を有つて居る。が、此憲政の逆轉といふ事は大隈内閣も亦免れることは出來ない。よし數歩を讓つて形式上は立憲の本義に適ふて居るとしても、其眞相に於ては非立憲であり、又其惡政の結果として形式的非立憲の寺内内閣が生れ出た事を注意せねばならぬ。寺内内閣も憲政會も共に前述の如き弱味を有つて居るが、若し寺内内閣にして大隈内閣の如き惡辣手段を以て敵黨の斬崩しを爲さんか、本議會は或は解散なしくして終るやうな事になるかも知れぬ。然し此内閣は所謂秉公持平誠意善政を布くと稱して居るので、今日までの政府の對議會策を見れば、總て事の成行きに任せて何等の手段をも講ぜざるものゝ如く見える。それで憲政會の内容は甚だ其力に於ては微弱なるものなれども、其數に於て富むを以て、政府が何等の手を下さゞる以上、此議會は到底解散の運命に陷るより外はないと觀察される。

解散の結果を豫想すれば、憲政會は元來が不自然なる多數にして、如何に口に美名を唱ふるも、大隈内閣の百出せる秕政によつて國を誤らんとせしを助けて其非を遂げしめ、今日に至つても之れを悔悟せず、一つの聽くに足るべき答辯を有しないといふ有樣であるから、到底我國民の信望を得る事は出來ない。されば總選擧の結果著しく其數を減ずるのは火を見るよりも明かである。

國民黨は多少其數を增加せしめ得べきものと觀察される。又中立の名によつて政府の與黨と稱すべきものも若干選出せられるであらう。

要するに解散の結果は孰れの黨派も議會に過半數を制する事が出來ず、謂はゞ小黨分裂の有樣を來すのではないかと思はれる。今や未だ歐洲の戰局治まられざれども、早晩媾和の時期も到達するであらうが、今日にして其前後の調停を講し、國を擧げて一大決心を以て事に當り、國家興隆の大策を講ぜねばならぬのであるから、徒らに黨爭を事とし、政權の爭奪に沒頭するが如きは甚だ憂ふべき次第である。故に何とかして此解散の動機によつて恰かも驟雨一過の後清爽なる青天を望むが如く、國論を統一して眞に國家興隆の道を立てる事になるやうに其勢を替へたいものである。即ち今日の狀態は尋常一樣の月並的觀察を以てすれば、小黨分裂、世道人心の惑亂、内外事局の紛更といふ悲觀的結論に達するが、此世には往々意外の事があるもので、恰度大錦が太刀山を倒したやうに、此悲しむべき狀態を現出せんとする解散其物を以て、人心を新にし清新にし、各政黨は各々政權病より離れて本當に眞面目に即ち憲政の常道に立歸らん事を祈るのである。即ち解散といふ禍を轉じて福となさんことを

願ふものである。我輩は決して徒らに敵黨を惡罵して能事終れりとするものではない。何うかして今日までの厭ふべき此政權爭奪政略中心の政治を止めて、國家國民の爲めの本當の政治に立歸り、以て全國民を大いに覺醒せしめ自覺せしめ、玆に一大國民運動を起して戰後經營の大策を講じたいと念じて止まないものである。（一月二十二日朝）

△選擧も超然主義でやるといゝが

古島一雄

こゝ迄漕ぎ付けるに就て國民黨は多少の苦心をしたが、最早解散は疑はない。扨其解散後の選擧に就て、政府は如何なる態度に出づるであらうか。政府は自ら乘公持平を唱へてゐるが、選擧にも果して此主義を實行するであらうか。若し之れが實行出來れば、それも面白いことである。と云ふものは、これまでの解散に對しては、時の當局者は必ず一方の政黨に偏してゐた。從て其選擧に對する當局者の手心は、敵と味方とで非常に異つてゐた。所が現政府は乘公持平を標榜してゐる。寺内と云ふ男は能不能は別問題として正直な點は認められる。從て其選擧に對して誠心誠意選擧規則を厲行し、總ての政黨に對し寺内式及松室式を發揮したらば、其結果は果して何となるか、チョット面白い。超然内閣など固より時代後れの産物だが、若し其超然内閣を善用すると云ふ事であつたなら、其超然たる態度で選擧度を勵行する位の處が關の山だ。故に寺内が眞に超然主義で遣る積なら、其超然の方針で選擧をやつて見るも一興である。然しながら其選擧勵行をした結果、政黨に關係せぬ中立の議員が多數出來ると思つたら夫は間違である。何と云つても日本の政界の地方に於ける地盤は、多くは政黨に由つて築き上げれてゐる。從て選擧勵行の結果は政黨員が多數を占めて中立議員が少なくなると云ふ事は政府も覺悟せねばならぬ。即ち成敗の上から云へば政府に取ては何の意味も無い事になるから寺内が果して此方針を遂行する事が出來るか如何かは疑問である。現に政友會は有利の地位に於て解散を受けたいと云ふ希望を有つてゐる。名分上多大の犧牲を拂つて不信任案に反對してゐる政友會を、政府は見殺しにすることも出來まい。乘公持平と云ふものが破れるのは此點からである。さりとて解散の結果、政友會が自身の豫期する如く、果して多數を得るであらうか。譬へ政府が多少の物質的援助を與へたとした所で、超然内閣擁護と云ふ不利の名の下に戰つて、果して相應の收穫を得られるものであらうか。現在の政界が如何に腐敗してゐるとは云ひながら、又事大主義に傾きつゝあると云ひながら、名分論を除外して戰ふと云ふことは、大體に於て其の不利たるを覺悟せねばならぬ。さらば憲政會は如何なるか。憲政會が今日膨脹を來したることは、政友會に對する世間の反感が大に之を援けて居つたとは云ひながら、大隈内閣の下に於て其の選擧の上に大浦式を發揮したる結果であることは爭ふ

可らざる事實である。従て今回の選擧に於て其數の減るのは當然である。結局政友會が多少増して、憲政會が多少減するのだ。國民黨の僅かに増へる事は斷言する。従て國民黨は此兩政黨の中間に在つて、政局を支配する原動力となることを自分は堅く信じてゐる。（一月二十四日）

△我等の理想は國民本位の政黨政治

富田幸次郎

我等が玆に決戰をせねばならなくなつた大體の事實は、何んが爲めであるかと言へば、我々の理想たる國民本位の政治といふ事に其基礎を置いて居る。國民本位の政治を行はんが爲めには、政黨内閣を作るより外に道がない。其爲めに我輩は二十四年來始終努力して來て居るのである。其志を抱いて最初我輩は自由黨員となつた。而して伊藤公が政友會を組織するに及んで、之れに參加した。これは在朝の政治家たる伊藤公が、國民本位の政治を行ふには何うしても政黨に基礎を置かねばならぬと自覺して、在野の自由黨と握手したのである。我輩も即ち國民を基礎とする政治を行はんといふ念を有つて之れに參加したのである。然るに政友會のするところを見て居ると、眞に國民本位の政治をする考がないといふ事が明かになつたので、玆に何うしても新たなる政黨を起して眞に吾人の理想を實行しようと、所謂非政友を唱へて大政黨を作らんとしたが、これは殘念にも失敗して、玆に國民黨が出來た。然るに此國民黨は極く微力で、此一黨では到底内閣を組織して國民を指導することは出來ぬので、玆に同志會を作つた。これについては世間種々の批難をするが、桂公も矢張り政黨に依らねば駄目であると自覺して自ら政黨に投じて、我々と其立憲主義に於て一致したのである。故に桂公は其政策上に於ても我々の急進主義を大いに容れたのである。ところが桂公の死と共に中道にして倒れ、其理想を實行する事は出來なくなつた事は甚だ遺憾とするところである。其後大隈内閣出現して益々國民本位の政黨政治が確立されて、我々年來の主張する種々の政策を實行せんとした。即ち防務會議の設立、政務官事務官の區別を立てたる如きは其主なるものである。而して大隈侯若し退かば加藤子をして之れを實行せしめ、國民本位の政黨内閣をして益々其基礎を確立せん爲め、先づ議會に於て絶對過半數を占めて内閣の支持者たらんと、一昨年の總選擧に於て奮鬪し其理想に達し、其後三派を合同して玆に憲政會を作つた。然るところ、無法にも元老官僚の徒は、政黨の日一日と其基礎を確立するを恐れ、大隈内閣の基礎強固ならざる間に之を倒さんと、苦心焦慮種々の陰謀を企てた。而して他方に於ては今の憲政會元の同志會と提携せんとし、或る策士を通じて或は平田と同志會とを結ばしめんとし、或は寺内加藤聯合内閣を作らしめん等と力を盡くした。然しながら吾々の理想は國民本位政黨中心の内閣を作くるにあつて、單に政權を得んとするのではない。況んや大正

の新政に於て情意投合の不徹底なる内閣では最早や満足は出來ないのである。眞に國民本位の政黨内閣を作らざる以上は、到底世界の變局に処する譯けには行かぬと、官僚との結合を斷然として拒絶したのである。そこで元老はやむなく玆に不合理極まる超然官僚の寺内内閣を作つた。故に我が憲政會と寺内内閣とは其成立の當初から已に兩立しない事は明かである。然し彼等と決戰する爲めには、多數の黨員を有して居るところから一糸紊れざるやうに十分結果を堅くする必要上、幹部に於てこれを發表するの時期を待つて居つたのである。而していよ〳〵今日に及んで大決戰の時期に到達したのである。以上は今日までの大體の經過であつて、將來も此國民本位政黨政治の實現といふ理想を以て進まんと欲するものである。

抑々寺内内閣は元老の擁護で出來上つた内閣であるから、國民の機關なる議會とは何等の交涉はない。故に國政の圓滿なる遂行を計り、國事多端なる此時局に相應する政治を實行する事は絶對に不可能である。而して國民の政治思想大いに發展したる今日、如斯き内閣を認める事は實に大正國民の大なる恥辱である。寺内内閣は誠心誠意、擧國一致を主張するが、いくら誠心誠意を叫び、擧國一致を唱ふるも其これを行ふ丈けの要素を確實に具へて其事實を示さねば駄目である。其閣僚を見れば全くいかゞはしい人物のみで、擧國一致に相應しい人才もなく、誠心誠意に恰度反對せる人物を用ゐて居る。斯くの如く已に其組織其物に於て一點の取るところはない。況んや國民に基礎なく、議會の大多數は反對といふのであるから、潔く辭職するのが當り前である。然るに何故解散をしようとするのか。元來解散は多少にても其基礎ありてこそ國民の同情を得るものなるに、現内閣は何等其基礎なきに之を斷行するといふは、これ國家國民に非常なる損害を與へるものである。而かもこれ全く今までの元老官僚の權威を持續したいといふ私情より出でたるものである。今現内閣の政策と稱するものを見るに、何等彼等が此内閣を作らねばならぬといふ特殊の理由はない。彼等の特に主張する對支外交の如き、歴代の内閣が唱へしものと何等の差違はない。一方では現内閣は其方針を改めたといふて居るかと見れば、前内閣より留任して居る陸海軍大臣は前内閣のと同様だと言ふて居る。即ち別に變つたものがないのをあるかの如く公表して、國民を欺瞞して居るのである。之によつて、いよ〳〵現内閣は玆に國家國民の爲めに作られたるものにあらずして、元老官僚の徒が寺内伯を以て無理彌理に其の勢力を持續せんとする私情に過ぎない事が明白となる。されば吾人は斯かる存立の意義なく、國民に何等基礎なき内閣をば、再び現出せしめざるやう國民と共に根柢的に破壞せんと欲するものである。

扨て解散後の總選擧に就いて、政友會は内閣に好意の押し賣りをして選擧上の利益を得んとして居るやうであるが、それは何んなものであらう。現内閣は政友會を大きくすれば、其大きくした政友會に占められるといふ譯になるから、到底も政友會の註文にははまるまいと思ふ。又政友會は頻りと憲政會が選擧干涉の爲めに今日の大多數を得たと唱へて居

るが、決してさうではない。實際政友會も度々自黨に利益のある内閣の下に選擧を行ふて居るから、其事情は能く知つて居る事であらうが、我々は大隈内閣の下に選擧上少しも利益を得る事はなかつた。我々に取つて自黨内閣の下に選擧を行ふといふ事は少しも有難くない。扨て何れにしても現内閣が政黨と結ばんとするなれば、政友會を助けるよりも寧ろ成金や實業家等を一束して一種の中立派を作るであらうと思ふ。然しそれも大多數を得る見込はない。要するに何んと言ふても總選擧の結果は我が民軍の聯合黨が勝利を得る事は疑ひない。そこでいよ／＼國民本位政黨中心の眞の内閣が出現するのである。(一月二十四日)

▼次號論文豫告▲

アリヤン文明の特性に就て永井柳太郎氏に訊す……木村泰賢

期待せる日本傳說秘密寶庫の扉は開かれたり

顧問 文學博士 喜田貞吉先生 文學博士 森林太郎先生

藤澤衛彥先生編

裝幀 杉浦非水畫伯

挿畫 小村雪岱畫伯

四六版上製 每頁四百頁內外
表紙新式オフセット數十度刷見
返し箱張石版裝幀艶麗組活字最
新式九ポイント組製本堅牢也

全貳拾四册完結

日本傳說叢書

每月一回配本 會費一ケ月 僅々壹圓卅錢

開闢以來何人も企てざる大努力の結晶 不朽の大名著

日本傳說叢書は眞に貴重なる純日本の所產にして世界に誇るべき燦然たるもの 我が國土に於ける文藝根本の神秘を示現し驚異と靈光とを以て我等が誇るべき皇統三千年の燦々たる大歷史に猶且つ力强き愛國の裏書を加ふ幽玄古奧なる日本傳說の多幸なる眞に世界の冠とすべく其材料種々相の豐富たる且は傳說憧憬者が嘆賞の的たるべし この人爲の創作すべからざる此美の結晶たるや本書唯一の至寶たるのみ。 今や感謝に價すべき努力の限りを盡して內容外觀の完璧せる本書發刊さる熱愛溢るる大和民族の住ふ東方に傑出せる日出づる國のありとあらゆる傳說を愛する者よ來つて文藝と歷史の遠き原型の純なる姿に接せよ

● 大募集▼第一期締切二月廿八日・配本三月一日より

● 會員▼內容規定見本ハガキ及び電話にてお申越次第無代進呈致します。

申込所▼東京神田錦町三の六 平和出版社內

日本傳說叢書刊行會

振替東京八四四六番 ▼電話本局三三六六番▲

(中付一の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

早稲田大學講師吉田絃二郎先生新著（著者が自信ある創作及文集）

新刊發賣

生命の微光

「力は孤獨から生れる！」この人生の見方は非常に淋しい。けれども涙ぐまれるほど懐しい生活の力を私に與へた。兄弟を捨て友を捨てあらゆる人々を捨てゝ我れたゞ一人、人生の悠久な寂寞と運命の廣野に孤獨の影を見出した時私たちの哲人生活の第一歩が始まるのではあるまいか。光りなき絶望の底から光りが生れ愛なき嫌人者の臆病な心の底から温かい人間愛が生れるのではあるまいか。私はこの心弱い生活者の收穫の中から創作五篇と卅餘篇の感想を纒めることにした。暗の底に低徊せる孤獨者のいのちの微光をもとむるかすかな祈りの聲として。―（著者）―

四六判最上製美本
全壹冊紙數四百五拾頁
正價金壹圓卅五錢
郵稅金八錢

東京帝國大學文科大學講師 紀平正美先生新著（學界の權威）

忽ち再版

自我論

本書『自我論』一篇は全く自分の觀念論の上に立脚して組織したものである。從て缺點が多からうとは思ふが同時に又自分のものであるとの自信をも有つて居るのである。前篇『自成の分析』に於ては出來得る限りの分析を試みた。廣義に於ける教育者或は人の上に立つ人には其の方法上に多少の參考となるべきものと信ずる。後篇『人格と價値』に於ては人格の意義と價値とを論理的に定めんと企てた。卽ち理想の何ものたるかを論じて哲學宗教道德其他一般に人文現象の根柢となるべきものを定め以て現代人の趨くべき方法を示さんと計つた積りである。切に學者の批評を待つ。（著者識）

四六判最上製美本
全壹冊紙數四百五拾頁
正價金壹圓卅五錢
郵稅金八錢

東京市神田區表神保町七番地 大同館發行 振替貯金口座東京八七貳番

（中付一の四）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

初乗飛行感想記

山中未成



△▼雲上人にしてやる▲▽

理髪店の、扉を押して、内部を覗いてみると鏡のまへの、どの椅子も、お客が悉く占めてゐて、眞白な布に掩はれて、黒い頭だけを、各自が出してゐた。

然し、先客の濟むのを、待ちあはしゐる人は、一人もゐずに、火鉢の傍の椅子だけは、空いてゐた。

扉のなかに、私は、一足踏み入れたけれども、彼方の遠くの隅の、火鉢のそばの、空いてゐる椅子のところまで、直ぐそのまゝ入つてゆくのが、こゝろもち躊躇された。すると、その刹那に、

『今直きに濟みますから』と、理髪師の三四人が、殆ど同時に、皆同じやうな口調で、私を包みこむやうな聲をかけた。

その口調に、私の裏の弱い一面が、輙く牽かされたらしく、私は、扉を大きく開いて店の中に、全く入つてしまつた。そうして、火鉢の傍の、椅子のうへで、先客の濟むのを、少時くのつもりで、待つてゐた、

眞白な布に掩はれてゐる、先客の、どの頭を見ても、その誰もが、今しがた、鋏をあて始めたばかりらしく、然も、皆が如何にも念の入りさうな髪の形をし

てゐて、どれも少からぬ時間をとりさうな、複雑な恰好をしてゐるものばかりであつた。

私は、その室内に、柔く瀰蔓してゐる、曇つた鈍重な光線を、苦しく感じ始めて、果は、その光線の作用から受ける暗示のために、ぼんやりした錯覺狀態と謂つたやうな、こゝろもちに、輙く移つてしまつた。同時に、「どうともなれ」と、いふやうな全く自棄した氣が、私の外がはに、不規則に、纏ひついてゐた。

そこに、復た、一人の新しい客が、これは毫しの躊躇もなく、扉を強く開きながら、眞直ぐに入つてきて、私の隣りの、空き椅子に着くと、冷たい視線で、私の顔を、掠めるやうに瞥た。

その新しい客の顔を、私も瞥かへした。そうして、『確かに、何處かで見た顔だ』と、憶ひながら、然し、その場所を、思ひだすことは、到底、能きないことなのを自分で最初から會得してゐた。たゞものを言つたとは無いけれども、每も偶然の機會に、時々、出會ふ顔であることだけは、相違なかつた。

その顔から、視線を離して、火鉢のなかの灰を瞰下しながら、其の顔の輪廓を、復ねて憶ひ描いてゐるうちに、鏡に向いてゐる他のどの客の顔も、私の現に憶つてゐる顔――新しく入つてきた客の顔と、全く同じ顔を、總て皆が、してゐるやうに、想はれてきた。それらの誰の顔も、鏡に向いてゐて、私の凭れてゐる椅子の位置からは、一つも見えないだけに、皆の顔が、總て私の隣りに居る、何處かで屢々見覺えのある顔と、總てが一齊に、同じ輪廓、同じ表情をしてゐるやうに、次第に強く思はれてきた。そうして、

「自分の顔は？」と、自身が省みてゐる自分の顔も、或は、やはり皆と、同じ輪廓、同じ表情を、してゐるやうに、疑はれてきた。そう思ひ、且つ疑ひながら、一方には、

「あゝ面白い！」と、その錯覺の興味も同時に萌してゐた。

その錯覺に、三分間ばかりも、耽つてゐた後に、私は故意に、錯覺の境を、忽ち卻けた。

そうして、そんな錆つた感覺を、起したことが、我ながら、いかにも忌々しかつた。

その忌々しさに、強く迫られて、そこに居耐まらないやうに、なつてきた。その果に、私は立ちあがつて、扉の方に歩き始めながら、

『復た來ますから』と、誰にともなく、言ひすてゝ、扉を餘ほど強く押したいのを、靜かに悠つくりと開いて、戸外の、路のうへに出てきた。

「社用も、ひとまづ濟ましてきたし、何處に往かうか知ら？」と、思ひ迷ひながら、的なしに、解放されてゐる氣もちで、私は路の片側を歩きながら、一日に少くとも一回は、必ず息みにゆく珈琲店に、遂に入つてしまつた。

珈琲を、持つてきてもらつて、テーブルのうへの、砂糖鉢から、眞白な砂糖を匙で、抄つて、はらりと、珈琲碗のなかに、拋げこむでおいて、まづ舒びくとした氣になつて、私は、喫煙し始めた。

少時く、喫煙してゐるうちに、氣がついてみると、煙草の灰を、灰皿には落さずに、その隣りの、砂糖鉢のなかに、もう幾度も、落してゐるのだつた。

その自分の妄らな所作に、愕きながら、私は、給仕達の顏を、竊かに見まわしてみたけれども、その誰も、氣がつかずにゐるらしく、小さな給仕たちは、毎ものとほりの顏をしてゐるのに、過ぎなかつた。また、近所にゐる、五六人の客の顏も、誰も別に、私の所作に氣をつけてゐた者は、一人もゐないやうに、思はれた。

砂糖鉢に、そのまゝ默つて、竊かに、蓋をして置いて、別のテーブルに移つてやらう。そして、他のお客が、私の今までゐたテーブルに來て、さて、砂糖鉢の蓋をとつて、砂糖と煙草の灰とを、いつしよに抄ひあげて、珈琲の液のなかに入れてしまつた刹那の顏を、そつと眺めてやらう。と、いたづらな氣に、淡く唆られながら、近くに空いてゐる二つ三つのテーブルの上の、砂糖鉢と灰皿とを、私は少時く眺めてゐた。

そこに、私の右側の通路を、ゆつくりと歩いて、入つてきた一人の新しい客が、私の右肩に、すこし強く

觸つて、通りすぎて往かうとした。そのお客の顏を、私は直ぐに仰いで、すこし愕いた。それは、私と舊から互ひに熟く知つてゐるHであつて、猶ほ、Hが、銀座どほりに近い珈琲店などに、一人で入つてくることは、Hの平常の生活には、全く稀らしいことのやうに思はれたからであつた。

『おい、H、どうした』Hの左後から、私は直ぐに、聲をかけた。

『?』Hは、活潑に、蹈みとゞまつた。と、振りかへて、私を認めると、忽ち、眸を纖くして、

『やあ、貴樣か』と、會得したやうに言つて、直ぐ續いて大きな笑ひ聲をあげた。さうして、私の前の椅子に、腰をつけると、

『こゝの珈琲は旨いな。東京に來るたびに、飮みにくるんだが、おい、給仕、己にも一ぱいくれ。貴樣もう一ぱいどうだ』などゝ、ますく活潑な聲でHが言つた。

『巴里で、旨い珈琲を飮んだのだらう』私が斯う言ふと、Hの眸が、俄かに大きくなつて、私の瞳を、他意なく視つめながら、

『うん』と頷きながら、強く應へた。

それから、二人の話が交るく縺れたり離れたりした。Hは、珈琲に砂糖を入れずに、苦いまゝのを、三杯ゝ飮み乾した。さうして、煙草の灰が入つてゐる砂糖鉢は、そのまゝ全く靜かに、テーブルの上に、終りまで無事に載つてゐた。二人の話のうちに、

『何が愉快だつて、貴樣、超絶してゐるのだもの。超絶――』Hが言つてゐる途中を、

『待て。たゞ地面から超絶してゐるだけぢやないか。貴樣の心は、飛行そのものに、却つて執着しきつてゐるのだらう。つまらない超絶だよ』私が斯う言つて、遮ぎつた。

『なあにを言ふんだい。飛んでみんにや、わかるもんかい。ふん、具體的の超絶なんだ。それに、自由だぞ!具體的の超絶と自由とが、己等の日常の心なんだから。貴樣にや、わかるもんかい。一度でも乘つてみろ』

Hは、私を全く瞰下してゐるやうな、すつかり離れた

口調になつて、斯う言ひきつた。
「乘せてくれ。そんな理窟は止しにして」と、私は直ぐに、追ひつくやうに言つた。
「よし、いつでも來い。泊りがけで來い。氣流の好いときに、そつと乘せてやらう」
「ありがたい。どのくらゐ昇るんだ」
「はゝゝ。幾らでもさ。五百でも、千でも、雲上人にしてやるから」
「よし、今夜行くぞ、いゝか」
　Hが私を、全く瞰下したやうな、離れた口調で、話をした刹那に、私は、Hの背廣服の、胸もとを引き攫むで、激しく小突きまわしてやりたいやうな、我と牴悟しい、理由もなく只だ自分孤りで口惜しい、むらむらとした氣に、一時に襲はれてしまつた。が、Hの操縦する飛行機に、乘せてくれることを、Hと約束してしまふと、さきに理髪店のなかに、居たときから、何かに掩はれてゐるやうに欝積してゐた、たゞ悒々と全く不規則に擾れてゐた氣分が、忽ち、もう悉く晴々して、漸くほんとうの自分を取り復へしてきたやうな、毅さも同時に攫まへることができた。そうして、たゞ一途にうれしかつた。
　三日後の、夕がたから、私がHの家を、訪ねて往つて、その翌朝に、飛行機同乘のことを、Hと約束した。そうして、珈琲店から直ぐ近くの、自分の勤めてゐる新聞社に、私は、いそ／＼して歸つてくると、編輯室に行く階段を、一氣に走り昇つた。

△▼苦味丁幾に薄荷▲▽

　Hと珈琲店で、ゆくりなく會つた其の日の夜に、電燈の直ぐ下で、私が書物を讀むでゐると、右のページの端に、一匹の小さな蠅が、かさ／＼と匍つてきた。
　蠅を暫く視つめてゐるうちに、やがて蠅は苦もなく飛びあがつて、私の直ぐ右の壁に止まつたかと思ふと、復た飛びあがつて、天井に近く、室内の上空を掠めて、彼方の隅の、うす暗い方に、小さな影を隠してしまつた。
「彼奴も飛んでゐるな」と、私は思つた。そうして直

ぐに、Hの『超絶……自由』などの語を、思ひだして、獨りでをかしくなつた。また然し、蝿の飛むで行つた形を、思ひだしては、「いかにも自由に飛んで行つた」といふ氣も起きてゐた。續いて、テーブルの隅に重ねられてゐる書物や原稿紙の綴りなどを眺めては、其等自身がそのまゝ、眞に窮屈らしい姿をして、固まつてゐるやうに、思はれもした。

頭のうへに、柱時計が、チクタクと、振子を動かしてゐた。書物や原稿紙などに比べて、「こいつは動いてゐるな」と思つてゐるうちに、靜物と動物との、差別が、眞に斷然と、私の胸に映つた。そこから力そのものが、抽象的に、これも斷然と、私の意識に上つた。そうして、力の强さと自由の程度とが、比例してゐる法則が、今までの聯想の自然の結果になつてしまつて、今更らしい一時的印象を與へた。

「器械の力による器械の自由に、Hが感化されてゐるのだな。それがHの矜りなのだな。そこに其の器械には全く無力な不自由な己が乘せてもらふのは、飛行機の上ですつかり縛られに行くやうなものだ。つまらない!」私は直ぐに索然としてしまつて、續いて「何も態態と、Hの所まで、汽車に乘つて、往つて泊めてもらつて、そうして、空のなかに、自分の縛られてゐる肉體を動かしてもらふだけの事はない」と、思ひついた。「この約束は取消すやうに、葉書に書いてやらう」私は更に斯う思つて、テーブルの引きだしから、葉書を拔きだして、萬年筆を執りだした。ところに、先の蝿が、復た電燈の光を慕つて、今度は、壁に掛けてある暦の眞中ごろに、すつと飛んで來ると、やはり苦もなく、其處にひたりと止まつて頭を搖かした。私は、その蝿の姿を視た。すると、蒼い大空を、彼方の天際杳かに高く、恰も唯我獨尊といつたふうに、昂然と然も悠々と、空から空へ、八方無碍に翼を横たへてくる飛行機の姿と、そこに、大氣の魄を新しく搖り覺まして、往くに隨ふて悉く擾亂的な革命性の響きを、烈しく震撼させてゐる、發動機の爆鳴とを、私は輙く思ひだした。そうして、萬年筆を、葉書の横に、擱いてしまつ

た。

「乘つてやらう。まさか墜ちはしまい」

私は、この時に、飛行機に同乘してみたい氣が、始めて起きてきた。同時に、それの危惧のこゝろも、始めて忽ち萌してきた。そうして、危惧そのものから、痛切に受ける眞面目な刺戟に、觸れる時の特異の興味を想ひながら、延いて其れを期待する稀有の悦びが、そこに湧いてきた。

「良い機會が來た」と、私は思つた。

命をかけて、自分から進むで、危きを冒してみる時の、刺戟の味はひは、コップに苦味丁幾を、なみ〳〵と盛つて、その中に、薄荷を、どつさり混ぜて、それを一息に、飲み乾してみるときの味覺を、毎も想像させるのだつた。支那の革命のことに、自分が嘗て干與してゐた最中に、屢々、危い場面の裡に、自分の心を浸たしてみるごとに、苦味丁幾に薄荷を混ぜて飲み乾すときの味覺を、私は毎に想像してゐた。

蝿は、暦の眞中ごろに、そのまゝ止まつてゐた、私は、Hと飛行機に、同乘することに、愈々決めてしまつた。危惧性が齎らす刺戟の、特異の興味に接してみる、稀有な機會が來たことを、よほど强く悦びながら。

△▼木の葉の戰ぎ▲▽

Hと約束の日が、直ぐに來て、その日の夕方ちかくに、私は、Hを訪ねるために、汽車に乘つてゐた。

私の注意は、列車の窓の外ばかりに、常に鋭く向けられてゐた、それは鐵道の沿線に近い、一本の樹や、木立の茂りの、梢の尖を、透かすやうに熟視して、風の强さを、梢の動きかたによつて、知りたいためであつた。殊に、レールの直ぐ近くに立つてゐる木が、有つたときには、私は視線を凝らして、木の葉の戰ぎにさへも、十分に鋭く注意した。

針のやうな葉の、松や杉は元より、潤い葉をもつてゐる木も、どれも皆が、全く靜かにしてゐて、私を悉く安心させた。夏の夕照も、靜かに染まつてゐて、私に、

「明日も大丈夫だな」と、毅く思はせた。

△▼幾らでも飛べ▲▽

「一等新しいのに、乘せてやらう。御馳走にな」と、Hが、私の瞳を視ながら、少し笑ひかけて言つた。

「うむ」と、私は誘はれるやうに少し笑つて頷いた。

「おや、貴樣、眼鏡をかけてゐるな。厄介な奴だ。脫すと物が見えないしと。之を貸してやらう」Hは斯う言ひながら、上衣の右かくしから、雲母を張つてある風避けの眼鏡を、私に渡した。そうして、

「あれだ」と、彼方を指ざした。

眞新しい綺麗な、一臺の飛行機が、總たいに淡黃いろい彩りをして、直ぐに獨りでゞも、そのまゝ飛びあがつて行きさうな、快隼な姿をして、飛行場の隅の、庫のまへに、曳き出されたまゝになつてゐた。

私は默つて、あらためて空を仰いだ。快く晴れてゐる中に、灰色の雲が、いかにも無心さうに、幾つも、靜かに浮いてゐた。その雲々の雜多な形と、空の中の配置とを、私は、Hの家を出た時から、眞に良く覺えこんでゐた。そうして、Hの家の門を出ながら、私が最初に空を仰いだときと、それから三十分あまり經て、飛行場に來て、今から乘るべき飛行機の方に步いて行かうとしてゐる時と、常に全く同じ形と配置とをしてゐる幾つもの雲々の姿が、私を根柢から悅ばした。默つて悅びながら、Hの步いて行く後について、私は飛行機の直ぐ前に行つた。

いかにも纖い支柱、それよりも猶ほ纖い針金、傘紙のやうな薄々しい翼の布、それらの、さながらに脆い一切の直ぐ後に、極めて强烈な力を藏してゐる發動機が、毅然と一つになつて屬いてゐる、その脆弱性と强烈性との、然も離れがたい兩つの對照が、私を忽ち悅ばした。そこに、飛行機そのものゝこゝろが、私に適然と理解された。

「さあ先に乘れ。そら、ぎざぎざのついてゐる小さな鐵部が有るだらう。それを蹈むで、針金に觸らないやうにして乘れ。後の椅子に」

Hは私を顧みて言つた。

『好し』下の翼の端に、取り着けてある、拳ほどの大きさの、鐵の上に、私は右足をかけて、兩手に支柱を握みながら、下翼の直ぐ上に斜めに伸びてゐる針金を、左足で跨ぎ、頭の上の別の針金の下を潜つて、兩つの坐席の、後の方のに、漸く腰をつけた。

『これから貴樣の命を、預かつてやるのだ。その帶革を締めろ。それから支柱を握つとれよ。帶革は、どんなことがあつても、解いてはいかんぞ』Hは斯う言ひながら支柱を握むで、前の方の坐席に、直ぐに登つてきた。斯う言つた時の、Hの頰が、かなりに緊張してゐるのを私は知つた。その頰のいろが、硬く冷たいものに見えた。

『よし』と、私は答へながら、半圓形の籐椅子で出來てゐる坐席の、兩側に着いてゐた太い帶革を、下腹の前に、俯向きながら、確かに留めた。そうして、顏をあげると、私の直ぐ前に、Hがもう操縱席に腰をつけてゐて、その肩幅の廣さを、私に示してゐた。私は次ぎに、自分の周圍を見まわした。左右に前後に、あらゆる方向をとつてゐる、針金が、私を濃く圍むでゐた。そのために、身動きも能きないやうな、窮窟さと、周圍を圍はれてゐる爲の安定さとを、私に感じさせた。

Hは、圓い把手を動かしてみたり、兩足を交互に踏むだりした。それにつれて、方向翼や、昇降翼が、直ぐに動いて、その爲に、飛行機全體が、其の位置で、ゆら〳〵と鋭敏に搖れた。私の軀も同時に搖れた。

「さあ來い。幾らでも飛べ」と、強く思ひついた私は、そこに烈しい反抗性を、自から充ち〳〵させて、且つ同時に躍動させてゐた。

直前の危險を冒さうとする際に、私は、每に烈しい反抗性に充たされる。それが、また每に私の惧れを全く無くしてしまう。

兩手に、支柱を握みしめながら、反抗の鋒芒を、私は眞直に延ばしきつて、飛行場の全面を見互した。菁菁と茂つてゐる、雜草の綠りいろが、雲母と硝子との二重の眼鏡を透して、私の瞳に、「地上」といふ感じを、強くあたへた。そうして、

「こゝを離れるのだな」と、思つて、私は烈しく悦んだ。然し、その悦びは、反抗性が背景になつてゐる、一時の幻のやうな發作であつたらしく、「廻せ」と、Hが叫ぶのと同時に、私の悦びは、忽ち消えて、直ぐ前のHの兩耳を、私は意味なしに視つめた。

忽ち、直ぐ後の推進機が、凄じい響を起て、同時に、發動機は、極めて迅い旋律の、爆音を迸らせて、私の鼓膜に、「强さ」を、したゝかに思はせた。そうして、私の反抗性を、いよ〳〵激しく動かした。

Hは、左指で、坐席の左下にある發動機の調節機を徐かに前後に押したり引いたりした。その度に、私の直ぐ後の大きな連續的の響音は、高低の波を、輙く打つて、それが、低くなつたときは、霧が、うすく晴て行くやうな感じを、私にもたした。私は、またHの力を左右することの能きる、然うした所作を、すこし羨しく感じながら、やはりHの兩耳を、後から視つめてゐた。

發動機の調節機を、數回押したり引いたりしてゐたHは、右手を俄かに高く擧げた。その右手の擧げかたは、純乎たる眞率性を、劃るやうに溢れさせてゐた。その刹那に、飛行機は、響と、いつしよに、颯然と風をきつて、滑らかに進み始めた。その進行の他には、何の動搖も、全く別に無く、只だ一途の直進ばかりが、そこに激しく動いた。私は、坐席の下の、空所から、下を瞰た。草の綠いろが、一樣に只だ靑く、私の瞳を、颯々と掠めて過ぎた。

△▼沒我の表情▲▽

私は顏をあげて、前方を見た。一面の杉の森が、横に長く延びてゐた。その濃い綠りいろが、私の瞳に映つてゐるうちに、杉の森が、ゆつくりと低くなり、續いて、森の上面が、平らかに現はれ、續いて、森を越えて彼方の更に著しく低い畑が、一時に擴がつて行つた。それらが、私の視線を、次に〳〵と、展ばして行つた。

その眼界は、輪を外に膨らすやうに、常に連續的に圓く擴がつて行き、悉く擴がり盡したときには、遠く

の山脈の上際が、蜿蜒と延亙してゐる姿を、遙かに自から瞰下すやうになり、大小の森、遠近の部落、長い道路、潤い畑、下界の一切が、未だ下に〳〵と沈むで行くやうに動きながら、その全部が、規則たゞしく小さく縮むで行つた。そうした萬象の變化を現に認識したときの私は、衝動的の歡びばかりに、只だ充たされて、そのために、自分を悉く忘れてゐた。

「大宮――」Hは有らんかぎりの聲を、發動機と推進機の響の中に、辛うじて叫びあげながら、卒かに右手を伸ばして、下界の一方を、遙かに指ざした。

その方向に、際だつて多くの甍と森とが、ごちやごちやになつて、雜然と群がつてゐた。私は、服の袖口から、鋭い風が、腋の下に奔り拔けて、直ぐに胸から腹にかけて、肌に觸りながら、戰ひ狂ふやうに、小さな渦を縺れさせてゐるのに、更に氣がついた。そうして、自分の直ぐ左右を、試みに顧みた。

私の直ぐ傍に、眞黃いろい翼が、日の光に直射されて、明かるく美しく輝いてゐた。その他は、環界悉く空しく、そこに全く孤獨な、痛ましいほどの寂寥な感じが、一時に私を烈しく襲ふた。今しがた、昇りぎわの、絶大な歡びのために、前の反抗性は、自から消えてゐた。そうした後に、孤獨な烈しい寂しさに、忽ち、つゝまれた私は、その爲の怖しさに慄へた。私は、翼の狹小な面を、直ぐ近くに、あらためて熟視した。ますます強い怖しさに迫られながら、更に、直ぐ前のHの横顏を眺めた。

何といふ尊い表情であらう！　彼は、瞳を凝らし、兩手を把手に添えて、唇を緊しく締めたまゝ、機の安定に、全心を、まさしく傾注しつくして、そのまゝ唯一心の三昧境に、全く沒入してゐた。そこに沒我の人の表情を、私は確かに視た。そうして、その尊さと嚴肅に撲たれて、私は、直前の怖しさを忽ち忘れた。

飛行機に乘るときから、その時まで、私とHとの内部は、常のやうに別々になつてゐた。然し、Hの横顏を視て、その表情の、尊い嚴肅な氣に、現に撲たれるのと同時に、私は、彼と全く一つになつてしまつた。そ

の一つに歸したときの親しさは、地上の心理ではなかつた。それを强ひて書き表はすならば、自分の全部を現實に、他に取らせて、そして、他が自分を、全心を擧げて抱擁することに努めてゐてくれることを、他も自分も、互ひに知りあつてゐる、親しさであつた。そこに、私は、Hの裏に自分が含まれてゐるのを知つた。

過去に、覺え識つてきた、道德や宗教のうへの、もろ／＼の親しさの他の、空の上の親しさを、其の後に、思ひだすごとに、常に淸新な特異な溫かさが、私の胸に注射されて、その都度、私は、Hを戀ひしいものに省ふ。

△▼發作性の微笑▼△

Hは、飛行機を、左の方に、ゆつくりと大きく、旋はした。その圓弧を、描くときに、飛行機の全部が、左の翼を下にして、斜めに傾いた。同時に、私の全軀も、著しく左に傾いて、坐席の左緣に、波のやうに、**寄りかゝつて行つた。**

「？」咄嗟の疑ひが、私を掩ふた。その疑ひが、忽ち、復た怖れに變はつて、私の全部を慄へさせた。然し、機體は、直ぐに、舊との安靜な平らかさに復へつた。そうして、私は依然としてHと、やはり一つになつてゐた。

『今何米突だあ？』私は、Hの左耳のそばで、聲帶が許すかぎりの、叫び聲をあげて、Hに訊ねた。

Hは、右手を、輕く擧げて、五つの指を、開きゝつて、左右に、小さく振つて見せた。それを視とめて、凡そ五百米突の高度に、昇つて居ることを知つた私は、坐席の下の、空所から、遠く眞下を眺めた。

そこに、藁葺きの屋根が、二列に纖長く並んでゐる間に、淡い灰いろの路が、殆ど眞直に、且つ全く坦かに延びてゐた。その長い直線の、或る一點に、一人の男が、俯つむいて、路を掃いてゐた。兩手に持つてゐる竹箒が、絹絲針ほどの長さに見えながら、それでも、男の掃く手に從ふて、極めて斷然と、規則的に動いて**ゐた。**

藁葺きの、ある一つの屋根の端から、淡い綠いろの

煙が、蒸々と騰つてきながら、風に弄ばれて曲線を描き、且つ散らされて、擴がつて消えて行くのが、いかにも巧妙な仕掛けで出來てゐるやうに、眺められた。

自然と人爲との、差別が全く無しに、一切の現象の、悉く精巧に、また平等に、且つ渾然と調和してゐる、出來ばえが、私を、新しく悦ばした。そうして、其れを最も明からさまに俯瞰してゐる自分は、一切の現象に對して、まさしく第三者の態度になりきつてゐるやうに、確かに思はれた。

Hは、更に、前方の大きな杉森のうへに、私を、導いて行つた。その森の上を、別の飛行機が、さながら匐つてゐるやうに、動いてゐた。その姿は、恰も水の中に、鰯が泳いでゐるのと、全く同じ趣を具へてゐた。私は、自身の乘つてゐる飛行機も、大氣の中を、やはり泳いでゐることに、氣がついた。續いて、今しがた思つてゐた「第三者」の態度といふのも、實は第一或は第二の相對者であることや、またHが話してゐた「超絶」とか「自由」とかの考へかたも、全く撞着した、殆ど凡愚な考へであることなどを、私は、十分の餘裕をもつて、思ひ始めてゐた。そうして、その時まで、Hから教へられたとほりに、兩手で摑みつゞけてゐた支柱を放して、私は、自分の手頸の、脈搏を、徐かに抑さへてみた。その脈搏は、かなりに激しい速度で、動いてゐた。

そうしてゐるうちに、機體の全部が、卒然と、下の方に強く抑さへつけられたやうに、ぐんと墜ちた。そうして、直ぐに復た、何かの底力を有つてゐるやうに、しつかりと停まつた。その刹那に、私は、無意識に、左右の支柱を、強く摑みしめた。自分の軀よりも、機體の方が、迅く下に墜ちて、私の臀部と、坐席とが、距離を置いて離れてしまひ、私は、宙に、置き去りにされたやうな、墜ちた刹那の感じが、少時くした後に、蘇へつてきた。

その時に、Hは私を始めて振りかへつた。そうして、眸を直ぐに繊くして、冷たい笑を含みながら、私を見た。その笑ひの意味は、私に全く判らなかつた。然し、

私も頬で刻むやうに笑つた。その自分の笑ひにも、意味は無かつた。恐らく二人ともに、互ひの顔を、見あはせたときに、發作性の微笑が、各自の頬に、我知らず浮いてきたのらしかつた。

△▼奈落・翻弄▼▽

Hが、右手を擧げると、手の甲を平たく伸ばして、前の方に、下げて見せた。

「降りるのだな」と、思ひつきながら、私は默つてゐた。

桑の樹の、疎らに生えてゐる畑の上に、飛行機は、ゆつくりと沈むで行つた。

その時も、私の臀部と坐席とが、不意に屢々離れて、そこに依るところを失ふた、底氣味のわるい、惡感が、私を襲ふた。同時に、私は、「奈落」といふ意味を、始めて知り得たやうにも思つた。

Hは、復た右手を擧げた。そうして、その手の甲を、幾度か、上下に動かしながら、

「氣流」と、長い一聲に、叫んだ。

桑の樹の畑の上を過ぎて、已に飛行場の中の、草の上に近づいてきたときに、機體は、或は上に、或は下に、衝かれるやうに、間斷なく動搖した。その時には、私は、機上の氣分に、幾分か慣れてゐたらしく、間斷のない不規則な上下の動搖を、そのまゝ軀だけに、感じたのに、過ぎなかつた。そうして、「翻弄」といふ意を、正しく思つてゐた。

△▼ふざけた奴だ▲▽

推進機と發動機との、轢さぐあひが、緩徐になり始めて、草のいろの所々の濃淡が差別され、今までは風をうけて、眞直ぐに前を向いてゐられなかつた顔を、漸く眞直ぐに、復へし得るやうになつたときに、飛行機は、地上の有になつて、平らかに滑走してゐた。そうして、發動機に、小さな爆音を、名殘りらしく、思ひだしたやうに、疎らに起てながら、徐かに停まつた。私の意識も、そこに全く靜かになつた。

Hは、素迅く、地面のうへに、降りた。直ぐに續いて、私も、降りた。踵の下に、測りがたい大きな力

が、私を眞に強く十分に安心させた。私は、雲母の眼鏡を取り脱しながら、兩方の皷膜が、外がはから壓迫されて、凹んでゐるやうな感じを、覺えた。

『どうだつた。命一つ、正に返上仕候也だ』Hは、斯う言つて、高く笑ひながら、私を見て、歩き始めた。

『昇るときは好いね。いゝ、ぐんと不意に墜ちたときが、怖ろしかつた』私はHと肩を並べて歩いて行つた。

『あれか、あれは發動機さへ、ちやと聞こえてゐたら、何でもないんだ。うん、でも誰も怖いね』

『五百米突上がつてゐたのかい』

『いゝや』

『然し、貴樣は手で合圖をしたぢやないか』

『噓だよ』

『噓か、わるい奴。本當は、どのくらゐの高さだ』

『三百ぐらゐだつたらう』

『どうして噓をつゐたのだ』

『貴樣を怖がらすか、愉快にしてやらうと思つてさ』

『ふざけた奴だ』

二人は、斯んな話をしながら、飛行場を出口の方に、歩いてきた。

▽▼彼處あたりを▲▽

歸るときの、列車の窓から、私は、飛行場の上空を、二三度仰いだ。そうして、三百米突ほどの高さを、視線で測りながら、

『彼處あたりを、周わつてゐたのだな』

斯う思つて、輕い快感を、崩してゐた。自分の家に、歸つてきたときに、玄關で、『どうでした。面白かつて？』妻に訊ねられて、

『うん』私は應へながら、先づ自身を空中に置いてみた、生れて始めての經驗、萬人の多くが未だ知らない經驗を、現に自分が體得してきたことを、自から晴々と淡白に悦んだ。そうして、玄關さきに、ゆつくりと靴を脱いだ。

店頭哲學

——まづ聊かお客なるものを罵る——

高島米峰

一、お客に向つて一矢

僕、店頭に打坐するもの、實に十有六年、その間、如何にかして、小賣商人といふものゝ位地を高めやう、お客といふものゝ不心得を誡しめ、無作法を矯正し、あわよくば、金も少々はもうけて見むと、努力奮闘、實に至らざるはなかつた。しかも、未だ、その目的の萬一をも達することの出來ないのに、却つて早くも小賣商人の衰亡を歎ぜざるを得ざるに至つたなどは、糞忌忌しなんど、言ひやうがない。さりとて、僕に、變說改論の妙術もなく、屈節賣操の機略もない。たゞ有るものは、主義のために殉ずるといふ、一片耿々の丹心だけである。衰ふるも可、亡ぶるも亦妨げず。聊かにても、道の個中に在りて、伸ぶるあるを樂しむべく、邁往直前したい。そこで、新年頭、まづ、店頭の所得を開陳して、世のお客様側に向つて一矢を放つ。中ると中らざるとは問題でない、要するに、たゞ、眞劍である。

二、俥夫とめし屋の主人

理論を說く前に、まづ、こゝに一つの例話を擧げる。

「オイ俥屋ッ」

今しも、魚河岸から出て來た男、……電車に乘るべく、聊か大きに過ぎたる、且つ電車の乘客からは、頗る嫌はれさうな、……魚の籠を携へた一人の男が、傲然として、そこに辻待ちして居る俥夫を呼びかけた。

「ヘイ、どちらまで」

と、これはまた、腰を屈め、手を揉みながら、甚だ丁

寧なものである。

「小石川指ヶ谷町まで、いくらで往く？」

「ヘイ、……エヽ、お高いことは申しませぬ、……卅五錢やつて下さい、急いで參ります。……お荷物もあることですから。」

「ベラボー奴、荷物があるからこそ、俥なンぞにも乘らうといふものだ、荷物がなければ、割引電車の片道で、三錢で歸つて仕舞ふンだ、廿五錢やらう。」

押問答數回にして、遂に、三十錢で話しが纏まつたらしい。彼は揚々として、車上に烟草をふかし、此は營營として、時々瀧なす汗を拭つて居る。

「そこだ〱、その右の八百屋の隣りだ。」

「ヘイ、ヘイ、……どうも有り難う。」

と、俥夫は汗を拭きながら、頻りに腰を屈めて居る。

「オイ、いゝか、そら十錢玉が三ッ。」

御苦勞とも言はないこの横柄なる乘客に對して、しかも、尙俥屋は、再び腰を屈めながら、

「ヘイ、どうも有り難う。」

といふ。

日本橋から小石川の指ヶ谷町まで、隨分の道程である。賃金を得ると同時に、俄に、疲勞と空腹とを感じた車夫は、どこかで一杯やりたいものだと、眼を擧げて不圖見れば、自分は今正に、腰障子に、「酒めし」と筆太に書かれてある、繩暖簾の前に立つて居るのである。

もう、思慮を廻らす遑がない。いきなりそこへ飛び込んで、今までの謙讓なりし態度とは、まるで打つて變つた傲慢の反身で、

「オイ、一本つけてくンな。」

「ヘイ、いらつしやいまし。」

と、腰を屈めて、手を揉みながら、甚だ丁寧な接待をして居るのは、即ち、この繩暖簾の主人にして、何ぞ知らむ、今が今まで、この車夫を奴隷の如くに使役して、以て意氣揚々として居た、乘客であらうとは。

三、新しい女と舊い女

賣ると買ふとは對等である、お客尊く、商人卑しいといふ理窟がどこにある。從つて、お客威張つて商人

屁子垂れるといふ理窟もない。咄、這の無自覺なる倖夫、無反省なる縄暖簾の主人。と、しかく、頭ごなしに叱りつけても、血の廻はりの善くない連中には、一向、要領が得られまい。マア、少し氣を落ちつけて、僕の說くところを聽け。それも、直に、第一原理の講釋では、お釋迦樣が、莊嚴をお說きになつた時と同じやうに、如聾如啞では心細い。まづ、萬人向きの『女』を借用して來る。

古來、女は澤山あつた。今も、現に、人類の半は女である。その女の中から、『新しい女』といふものゝ生れて來たといふのは、どういふ譯であらう。彼等『新しい女』は、『原始の女性は太陽であつた。眞の人間であつた、然るに、今の女性は、月である、太陽の光を受けて、辛くも青白く光り得て居るだけである。何とかして、今の女性をして、原始の女性の如く、その本具の天才を發現せしめなければならない。』と叫んで居る。原始の女性が、太陽であつたかどうかは別問題として、日本の女性は、久しい以前から、『男のための存在』であつた。結婚といふやうな、人生の大事に際してさへ、女は、自分の配偶者を選擇するの權利を有して居なかつたし、夫婦の關係も、夫唱婦隨が原則となつて居た。剩へ、女は、貞操に關して、峻酷なる制裁を、受けなければならないことになつて居たに拘らず、男は、全然、貞操から解放されて居た。つまり、女は、實に、人形であつた、翫弄物であつた。

元來、東洋思想……佛敎儒敎の思想は、概して、男尊女卑である。この、佛敎儒敎の思想によつて、築き上げられた日本の思想が、女を『男のための存在』として、それ以上、女の何ものをも認めなかつたといふことは、その事の當否は別として、蓋し、當然の歸結であつたと見なければならない。即ち、別な言葉で言へば、過去の日本道德は、男子中心主義の道德であつた、然るに、輓近、西洋思想の輸入と、女子敎育の進步とは、こゝに女子をして、『女も男と同じく人間である』といふ、自覺を喚び起さしめ、更に進んで、男子中心主義の道德に、反抗せしむることになつたのである。

これ亦、時勢の推移、社會の進步であつて、『似而非新しい女』にあらざる眞の『新しい女』の出現は、意義あることである。然り、眞の『新しい女』の出現は、意義あることであるが、しかし、『似而非新しい女』『新しがる女』の輩出は、斷じて、國家の幸慶でない。從來、一口に、『新しい女』と、呼びもし呼ばれもして居た人々の中に、果して、幾人の眞の『新しい女』があるだらう。彼等の運動が、一般識者から、冷評的態度で迎へられたといふのは、畢竟、『似而非新しい女』『新しがる女』の、不徹底な行動が、著しく不快の感を與へたからであつたかも知れない。否、最近に及んで、所謂『新しい女』が、殆ど全滅するの止むなきに至つたのも、結局、彼等が、自己の放縱亂行のために、道德的破產を來したゝめである。

敎育ある婦人が、從來の『男子中心主義』に反對するのもよい、『男のための存在』ではないと言つて、女性の解放を叫ぶも聞えて居る。しかし、それと同時に、更に、『女子中心主義』の道德を樹立しやうと言ひ、すべての男子に向つて、『女のための男』たれと强要せむと言ふならば、それは、從來の『男子中心主義』が誤つて居たと同じやうに、亦これ、大なる誤である。『男尊女卑』が、舊思想として排斥しなければならないならば、『女尊男卑』は、愚な思想として、排斥しなければならない。

四、お客と商人

既に、『男のための女』でもなく、『女のための男』でもないといふことが、理解されたならば、同じ問題を、お客と商人との關係に持つて來るとどうなるか。即ち、『お客のための商人』か、『商人のためのお客』か。

原始の商人は、お客と對等であつた。イヤ、物々交換の時代には、お客も商人も無かつたのである。然るに、次第に社會の組織が複雜になつて來て、貨幣で物品を購ふといふやうになり、こゝに始めて、商人とお客との區別が生じたのである。その上に、士農工商といふやうに、階級思想が强くなつて來て、『こりや、町人、買つて取らせるぞ』と笠にかゝつて威張るのを、

『ハハッ、ありがたう存じ奉る』と、たゞ譯もなく、卑下して居なければならぬやうになつてしまつたのである。

しかし、かゝる狀態は、男が女を卑しめて居る狀態と同じことであつて、今や旣に、女が男に對して、反旗を飜して來たやうに、商人は、お客に對して、謀反を起さねばならぬ時期に進んで來て居るのである。考へて見るまでもなく、商人はお客から、たゞお金を貰つて居るのではない。十錢銀貨を受取る時には、十錢だけの品が渡してあるのである、十錢の銀貨と、十錢の品物とを交換するのに、お客……全體『お客』といふ名稱からして、不都合千萬であつて、『買手』で澤山である……が威張つて、商人が屁子垂れるといふ理窟は、毫も理窟にならない。賣る者が賣つて利益を得るならば、買ふ者は買つて便利を得て居る。賣る者は、買つて貰ふといふがために卑しといふならば、買ふ者は、賣つて貰ふがために卑しい譯である。買ふもの、買つてやるがために尊くば、賣る者は、賣つて遣はすがために尊くなければならない。若し、買はむと欲して商店に往つた場合、『お前には賣つてやれない』と言はれたら何とする。問題は、これで盡きて居るではないか。

聞く、英國に於ける商人とお客の關係は、實に、平等に圓滿に平和なものであつて、買ふものは買つて『有り難う』と言ひ、賣るものは賣つて『有り難う』といふ。バーでビールを飲む時でも、ボオイは、『サンキユー』と言ひながら注いで吳れるし、お客は『サンキユー』と言ひながらこれを受けるといふ。流石に、紳士の國である。然り、お客も紳士であり、商人も紳士である。『お客中心主義』でもない、『商人中心主義』でもない。今や、日本に於ても、長い間『男のための存在』であつた婦人の中に、覺醒一番して、『女も人間』であらうとして居るものも出て來た。然るに、長い間、『お客のための存在』であつた日本の商人中、未だ一人の起つて、『商人も人間』である、『商人も紳士』であると叫ぶもののないのは、眞に嘆ずべきではないか。否、何時まで

も、商人は『お客のための存在』だときめて置いて、商家の店頭、帽子も取らずに、『オイ、コラ、それはいくらだ』などゝ、ぬかしくさる、紳士淑女とかいふケダモノの雌雄の多いのは、新日本の新道德のために、更に大に嘆ずべきことではないか。

五、愛嬌と拳突

店頭哲學の第一原理、略してこゝに盡くしたつもりである。然るに、お客これを解せず、商人亦これを覺らず、これを以て、お客いよ／＼のさばり、商人ますます屁子垂れざるを得ないのである。試みに思へ、全く見ず知らずのアカの他人の住宅へ、『御免なさい』とも言はず、帽子も取らず、いきなりヌッと這入らむか、家宅侵入罪を以て、法に問はれても仕方があるまい。然るに、獨りこれを、商家の店頭に於てすれば、法に問はるるどころの騒ぎでない、却つて、小僧番頭が、『入らつしやい』のお世辭を眞向から振りかけて、一方ならざる歡迎を受ける。奇怪とも、不思議とも言ひやうがないではないか。少くとも、買つて貰つて自ら便利を得やうといふ程の考だにあるならば、まづ、帽を脫いで、『御免なさい』位の言葉は出づべき筈、又、商人の方でも、買つて遣はして、便利を與へてやる位の道理だにわかつて居るならば、この無知無禮の紳士とかいふケダモノに、一喝を食はす底の見識はあるべき筈。

お客なるものゝのさばり方は、單にこれにとゞまらない。己の無作法不心得を棚に上げて置いて、その上更に、『何屋の小僧は不愛想だ』とか、『何屋の主人は、拳突を食はす』とか、さて／＼、我儘にも程のあつたものである。一寸の蟲にも五分の魂といふ、同じ人間同士だもの、誰だからつて、無暗に威張り散らされて、氣持の善からう筈がないではないか。帽子も取らずに、いきなり飛び込んで來て、『オイ、こりやいくらだ』などゝ怒鳴られては、小僧と雖も人間のはしくれだ、少しはムッとしやうぢやないか。況や、堂々たる一商店の主人ともあらうものが、この無禮を加へらるゝに於て、拳突の一つ位、まだ／＼、よほどお手やわらかな

方である。一體、人といふものは、妙なもので、やさしく出られると、更に一層やさしく答へたく、強く出られると、更に一段強くやつつけたくなるものである。店へ來て、まづ帽子でも取り、『何々はありませぬか』『これは如何程ですか』と言はれて見ると、縦令、今までは、山の神と喧嘩して、餘憤を小僧の頭へでも洩さうか位に、頗る險惡な主人の天候も、ガラリ變つて、ツイ、お世辭も並べたくなり、愛嬌も振り撒きたくなるものである。小僧や番頭の不愛嬌を罵り、拳突を食つて口惜しがる連中は、須くまづ、自分の無禮無作法を反省しなければなるまい。他人をけなしたゝめに、自分がエラクなるといふ道理の無いやうに、矢鱈に威張つたからとて、それで自分の値打が上るものではない。

即ち、この理を推して考へるまでもなく、お客なるもの、徒にお客様面をぶら下げて、店頭に立ちはだかり、横柄な振舞に及ばうよりは、寧ろ、賣つて貰つて便利を得て居るといふことに思ひ及ぼして、せめては、言葉遣ひだけでも丁寧にすれば、商人の方だつて、魚心あれば水心ありで、決して、失禮なことはする氣遣ひがない。從つて、双方、愉快に別れることが出來るではないか。啻に、然るのみでない、呉服物なら、尺も餘分に切つて呉れやうし、食品ならば、成るべく新しいものを出しても呉れやう。前にも言つたやうに、他人を見下したからつて、自分のエラさが增す譯でもなく、商人に丁寧な言葉遣ひをしたからつて、紳士の面目に傷がつくと言ふ譯でもない。否、却つて、無暗に威張り散して、ゾンザイな言葉を遣ふのは、偶々以て、紳士の德を損ふといふことの外、何等得るところが無いであらう。これを以て、世の紳士淑女たるもの、若し、商店に入りて、歡迎せられ、親切に取扱はれ、上等の品を安く買はうと思ふならば、自分が威張りたがると同じやうに、商人も亦人間なれば、多少は威張りたがるであらうと察してやり、まづこちらから、下手に出て、丁寧な應接をして見給へ。

かういふ風に、人間は、誰しも皆威張りたがるも

のであるとしても、賣つて貰つて便利を得るものも威張れば、買つて貰つて利益を得るものも威張るといふ工合に、たゞ天狗の寄合の如く、高慢の鼻の突き合せでは、兎角、世の中の圓く納まらう筈はない。これを以て、お互に、その威張りたさを抑へつけて、高い鼻をへし折つて、向ふでもニッコリ、こちらでもニッコリ、『御免なさい、これはいくらですか』、『ヘイ、入らつしやい、まアどうぞお掛け下さい、ヘイ、精々勉强致しまするで、何分御引立を、……長松や、お茶持つておいで。』といふやうなことになつたら、頗る愉快なことではないか。

六、雜誌も只兩替も只

然るに、お客にこの反省なく、商人にこの自覺なき結果は、到るところの商店に於て、お客の横暴と惡風、殆ど枚擧に遑がない。

『オイ、「婦人畫報」はあるか。』

『ヘイ、ございます。』

『いくらだ。』

『廿八錢でございます。』

『拾圓でおつりだ。』

たつた廿八錢の小買物で、拾圓の紙幣でおつりを取らうといふ量見からして、甚だ圖々しい。なぜといふに、廿八錢の雜誌一冊賣つて、假りに三錢もうかるとしても、拾圓紙幣を兩替して貰ふのには、三錢のきり賃を取られてしまふ。それすら、昨年末のやうに、小錢の拂底の場合には、銀行の窓口に、『兩替謝絕』の掲示さへ出してあるのが少くなかつた。三錢もうける（賣は、この三錢も、全部もうけではない。營業税、所得税から、生活費までを含ンで居る。）ために、三錢のきり賃を出す位なら、いつそ商をしないで店を閉めて居る方が、頗る氣樂である。イヤ、『入らつしやい』だの、『有り難う』だのと言ふ、お世辭だけが損といふもの、それも、姑く、商人の弱みとあきらめて、込み上げて來る癇癪をグッと抑へ、ならぬ堪忍をウンとこらへて、九圓七十二錢といふおつりを渡して、『有り難うございます』と送り出す。それで濟めば、マアそれまでだ。

從つて、この原稿も尻り蜻蛉で、纏まりがつかないが、それから彼是二時間も經つた後、一人の下女がやつて來て、

『先程、旦那様が、「婦人畫報」を買つてお歸りになりましたが、その前に、奥様が、もう「婦人畫報」を買つてお置きになりましたので、同じものが二冊あつても仕方がありませぬから、どうか代を戻して頂きたい。』

といふ。「婦人畫報」でも買はうといふのは、大抵の場合、奥様の發意に相違ない。

『あなたや、今日、お役所のお歸りに、「婦人畫報」を、ネエ。』

などゝあまッたれられ、その『あなたや』なるもの、鼻の下を長くして、

『ウン、よし〳〵。』

と來るのが、世間並である。苟も、一度、旦那様に頼ンだ以上、旦那様のお歸りをも待たずに、自分勝手に、「婦人畫報」を買ひに出るなンて、不都合千萬、不埓至極の爲左衛門である。

若し、不埓至極、不都合千萬の爲左衛門でないといふならば、何故に、一旦買つた雜誌を、二時間も經つてから戻さうといふのであるか。元來、畫報といふものは、繪を見て仕舞へば、それでよいものである。繪だけならば、二三十分もかゝれば、家族全體が、遺憾なく見了ることが出來るのである。買つて往つて、二時間もたつてから、戻しに來たといふ場合、商人の立場として、こゝに、一種の邪推を起さずには、居られないではないか。

『女學世界』を買つて往つて、程經て、『婦人公論』に取りかへて呉れいといふもの、『中央公論』を買つて、重要な部分を讀み盡した頃、『新公論』と間違へたのだから、取りかへて呉れなどゝ言つて來るものも、少くないが、これ等は、即ち、一冊の雜誌代で、二冊の雜誌を讀まンとする猾奴ではなからうか。當世紳士とかいふケダモノ階級に、かうしたものさへ居るといふのは、まづ以て、文明の餘榮とでも名づけて、驚嘆して

置くより外はあるまい。さるにても、只で兩替させ、只で雜誌を讀み、一冊の代價で二冊見るなど、畢竟これ、お客は尊い、商人は卑しい、卑しい商人は、尊いお客のために、如何なる橫暴壓迫を加へられても、泣き寢入るものだといふ思想の、拔けないためである。

七、交番の巡査と商店の番頭

商店などへは、時々、『オイ、何町何番地は何處の邊だ。』などゝ、型の如く、帽子も取らず、腰もかゞめず、いきなり怒鳴込ンで來る無作法者がある。而して、かういふ連中は、大抵、髭でも蓄へて、一廉の紳士面をして居るケダモノである。凡そ、人にものを尋ねるのには、それ相應の禮儀といふものが無くてはならない。世間一般の商人なるもの、事理を解しないものが多いからこそ、いつも、此種のケダモノに怒鳴り込まれて、一向怪しとも思はないで居る。怪しいと思はないどころか、却つて、この無禮に對してさへ、尙且つ、丁寧な禮を施しながら、『へイ、これから何軒目です』とか、何とか、敎へてやつて居る。若し、この調子で、交番の巡査に尋ねて見たらどうだ。イヤ、交番の巡査までゞなくとも、まづ、端下給金でも取つて居る、腰辨先生かなンぞの家でゞも、やつて見たらどうだらう。ガラ〳〵ッと戶をあけて、いきなり飛び込み、帽子も取らず、會釋も施さず、『オイ、何番地はどこだ』など言つて見給へ、『ナニッ、失敬なことを言ふなッ、お前に番地を敎へるために、こゝに住ンで居るのではない。』位の挨拶は、必ず食はされるにきまつて居る。腰辨先生の家貧くして、商人の家卑しといふ理窟はあるまい。交番の巡査も人間なら、商店の番頭も人間だ。そこで僕は、最初の間は、この種のケダモノの舞込む度每に、『せめて、帽子位は取つて尋ねたらよいでしやう。』と敎へたものだが、そうすると、何にも言はずに、赤くなつて逃げて行くものもあつたが、大抵は、『聞かンでもよい』などゝ、捨て科白して、憤然として去るのである。そこで考へた、折角、大道を敎へてやつて、相手を怒らしては効が無い、これは、いつでも、相手と對等の位置に立つて、敎へてやる方が善からうと、こ

れからは、帽子を被つたまゝで、ものを尋ねるケダモノに對しては、僕も、わざ〳〵帽子を被つて、返答をすることにして見たが、これは、なか〳〵煩はしいので、近頃はめつたにやらない。

又、物を買つて、代金を拂ふ時に、お金をそこへ投げ出す奴がある。犬に、肴の骨でもやるのではあるまいし、十錢の品物を受取つて、十錢のお金を拂ふのに、投出すとは何事ぞ。マア、姑く、位置を代へて、商人が品物を渡す時に、お客の前へ投げ出してやつたとしたら、どンな氣持がするかを考へて見よ。お客が、お金を投げ出してよいものなら、商人も、品物を投げてやつてもよい譯であること、言ふまでもあるまい。

又雑誌や本を素見すもの丶中に、一々、指頭を唾で濡らして、頁を繰る人があるが、あれは、甚だ迷惑である。指端の垢を、毎頁に印して、割引でもしなくては、とても賣れないやうなのが、時々出來上る。賣物を只で見る時は、極めて謙遜の態度であらねばならぬし、又、見了つたら、一言の挨拶位はして、出て行くべきであらうと思ふ。圖書館なら、入館料がいるし、貸本屋なら、損料を拂はなくてはならない位の事は、苟も、本でも讀まうといふ志のある人間なら、心得て居るべき筈だと思ふ。

八、無收穫にあらず

此の種、お客なるもの丶無禮、無作法、横柄、惡風、一々數へて居ては果てしがない。今は、たゞ、大綱を揭げたるのみであつて、その細目の如きは、他日を期することにする。若し、これによつて、縱令、一人にても、賣ると買ふとの對等なる所以を、理解して吳れる人が出來たならば、僕が、店頭に於ける十六年間の努力奮闘は、決して無意義、無收穫でなかつたといふことを、歡ばずには居られない。（大正六年一月十七日）

感冒と強固療法

眞鍋嘉一郎

左の一篇はかつて自分がある醫學會の席上にて講演せしものなるが、中央公論主幹瀧田氏の一覽に供へしに、本誌の讀者にもまた興味ある材料なりとのことにて掲載せんとの希望なりしを以つて既載の醫學雜誌社と交渉のすゑ多少の訂正を加へて本誌に掲ぐることとなしたり若し讀者諸君が衞生思想の一端にも資するところあらば幸甚。

△感冒は全身の危險なり

吾人は感冒卽ちかぜひきと云ふ事實には日常遭遇して居ながら、其病理的の説明は極めて不明である。かぜ卽ち感冒に對する特定的の定義がないに苦しんで居る。併し定義はないが感冒と云ふことは事實に存在してゐる。吾人は唯だかぜひき、風邪と唱へて簡單に云ひ過して居るが、此感冒と云ふ事は、一時的に全身の調子が變つたのであつて、全身の抵抗力の減つた場合である。此點から云へば其危險の程度が、慢性に經過する限局性の病氣、例へば限局せる慢性の結核性疾患と比較して甲乙なきのみか、寧ろ感冒の方が危く思はるゝ場合さへある。卽ち限局性の結核は局部的の危險であるが、感冒は一時身體全體を危險に陷れるものである。夫れ故感冒と云へば事實は簡單であるが、場合に依ると全身の危險と云ふことに考へられるのである。

△體質と境遇

感冒に限らず、凡そ疾病の發生を論ずるには、病理學上種々の方面から解釋する。病原菌が身體に侵入して病の發生を促すなどは無論分つた問題であるが、其他第一に人間の體質（コンスチツーチオン）、第二に人間の身體の生活する境遇狀態（コンディチオン）が、病を起す大要素に成つて居る。故に吾々醫師が病氣の治療をなし、或は病氣の將來の經過を

定める時に、常にその病人が如何なる身體、體質を持ち、如何なる境遇に在るかを考慮せねばならないのである。乃で若し其疾患の原因せる大部分が、第二の境遇、狀況に歸して居る場合には、或程度までは其生體の境遇を變化する。例へば食餌を變化するとか、或は住居を改良するとかして餘程施す術がある。其他身體上の狀況、或は年齡の關係、少年から成年に移り往く時、或は成年になる前後とか、婦人で云へば月經の初潮又は閉止する時とか、年齡が高齡に達するとか、或は過度に疲勞するとか、或は衰弱して居るとか、或は中毒に罹つた時とか云ふやうな、凡て個人的の狀況に附帶して病氣が生じた場合に於ても、亦吾人醫師が多少處置を施す餘地がある。然し甚だ困難なのは其原因が體質に在る時である。總て先天的缺點ある體質に就いては、其根源から體質を改造する事は、醫師の力では迚も出來ない。

所で感冒にかゝり即ち一時身體の障礙を爲す所の刺戟があつた時分にも、其患者の體質に由つて其起り來る症狀は各々一樣ではないのである。近來西洋では病理學上三種に人間の體質を區別して居る。即ち第一は加答兒性體質（或は淋巴性體質）第二は關節炎性體質、第三は神經病性體質と云つた具合である。固より此分類法は完全なものとは云へないが、醫師が診療の實際に應用するには至極便利である。感冒に罹つた時には、或人は加答兒性症狀を起して消化器或は呼吸器の加答兒に罹る。又他の人は關節が痛み所謂僂麻質斯性の疼痛を起す。又或人は神經痛の形で疼痛を起す。斯くの如く人々の體質に由つて、同じ感冒を起す處の原因が働いても、其症狀は色々になつて來るのである。

△感冒とは何ぞや――健體の調節作用

然らば感冒とは抑も何んなものであるか。先づ其定義を見出さなければ、夫れを豫防し又は治療するに方つて一向方針が立たない。今夫れを說明すると、感冒と云ふものは、身體が一定の寒冷に逢つて、身體の防衞的反應が十分に起つて來ないことである。元來人間の身體には、寒くても暑くても、始終自分の體溫を一定

に保つて行く爲めに體溫調節の機能がある。其機能を擧げると六かしく云ふことになるが、化學的調節の機能と理學的調節の機能との二つであつて、寒い時分は身體に酸化作用を起して熱を作り、さうして自分の溫度を保ち、暑い時分には皮膚の血管を開いて溫熱を放散し、或は汗を出して冷やすと云ふ機能があるのである。

冬期吾人が一朝寒冷に逢ふと、自分の身體の溫度が外に放散しないやうに、成るべく表面の皮膚に血液の來ないやうに血管を收縮する。夫れが爲めに身體の表面の血液が内部に這入つて、身體の溫熱を失はぬやうに用意をする。次ぎには體内で熱を作る作用が起つて來て、筋肉の收縮等に依つて體内で熱を作る。此第一に起つて來る即ち寒冷に逢つた刹那に起る反應を、寒冷に對する第一次の反應と云ふ。而して其刹那に起つて來る第一次の反應は、一旦寒さに逢つた際自分の體溫を奪はれぬ爲めに用意するのであるが、之に次いで第二には、再び皮膚の血管が開いて皮膚が眞紅になる。此第二次の反應が寒冷に逢つた後に起つて來なければならないのである。其證據には吾々が冬期寒風に曝されて突然屋内に入る時、始めは皮膚が蒼白になつて居るが、直ちに紅くなつて皮膚に暖氣を感ずる。乃ち皮膚が寒冷に逢つて、第一次には血管が收縮し第二次には血管が開くのである。而して此第二次の血管が開いて皮膚が眞紅になるのは、長い間寒さに逢つて血管が痲痺して皮膚が紫色になるのとは大に意味を異にして居る。即ち吾人が永い間氷をあてるとかまた永い間寒い目にあふた時分に皮膚が帶紫紅色になるのとは大に趣が違つてゐる。其皮膚の色合を見ても、寒さに應じて健全に反應した皮膚と、寒さが永く働いて皮膚血管が痲痺して鬱血したる場合の皮膚とは確かに違ふ。詰り此寒冷に逢つた時分に起る處の反應は、血液の分布狀態が變つたのである。初め表面の血液は一旦内部に流れ、次に第二次の反應となつて内部の血液が再び外部に出ると云ふ風で、血液の循環に一大變動を來した有樣になる。

其處で最も必要なのは第二次の反應で、寒さに逢つ

て一旦內部に入りし血液が、再び皮膚の方へ來るといふ作用が起れば、先づ感冒といふものには罹らない。處が此血液が皮膚から驅逐せられて體內に這入る、さうして第二次の反應が起らない、即ち血液が身體の表面に流れて來ないで這入つた儘止つて居ると云ふ、此場合に初めて感冒と云ふ狀態が生ずる。即ち內臟或は筋肉等に血液が停滯して、其處に疾病が發生するか、或は發生する根本を作るのである。

△冷却せし皮膚の發赤——血液感情

然らば前掲第二次の反應——寒さに逢つて血液が內部に這入つて再び外部に出て來る現象即ち寒さに接して後一旦蒼白となりし皮膚の發赤するのは何に依て起るか、之れは生理的殊に吾々の理學的療法の見地より解決すべき問題であるが、遺憾ながら今日未だに解決されてゐないのである。此反應は決して血管の痲痺ではなく、自動的に皮膚の血管が開いて、血液が表面に多くなり皮膚が暖くなるのである。或人は中樞性の作用であると說明し、或人は血管の反射作用であると唱へて、今日尙十分な說明が施されてゐない。其處で前年伯林大學の水治療法所の助手ヒルショフェルドと云ふ人が、戰爭中にも拘はらず研究して、此第二次反應に對して一種の意見を發表して居る。氏の說では、一旦血管が收縮する、言ひ換へると寒冷に逢つて皮膚に貧血を起す、夫れが一旦寒冷の刺戟が去ると、收縮したる血管が開いて舊の通りに戾つて來て、其際血液が急に流れて來る。其急に流れて來るのは吾々醫學者間に所謂血液感情（ブルートゲフユール）に基くもので、宛かも貧者には施與が厚いといふた按排に、一旦貧血した部分に血液が來る時分には非常に勢よく澤山に流れて來るものである。序でながら、此血液感情なる名稱及び說明の出處を探るに、獨逸の外科の泰斗ビール博士が唱へたもので、乾いた手拭と濕ふた手拭とを水に漬けると、乾いた方には水が早く多く浸み込んで往くが、濕れた方には水は往かない。之と同樣に一旦貧血した處へ血液が來る時分は、非常な勢ひで流れ込み、夫が爲めに皮膚に充血を起す。同時に血液が澤山來ると血液自身は始終溫熱を帶

びて居る。其血液が多量に急に皮膚に來るが故に、血管壁の平滑筋が血温で暖められて弛緩し、其爲め益々多く血液が來ると云ふ事實で、寒冷に逢ふて第二次に皮膚が紅くなると云ふことを說明してゐるのである。故に血液が寒冷に逢つて、皮膚が赤くなると云ふとは貧血の人には起らない。詰り血液が暖かい爲めに血管が擴がつて來るのであるから、血液の少ない時分には起らない譯である。夫れ故全身貧血を起した人は、寒冷に逢つても第二次の反應が起らない。從て寒冷に逢つて起る處の第二次の反應があるかないか、又遲く來るか早く來るかと云ふ事が、即ち感冒に罹るか罹らないか、かぜを引くか引かないかと云ふ區別の生ずる所で必要な事である。

△水浴反應——皮膚の練習

寒冷の刺戟、例へば冷水を身體に懸けて、さうして第二次に皮膚が發赤する反應が起るのは醫療學上專門的に云へば水治反應或は水浴反應であるが、此反應は冷水療法に必要な事である。即ち冷水療法——冷水浴或は冷水摩擦——に據つて或は感冒を豫防するとか、或は皮膚の營養を良くするとか、血液の循環を良くするとか云ふのは、即ち此水浴反應を確實に且つ銳敏に起らせる事に力むるの意である。皮膚が寒冷に逢つて、血管が收縮して皮膚に貧血を來し、第二次に皮膚が再び充血するといふのは、詰り皮膚に現はれた作用が完全である驗(しるし)なので、何人でも此反應を始終保つて居ると云ふ事は出來ない。殊に小兒の如きものは未だかゝる調節反應がないのであつて、追々成長するにつれ、色々外界の刺戟に觸れて體溫調節及び防衞の作用をば練習し來るのである。故に幼年者は寒冷に逢つた時分の反應が完全でないからかぜを引く。又始終室内に籠つてゐて偶々寒冷に逢ふと、皮膚の練習が足らぬからかぜを引く。夫れに反して勞働者が終日外に居て寒風に曝されながらかぜを引かないのは、皮膚の調節作用が充分鍛練されて居るからである。

△溫度高低の緩急

次ぎに溫度が幾何程あつたなら感冒を起すかと云ふ

に、之れは皆比較の溫度である。例へば低い溫度であつても、其溫底が漸次に長い間に降つて行く時即ち夏から冬に移行する如く行けば、冷たい溫度でも少しも吾々に害を與へない。けれども其溫度が急に變つて來る、即ち短時間に急變する時分には、人體が刺戟に堪えられないから、其刺戟に應じて第一次第二次の反應を起して來るのである。故に反應が健全でなければかぜをひく。極寒の季節には始終寒いけれども、其氣溫が一定して居る爲めに、却て割合にかぜをひかない。唯春とか秋とかの如き始終溫度が變動して居るやうな場合に於ては、感冒に罹る機會が多いのである。寒さが極めて凛烈なる時には何故却て感冒に罹らないかと云ふに、之れは反應と刺戟とが竝行するからである。極く強く刺戟を與ふれば夫れに應じて反應が又著るしくなる故、寒さが極めて强い時には、生體の之に對する反應も非常に強く現はれて來るから、却て極寒の時には、吾々の防衛作用が充分行はれるので、チリ〳〵寒くなつたりする時よりは害がないのである。故に吾々は不知不識の間に寒冷が犯して來ると云ふやうやうなことが害を爲す事を考へなければならない。汽車などに乘つて居ると、漸次に冷えて其間にかぜを引く事があるが、これが危險で、汽車などでは寧ろ烈風が寒く吹き込んだ方が却てかぜをひないのである。斯樣な具合で詰り生體が皮膚に强い刺戟を受ければ強く反應を起して結局安心である。然らば人間が今暖かい處から寒い處に移るには何うすれば可いか。先づ身體が高溫に接した後感冒を避くるには、長時間の内に漸次と低い溫度に下げて來るか、或は急に下げて來る即ち暖かくなつた後急に冷たい目に逢はせる。と云ふ風にしたら其刺戟が強く、從て其反應も强い。暖かい所から遽かに寒い目に逢はせたとても身體に害はなく、反應さへ充分に起りさへすれば良いのである。

△對寒防衛作用の減弱

處が此對寒反應は個人々々によつて異ひ、更に同一人でも其時々の身體の狀態によつて變つて來る。例へば其人は平生かぜをひかないけれども、其人の身體の

の狀態が變つて來て、或は疲勞して居るとか、或は睡眠中とかで狀態が變つて居るやうな場合に於ては能く感冒に罹る。例へば非常に疲勞せる時は一般の生理作用も衰へて居る爲め、充分對寒防衛的の反應が發現して來らず、或は睡眠時は一般の生理作用が休止して居るが爲め、此時も對寒の反應が完全でない爲め、感冒の源となつて身體に害を來たすのである。

△强固療法——局部の保護と全身の發達

以上の諸條件で感冒と云ふ者の起る大略の理窟は分つたと思ふ。詰り一旦感冒に罹ると、體質に應じて夫れ相當の障碍を起して病氣に罹るのである。又病毒の傳染を促がしたり、潜伏して居る所の慢性傳染病、例へば結核病の如き者も再び出て來ると云ふやうな惡い結果を來たすのである。故に此感冒を豫防する事は、健康體に於ても、亦病體に於ても頗る必要な事である。之を强固療法と云つて醫療界にては理學的療法の一の大なる題目になつてゐるのである。而して强固療法とは、吾々が外界の溫度の變化に應ずる血管の調節の練習に過ぎないのである。一般から云つて、生體の機能なり或は器官なりは、始終之を使用練習すれば、追々發達して來ると云ふやうに極つた原則がある。尤も如何なる體質を有つて居る人にでも、此原則が當て嵌まるとは云へない。體質が健全であつて練習をすれば、其機能は益々發達して來るけれども、體質の弱い者であると、練習すると、却て其機能が衰へるのである。故に身體が弱いから練習をしやうと云ふ事に就いては、豫じめ身體の素質を見て、練習させて發達の見込があるかないかと云ふことを極めてかゝらなければならない。と云つて無暗に身體を大事にして、身體の防護的作用や、生體の發達すべき機能を發達させずに閉塞させて居ると云ふ事は考ふべき事である。今日の醫師間の治療法でも問題になつてゐるのは、例へば身體に限局性の疾病がある場合、矢鱈に身體を安靜にして居れとか、或は靜養して居れとか云ふ說が近來迄あつた。然し生體に限局性の病氣があつて、其局部內の病氣の爲めに身體を使はずに置くと云ふ事は、病氣の部

分は其儘治するも、全身を無視して其爲め爾餘の機能を發達せしめないで脆弱ならしむることになる。故に醫師が一の病氣に對して治療を行ふ場合に、其病人の病氣の分と病氣でない分とを比較して、其殘つてゐる健康部分を發達せしめ强固にする要はないか。詰り病氣は局限して居るが、病氣の部分を餘りに保護するよりも、寧ろ生體全體の抵抗力機能を發達せしめた方が、其生體全體として利益がありはしまいか。此呼吸は醫師たるものが第一に學び知らねばならぬ事となつて居る。また醫師以外の人々といへども多少心得て居らねばならぬと思ふ。夫れ故に今日猶ほ結核治療法に於て大なる爭がある。結核と云へば、從來歐洲に於ても、又吾々が今日考へて居る處でも、養生をさせて可成安臥させて置くと云ふ療法を是迄採つて來たが、其場合には他の健康部の發達を止めて了ふのである。故に例へば病氣が起つた場合に於て、其全身が永く守らされたる安靜の爲めに衰弱して居るので却て成績が惡いから、結核の安靜療法と云ふものも必ずしも常に効があるとは云へない。却て惡い結果を來たして居ると云ふ議論も今日では起つてゐる。又一方では、かゝる結核性の病者は、適當に病竈に影響しない程度に運動させ、爾餘健康部分の發達と身體諸部の機能增進とを圖つたならば、結局身體全體としては强固になる。夫れが爲め却て働いて居る所の結核患者の方が、働かない結核患者よりも成績が良いと云ふ今日の議論になつたのである。故に英國の或るサナトリウムの療養所の如きは、前の議論の如く、一局部に病氣があつて安靜にして置くと、其病氣は發達しないが、全身の機能が漸次衰へて來る爲めに、後に他の病氣になつた時、益々抵抗力が弱くなつて居つて却て惡結果を來すと云ふ議論に傾いて、患者を安靜にして置く安臥廊下を打ち壞して了つたと云ふ位である。其他慢性の良性なる腎臟病の如きも、從來は佛蘭西邊りでは必ず安臥させて置く事に努めたけれど、結局安靜にして置くと云ふことは、全身爾餘の健康部の機能を衰弱させるのであるから、斯う云ふ場合には矢張り健康部の發達を圖る爲めに、病

的部分に影響しない程度に於て身體の運動練習をさせて、將來他の病氣に罹つても夫に堪へる丈けの體質にして置かなければならぬと云ふ議論になつてゐる。前の維納大學の内科の泰斗ノールデン博士は或る種類の慢性腎臓炎患者などは折々唯大切にする爲めに心臓の方が衰へて、却て生命を縮めるのであるから、成るべく健康部の發達發育を圖らなければならぬと云ふ議論を唱へてゐる。之と同樣に強固療法に於ても、多少疾病を有つて居る者、例へば輕症の不活動（結核病結核にかゝつて居るが症狀がないもの）に罹つて居る者に對しては、矢張強固療法を行つて、他の健康部の發育を圖らなければならぬと云ふ事になつてゐる。夫れ故に此議論に基て結核病者にも冷水療法即ち身體を強固にすると云ふ意味で冷水療法を施すといふ傾向になつて居る。併し斯く云へばとて其生體が先天的に薄弱であつて、吾吾が期待してゐる良反應を起さない者には、到底冷水療法を施しても及ばぬのである。固より身體には別段病氣はないが、身體の構造が惡く、發育が惡く、心臓が小さいとか色々先天的に薄弱な部分のある所謂虚弱體型（アステニクス）のもの、これは小學校の生徒にも時々あるが、かゝるものは練習をさせて見るも却つて病を導くやうなもので、目的を達せずして生體を害する結果を來たす場合がある。健康者は無論の事、縱令病體に於ても、病に罹つて居る部分と病に罹つてゐない部分とを比較して、健康部を益々發達せしむることが生體全般の上から必要であれば積極的の治療を行ふ。之れが今日の原則である。

△**感冒の豫防――冷水浴及び冷水摩擦**

所で此感冒の豫防たる強固療法には、常に皮膚の血管の調節作用を練習し、即ち寒冷に應じて毎に第一次反應、第二次反應の起る樣にする事が大切である。極く簡單なる方法は先づ初めに身體を暖めて置く。詰り寒い暑いと云つても、此生體が初めに接した所の溫度と、後に接する溫度との比較的の差異であるから、決して冷却すると云つても、常に氷の如き冷たい溫度を要しないのである。生體を一旦暖めて置き、今度は生體の堪

へらるゝ限り前の溫度よりも低い溫度の水にて身體の皮膚を刺戟するのである。乃で吾々が行ふ所の、朝、臥床に寢て居て未だ皮膚が暖まつて皮膚に血液が充分流れて居る間に、冷水浴或は冷水摩擦をするのが簡單で、而かも原則に適つた方法である。又實際上豫備溫身法としては治療所的設備かあるならば蒸氣浴、電光浴或は熱氣浴等が簡單である。先づ身體を暖め、後冷水を種々の形にて皮膚に加へ、第一次第二次の反應を種種起させて行かうと云ふ方法がある。處が最初身體を暖めて置いてから直ちに冷たい刺戟を與へる、夫れ丈けで反應を起す場合があつても、まだ一つ方法を加へると其反應が極めて確實に顯はれるのである。卽ち寒冷の刺戟に加ふるに器械的刺戟を加へる。すると益々第二次の反應が顯著に現はれるのである。故に冷水に浴した後を摩擦するとか、其他色々の方法があるけれが、詰り第二次の反應を盛んに起す爲めには唯だ溫度の變化のみならず、器械的に皮膚を刺戟すると云ふことを心得なければならない。之は最も簡單な方法で、詰り夏期日光に皮膚を照らせて、直ぐ冷たい瀑布に打たれると云ふことは、恰も皮膚血管の練習に相當するのである。卽ち寒冷の刺戟と器械的刺戟との兩者合同して、生體の反應を起させる謂であつて、必らずしも病院等の水治專門の治療所的設備を要せず、各自が此の原則に從ひ考案して行へるものである。或は皮膚の刺戟を强くする爲めに、冷水中に鹽分を加ふる如きも亦一の變法で、最も其の目的に適つたものである。詰り海水浴に於て、日光に皮膚を晒らし、後冷かな鹽分ある海水の波に打たるゝことは、冷、鹽の刺戟の上に波の器械的刺戟を加へる譯である。故に冷たい水に這入つても、夫れと同時に器械的刺戟があれば、吾々は決して寒いと云ふ感じはないのである。故に冬期寒い時に水風呂に跳込んで、頻りに身體を摩擦すると、反應も極めて强く、早く第二次の反應に移つて暖かく感じ、皮膚の調節作用が敏活になる譯である。換言すれば吾々は、死んだ様な活動せざる皮膚を活かすに過ぎないのである。乃で前述べた療法は詰り身體表

而の血液が寒冷に逢つた爲め、一たび內部に集注し、之を再び第二次反應を起して身體の表面に導くと云ふ血液循環の大變動を起さす主義であるから、其場合には其身體を爽快にすると云ふ療法にもなるので、非常に頭が重い、即ち血液の循環が惡くて頭の重い場合に於ても、此方法を行へば、血液の循環が一變する爲めに、精神に爽快を感ずることもある。けれども此處に說くところは皮膚の血液の循環を敏活ならしむる原則を重んじた譯である。

△感冒の餘病——溫熱療法

次に一旦感冒に罹つて急性的の症狀のある間は、適當に其對症療法を施して順當なる經過を俟つより外はないが、肺炎とか「インフルエンザ」とか急性の「リウマチス」とかに罹つて、筋肉が痛むとか、或は神經が痛いと云ふやうな障碍が殘つて居ることがある。之は獨り傳染病、「チブス」、肺炎のみならず、慢性の疾患に於ても類似の事があつて、例へば肺結核患者にて一時肺尖加答兒が治つて、其後時々神經痛を起すことがある。是等は其原病竈は治つたけれども、後に毒素の爲めに神經痛を來すのであると說明して居る。殊に貽後症狀として見る所の筋肉痛、神經痛、關節痛には大部分自覺的疼痛があるが、別に解剖的の變化を見出し得ないことがある。

乃で唯だ感冒と云つても、或は過度の全身及び局部の疲勞が斯かる病狀の發生を助け、又急性傳染病の場合などには黴菌の毒素性作用も加はつて、筋、神經、關節部の疼痛を起して居るが、斯かる場合でもどうも解剖的變化を摑む譯には行かない爲めに、或人は分子的の變化であると云ふやうな曖昧な名をつけて居る有樣で、其眞相は益々研究されなければならない。實際には全く外界から見て何とも變化がなくして、神經の徑路、關節の被膜、骨膜、腱の起始、筋膜、筋肉自身等に何分疼痛があつて去り難く、どうも仕方がないから、其說明は血液の障碍と云ふことで解釋をつけて居る。我邦でも斯う云ふ病氣に罹ると、溫浴療法或は溫泉療法を賞用して居るが、此療法は矢張り實效があ

る。

△全身療法と局部療法

斯樣な疼痛所謂感冒に附隨して起りし病氣の殘遺は、藥劑療法でも割合効がないが血液の循環を佳良ならしめた爲め効を奏した事がある。然らば如何にして疼痛又は多少障碍ある部分の血液の循環を良くするかと云ふに、夫れは第一に全身の血液の循環を良くして、間接に障碍ある部分の血液の循環を良くする方法と、第二には直接に其部分の循環を良くすると云ふ、二つの方法がある。乃で此場合には前の强固療法とは反對に溫熱を加へるのである。之は溫熱を加へるから皮膚の血管が開き、血液循環が盛んになり、爲めに局部の淋巴、血液の鬱滯を消散せしむるのであつて、其方法として病院などにては電光浴、蒸氣浴、熱氣浴、全身浴などがあるが、是等はいづれも皮膚の血液を一變させ、局部の血液循環の惡い處をよくする。固より其際に於て多少發汗する。發汗も時にはそれ自身有益なる場合がある。殊に發汗が効を奏するのは、傳染病症で身體にある毒素が發汗の爲めに一部分排出される爲めに爽快に感ずることもある。例へば「インフルエンザ」とか、急性の傳染病に罹つた時分に、發汗して爽快を感ずるは一部の毒素が出て了ふ爲めと說明する人もある。けれども今玆に擧げる所の神經痛等に於ては發汗させて毒素を去るといふやうな狹い意味よりも、寧ろ循環を良くして障碍ある部分の循環を良くすると云ふ事を重んじてゐる。併し全身浴をするとか、或は蒸氣浴に入るとか、或は熱い湯に入るとか云ふことは、一般から云つて極めて荒療治である。夫れが爲めに考へねばならぬのは、然う云ふ場合、自然心臟並に肺臟を餘計働かせるやうになるから、心臟並に肺臟に故障ある時には、病院などには單に局部的に行ふべき熱氣裝置とか、電光裝置とかもあるけれども、是等は一體局部丈けを暖めて、折角局部が暖まつても血液が其部分の溫熱を取つて他に運んで往くやうになる爲め、其局部は吾々が要求する反應を起す迄には時間も掛るのである。而かも割合に深い部分に其溫度が及ば

ないので、此狹小なる局部的の溫熱療法は、漸次大膽れつゝある形勢に向つてゐる。出來るならば、全身が健全なら溫浴なり蒸氣浴なりをする方が良いのである。

△溫浴に「マッサージ」——溫浴の利害

夫れと同時に「マッサージ」を行ふ。先づ溫熱を加へて血液の循環が良くなり、又筋肉が弛緩する場合に「マッサージ」をすると云ふ事は、益々血液の循環を助けるので、詰り溫熱療法を施した上に器械療法を加へるは、其効果を倍加する譯である。故に我國でも溫泉に按摩は始終付き物になつて居るが、最も適當な配合で、浴後直ちにマッサージを行ふのは理想的である。之を前後して浴前にマッサージをする人があるが、浴後の方が理論上適當である。唯暖める治療法には又缺點が伴ふ。それは溫浴をすれば身體に疲勞を起す。之が非常な缺點で、單に身體の血液の循環を良くすると云ふ意味から云へば、冷水浴の方法で、皮膚の第二次反應を起させ、夫に依りて血液の循環を盛んにした方が良いと云ふ説も起る。而して唯だ疲勞を起すことが溫熱療法に於ける非常な缺點であると共に、又冷えると云ふ事があつて感冒に罹る心配がある。其理由は、一旦暖まると血管の緊張性が緩んで居り、後寒冷に接して適當に收縮する事が出來ない。乃で動もすれば溫熱療法の後に惡い結果を來たして感冒に罹る。夫が爲めに溫熱療法の後には必ず冷水法を行ひ、血管の緊張を復舊して置くのが溫熱療法の原則である。若し溫い湯を浴びて後に冷えない樣に冷水法を行ふ事の出來ない場合には、漸次に身體を冷やし、漸次に平溫に戻すと云ふ方法を講ずるのである。

△溫浴の後冷

日本人の浴湯は、溫浴と云ふよりも寧ろ熱浴である。往々後冷えのする人もあるが、後冷の心配は寧ろ西洋人の恐るゝ程多くはない。此事に就てベルッ先生も書いてゐるが、日本人が湯に浴つて後に何等の處置をしないのは不思議であると云つて往々問はれる。寒い日に暖い湯に這入つて、後で必ず水を被ぶる人があ

るが、之れは生理的に價値ある事を知らずにするのであるが、最も合理的な方法である。そも〳〵人間は體溫が普通で少しも熱を感じない溫度の時分には、身體に熱を發生することが少いのである。漸次外部の溫度が昇るにつれ體溫の放散を計り、身體が過熱せぬ樣に皮膚の血管が開き、唯だ單に理學的の調節をのみ行つて居るのみで、少しも化學的調節はやつて居ない。けれども、其溫度が益々高くなつて或は四十度以上になつて來ると、理學的調節はあらうけれども、身體の內に却て酸化作用が高まつて溫熱が發生するのである。詰り溫度が或程度以上高くなれば高くなる程却て身體の中で溫熱を發生する。乃で日本人が、熱い湯に浴する時却て身體に熱を發生する機能が起つて身體自身に熱を作るのである。即ち酸化作用が盛んになつて身體に熱を發生し、夫が爲めに湯から出ても、身體中で熱を發する所の作用が一時持續して居る爲めによるのか、熱浴の後に冷えると云ふことが少くないと思はれるのである。却つて微溫の湯に這入ると、體內發溫のない爲めか後冷えのするものである。故に西洋の法則を無暗に日本人に其儘適用し難いかと思ふ。其他溫泉に於ても熱い湯に這入つて後で後冷えしないとか、するとか區別をしてゐる。例へば伊豆山の溫泉に這入ると後で冷え、熱海の溫泉に這入ると後が暖かい。之れは熱海は鹽湯でクロールナトリウムの外に、クロールマグネシウムとかクロールカルシウムとか云ふものが含まれてゐる。即ち「ニガリ」の成分を含んで居る。斯樣な鹽類は自分自身に水分を含む性質がある。故に溫泉に這入つた後に皮膚の上に鹽分の層が附着し、直接皮膚から水分が蒸發する代りに、其皮膚の上に着いてゐる溫泉の鹽分が水分を吸收して蒸發させない。即ち蒸發を防いで居る。其爲めに暖まるのである。

以上は唯だ原則的の事實のみを云つたに過ぎない。其方法を如何にするかは一に各自の考案によりて容易に行はれる。

惜しい事には、未だ日本人は服藥專門に重を置いて、病人自身も藥を飮まなければ安んじない爲めにい

ろく有効なる藥物以外の治療法があつても容易に應用されない。或は持續して此等の方法を行はうと思つても行ひ難い有様で、何分理學的療法といふ様なものが普及し難い時期である。けれども吾々は濫用に走らず、其方法を輕侮せず、着實なる歩調を以て適當に諸方法を取捨し、極めて簡易な理學的の方法で疾病を豫防し或は病者の苦痛を幾分でも除去することが出來たならば、御互に幾分の幸福であらうと思ふ。

趣味の會

黒頭巾

其一

◉近來、一人一黨といふ事あり。若し一人を以て一黨を爲し得可んば、「一人一會」を爲すを妨げず。一人一黨は、つねに全黨一致ならざること無し。一人一會は、譬へば一人にして碁を打つが如く、思ふが儘に、理想を逞しくすることを得可し。

◉趣味を同じくせざる者は、相集まると雖、以て、趣味の會を爲し難し。「趣味の會」は必ずしも會合に非ず。故に、會員の多數なるを要せず。若し、已むを得ずんば、僅に、一人一會を爲すとも、尚ほ異趣味、無趣味の多數者を糾合するには勝さる可し。

◉心中に友あれば、斯心、寂寞たらず。「趣味」を以て友とする者は、斯心、つねに樂し。碁、將棊の人を見よ。彼等は閑居無聊の時、往々、碁經、詰將棊などの譜を繙き、盤面に對して、一人にして敵となり、味方となり、一喜一憂、以て、半日、一日を消光し去るに非ずや。

◉月を友とする者は、獨り月に對して、一夜を明かすを得べし。花を友とする者は、花をかざして春日を暮

らすべし。而して水を趣味とする者は、河畔の柳に非ずとも、獨り水の流を見て暮らすも惡しからず。

●林和靖が梅花と併せ歌はるゝは、彼が、常に梅花を友とし、ひとり梅花の下に逍遙して、髣髴として林下に、美人を見たるに由る。趣味は幻覺を生ず。林和靖は、梅花の下に「一人一會」を爲せるものなり。而して梅花下の美人は、彼が趣味の幻覺ならずんばあらず。

●陶淵明も亦菊花に向つて一人一會を爲せり。彼の詩に、採菊東籬下、悠然見南山の句あり。此の句は、彼が悠然獨樂の妙境を示せるものにして、趣味の一人一會なりしならずんばあらず。

其二

●必ずしも酒無くとも「趣味の會」たるを失はず。然れども「趣味の會」には、多くは酒あり。酒有れば能く趣味の一人一會を爲すを得可し。

●酒客は、獨酌を嫌ふといふは、未だ盡さず。酒の妙用は獨酌に存す。獨酌を嫌ふといふは、畢竟、寂寞を嫌ふなり。然れども酒あれば則ち寂寞を免るゝといふは、獨酌の妙境なる可し。

●獨酌、以て書を讀み、詩を思ひ、或は興に任かせて筆を揮ふ時、陶然として樂言ふ可らざるものある可し。此の時、人悉く酒の中に在り。

●「酒無くて、何のおのれが櫻哉」、酒無ければ櫻花に對すとも高興來らず。然れども酒有れば、櫻花、自から杯中に開く可し。

●瓢箪より駒を出すのみに止らず、瓢箪より詩を出し、友人を出す。則ち一瓢を携へて、山に登り、河に游ぶ。決して孤行といふ可らず。

●天下、會心の人と游ぶより愉快なる事無し。會心の人と逢へば、つねに趣味の會を爲さずんばあらず。會心の人あれば、必ずしも酒無くとも可なり。酒あれば更に可なるべし。

●會心の人無ければ會心の酒あるを要す。會心の人、會心の酒、則ち天下到處、會心の境ならざるは無し。顏淵、一瓢の酒を携へ、肱を曲げて窮巷に樂みしといふものは、彼が、つねに酒中に會心の人を樂しみつゝありしを意味す。

●吾黨は憶ふ。顏淵は、進んで聖賢を友とし、退いて、窮巷に、酒中に、つねに、「趣味の會」を爲せしならずんばあらず。彼は、獨善のみならず、兼ねて獨樂の至

○境に入れり。

其三

◉廣初新誌に、雌雄兒の竹筒あり。趣味の一瓢は、以て、此の竹筒に譬ふ可し。

◉雌雄兒は何處の人なるを知らず。明末清初の道士なりと傳ふ。此の人、衲衣の外、何物をも携へず。唯だ腰に、三箇の竹筒、大さ錢ばかり、長さ五寸許なるを佩ぶるのみ。

◉雌雄兒、遊歴して雲間に來る。雲間には素封家多し。空屋、三百餘楹あり。雌雄兒之を僦り、既に入つて其の戸に鍵し、堂上に獨坐す。

◉雌雄兒、堂上に獨坐し、腰に佩ぶるところの竹筒を取つて、蓋を揭げて之を傾れば、芥子の如きもの無數地上に躍つて已まず。須臾にして盡く化して倚、桌、幃、帳、器皿、具はらざること無し。既にして第二筒を傾くれば、芥子の實の如きもの躍出すること、第一筒の如し。須臾にして、穀、粟、飲、食、牛、羊、鷄、犬、悉く具はらざる事無し。第三筒を開けば、則ち須臾にして、僮僕、婢、媼、妻、妾、男、婦、數百人、皆集まる。奔走に供する者、堂宇を掃除する者、器用を整頓する者、頃刻にして、宛然、大富家の如し。而して是等のもの、すべて腰間の竹筒より出づ。

◉雌雄兒、此に於て、車馬に乘じ、僕從を擁し、諸方に交游す。知る者、驚いて妖人なりとす。家主を勸めて退去せしむ。雌雄兒乃ち盡く、妻、妾、僮、婢、器用、牛羊の類を以て、竹筒の內に納め、飄然として去る。其の終るところを知らずといふ。

◉吾輩、憶ふに、此の雌雄兒が、三箇の竹筒の外、更に一瓢、一瓶の酒を携へざるを以て、注意す可き事と思ふ。實は、此の不思議なる竹筒三本を有すれば、一瓢、一瓶の酒を必要とせず。又た若し一瓢、一瓶の酒を有するを得ば、三本の竹筒を携ふるの必要無きなり。一瓢、一瓶は以て、三本の竹筒の不思議を現はすを得べし。

◉一瓶、一瓢の酒。坐上に春風を生じ、忽ち人をして富貴ならしむ。石に踞して飲むと雖、玉樓に在るが如し。玉山既に崩るゝの時、富貴自在、福祿無限、借金取りも鶯の聲。天下の事、意の如くならざるは無し。王公の樂と雖、以て一瓶、一瓢に換へ難かるべし。

◉一瓢一瓶の酒、能く山水樓閣を出すこと、趣味の幻術の如きものあり。眼前に「廻轉する坐敷」「クル〳〵

變化する悴の顏」など、出現し來らずんばあらず。
◉趣味の會に、多く酒を用ふるは、酒の中より、家も庫も、友人も、美人も、樓閣山水も、生滅自在なればなり。會心の友と、酒を擧げて相屬すれば、坐上に居らざる人物、風景、忽然として現出し、悉く坐上に參加すること、雌雄兒の竹筒を開くが如くならずんばあらざるなり。

其四

◉吾輩の駒込の書齋は、東に、蒼田を隔てゝ、田端の邱樹を望む。螢澤を過ぎ、藍染川を東に渡りて、高臺に登れば、ポプラ倶樂部あり。吾輩、同人、趣味を樂しむ所とす。
◉螢澤、藍染川の名、何ぞ美しき。此の澤と川と、田端の臺と駒込の臺との中間に横はり、川は一帶の樹蔭を流れ行く。路に當つて石橋を架す。螢澤には卑濕にして螢火と、生蕈と多し。橋に近くして、生蕈を洗ふ時、勁香、行人を襲ふ。
◉田端の臺は、北は瀧野川の楓溪に窮り、南は、道灌山に接し、東は、渺々として三河島を俯瞰す。道灌山は蟲の名所。蟲の名所は則ち月の名所ならずんばあらず。而して蟲の名所は、ポプラ倶樂部と相距る僅に三四町。或は、ポプラ倶樂部も、蟲の名所の中に入る可し。
◉倶樂部のポプラを以て名とするは、遍ねくポプラを植ゑて牆とすればなり。ポプラの名は、倶樂部の光景を語り、併せて其の由來を語る。
◉此のポプラは、寒霞溪の人、遠く寄せ來る。初め國四郎、八郎、博、寅治、未醒等十人の油畫家、小豆嶋に游び、十人寫生旅行を著はす。而して其の報酬を投じて、建設したるが、則ち此のポプラ倶樂部なり。
◉倶樂部の創立の初は、竹牆を結ぶこと、鯨綱を引くが如く、人も犬も、自由に、牆を潛り、またぐ可かりし。牆の意味を存したるは、ポプラなりしも、苗の儘に放在せられて、數年の間、太だ伸びず。今、漸く亭亭として、夏は涼風を送り來る。
◉倶樂部の庭の北一帶、隣家の椎の木の森を以て縁ち取り、欝々蒼々として、翠陰、頗る人に可なり、定めて大なる邸宅の庭樹なる可く見ゆ。然れども、倶樂部の創立以來、既に七年を過ぎて、未だ何人も、此の椎の林の主人の名を識る者無し。此の倶樂部員の呑氣なる事此の一事を以て徵するに足らずんばあらず。

其五

●此のポプラ倶樂部の特徴とす可きもの三あり。會員が專ら學問藝術の士を以て組織せる事、其の一なり。老人を混へざる事、其の二なり。必ずしも老人を嫌ふには非ず、事實に於て老人無し。又た必ずしも壯年者のみにも非ず。多少の中老者を有す。吾輩の如きを以て、既に年長者の一人に屬す。白髮禿頭無きに非ず。然れども中老者と見ゆる者と雖、元氣は壯者を壓するの慨無くんばあらず。青年と、新趣味との氣分、磅礴しつゝあるもの、此の倶樂部の如きは、帝都に稀有なりといふも過稱に非ず。

●此の倶樂部は、定めて老人の入會を歡迎す可し。老人と雖、一たび此の倶樂部に入る者は、欣然として若返るを常とす。此の倶樂部は、『不老の坩堝』ならずんばあらず。事實に於て、此の倶樂部に老人無きなり。

●第三の特徴とす可きは、簡單、無邪氣、清素の精神、充實する事、是なり。この三は、實際に於て、法三章に換へられつゝあり。青年の氣分と新趣味とを有する者は、何人と雖、會員たる事を得。之を創立せし者は藝術家なれども、今日に於ては、必ずしも藝術家の倶樂部といふには非ず。

●來る者は拒まず、去る者は追はず。會規、淡として水の如し。無邪氣に語り、無邪氣に游び、曆日無きかと見て、咫尺の間に、東京ありとは思はれず。蠻勇無く、大酒家無く、官僚無く、道學先生無し。唯だ趣味と清樂とあるのみ。

其六

●此の倶樂部は、約七百坪の敷地を有し、建造物は蕭疎たるも、行樂に適す。南に、廣き芝生を控えて、日光浴に宜し。芝生にはテニスコートあり。撞球の室をも有す。夜々、寂寞を破つて、撞球の音、聞ゆ。

●東京には、贅澤なる倶樂部は少からず。贅澤を求むれば、際限無し。然れども閑樸なること、此のポプラ倶樂部の如きは、恐らくは得難し。會費の低廉なることも、亦た東京に冠冕たる可し。

●贅澤は文明の花なり。然れども現代の人は餘りに、華麗に疲れたり。極彩色の、文展の日本畫の如きよりも、墨筆の文人畫の氣分に渇しつゝある者は、現代人なり。故に、現代人に慰安を與ふるものは、都雅よりも樸雅、贅澤よりも質樸たらずんばあらず。而して這

般の要求を滿足せしめつゝあるものは、此の倶樂部なり。

◉此の倶樂部は、會員、雜然として集まり、嬉々として談笑すること、學生の控所の如し。學生ばかりにして、教師は無し。

其七

◉原町會、或は浪人會といふも「趣味の會」ならずんばあらず。原町會といふは、多年、其の幹事を原町に有したるに由る。

◉浪人會は浪人の氣分を趣味とするものなる可し。これ亦た多少の藝術家を混ず。新海竹太郎、結城素明、平福百穂の三人あり。會員の總數、二十に滿たず。

◉此の會の幹事は輪番に就任し、幹事の家を以て事務室とし、隨時隨處に開會し、一定の會場を有せず。專ら東京に開會すれども、時に、或は、旅行を試み、日光などに開會する事もあり。天下、到處に會場あるなり。

◉島地大等、沼田頼輔、中川忠順、稻葉君山の四人は、原町に住し、高島米峯は隣町の鷄聲窪に在り。凡そ是等の諸人は、原町會の原町閥なるものなり。若し、鹿嶋島兵兒が薩閥の中心たる者とせば、是等の諸人は、鹿島兵兒なるべし。吾輩は、つねに電車の原町驛より乘降すれども、駒籠に住す。原町の住人に非ず。

◉此の會員の中には、既に幾多の孫を有する者あり。然れども年齡は、未だ多く五十を過ぐる者無し。新海沼田、内田の諸人を長者とす可く、會の中堅たるは四十歲前後の諸人にして、文求堂の三十五六歲を少年とし、三十歲以下の人無し。

◉會員の中には、宗教家も少からず。讀書家たらざるは無く、氣焔を、吐かざるは無く、然れども其の氣焔は、青年の氣分を帶びず、既に中年の氣分を表現しつつあり。話材の娓々として盡きざるは、内田魯庵を推す。彼は一世の試人ならずんばあらざる可し。

◉會員の中に、柳田國男を有するは、一の異彩とすべし。眞に異彩なり。彼は貴族院書記官長、堂々たる官人なり。大官人にして、浪人會の會員たるは異彩に非ずして何ぞ。

◉柳田は、讀書該博、趣味の該博なるも、多く類を見ず。殆んど往くとして、彼の趣味ならざるは無し。彼は官仕して、未だ嘗て浪人したる事無し。彼の浪人會に於ける、浪人趣味を樂む者なるやも知れず。

其八

●浪人會には、辯士多し。加藤咄堂は其の雄なるものなり。高島米峯、或は之に次ぐ。十六七年前、吾輩、九州に在りて、咄堂の演說を聞きし事あり。彼、當時長髯毿々として胸を覆ひし事、今の如し。定めて老輩なるべしと思ひ、今に至つて、臂を把つて、供に一倶樂部に會衆たるに至らん事を豫期せざりし。

●吾輩、平生、南船北馬するを以て、此の會に列席せしこと、僅に兩三回に過ぎず。然れども感興、つねに印象して忘れず。

●此の會は、每會、必らず酒筵を開く。開會といへば、つねに所謂懇親會ならざるは無し。此の會の一特色なり。然れども、一人の酒豪たる可き者を見ず。杯盤の間に、歌ふ者を見ず。詩吟すら聞きし事無し。小謠も未だ聞かず。酒前酒後、或は碁將棊を鬪はしたる者をも見ず。席上に、謎戲を試みし例も知らず。

●是の會に於てこそ、書畫の寄せ書など試む可き筈なる可きに、未だ其の事實無し。但し、開會する每に、必らず缺席の同人に、葉書を送るを例とす。其の葉書には、各、一句を記し、或は姓名のみを自署するに留まるもあり。力めて、其の一句をして、皮肉的に、有効ならしめん事を腐心しつゝあり。

●是等の葉書は、概ね樂屋落なるものばかりにして、他人、之を見ると雖、盲の牆のぞきの如くなるべし。然れども受信者は、爲に、快心の一笑を發するに足らずんばあらず。

其九

●此の會の趣味は談論に在り。談論は則ち氣燄なり。相逢ふ劈頭、一箇のお世辭無し。直ちに砲火を開いて、機鋒の戰場に相見ゆるの慨無くんばあらず。

●氣燄の中には、研究と、摘發とあり。研究は極めて眞面目にして、摘發は極めて無邪氣なり。摘發する者、罪無く、摘發せらるゝ者、必ずしも慍まず。而して新研究と新研究と、滿場の傾聽を贏ち得る。

●此の會の、會員の少きは、却つて趣味を深からしむ。會衆、餘りに多數なれば、演說を爲すを得可し。談話に幾多の中心を生じ、興味の統一を期し難し。此の會が、會員の少數にして、却つて多年に渉りて、感興を涵養しつゝある所以なるべし。

●京都の內藤湖南、妻木直良、今西龍等、及び日光の

古谷清等は、此の會の地方會員とも見る可きものなるべし。但し、此會には、常收の會費無し。開會毎に、會費を徴收す。

◉去年、晩秋、此の會を日光に開會せし事あり。偶、吾輩は微恙を以て往かず。君山は遠く關西に去る。新海、中川、沼田、米峯、魯庵、素明、百穗及び幹事の田中等、相携へて往けり。當時、車窓の氣燄、如何なりしぞ。蓋し想像するに餘あるもの無くんばあらず。

◉開說、日光の一夜、談緒、酒筵に盡きず、燭を滅して、談鋒いよ〳〵鋭く、感興、海の如くなりしといふ。然れども歸途の逸事、更に佳話の摘出するに足るもの無くんばあらず。

◉日光は杉の名所、無數の巨杉、森然として天を刺す。大杉あれば天狗を生ず。鞍馬山の天狗も羽扇を携へて、杉の中に棲老しつゝあり。日光山の杉林も天狗を生ぜずんばあらず。是等の諸人、初めて日光を見たる者少からず。其の名を聞けば、日光を知らぬ人とは思はれず。人は見掛に依らぬ者と知るべし。而して是等の諸人、日光驛に下車するや、秋風肅殺、杉の梢を吹き來つて、悉く天狗となり了る。

◉是等の諸天狗、日光を去るに臨み、各、名物日光饅頭を注文す。發車の前、約の如く、注文の饅頭を車に滿載し來る。饅頭代、總計十三圓五十錢。室内に置くに地無し。饅頭を以て、悉く荷物棚を塡充し畢る。同乘の紳士、淑女、破顔一笑せざるは無し。

◉諸天狗、上野驛に下車するの後、各、饅頭籠を携へて、電車に搭す。諸天狗の肩に、手に、悉く饅頭ならざるは無し、東京の電車、未だ此の如く饅頭の大量を搭載したるものあるを聞かず。饅頭の勢、車中を壓倒す。又た以て、日光饅頭を、帝都に廣告するに足らずんばあらず。

◉饅頭と雖、其の大量を以てすれば、重きこと杵の如し、諸天狗、其の重きに堪へず、電車を下り、旗亭に投じて、晩餐を共にし、日光天狗の羽扇を擲ち、東京人に復舊し、食後、俥を僦ふて、一笑、各、手を別ち去る。蓋し、日光淸游の一事、藝苑の一奇事、而して浪人會の記錄に特筆するに値す。

◉浪人會に記錄無し。米峯、嘗て、感興を記して公けにせし事あり。吾輩、乃ち日光の淸游を記して、暫らく記錄の缺を補ふ。

其十

◉三越の流行會は、廣く趣味と會員とを網羅するの點に於て、恐らくは東京に冠たる可し。會員は五六十人。三越の主要人物、學問藝術に於て、あらゆる方面の人物、一堂に會す。

◉流行會は毎月八日、夜、三越に開く。晝の三越を知らざる者少し。時に、夜の三越を占領するものは、此の流行會なり。晝の繁華の裏に、夜の。此の清興あり。晩餐、微醉の後に、談論湧く。概ね談論の課題あり、無きも亦た談緒に苦しまず。

◉會規、拘束無し。毎月一回、開會する倶樂部と見るべし。幹事は、小波、麗水、江東、松葉、米齋、劍花坊等の諸人。新年及び夏の二回、大會を開き、夏は意匠を凝らし、奇游を試むるを常とす。奇游の意匠は、幹事の經營に出づ。

◉會員の中、長老は三越の藤村喜七を第一とし、塚原澁柿、饗庭篁村これに次ぐ。最も若きは菅原敎造なるべし。近時、會員漸く多く、開會時、互に出缺少からず。其の名を聞くのみにして、其の人を知らざる者も往々有り。

◉流行會の名は、流行を研究し、現代より古今東西に及ぼすにあり。流行を追ふに非ず。寧ろ流行の本を作らんとするに在り。抑時と處とあれば、必ず流行有らざる事無し。畢竟、趣味といふ趣味は、流行會の題目たらざるは無かるべし。

◉流行會の會員のみを以てするも、種々、趣味の計畫を立るを得可べし。試みに劇を以て言ふ。劇に關して篁村、松葉、米齋、梅雪、鬼太郎等あり、登場せしめんには、鐵笛、綺堂、鬼太郎、鳳仙等の諸人を有す。劇のみありて角力無かりしも、近時、三宅碩夫を容れたれば、大鐵傘下の空氣も、亦た流行會の分拆臺に上り來る可し。

其十一

◉吾輩、流行會の集會に、殊に興味を覺うるものは、其の書畫の寄せ書なり。書畫の寄せ書は情趣長へに盡きず。一時、趣味を凝らすのみならず、長く記念となすに足るものあり。

◉吾輩は、此の寄せ書を以て、流行會の即與たらしむるのみならず、廣く此の趣味を流行せしめん事を思ふ。

◉故博士坪井正五郎は、流行會創立以來、盡力せる人なりし。彼が歐行の時、博士山崎直方と共に、伊太利

に遊び、吾蜚に寄せ來りし繪葉書に、『且つ流れ、且つ行きて、此に來る』とあり。彼が、つねに流行會を忘れざりしは、此の寄せ書の上に現はれたり。

●去年、大晦日の前夜、瀧田樗陰、其の望岳樓に、止水、百穗、及び未醒と吾蜚とを招きし時、未醒は差支起り、來らず。主客ともに、紛々世上事を忘れて、趣味の一夜を送りし事あり。

●此の夕、天晴、蒼冷に、富士山、墨畫の如く西窓に映じ、窓を以て直ちに、額椽となさば、一箇、絶好の扁額を得可かりし。三更、會散する時、弦月、低く冴えて、富士山、夢の如く淡し。

●此の夜、主人、頻りに漱石の書畫、及び其の寄せ書を示す。延いて寄せ書の趣味に及ぶ。蓋し、必ずしも書畫を善くせざるも、趣味の人、興來りて毫を揮ふ。趣味、沸々として筆端に迸る事、萬年筆ハインキがペンを傳つて流るゝが如くならずんばあらず。

●吾蜚かねて、百穗を識る。然れども止水を見るは、此の夜を始とす。吾蜚、彼の絖本の畫一枚を藏す。談此の事に及ぶ。絖本は彼の嘗て僅に描くところといふ、共に奇緣を喜び笑ふ。

●文人畫は紙本を可とす。紙本の寄せ書、尤も興味あり。絖本は、趣味薄し、趣味は紙に在り。百穗、止水、皆奇を帶ぶ。百穗は筆を揮ふこと誘導するが如く、筆、走るに隨つて徑路を見ると雖、機鋒、人を驚かす。止水が筆を揮ふは驅使するなり。筆、手に在るの時、筆、自ら其の行くところを知らざるが如くにして、筆を擲つて笑つて見れば、精采、爛たり。

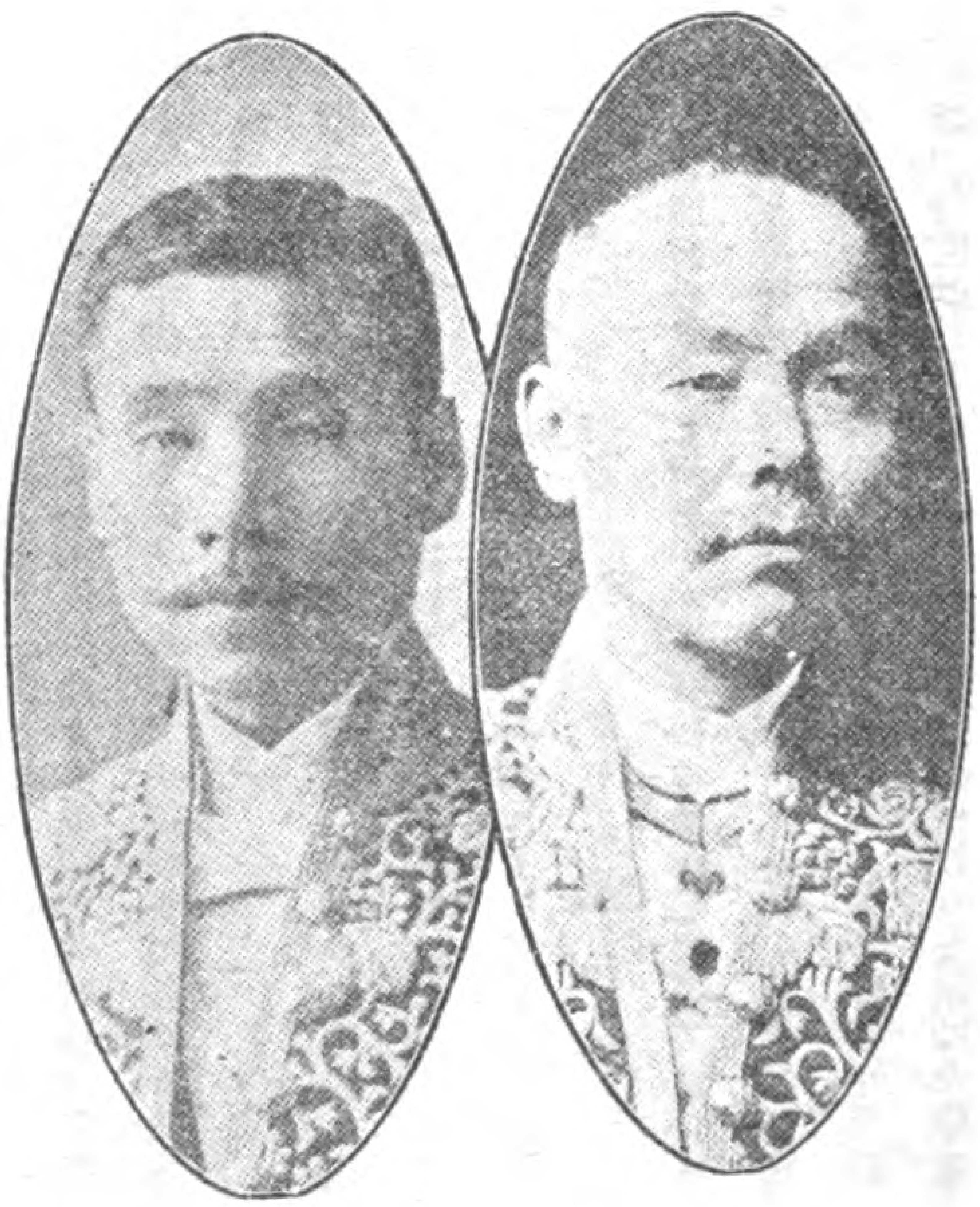
此の日、日東道人、北國の大蟹を送り來る。長閑、卓上にひろがり、横行天下の慨あり。之に對して筆を走らす。偶、大錦、太刀山を破るの飛報來る。暫らく筆を投じて、魂、大錦傘下に聽す。

大正六年一月廿一日　黑頭巾再記、

人物評論（八十一）

現内閣側に於ける

總選擧の二參謀
有松英義と水野錬太郎



△有松と水野の人物

前田蓮山

◎今日地方官の上に大威力を有して居る者は原と平田である。而して原が三回の内務大臣になつたのに對し、平田は唯だ一回に過ぎないにも拘はらず、此れだけの勢力を扶殖したと云ふのは、山縣の勢力を譲り受けたからである。

◎山縣は明治十六年から廿三年まで足掛け八年間內務の倚子に據つて、實に拔くべからざる大勢力を作つた。是れが今日所謂山縣系官僚派なるものゝ基礎となつたのである。其の後山縣は芳川を代理として四回も內務に據へ、平田は芳川に代つて山縣の代理となつたのである。

◎原は芳川の後に單身內務に飛び込んだ。實に懸軍萬里と云ふ有樣であつたが、其の英決果斷は早くも省內に於て大久保以後の內相だと評せられ、一回で旣に官僚派の鼎の輕重を問はんとするまでの勢力を作つたものである。

◎尤も原が飛び込んだ頃は、地方官等も政黨の勢力を認むるまでの時勢となつても居た。又た伊藤に對する同情者もあつた。山縣系に對する不平者もあつた。彼等は原の手腕力量を望み見て、是れ吾が主なりと歡迎したのである。

◎原の手腕力量と時勢とは、明治十六年以來二十五年間に貯へた山縣系の勢力に大龜裂を生ぜしめた。其の時に原の肱股として働いた者が次官の吉原、地方局長の床次、警保局長の古賀、書記官の水野、此の四人である。

◎彼等四人は原の四天王とも稱すべきものであつたが、其の中でも吉原は好々爺、古賀は放慢、床次は粗大で、一番原の役に立つたのは水野であつた。彼は人物の輪廓こそ床次ほどの大きさを持たないけれども、學殖と云ひ才と云ひ智慮と云ひ、遙かに他の三人に優れ、且つ內務省へへヌキの男で、省內の事務に精通して居る所から、大に原に重寶がられたのである。

◎第二次桂內閣が出來て、原の後を繼いで平田が內務に據つた。而して平田は原に依りて塗られた政黨的色彩を、銳意地方官から拭き去らうとして、床次と水野とは地位こそ保つたけれども、全く手も足も出ない狀態となつた。其の時に平田の下で勢力を振つたのが次官の一木と警保局長の有松とである。

◎即ち一木と床次、有松と水野は、內務省に於ける二對の競爭者である尤も官歷から言へば一木は床次より先輩で、有松は水野より先輩であるが、原の下に於ける床次、水野、平田の下に於ける一木、有松と、斯う政治的勢力が對峙したわけである。

◎一木は二十年、床次は廿三年、共に帝大の政治科を出た。水野は廿五年の法律科出身で、有松は帝大出身ではないが夙に獨逸の法制を研究した男である。學問の經路も亦た一對づゝ同じやうになつて居るのは面白い。

二

◎官歷から見ると初め一木と有松は殆んど同等であつた。有松は一木が大學を卒業した翌年、床次は大學に水野は高松學校に在學中、廿一年に文官高等試驗に及第して判事試補となつた。即ち平沼騏一郎、木內重四郎、日置益などは、有松が判事試補になつた年に大學を出た。

◎桂西園寺時代では、有松と水野とは互に敵視して居たが、大隈內閣の

末葉から、共同の敵に當るために接近し初めた。元々個人としては互に畏敬し合つて居た仲であつたから、一度び接近し初めると急速度を以て融合し、今度水野を內務次官に擧げるに就ては、有松が大に斡旋の勞を取つたのである。

◎どちらかと云ふと、有松の方から水野に惚れたのであつた。內務行政に不案內な後藤の次官として、久保田のやうなヌーボーを置いては危くて堪へられないので、有松が法政局から萬事の世話をして居たが、何うも身が廻はり兼ぬるものだから、水野を推擧したわけである。

◎是には勿論解散の準備と云ふ意味も含まれて居る。原と後藤を結ぶ楔子とも見られる。其れを有松が熱心に斡旋したと云ふのは、平田と有松との關係に變化が生じたと云ふことを知ることが出來やう。

◎初め平田は自ら寺內々閣の軍師となつて、憲政會と提携せしめやうと目論で居た。大浦兼武や一木や下岡なども此の方針を以て平田に說いたのである。一應之れも良策のやうではあるけれども、既に寺內と大隈との交渉が纏まらず、大隈が『加藤高明は練達の士なり』と云ふ例の辭表を捧げるまでになつた以上は、寺內たるものが面目にかけて憲政會に提携を持ち込むなど云ふ事が出來ないのは判り切つたことである。

◎而かも平田は後藤と仲小路とが入閣すれば貴族院方面に對して工合が惡いと言つて、極力彼等を排斥しやうと企てたものである。併し其の貴族院方面と云ふのは表面の言ひ草で、實は憲政會に對して工合が惡いからであつた。

◎所が寺內は何うしても後藤を入閣させないで置くわけには行かなかつた。後藤と寺內とは兒玉源太郎を中心として夙に結合して居たからである。そこで平田は仲小路だけは是非共入閣させては不可ないと頑張つたが、後藤が仲小路が入閣しなければ自分も御斷りすると言つて引籠つた結果、平田も到頭我を折つたものである。

◎獅膽尾崎や報知新聞の元老攻擊が激烈になつて、山縣が自ら法廷に立つて爭ふとまで言ひ出した時に、平田も今は現內閣にスネても居られず、何うあつても議會を解散して憲政會を征伐しなければならぬと自ら進んで來たので、貴族院方面は自分で盡力しなければならぬ事となつたわけであるが、其れでも尙ほ仲小路を嫌つて、柴田家門と取り代へしめやうとしたらしいが、勿論成功する道理がない。

◎平田が現內閣に對する好意は全く義理一片である。然るに有松は平田が大隈內閣と貴族院とを妥協せしむる時から大不平であつた。目下官僚系は憲政會系と政友會系とに分裂しつゝある有樣であるが、有松は次第に政友會系に傾きつゝあるやうである。

◎此の勢が進行して行くと、遂には官僚政黨縱斷の形勢となるであらうが、官僚は政友會に有利の方であらう。樞密院では伊東巳代治、清浦奎吾、末松謙澄、三浦梧樓等が中心人物であるが、彼等は悉く非平田派で、平田を蛇蝎の如く嫌つて居る。所詮平田の勢力は山縣の生きて居る間である。有松も結局平田を離れる者と見て置いて間違はあるまい。

◎有松が平田を離れて政友會系に接近するやうに、水野も漸次原の色彩

を薄めて、官僚派中の政友會系と云ふ立場に變ずるであらう。再び寺内内閣が出來る機會がありとすれば、有松は入閣して水野が法制局長官となるに相違ない。

◎政友會系官僚派は先づ西園寺、寺内時代を作つて、次に原、後藤時代を作らうと云ふ計畫を持つて居るらしいが、甘く行けば御慰みである。

三

◎有松と水野は能く似た型の人物である。共に頭腦が明晰である。共に學究的趣味を有する。共に冷靜である。共に輪廓が小さい。共に事務的手腕に秀づる。

◎有松は奸智をも出せば出し得る、悪るい事もすれば爲得る。併し水野は其の資質を有松ほどに持つて居ない。有松は辛辣なる戰鬪力を有して居るに反し、水野は討論にかけては頗る深刻で、貴族院内の雄であるけれども、勢力を作ると云ふ政略的手腕は甚だ乏しい。

◎山縣、平田、有松は殆んど同型の人物である。共に智謀に長けて居るが、節制力が強くて容易に之れを使用しない。成るべく穩健に〳〵と遣つて行く。彼等は大浦のやうに惟れ命從ふ底の人間を使用しなければ充分の働きは出來ないのである。

◎此議會は必ず解散であらうが、總選擧の結果は如何であらうか。水野は地方官に大なる勢力を有して居る、水野が引き立てた知事の數は隨分多いと云ふことである。此の水野の勢力に有松の智謀を加へたならば、計畫は甘く立つに相違ない。

◎唯だ彼等は共に膽略に缺けて居る。後藤に此の膽略があれば甚だ面白い選擧が出來るだらうが、後藤の膽略は如何なものであらう。後藤は案外に小膽者だと云ふ評もある。如何にも彼は見かけ程の豪傑では無いに違ひない。併し今度の解散は乾坤一擲の大賭博である。吾輩は彼に充分の覺悟があらうと信ずる。

◎前總選擧は官僚と大隈と聯合して働いた結果、あんな好成績を得たが今度は平田が現内閣に不快の感を持つて居ると云ふことは、政府側のため大なる不利益であらう。

◎有松などは前總選擧で同志會の膨脹したのを見て、是れならば政友會に代ふるに同志會を以てする所以で、解散の甲斐はなかつたと言つて居たやうだが、此んなケチ臭い考へでは此の選擧は失敗である。政友會が再び膨脹するのを恐れるやうではトテモ駄目である。此の點に就て水野と有松とが衝突しなければ可いがと言ふものもあるが、有松ともあらうものが此れ位の事が判からぬ男ではあるまい。（完）

△現閣の有力なる幕僚

鵜崎鷺城

後藤内相が大浦前内相の轍に倣ふて、思ひ切つた政略をやるともやら

ぬとも明言は出來ぬが、少くも後藤其人の性格からいへば内務大臣として無爲に過すような人でない。如何に寺内首相が後藤の脫線を心配して手綱を引緊めて居るとはいへ、內閣組織の初めに平田其他の異議を排して副首相ともいふべき位置に据ゑたのであるから、或る程度まで自由手腕を揮はせるに相違ないと思ふ。現内閣の大臣中、本野外相は外務省生抜きだし、仲小路は嘗て農商務大臣になつた經驗があるし、田遞相、岡田文相、松室法相はいづれも其畠に長く居た人々であるが、獨り後藤内相は違つた畠に天降つたのであるから、内務行政に通じて居ない。それ故に内相として腕を揮ふには是非とも好い參謀役が必要である。此意味に於て内務の事情に明るい新次官の水野錬太郎と、法制局長官は有力なる幕僚である。

最近水野が突如として内務次官になつたに就ては、彼が政友會員である處から、世間にいろ〳〵傳へるものがあつたが、裏面に何樣の意味があるにせよ、後藤内相が彼を次官にしたのは其人を得たものである。先考は東北の生れであるが、水野は生抜きの江戸ッ兒で、明治二十五年二十六人の銀頭で帝大法律科を出で、福原鐐二郎や故山座圓次郎と同級であつた。部は違つて居たけれども、若槻禮次郎、安達峰一郎、荒井賢太郎なども同年の法律科出身である。水野は卒業後農商務省に暫く試補勤めをして居たが、間もなく内務省に轉じてから一度も地方官廻りをせずに、山本内閣の時まで居た。今日は内務省の屬僚の顏觸れも大方變つて居るが、第一西園寺内閣より第二桂内閣を經て第二次西園寺内閣に亘り内務省屬僚派の牛耳を握つて居たのは床次竹二郎、井上友一及び水野の三人で、此三人が兎も角も内務省の花形役者であつた。

元來内務省は役人仲間に行政大學又は自治大學といひ、昔から僧史館吏の養成所のようになつて居るから、役人志願の大學出身者は一應内務省に入ることを望み、又た内務省の方でも少壯有爲のものを採用して仕込んだものである。床次は久しく各縣に地方官を勤め、漸く第一次西園寺内閣の時地方局長に任ぜらるゝに及んで、其人物と先輩といふ點から、屬僚派の盟主に推された形であるが、實際は本省居附きの水野と井上が主として政府學官吏學の指南役に當つて居た。特に水野は參事官として一番故參であつたし、秘書官を兼任して二十六年以來歷代の大臣に仕へて來たから、本省及び地方官の事情に通じ、内務省の活字引にして又た智嚢であつた。彼は各府縣知事以下事務官の性質手腕より其結婚關係に至るまで巨細に知つて居るから、原でも平田でも其他内務に長官たりしものは、勢ひ彼を相談役とし、地方官更迭の任免陟黜は彼の立案獻策に待つ處が多かつた。それ故に隱然人事上の勢力があつて、地方官などは大臣次官よりも彼を恐れ、睨まれては大變と、東京へ上つた節は先づ彼の御機嫌を伺つたさうで、一時内務省には行政大臣の外に人事大臣があるといはれ、水野は纔に局長、勅參を以て人事大臣の形であつた。

水野は初め特に政治系統はなかつた。唯だ彼は内務の働手として歷代の大臣に重寶がられた。若し彼に系統的色彩が附いたとすれば、原が第二次西園寺内閣の内務大臣になつた時からで、更に山本内閣の時、三た

び原が内相となるに及んで明かに政友系といふことになつた。縦令ひ人事上の勢力が裏面にあつたにせよ、其位置からいへば平田時代までは參事官兼秘書官に過ぎなかつたが、四十四年原が二度目に内相になつた時、床次が次官に進んで水野は地方局長となり、而も土木局長と鐵道院理事を兼ねて幅を利かし、更に山本内閣になつて次官に進んだ。さすれば次官は今度で二度目である。其時は政友會に一夜漬の黨員が俄に出來て、先づ大臣の高橋是清、山本達雄、奥田義人が洗禮を受け、次いで鐵道院總裁の床次を初め、薩摩政友聯合内閣の次官局長であつた犬塚勝太郎、橋本圭三郎、小山温、岡喜七郎等がゾロ／＼流れ込んだ。水野も其時公然政友會に入黨し、内閣が潰れる前に勅選議員に任ぜられた一人である。

　水野は獨り吏才があるのみならず、學問の天分も乏しくない。東京帝國大學、第一高等學校の講師を囑託されたこともあるし、役人になつてからも二三の私立學校に關係して居た。法學博士になつたのは明治三十六年頃で、法學上の論文を提出したからである。彼が久しく内務參事官をして居たのも、畢竟法律上の知識と立案の才があるからで此點に於ては一木に亞ぐものとせられて居る。參事官時代に西洋へ行つて内務行政を調べ、其後も洋行したことがあると思ふ。彼は文才も相當にあつて二三の著書を公けにして居るし、其辯舌も充分練れた處はないが、兎に角條理が立つて居る。彼は器局の大きいドッシリした處はないけれども、頭は非常に明敏であるから、物の理解が早い。床次などは人物派の側で、部分的の仕事よりも大綱を統べて行く方であるが、水野は何事にも細かく頭の働が及んで、而も論理的に物をやる方である。それ故に政治家としては床次の方が柄に嵌り、大臣にも政黨の首領株にもなれる丈けの大處を具へて居るが、水野は政治家といふよりも寧ろ高能なる事務官である。貴族院では交友倶樂部に屬し、世話役兼討論家として花形の一人であるが、政友會に籍を入れたからといつて、頭から政黨化することは難かしい。近年は次官より大臣になるものが多く、現内閣の如きは大部分次官上りで、殆んど大臣は次官から採ると定つたようであるが、單に此點からいへば水野も二度内務次官の經歷があるから、將來大臣になれぬことは無く、又たなるかも知れぬが、其事務的才幹に長ずる上からいへば、大臣よりも次官が最も適任であるまいか。

　彼が後藤の下に次官になつたのは、單に二者双互のみの關係からで、政府と政友會の間に於ける政治的意味よりしたのでないといひ、時節柄世間の誤解を避ける爲め、政友會を脱黨したとの辯明であるが、彼と原の關係からいへば少くも原は相談に與つて居るに相違なく、又た現内閣に對する政友會の態度から見ても、政治的意味があるゝ思はれる。併し彼が内務行政の懐刀として控へて居れば、後藤も心強く感じ安心して省務を任すことが出來る。最近の地方官更迭の跡に徴するも、水野が再び人事大臣として切廻して居ることが分る。

　有松の内務省に入つたのは略ゝ水野と同時代であるが、役人の經歷は少し先輩で、獨逸協會學校出身である。内務省に入る前に司法省、農商務に參事官を勤め、内務省では警保局警視官より參事官に進み、後に警

保局長になつて、警保局を以て始り警保局を以て終つた形で、其間に法制局參事官となり、三重靜岡の知事にも任ぜられたが、通算すれば本省に居た期間の方が長い。

警保局長は前後二度なつて居る。最初は三十六年第一次桂内閣の時、次は第二桂内閣の時であつた。前には日露戰爭に次いで、講和問題から日比谷事件のような騷動があり、後には社會主義者の陰謀などがあつて、行政警察及び高等警察に關する事項を專管する警保局長としては隨分多事多忙であつた。第三桂内閣の時は警視總監か内務次官か、其他何等かの要職に擧げられるだらうと思はれたが、意外にも宮中に入て帝室林野整理局長といふ閑職に就いた。二三年間政府部面から姿を隱して居たが大隈内閣が出來て下岡忠治が内務次官になつたので、其後へ行つて樞密院書記官に任ぜられた。今度法制局長官になつたのは多少法律の頭があるのと、元と法制局に居た經歴があるからでもあるが、一つは現内閣にとつて必要なる人物と認めたからで、實際寺内内閣の如き性質の政府には是非一人役割中に加へなければならぬ役者である。

有松は大學出身でないけれども、頭をノシ上げて此まで來た位だから、素より唯だの鼠でない。彼は頭も好いし吏務に長じて居るし、一種の手腕家である。警保局の書記官時代から局僚中の錚々たる一人で、特に警保上の知識がある處から、桂にも淸浦にも平田にも信用され、其方の適材として二度も警保局長に任ぜられたのである。彼は初めから官僚的の頭で固り、其法律思想も警保の運用も總て官僚式で、其上警察事項に久しく携つた居たから、自然頭が探偵政治家流に化して居る。それ故に明處よりも暗處に働くに長じ、時として惡辣なる權謀を用ゐる。此官吏思想と探偵政治流が保守的政治家に喜ばれる所以で、現に山縣の氣に入りである。彼が宮内省に入つたのも山縣の手からであるし、樞府翰長に任ぜられたのは樞相たる公の所望に相違ない。法制局長官も寺内と山縣の相談に出で、目白が信用して居る如く寺内も彼を信用して居る。彼は警保局長時代より官僚系の策士と呼ばれ、貴族院では幸倶樂部に巢をくつて、其方面の活動家である。從來長州系統の官僚派の陰謀——反對派に對する計畫——には、必ず彼が加はつて少くも或る一つの役割を擔當して居る。現に第二桂内閣の時、大浦が千家尊福、松岡康毅等を首領とする舊木曜會を破壞して、政友會の勢力を貴族院から追ッ拂はんとした時、彼も其手傳役の一人であつた。一時伯爵同志會及び子爵談話會の如き團體が崛起して、貴族社會に政黨主義の空氣が流れ込んだが、是れも政友系の勢力を叩き伏せる目的より官僚派が破壞運動を試みた時、彼は其陰武者の一人となつて、或は秋元子爵の片腕と頼んで居た勘解由小路資承といふ子爵を軟化し、或は大木遠吉を脅迫する爲め、皇室費に關する批評を公けにしたのを不敬呼はりさせて伯爵の間を攪亂した。貴族院に於ても、原内相の選擧法改正案を否決する運動を熱心に試みた。彼は敏活にして常識があるし、人を口說くことも巧みであるし、性根がネバリ強く出來て居るし、特に非常なる精力家で、貴族院に何か問題でも起つた場合は、殆んど晝夜兼行で遊說して步く。容貌風采こそ粗末であるが、

煮ても燒いても喰へる人間でない。官僚系の或人が彼を評して、有松といふ男は丁度錫を見たような人物で、見てくれは惡いけれども、嚙み占めれば占める程味が出るといつたさうであるが、少くも官僚系の間には不言實行主義の智慧者になつて居る。

彼の法制局長官は前任の高橋と違つて、其有力なる點に於て閣外の大臣といはれ、特に内務方面及び政治團體の事情に通じて居るから、常にいろ〳〵後藤の相談對手となり、萬一議員操縱でも試みる場合は必ず參謀役になるだらうと最初から囑目されて居た。いよ〳〵議會が解散になつて近く總選擧を行ふ場合、政府はやりたうてムズ〳〵しても、秉公持平の宣言の手前に對して、露骨な干渉も出來まいが、さりとて道德家然と納まつて居るとも思はれぬ。議會再會間際の地方官更迭は、選擧に關係がないといへば無いが、準備の爲めと見れば見られる。兎に角總選擧といふ問題についても、水野と有松は有力なる計畫官として聯想される人物である。

△水野・有松の印象

某省高等官

水野・有松の兩氏が現内閣の政戰の有力なる參謀だと云ふ事を聞いて吾輩は寧ろ意外の感を抱く。と云ふ意味は有松にも水野にもそれ丈けの手腕が無いと確信して居るからではない。兩氏の手腕の程度を知る程に吾輩は兩氏に接近してゐない。只一二度此兩氏と會つた上での印象ではどう善意に考へ直してもあんな男が何が出來るだらうと思はれてならない。

水野氏は公平な人だと云ふ事は聞いた。吏才に長ずる好事務官であると云ふ事も聞いた。相當に學才もある。學界に身を置いたら優に第一流の學者になれたらう。法學博士にもなつて居る。然し永く内務省の飯を喰つた彼には彼が自ら任じて居る程に學者として出來上つてゐない事は疑ひない。それでも專門の學者でない博士の中では彼は確かに出色の學才であると云ふ評判だ。暇があればよく讀書もして居ると云ふ事である。それ丈け内務省に居つた間は若い者から尊敬されて居つたやうだ。然し彼が若い屬僚の間に一種の威力を持つて居つたのは其吏才と學才とばかりではない。永く秘書官として人事を引受けて居つたが、彼の人を動かすや頗る公明正大で容易に情實を交へなかつた。又人を動かすに其當を得て居つた。それ丈け彼の爲めに動かされたものは不平のいひやうがない。こんな所が彼の威望を集め得た點であらう。兎に角彼は一時床次と合せ評せられて内務省の二大中心であつた。今日でも地方官の間には隱然として重きを爲して居る。

といふと非常にエライやうだが、逢つて見ると片々たる官僚型類型に過ぎない。話をしてもドッシリした所がない。人物の幅は床次などゝは霄壤の差があるやうだ。彼は到底次官以上の人物ではないと云ふやうな

感じを持たしむる。後藤男のやうな粗笨な政治家の女房役としては最も適任であらうと思はるゝ。それ以上にエライとは思はれない。エライのかも知れないが一二度逢つた印象からはどう考へてもエラサウでない。退いていろ〳〵な理窟を捏ね廻はすことは達者だらうけれども議會に於て辯難駁答することは下手らしい感じを與へる。

有松氏は水野氏と違つた意味に於て同じく平凡な感を吾輩に與へる。水野氏には容貌風采に一寸才氣のあらはれがあるが有松氏に至つては容貌から言動から極めて茫漠として居る。人と話をしても先づ沈默を守つて他の云ふ事を諦聽する方の性質らしい。でも聽けばあれでなか〳〵の策士で山縣公の智惠袋であるとの説もある。あんな頭腦の何處をつゝけば縱横の奇策が出るのやら、誰も彼もなか〳〵喰へない老猾な策士だと云ふから、吾輩も餘つ程其積りになつて彼の顔を見詰めたけれどもどうしてもエライとは思へなかつた。それ程韜晦して居る丈け或は本當にエライのかも知れない。

只之れ丈けは疑ない。＝と云つて人に聞いた事であるが＝彼が獨逸語に巧みで獨逸の法律學には相當に深い造詣を有つて居る。日本の法律にもなか〳〵委しく、立法的頭腦は餘程精密である。法制局長官として若手の參事官は何れも彼に一目を置いて居るさうだ。數年前博士會の席上に於て上杉博士が當時樞密院書記官長たりし彼を博士に推薦せんとして事情を知らぬ多數の人の嗤笑を招いだが、然し有松氏をよく知つて居る人は決して此推薦を不當とはいはなかつたさうである。して見ると相當に學才もあり、一體に綿密な性質と見える。且つ又永く地方官をして居つた經歴もあり、曾て警保局長として令名があつたと云ふ事であるから、日本のやうな舊式の政治の行はるゝ國に於ては最も政治界の情僞に通ずるものとして重寶がらるゝ人物であらう。

然し水野氏にして有松氏にしても、百年を達觀する經世的大理想に動いて政策を案ずる底の政治家でない事丈けは疑ない。只其日暮らしの政治家の間に於ては確かに一頭地を抽くものであらう。それも經綸に於てではない。政略に於て、打算に於て、小策に於て。

△水野・有松の人物及手腕

鐵拳禪

一

官僚派の策士と目され、自身も亦何時か高級策士の積りで、政變毎に舞臺裏の活動には後れを取らぬ有松英義の、寺内内閣の法制局長官となつたのは、何等の不思議無く、洵に當然の陞任で、別に問題とする程のことも無かつたが、法博水野錬太郎の卒然政友會を脱して、超然内閣の内務次官となり、而も平氣で二度の勤めをすると云ふ鞍替其物が嫐から ず政界の視目を惹いた。或者は彼れの就任を以て、浪人をしてる事が辿も辛抱し切れなくなつたのだと云つたが、夫れだけの事では別に政界の

視目を惹く筈も無く、問題とする程の事も無いのだ。が併し、彼れの就任は、單に辛抱し切れなくなつたつたと云ふ一身上の都合、若くは役人根性の頭を擡げた爲めとのみ解する事は出來ない。無遠慮に彼れの心理を解剖するならば、政黨に入つて始めて政黨の內情を知り、黨人其者の案外無智無識見なるに呆れて、政黨に愛想をつかしたと云ふ事も何程か有らう。碌々たる黨人と伍して、無爲の日を送るよりも、役人となつて威張つて居る方が遙かに氣が利いてると、舊巢を懷ふる様な胸算用も何程か有らう。けれども、彼れが年來知遇を得た政友會總裁原敬の許を去つて、內相後藤の麾下に赴いたのは、自身の榮達を圖る以上に、政界に公表する事の出來ない裏面的の意味があるやうに思ふ。政界の視目を惹いたのも、此の裏面的の意味ある事を觀取したからである。

水野は有松のやうな策士的手腕は無いが、策を弄せば可なりに策を弄し得る手腕を持つて居る。唯彼れは、有松のやうに忠僕振を發揮して、政界の舞臺裏に活動したり、役者の鼻入に奔走したりする様な事は無い。凝乎として動かない様に見えるが、可なり智腦を働かせて、親分に獻策もすれば、自ら手を下して斷行の鉈を揮ふ事もある。表面華やかに活動する様には見えぬが、實際に於て奔走もし、活動もして居る。舞臺裏の仕事師と云ふ點より觀れば、或は有松などよりも腕が冴えてるかも知れぬ。が、水野は有松のやうに官僚派に廣く、根強い勢力を持つて居ない。其の勢力の及ぶ所は、內務省の範圍のみである。原の知遇を得た關係上政友會に結び著いたが、政友會には何程の勢力も無かつた。有松は長閥の大勢力に縋つて、其の背後の勢力を利用し、若くは大御所の權威を笠に著て、縱橫無盡に切り捲つて行くのとは譯が違ふ。一は小さい範圍での仕事師だが、一は大きい舞臺での働き手である。其處に有松と水野との差は有るが、そは必ずしも人物の大小の差では無い。水野は孰れかと云へば學者肌の人物で、仕事師で無いやうに思はれるが、實際は仲々の仕事師で、學者と云ふよりも寧ろ實務家と云ひたい程に、其の行政上の手腕が冴えて居る。有松は學者では無い。實務家でも無い。實務に經驗があり、手腕は無い譯では無いが、其の打算的な、掛引の上手な、策士肌の所が著しく目を惹くせゐか、實務家としてよりも、寧ろ策士として生きてる人のやうに思はれる。同じく策士と云つても、官僚派の勢力を支持し、若くは擴張する爲めの忠僕的策士であるから、政黨界の策士杯とは、自ら其の趣も異なり、其の毛色も亦違つて居るのである。水野には、此の毛色の違つた策士的手腕は無いが、策を講ずるだけの智腦もあり、夫れを運用するだけの手腕も持つて居る。

二

然ら云ふ所から察すると、水野が男後藤に拔擢されて――若し二度の勤めだから拔擢が語弊があると云ふなら、男後藤に懇請されて――內務次官になつたのは、政界に對して何等かの意味のある事と思ふ。彼れ自身にしても、何等の考慮も、何等の確信もなく、將來ある原と手を別つて、男後藤の許に馳せ參ずる者でない。原と後藤との間には、假に

何等の默契がないとするも、原と水野、水野と後藤の間には、何等かの默契あるに相違ない。水野は縱令原と後藤の楔子で無いとするも、水野を通して原と後藤との意思は或度まで疏通してる事と思ふ。此の原と後藤との意思疏通を以て、直ちに寺內內閣と政友會との情意投合と見る事が出來ない迄も、何樣か接近しつゝあるの事實は疑ひない。で、水野の就任は、表面上政友會を脫しても、裏面的に政友會と握手しつゝあるので、寺內內閣と政友會との疏通機關となつて居ると觀ることが出來る。

世人は乘公持平の超然內閣の廣告に魅されて、眞逆政友會と情意投合は敢てしなからうと思つて居たが、政友會が國民黨の現內閣不信任案に贊成を拒んだ所を見ると、疏通機關が充分に働いて居るやうに思ふ。最前水野一人が內務次官になつたからとて、どれ程疏通の効を奏するだらうと多寡を括つた者も、今日では其の疏通の事實を疑ふ事は出來まい。堤防が螻蟻の一穴より崩壞するのに、縱令領袖ならずと云ふも、手腕彼れが如く、畫策彼れが如き者が事に當つて、多少の疏通が付かぬと云ふことは無い。既に一穴ほどの疏通が付けば、後は洪水の勢で以て押して行く事が出來るものである。政友會は素より超然內閣を是認する筈はないが、憲政會に對して兩立する事の出來ない惡感を抱いて居る。其の惡感は純理を問ふに暇ない程の勢を以て、堤防一つ隔てた超然內閣と意思の疏通を圖らうとするのだ。之は政友會の硬派の純理を以て、如何ともする事の出來ない勢である。水野は此の勢を導くべく、堤防に螻蟻の一穴を試みた樣なものである。

既に政友會が超然內閣を公然にもせよ、暗々裡にもせよ、援助する以上は、國民黨及び憲政會其他は反對するに極つて居る。反對すれば、解散は最早爭ふべからざる勢である。代議士は解散を怖れて居ても、『勢』に抗することは出來ない。恐らく解散は、勢を以て押して行くであらう。斯う云ふ觀察點に發足した者は、水野の就任を以て、解散の準備であると云つた。內相後藤の次官を更迭した意志も、恐らく玆にあつた事と思ふ。若し準備と云ふ事が大袈裟だと謂ふなら、後藤は少くとも這の更迭を以て政府の決心の程を示すと共に、解散の擬勢を見せ、野黨の面々が擧つて反對するなら斯うだぞと、例の閣上的威嚇を試みたのであると云ふ事が出來る。縱令夫れが準備であらうと、威嚇であらうと、次官の更迭は、解散と何等かの關係を持つてる事は明かである。前任者の久保田政周は東京府知事より進んで此の椅子を占めたが、人格も比較的高潔で、黨派心の稀薄な、善く云へば公平無私な人である。官僚派と目されて居ながら、そんな臭味は一寸認める事が出來ないと云つた風で、至つて恬淡な性格に衆望を得て居る。實務に錬達して、吏僚の推服する所とはなつて居るが、男後藤の覇氣橫溢、才氣煥發する底の人物とは、反りが合はない。夫れに平時事務には適して居るが、一朝解散となれば果して政府の利益の爲めに働き得るやは疑はしい。突飛な、脫線的な男後藤の参謀としては、唯其の實務の錬達と、態度の公平無私とだけでは、甚だ覺束ない。少くとも學者の頭腦と、實務の手腕と、黨人の呼吸とを解する者で無ければならぬ。夫れは彼れが對議會、對政黨の上に必要とする所

である。彼れが比較的高潔な久保田を斥けて、何程か黨派心に燃える水野を擧げたのは、斯の理由に基くと推せざるを得ない。水野は曾て原の股肱となつて、總選擧の事に與つて居る。干渉非干渉の手心なども熟知して居る。本省にも地方にも彼れが頤使に甘んじて働く者がある。斯う云ふ點に於ては、久保田は水野に及ばない。水野は長く内務に勢力を張つて居たから、其の勢力を利用しようとすれば幾許も利用する事が出來る。男後藤は鐵道方面には年來扶植した勢力を持つて居るが、地方長官や警察部長の間には何程の勢力も持つて居ない。彼れが如何に其の剛氣と才氣と權力とを以て臨むも、如何ともする事の出來ない狀態にある。内相として新米の彼れが、年來の勢力を持つて居る水野を引いて謀將としたのは、前内閣の首相大隈が子大浦を内相に起用したと同一筆法である。唯大浦には選擧干渉を聯想するが、水野には其の聯想を起させぬだけ現内閣の爲めに取るべしとする。

三

水野を内相後藤の智囊とすれば、有松は首相寺内の股肱であらねばならぬ。尤も内閣輪長に伯兒玉が扣へて居るが、秘書官格の人物で、頭こそ滑かに光つて居れ、まだ坊ちやんである。前輪長の江木翼ほどに冴えた手腕を持つてるとも思へないが、懐あひの大きな所はある。其の懐あひの大きな所が、伯寺内の吝な所を補つて旨く行つてる樣な者の、夫れ程に智謀に富んだ人物では無い。いざ總選擧となつた場合に、左右兩翼となつて活動する者は、即ち水野と有松の二人である。有松は法制局長官で、總選擧などに關係せずとも可いのだが、彼れが策士的手腕、活動的性格は、默して止むべきもので無い。屹度お家の一大事とばかりに、其の智囊を傾けて、忠勤を抽んずるに相違ない。愈よ辛辣なる手腕を揮ふとなると、水野のやうな手溫い事をやつて居ない。随分剃刀の樣な切れ味の好い所を見せるのである。

有松は明治二十一年十月文官高等試驗に及第して判事試補となり、二十三年十月判事となつたが、爾來司法省參事官、農商務省參事官、内務書記官兼法制局參事官を歷て、三十五年二月專任法制局參事官となつた。彼れは此の時分から漸く儁敏の技を拔いたが、遂に鋭進の資を認められて、三十六年九月警保局長に拔擢された。官僚式の辛辣を以て事に臨んだので、民間の評判は餘り善くなかつたが、長閥の受は頗る宜しかつた。一體彼れは岡山縣の產で、根が悧巧で、利害の打算には拔け目が無い。加ふるに機略もあり、手腕もあるので、長閥に食ひ下つて離れない許りか、其の頭目から調法な人物として迎へられて居る。翌年十一月には三重縣知事に左遷されたが、四十一年七月再び警保局長となつて、桂内閣の爲めに辛辣な腕を揮つてゐた。最初は貧任内相兒玉の下に働き、次は内相平田に起用された所より見るも、彼れが長閥の懐刀である事は明かである。桂内閣の瓦解と共に、警保局長の椅子を去つても、矢張長閥の庇護に由つて、勅選議員にもなれば、樞密院輸長にもなつて居る。彼れが手腕を試みる所には、多少の非難の伴はないことは無いが、長閥から排斥

し去られないのは、彼れの爲す所は一に長閥の爲めに謀つて居るからである。若し彼れが長閥を離れたなら、彼れの名も、彼れの地位も、今日ほどに人の目に止まらなかつたかも知れぬ。尤も彼れは他の役人とは違つて、人を魅する力や、籠絡する手段に長けて居る。それに一寸太つ腹と云はうか、一種の圖太さがある。本人案外人が善さ相であるが、其の行る所を見ると、何か斯う凄味のあるやうに見える。實際彼れが背後の勢力を頼んで手腕を揮ふ時には、隨分凄いことも行る。此の凄腕を以て最後の手段を取らせれば、選擧干渉などを行り兼ねまじき勢である。けれども、私人としての彼れは、全く官人の凄味を沒して、人を外らさぬ滑脫な性格の表面を見せるのである。

　有松は暫く内務の椅子から遠ざかつて居たが、往年警保局長時代に植ゑた勢力や、縁故關係やらが今尚殘つて居て、警察部長などを操縱する權宜を持つて居る。夫れに彼れは多年警保局長の椅子に在つたので、彼等を操縱、督勵するの呼吸を解して居る。桂内閣の爲めに試みた辛辣な手腕を以てすれば、彼れは或度まで政黨の切り崩しや、政黨地圖の色彩を一時的に變化させる位の藝當は出來ぬとも限らぬ。彼れが法制局長官の職に在りながら、現内閣の謀將と目されるのは、彼れの經歷と手腕とに由るのである。

四

　有松は水野より早く名を成してるので、可成りの老人の樣に思はれるが、水野よりたつた五歲の年長である。即ち有松は五十五、水野は五十である。年號から見れば、有松は文久で、水野は明治だから、其の感じの上からは、有松の頭腦は如何にも古さうに見える。事實水野の思想に比ぶれば、有松は年齡の差以上に古いかも知れぬ。識見から云つても、非常の徑庭ある事と思ふ。法博だから水野を然う高く買ひ被るので無い。彼等の遣り口を見ても、然う思はれるのである。其處が策士と學究の差異かも知れぬが、極言すれば有松は手腕の人で、思想の人では無い。水野は大した人物でないにせよ、何か奥深い或物を持つてるやうに感ずる。有松の手腕は乾燥し切つた凄さだが、水野の手腕は潤澤のある鋭さである。彼れには人を籠絡する才があり、是れには人の推服を買ふ德がある。其の手腕の鍛錬されてる點は、策略の上に於ては有松勝り、實務の上に於ては水野が優れて居る。

　水野は明治二十五年の帝大法科出身で、内務省に奉職以來、本省を離れた事なくして今日に至つて居る。即ち三十七年一月に神社局長兼内務省參事官となり、四十一年七月に參事官兼大臣秘書官となり、四十三年九月に土木局長に進み、爾來累進して地方局長、内務次官となつたのである。斯樣な風に長く内務省に居たから、從つて其の潜勢力も亦大したもので、水野系と稱する者すらある。彼れは然う黨派を作らない人物のやうに思はれたが、可なり自個の勢力を植うるに腐心した。曾て床次が次官になつた時、彼れは地方局長で居て次官を凌ぐの勢があつた。後には床次と融和し、床次を援けて事を成し、共に政友會に入會する程の間

柄となつたが、或期間は互に拮抗して相下らない樣であつた。床次が當然推薦さるべき勅選議員を水野に讓つたのは、床竹の代議士となる野心があつたからでも有らうが、水野の原敬に報ゆる爲めだとも云はれた。水野は床次の雅量に較ぶれば、多少偏狹の嫌は有らうが、其の行政上の智識に於て、手腕に於て、彼れに劣る者でない。

彼れが今次政友會を脫して次官になつたに就ては、世間に尠からず非難がある。彼れが官界に榮達を圖らんが爲めに政黨に入り、再び官職を得んが爲めに政黨を脫すると云ふ輕薄な行動——少くとも然か見ゆる——は、吾人と雖も遺憾とする。けれども、彼れは必ずしも超然內閣を非認せぬ樣である。夫れは次官になる爲めの方便であつたか、何うかは知らぬが、果して彼れの眞意ならば、彼れの就任は決して彼れの言明を裏切ては居ない。彼れとしては、行くべき道を行いたので、良心に耻づる所は無からうが、其の行動の輕薄な點は、確かに世の非難を値する。彼れと雖も、馬鹿で無い限り、斯の非難の降り掛かる位は百も承知で有つたであらうが、而も其の非難を怖れず、敢然として男後藤の麾下に赴いたのは、何等かの成算を抱いて居るに相違ない。單に超然內閣の乘公持平と、擧國一致の空名に憧がれて、就任したのでは無からう。必ずや彼れは、此の短命內閣に飛び込んだ以上、何か一仕事をしようと目論んでる事と思ふ。たゞ後藤の太鼓を叩いて、夫れなり往生すると云ふのぢや水野の水野たる所以では無からう。(大正六・一・二〇)

△二人とも文明的行政官

早川鐵冶

今度の議會が解散すると、活動するものは法制局長官の有松英義君と內務次官の水野錬太郎君であると云ふものがあるが、我輩を以て觀ればどうも腑に落ちない議論である。兩君共役人として仕事をする上については、勤勉ではあるし、相應の學識もあつて、而かも事務の才もあるから立派なものであるが、議會解散後に何で兩君の活動を煩はす點があるのか、我輩には全く分らない。有松君は山縣公や平田君に信用されてゐるから、大隈內閣が瓦解して寺內君が後繼內閣を組織した時には、山縣公へ使者に立つたり、寺內君と平田君との意思の疏通を圖つたりする事には役に立つたらしい。がそれだからと云つて議會解散後兩君が活躍しなくてはならない譯はない。眞逆選擧干涉に活躍すると云ふ意味ではあるまい。元來選擧干涉などゝ云ふ事は、相當文明の教育を受けた學問のある人間のしない事で、又する勇氣のない事である。あゝ云ふ事は矢張り大浦君のやうな、教育の餘り無い、警察官上りの、膽力のある男にして初めて出來る仕事だ。探偵的な眼で人の缺點を探し廻つたり、地方官や警察官を巧みに操縱して選擧干涉を斷行するなどは、蓋し有松君や水野君のやうな文明の教養ある人の柄でない。世間では後藤內相が其上に立つて御自身采配を振るやうに取沙汰するものもあるが、これなどは全く後

藤君の性格を知らないものゝ妄論である。あの男は文明カブレのした、公平を重ずる性質の人である。暴政府政の出來る人ではない。我輩はこの場合寧ろ大浦式の人物が欲しい位である。文明の教育を受けた大浦流の人物が必要であると思ふ。水野君にしても有松君にしても、將た後藤内相にしても、教育はあつても、大浦流の此勇氣を欠いてゐる。良く云へば文明的行政官である。今日の如き政治界の腐敗し切つてゐる場合には、最早や文明一方の議論許りのものではいけない。素直な教育を受けて半生を平穩無事に過ごして來た人間には、迚も之を廓淸する蠻勇はない。有松、水野兩君も蓋し其例に漏れない。

以上を冒頭として例に由つて兩君の批評を試みやう。先づ有松君は我輩と同郷で、年は二つ三つ我輩より上であるが、世に出たのは我輩の方が早かつた。同君は岡山師範學校を出て岡山小學校の教員をしてゐたが、上京して小松原英太郎の書生となつて其世話を受けた。獨逸協會に學んで、初めて區裁判所の判事となつた。平田東助君には獨逸協會の關係から心安くなつたらしい。明治二十五年我輩が外務省から農商務省に轉じた時、有松君も同省にやつて來た。時の大臣は後藤象二郎であつた。所が有松君は後藤のやうな磊落な人は嫌ひ、後藤はまた有松君のやうな役人風な人と肌が合はない。それで自然面白くなかつたか内務省に轉任して、警保局主事から其局長に進んだ。それから三重縣邊りの知事となり又警保局長に戻り、恩給を貰つて貴族院議員となり、御料局長官、樞密院書記官を經て今日の他位を得た。隨分坦々たる生涯で、若い時分は貧乏士族だけに多少苦しんだらうが、後年は順當に行つて月給に離れる心配なくやつて來た。非常の勉强家で、獨逸協會を出たのみで高等文官試驗に合格した男である。議論なども偏狹な所はあつたが、頭が良いから立論などは確かりしてゐた。法學博士にはなつてゐないが、夫れ以上の學識はある。唯獨逸協會邊の變則な教育を受けた悲しさに、普通學全般に亘る知識はないが、公法學については造詣が深い。如何見ても政治家ではなく學者的役人であると思ふ。政變の都度お使ひ役をするから、新聞記者などは一廉の政治家のやうに云ふが、これは眞ではない。一體岡山には二種の全く類を異にした人物の型がある。例へば花房義質、小松原英太郎の如く、勉强な、冷靜な、極く嚴重な、窮屈な人物と、犬養の宿彌とか坂本金彌とか秋山定輔などの腹の太い策士政治家的な人物とがある。有松君は前者の純理派に屬して、決して政治家ではないと思ふ。

水野君は秋田か山形の生れと思ふが、戸籍面では東京府士族となつてゐる。恐らく定府であらう。水野君の言葉付や肌合には秋田山形らしい所がない。江戸つ兒肌の氣輕な淡白な男である。學問も好く出來て、明治二十五年に一番で大學を卒業した。同級には山座圓次郎や平岡定太郎がゐた。初め實業に志して第一銀行に入つたが、驥足を延ばすことが出來ないので、一年許り勤めて二十六年に農商務省に來た。同君が引續いて第一銀行にゐたら今頃は取締は勿論、各種の銀行會社の重役にでもなつて多少の財産を作る事が出來たらうが、其代り今日ほど名は表はれまい。農商務省には入つたが、同省には同君と同級の人が早く入つてゐた

ので、其下風に立つのを甘んじなければならなかつた。後内務省に轉じて大臣秘書官兼參事官となり、歴代の大臣に歴仕する事二十年、内務省の地方長官の系統から家族の内幕まで知り竭くしてゐるから、今では内務省になくてはならぬ人になつてゐる。大正三年役人を罷めるまで二十一年間も内務省にゐたのだから、地方行政、社會政策、地方自治などの問題について、水野君のやうに能く其實際を知つてゐる人はない。役人を罷めてから政友會に籍を置いたが、役人としては立派であるが、政黨に入つても恐らく驥足の伸ばしやうがあるまい、今の政黨員と役人肌、學者肌の水野君と全く融合するものではあるまいに、と我輩は陰ながら同君の爲めに惜んでゐた。所が今回後藤内相に再び引出されたのは、後藤君の爲めにも好い女房役が出來た譯だし、水野君にしても政黨員なんかになつてゐるより遙かに前途多幸であると信じて居る。甘くすれば或は國務大臣になれるかも知れない。勝田主計が大藏大臣になつてゐる今日、學問に懸けても行政に懸けても勝田に劣らぬ水野君が、一日遲れてゐるのは稍や氣の毒な感もするが、或はそれも同君が早晩國務大臣になる階段かも知れない。

要するに有松君にしたつて水野君にしたつて、文明の教育を受けた循吏である。選擧に干渉して政界を攪亂するとか、又はさう云ふ資格のある人達ではない。我輩は何卒兩君にそんな穿き違へた眞似はして貰ひたくないと思ふ。兩君共役人としては立派なのであるから、妄りに自分の適任でもない政治界などに下手な活躍をして、折角官界に有する生命を短かくするやうな冒險をしてくれないやうに希望する。兩君には曾て同僚であつた關係もあり、且つ有松君とは同鄕の誼もあるしするから、敢て此苦言を呈する次第である。

評論

内外時論

法學博士 古川學人

講和問題の進捗と現在に於ける交戰國双方の要求

去年十二月十二日獨墺側が米國・瑞西・西班牙を通じて講和談判開始の提議をなした事、同じく二十二日米國大統領ウィルソンが交戰國双方に通牒を發して戰爭を終結し得べき條件及び再び戰爭の慘禍を起ることなからしむる爲めの協定に對する意見を求めた事は已に讀者の知る所である。此第一の獨墺側の提議に對しては聯合各國は同じく米國を介して殆んど拒絶に等しき答辯を送つたが、第二の米國大統領の通牒に對しては多少相談を纏めるに手間取つたと見えて本年一月十日に至り、漸く佛國外務大臣の手から巴里駐在の米國大

使に答辯書が手渡しされた。我外務省の發表にかゝる回答書の全文は十六七日頃の諸新聞に揭げられて居る。

獨逸の提議と米國の通牒との間には、一見其間に直接の關係あるが如くにして、實は何等の關係が無いと米國自身は說明して居る。米國では平和恢復の爲めに斡旋すべくいろ〳〵用意して居つた所に突然獨逸の提議があつたので、一旦之を差控へ、十日後れて通牒を發送することになつたと云つて居る。米國ではかゝる仲介をなすべく適當の潮合が來たと見て此態度に出でたのか、或は新たに再選せられたる大統領が、新たなる國民の後援を栖として豫ての素望を達せんとして動き出したのか。米國の外交は從來兎角輕易に事を擧ぐるの譏あるけれども、ウィルソンの此擧は戰亂の大局に此頃何等か平和的仲介をなすの餘地あるを思はしむるものあつたに相違ない。況んや之と前後して、其動機の如何は暫く之を措き、獨逸自身の講和提議ありしに於てをや。

獨逸が我から進んで講和の提議をなした動機については今日尙明白ではない。けれども獨逸側自身に速かに和議を締するの必要を感じて居つた事丈けは疑がない。無論和を欲するの念は英吉利にも佛蘭西にもあらう。露西亞の高級政治家の間には最近まで熱烈なる單獨講和の風潮が盛んであつたとさへいはれて居る。併し之にも增して獨逸の方にも速かに和を講ずるの希望と必要とがあつたものらしい。只其原因が世間普通に唱へらるゝが如く、兵員補充の困難にあるか、食料供給の困難にあるか、又は財政上の危機にあるか、將た又此等諸原因のすべての逼迫にあるかは今日之を斷言することは出來ない。併し如何に双方にいろ〳〵の理由があるとしても今日直ちに干戈を收むると云ふ事は其時機でない事は極めて明白である。何故なれば戰鬪に勝つて居る獨逸が屈辱的條件に甘んずる筈もなく、又聯合軍側が獨逸の言分に從ふのでは、全然開戰の目的を沒却することになるからである。況んや將來の希望乃至光明は云ふ迄もなく聯合軍側の上にあるに於て

をや。されば英佛は勿論、露西亞と雖もいろ〳〵の機會に於て最後の目的に到達するまで奮鬪すべき堅き決心を天下に表明して居る。一月中旬東京交詢社が各大臣を招待したる席上に於て、最も露西亞の政情に通じて居る本野外相は、露西亞は如何なる事があつても決して單獨講和はすまいと斷言して居る。一月二十日頃の新聞に前外相のサゾノフが新たに英國大使となると云ふ風說の如きも露國廟堂の決心が更に一層堅くなつた事を語るものではあるまいか。最近歐洲各國の巡遊から歸つた福田中將の談なるものは一月二十一日の諸新聞に出て居るが、中將も亦(一)軍制の改革、敏快(二)軍需品の充實(三)戰鬪員補充の餘裕(四)戰線に於ける志氣の旺盛等の理由を擧げて結局に於ける聯合軍の必勝を明言して居る。只最後の勝利を占むる時機如何の一點は中將と共に世間一般の未だ容易に斷言し得ざる所である。それ丈け今日尙獨逸に奮鬪の餘力が殘されて居るからである。現に獨逸は巴爾幹方面に於て更に進擊を續けて居る。ルーマニアを席卷したる後更に南轉してサロニカに於ける聯合軍側の唯一の根據を覆さんとして居るとの說がある。啻に之ばかりではない。英國の封鎖に對抗して通商破壞を目的とする獨逸の昨今の活動は殆んど死物狂ひの狀態にある。大西洋の南北に橫行する獨逸戰艇の犧牲となつた商船が、一月二十日の新聞には二十三隻とあつたが、翌日の新聞には二十六隻となり、更に續々增加の傾向ありとさへいはれて居る。英國に於ては已に商船に一々護衞を附けようかと云ふ說さへある。斯くして各交戰國は一旦講和の提議は見たものゝ尙暫らくは激しき爭鬪を續くるものであらう。

併しながら今度の講和說が結局の平和克復の上に何等の影響がないと見るのは正當であらうかどうか。勿論兩交戰國は今の處相手の言ひ分に讓歩してまで高價なる平和を買はうとはしてゐない。力の續く限り奮鬪を續けんとして居るてあらう。けれども我々局外者から觀れば、四面包圍の狀態にある獨逸は結局に於て兵員の補充、食料の供給に窮迫せざるを得ない。否、今

日已に其窮狀を暴露して居る。昨今頻々として傳へらるゝ占領地住民の虐使乃至强制移住の如きは明白に獨逸の窮狀を語るものである。獨逸は勞働動員の名の下に、先に十五歲以上六十歲以下の男子を强制して各種の役務に就かしめたが、後には其强制を婦人にまで及ぼし、昨今は白耳義、佛蘭西の占領地に於て其壯丁を妻子父母の手より剝ぎとつて之を獨逸の內部に送り、以て一には勞働の補充とし、又一には之によつて兵員補充の助けとなして居る。去年暮の波蘭獨立問題の如きも之によつて波蘭人を動員使役するの口實を作らんとするにあつた。斯くして獨逸は段々窮迫に陷つて居る。固より此種の窮迫は漸進的に來るものであつて、獨逸をして俄かに戰爭繼續不可能の狀態に陷らしむると云ふやうな事はあるまい。從つて獨逸は急に敵に屈するの必要に迫らるゝ事はあるまいけれども、局に當る政治家は時の進むと共に胸中非常の煩悶と苦心とを抱くことは之を想像するに難くない。只獨逸側にとつて一つの賴みは四面包圍されて居る丈け自然と萬事に自給政策を執らねばならぬ事にあつた。物を買つても代金は國內に落ちると云ふやうな譯で、無理ながらも遣り繰りがつく。外來の理由で急激な危機に迫ると云ふやうな事は割合に少い。それでも昨今は財政的に餘程急迫を告げて居るやうである。何となれば富の移動に大體國際的關係はないとしても、其國內に於ける分配は非常な變動を受くるからである。金は外國へ飛んで行かないからと云つて固より安心は出來ない。故に此點について獨逸の當局者は非常に苦心して居るやうである。斯く考へて見ると持久は獨逸に害あつて聯合軍側に益あるが如く見ゆるけれども事實は必ずしもさうではない。尤も獨逸と違つて世界到る處に連絡を取り得るから、物資の供給などに苦しむ事はなからう。然しそれ丈け又自給の政策は採つてゐない。中にも英吉利の如きは食料は之を外國の供給に仰ぐ。否なそれ許りではない、國內の工場を擧げて殆んど之を軍事的に利用して居る結果、他の諸種の生活品について輸入が非常に殖へた。此結果英國の外國に對する財政的關

係に非常な變動を來たす事になる。英國が海外に於て有せる債權の收益位では到底拂ひ切れない。其外他の同盟國の財政までも引受けて居るので、如何に測るべからざる巨富を抱いてゐる英國でも、早晩行き詰る事はあるまいか。今日の處毫も此種の危機の襲來を豫想すべき形跡は見えないけれども、理論としては斯くして何時までも續き得るものではない。少くとも用意周到なる當局者は此點に就て多少の懸念を持つて居るであらう。況んや戰鬪其物に於ては容易に頽勢を回復し得ざる狀態にあるに於てをや。して見れば聯合國と雖も際限なく此儘で進み得る譯のものでもない。故に我我は局外から見て當局者が如何に大言壯語しても、一旦適當の機會が到來すれば兩方共刄を鞘に收めるに躊躇しない境遇にあるものと見るのである。從て今度の講和說は差當り何等直接の結果を齎らさずして終るとしても、必ずや之を端緒として講和說は今度機會ある毎に頭を擡ぐるに相違ないと思ふ。人によつては一旦講和風が吹いた以上、もう此上は大決戰はあるまい、今後の小競り合ひは、講和談判開始に至るまでの戰時外交の背景をなすものに過ぎないと云ふ人すらある。どうせ其中講和になるだらうから、今の中に少しでも有利な地步を占めて置かうと云ふ意味以上の大戰爭は事實行はれまいといふ說にも一應の理由があるやうにも思はれる。

今度の講和說が結局物になるかならぬかは暫く別問題とする。けれども凡て講和は先づ初めに漠然たる講和の提唱が當事者若くは第三者によつて發せられ、次に當事者双方から條件の表明があり、終りに其兩方の條件が第三者の仲介等により、段々接近するといふ順序になつて成し遂げらるゝ。して見ると今度の出來事は右の順序の第一步に踏み入つたに過ぎない。而してウィルソンの十二月廿二日の通牒は其第二步に踏み入つたものであるけれども、獨逸は之に對して將來再び戰亂なからしむべき爲めの協定の如きは戰爭終結後初めて之を議定すべきものなりといひ、又戰爭終結の條件の提示を求められたるに對しては、講和を議せんが

爲めに中立國の一都市に即刻交戰國代表者の會議を開きたいなどゝ、顧みて他を云ふが如き態度に出でゝ居るから、一面に於ては殆んとウイルソンの仲介を受入れない形に見える。然しながら獨逸は已に公式ではないが、米國華盛頓駐在獨逸大使館の方面より、講和提議の當初それとなく戰爭結局の條件を示して居る故に、全然米國の通牒に否定的態度を採るといふ考へでもなからうかと思ふ。若し夫れ聯合軍側の一月十日米國に發せる回答には、聯合國側が著しく平和に眷々たるも、今日は未だ戰爭遂行の目的を完全に達し得る底の平和を見るべき時機に到着せずとか、戰爭の目的につきウイルソン大統領の覺書が交戰國双方を同一視せるは遺憾の至りに堪へずとかいうて居るも、終りに戰爭終結の最小限度の條件として約八ヶ條の項目を掲げてゐる。して見れば獨逸側にしても聯合軍側にしても、掛引上の言葉の使ひ方はいろ／＼複雜を極めて居るけれども、講和成立の第二歩に入るを必ずしも厭ふものでない事は明かである。而かも双方互に言葉を激しくして決してオイソレと和議の交渉には應じないといふ態度を取つて居るのは、ウッカリ講和風を吹かす事によつて生ずる民心の倦怠を豫防するといふ必要から見れば恕すべき點もある。何れにしても予一個の見解としては講和の風潮は相應に進んで來たと見る。唯獨逸にしても聯合軍側にしても、其所謂條件なるものを明白には云つてゐない。之は掛引の上に固より已むを得ない。唯之を端緒として双方の言葉が段々明確を加へ、而かも其相離るゝ所の距離が第三者の仲介調停によつて段々に接近する傾向を見るならば、我々は之によつて講和の傾向が段々進んで居るものと見て誤りがないと思ふ。講和成立の時機については、固より今は豫測することを許さない。唯講和が成立するものか、又容易に成立しないものかは兩方の言分が段々具體的になるかならぬかに據つて之を斷定して誤りないと思ふ。

今日まで兩交戰國の戰爭終結の條件として表明する所のものは、固より極めて漠然としてゐる。中にも獨逸側の言分が一層漠然としてゐる。之に比較すれば、

聯合軍側の方は稍其範圍を鮮明にしてゐる。獨逸側が亞米利加でそれとなく言ひふらさしめた條件は三つある。第一は原則として國境は戰前の通りに回復するといふ事。第二には此原則に對する第一の例外として露領波蘭及びルスアニアは之を獨立せしめ獨逸の勢力の下に置く事である。第三に前記の原則に第二の例外として巴爾幹に於ける國境の整理丈けは、將來の紛亂の種を除く爲めに講和會議に於て愼重に之を定める。但し勃牙利が第二巴爾幹戰爭に於て失つたものは之を取り返さしむる事といふのである。之に據つて見れば、獨逸は大體勃牙利をして多少の膨脹をなさしめ、波蘭、ルスアニアを獨立せしむるのみを以て滿足するといふのである。海外に於て失つた植民地は全部之を回復し、白耳義、佛蘭西の占領地は全部還附するといふのであつて、獨逸としては案外に穩かな條件と言はねばならぬ。

之に對して聯合軍側の要求如何と云ふに、領土の分配を戰前の狀態に恢復するといふ獨逸提唱の原則は之を認めない。却て講和談判の基礎として聯合軍側は、此際將來紛亂の再發を豫防するの目的を以て、或主義に基く國境の整理を斷行せんことを主張して居る。即ち來るべき講和會議に於て國境整理を爲すの基礎的原則は、第一には民族主義である。第二には將來に於ける平和の保障である。第三には住民意思の尊重である。第四には土耳古文明の壓迫である。第一の點は「民族主義を基礎とする永久的規約により保障せられたる歐洲の改造」といふ文字によつて表はされて居る。此原則の適用として生ずる國境の變動は、最も多く墺洪國に於て行はるゝであらう。何となれば異民族の雜然として並在するは墺洪國を最とし、而して其異民族の自治權主張の聲も亦最も墺洪國に於て盛んであるからである。尤も理論上から云へば、民族主義による國境の整理といふ事には二樣の意味がある。一つは二つ以上の部分に分れて居る同一民族が一國に統一せられんことを希望する場合、他の一つは二つ以上の民族が同一主權の下に支配されて居る場合に、それが各々分立し

たいと希望する場合である。けれども事實上講和會議の際に問題となるのは此第二の場合であらう。而して問題となるのは、豫て熱烈に自治を主張して居る民族の處分に關してゞあらう。何故なれば此熱烈なる要求をなさゞる民族については、差當り平和を危うからしむる原因にならないからである。然らば豫て民族的自治を要求して居るものは如何なるものかと云ふに、墺太利に於ける西スラブ人、殊に其中のボヘミア族、ルセアニア族、スロバツク族等であり、又南スラブ人の中ではセルビア族、クロアシア族である。中にもスラブ人の間には豫々墺洪兩國の外に第三の獨立團體を作らうと云ふ所謂三國鼎立運動なるものもあり、之と相應じてボヘミアも亦豫々獨立を希望して居つた。從つて聯合軍側の言ひ分を露骨に説明すれば墺洪國の中から南方の數洲を割いて第三の獨立國を作り、西北方のボヘミアを獨立せしめ、ガリシアに於けるルスアニア人にも或種の自治權を與ふる事になるであらう。尚此原則の適用は獨り墺洪國のみならず、獨逸も亦其適用を受け、獨逸東方の波蘭は之を普露西より離して獨立するとになるだらう。而して之に露領波蘭も加はつて、合して一國をなすことは豫ての露國皇帝の宣言もある事とて明白である。此事は對米回答書中にも露西亞皇帝の聲明せる波蘭獨立の事は云ふを俟たずと明言しても居る。獨逸側の要求は露領波蘭丈けの獨立であるが、聯合軍側の主張は波蘭人全體を打つて一丸とする獨立であつて、從つて波蘭人の豫ての希望にも合し、解決としては一層根本的である。斯くして出來上つた波蘭國の、聯合國側の勢力の下に服すべきは云ふを俟たない。又此民族主義の原則の適用は巴爾幹方面の國境整理にも適用を見る道理であるが、併し巴爾幹方面に於ては民族主義を基礎とする國境の整理は、大體に於て第一第二巴爾幹戰爭にて於て解決がついた。只多島海諸島の問題については希臘と土耳古との間にはまだ未解決の爭があつた。其外各國各々其境を接する個處に於ては各種の民族、犬牙錯綜して其國境の確定の上に十分に民族主義の原則を徹底せしむることは出來な

い。故に此部分については同じく民族主義を基礎として國境の整理をなすと云ふも獨逸側の言ひ分が通る狀況の下に於ては勃牙利と土耳其とが著しく利益して、セルビアなどは多少共領土を割かるゝだらう。之に反して聯合軍側の言ひ分が通る狀況の下に於ては勃牙利は第二巴爾幹戰爭に於て失つたものを回復し得ざるのみならず、土耳其は全然歐羅巴以外に驅逐せられ、場合によつてはボスニア、ヘルチエゴヴイナまでがセルビアに合せらるゝと云ふ事にならぬとも限らない。尙之に關聯して「伊太利人、スラヴ人及びルーマニア人を外國の支配より解放する事」と云ふ一箇條も之を見逃してはならない。之は專ら墺洪國領土の削減を目當として居るものである。此項目の適用として第一に伊太利北方のトレンチノ及び墺國南岸のリットラール半島地方は伊太利に之を割き、洪牙利東邊のトランスルバニアはルーマニアに之を割くべきの要求となるだらう。ダルマチアの伊太利に之を割くべきや否やは一つの問題である。何故なれば此方面には伊太利人よりも寧ろスラブ人が多數居住して居るからである。此地方までを伊太利に合するのは不當に墺太利を苦むるものにして而かも自然の解決ではない。スラブ人については已に述べたが、こゝに外國の支配より解放すとあるから全然墺國宮廷の勢力外に置かんと欲するの意味にも取れる。從來の三國鼎立運動は墺洪兩國と對立する第三國を設定するの意味で、墺國皇帝を戴く點については何等の故障を唱へなかつた。此點はボヘミアとても同一である。聯合國側はボヘミアや南スラブ族を獨立せしめて全然之を墺洪國の政治より引離す考なのか、或は墺洪國と對立して聯邦組織となさしむる積りなのかよく分らない。併し何れにしても墺洪國の統一的國力を弱むる所以になるとは明である。尙序に云ふが、ボヘミアにはボヘミア人が過半數を占むるけれども他の一半は獨逸人で此兩者は犬牙錯綜して雜居し、而かも兩者の仲は非常にわるい。故に大勢から云へばボヘミアの獨立は民族主義の要求に合するも、其結果ボヘミアの國内に於ける獨逸民族の不平反抗は一層甚

しくなるから、此獨立によつて民族主義が根本的に解決さるゝものではない。然し聯合國としては民族主義の名に於て獨墺側に打擊を與ふるを得ればそれで差當り目的が達せらるゝのであらう。

第二に平和の保障と云ふ原則は「大小國民の安全の保障」「防禦線に於ける陸海國境の安全の保障」と云ふ文字にあらはれて居る。此種の名義の下に聯合國側が如何なる犧牲の提供を獨逸に迫るやは今日之を豫測することは出來ないけれども、第一に見逃すべからざるはコンスタンチノープルの露國割讓、キール運河の中立と云ふやうな事であるまいか。人或は民族主義の原則によつてシユレヒウエッヒ・ホルスタインを丁抹に還附せしむべしと云ふものあるも、ホルスタンの住民の多數は獨逸人であり、シユレヒウエッヒも少くとも南半の大部分の住民は獨逸民族である。今日在住丁抹人の獨逸反對の運動が盛んであるが、併し此地方が丁抹領であつた當時には獨逸族の陰謀が又頗る盛んであつた。全體として此地方は公平に見て丁抹的なるよりは寧ろ獨逸的である。ホルスタンの如きは其未だ丁抹の勢力の下に在つた時に於てすら獨り離れて獨逸聯邦の中に加はつて居つた。故に此二州を獨逸より割くは自然の解決ではない。況んや丁抹に之れ丈けの利得をなさしむる因緣もない。若しキール運河の利用を將來の國際平和に妨げありとするならば之を何等かの形で中立にすればよい。之に關聯してヘリゴランド等の處分も或は問題になるかも知れない。又獨逸殖民地の處分、東洋に於ける青島の處分の問題も、見樣によつては此項目の中に入り得ない事もない。我國の新聞に、對米回答中の八箇條に青島の處分に關する項目なきを疑ふものあるけれども大小國民の安全の保障若くは防禦線に於ける陸海國境の安全の保障と云ふ項目を楯として青島の還附を拒絕するのは名義は立派に立つと思ふ。

第三に住民意思の尊重は「住民の意思に反して强制的に聯合國より奪取せる地方を回復する事」と云ふ文字にあらはれて居る。而して此項目の專らアルサス・

ローレンに關するものたるは云ふを俟たない。アルサス・ローレンは歴史的の所屬を爭ふならば獨逸にも佛蘭西にも相當の言ひ分はある、人種の關係は或は獨逸に近いかも知れない。けれども永く佛蘭西の文明に育まれて居つた結果として住民自身は殆んど洩れなく今尙佛蘭西を愛慕するの情に燃えて居る。之は云ふ迄もなく一八七一年普佛戰爭の結果として獨逸の割取したものであるけれども、聯合國側は住民の意思に反して强制的に奪ひ取つたと云ふ名義の下に之を佛蘭西に取り戻さんとするのである。佛蘭西がアルサス・ローレン二州の回復に熱心なる、此目的を遂するまでは獨逸を以て不倶戴天の敵と認むるを止めずといふ意氣込みを以ても明かである。而して今や此希望は聯合各國の裏書によつて一層有力に獨逸に對して主張せらるる事になるのである。

以上三つの原則は表向きは何と云つても、實際の目標は獨墺側領土の減削である。更に之に加ふるに第四、土耳古文明の壓迫である。「明かに歐洲文明と相容れざる土耳古帝國を亞細亞に放逐」すとあるから、コンスタンチノープルから全然土耳古を追はんとすることは明白である。其上「現に土耳古民族の流血的壓制の下に苦しみつゝある諸民族を解放す」とあるから、多年の懸案たるアルメニアを土耳古の羈絆から救ひ、更にアラビア族の獨立を承認する事は疑ない。アルメニアは恐らくロシアの勢力の下に歸せしむるであらう。アラビアはいふまでもなく英國が之を取る。斯くして露西亞の勢力は高架索より南下して波斯北部と連繫して、此方面に一大勢力を張り。英吉利は又紅海の東岸一帶の地を其勢力範圍に加へて印度との交通を一層確實なものにする。將來此結果英露兩勢力の關係はどうなるか、或は此兩者の衝突を見る事なかるべきや等の點は暫く之を後の問題とする。唯之に據つて南北兩面より土耳古を壓し、從つて、又獨逸の勢力を壓迫する結果となることは疑ない。

以上國境の變更の外に、更に聯合軍側は獨墺側に對して占領領土の還附並に其損害賠償を要求して居る。

即ち白耳義、セルビア、モンテネグロの領土を原通りに回復し、又佛、露及びルーマニアの占領地から撤兵し、其上に是等の地方に對して正當の補償を與へよといふのである。撤兵還附は獨墺側に於て固より初めから異議はない。唯其上に賠償を拂ふべきや否やが兩方の主張の分るゝ所である。

以上述べた所は聯合國側の最小限度の要求である。少くとも此れ丈けの條件を承認するにあらずんば斷じて和議の開始に應じないといふ意氣込を示して居る。之は固より獨逸側に於て直ちに之を承諾して談判開始の運びに至る事は出來ないだらう。斯くて兩方の主張の間には餘程大なる距離がある。けれども此距離は必ずしも短縮し得ないものではなからう。我々は先づ兩方の主張要求の範圍を明確に腦中に描いて、更に今後の發展に之を照し合はして、講和の風潮が果して如何なる方向に進むやを見やうと思ふ。

現内閣の所謂對支政策の刷新

現内閣は一つには對支政策の刷新を標榜して起つた。少くとも世人は對支政策の刷新を現内閣に期待した。大隈侯や加藤子が如何に辯明の辭を聯ねても前内閣の對支政策は結局に於て大いなる失敗であつた。此失敗が前内閣の倒壞の眞原因であるとまでいはれて居る。果して然らば之に次いで起つた現内閣は否でも應でも對支政策の上に新面目を生ぜしむるの義務がある。

世人が現内閣に對し、此點に關し期待する所は大體に於て二つある。一つは歴代の内閣をして對支外交の統一的計畫を紊す種となつて居る所謂軍人支那通の制禦、も一つは袁世凱逝去以來久しく中止の姿であつた中華民國の確立に對する積極的援助の施設である。所謂日支親善と云ふが如きは前内閣といはず現内閣とい

はず何人も取つて以て之を標榜すべき題目であつて、此標榜夫自身は前後一貫して變更する必要はない。只此親善の目的を達する爲めに執る所の手段について國民一般は前內閣に贊成しなかつた。否、國民の多數は前內閣の施設の或るものは却つて日支の親交を妨げた——革命勃發以來折角順調に進んだ親交の關係を却つて妨害したとさへ見るものがある。之れ世人が對支外交の刷新について多くの期待を現內閣に懸けた所以である。主義として超然內閣に反對のものも、此點の期待に釣られて現內閣の存在を認めんとするものすらある。

現內閣は其成立後間もなく支那に對して或種の新方法を講じた事は周知の事實である。去年の暮の特使派遣問題の如きは即ち之れである。支那の新聞は明白に段祺瑞の言として、特使の派遣は日本から誘はれたものだと云つて居る。けれども對支方針の決定を政府の口から公然公表したのは一月の十二三日頃である。而して同じく十五日には寺內首相の加藤・原・犬養三黨首の招待となつた。即ち此會合に於て首相は外相列席の上現內閣の決定せる對支新政策を詳かに說明したと云ふ事である。傳ふる所によれば其綱目には五ヶ條ある。或は日支親善主義といひ、或は支那國民全體を外交の相手とする方針といひ、或は我國外交の統一といひ、或は經濟的活動といひ、或は日支經濟の協同といひ、何れも極めて抽象的の事柄であつて、之れ丈けではどれ丈け現內閣が對支外交の上に新面目を開くやは分らないと云ふ噂である。加藤子は之を以て歷代內閣の方針と異る所なしといひ、犬養氏は其間に明白なる差別を認むるといひ、兩者の說一に歸せざるも、秘密嚴守の約束の下に內容を公けにしないから局外より之を詳かにすることは出來ない。けれども若し現內閣の根本方針は日支親善にあり、而かも相手は一部の官僚、一部の階級を着眼せず、國民全體を眼中に置くと云ふ事であり、而かも軍人の跋扈を抑へて外交の統一を圖り、且つ專ら平等共益の基礎の上に經濟的活動を共にすると云ふのであれば、之れ何人も贊成するに躊躇せざる

所である。只然し、之れ丈けでは餘りに抽象的で實際の政策としては丸で內容を缺いて居る。斯う云ふ方針の下に如何なる實際的施設をなすかが我々の問題とする所である。

今日まで現內閣の實際に施設せる跡について見るに、外交統一と云ふ方面については未だ具體的の結果があらはれてゐない。只此點は、潔癖なる寺內首相の從來の性格と、本野外相の昨今の活動を照し合はして略ぼ信用してもよからうと思はるゝ。只支那の民國的基礎の確立に對する援助と云ふ着眼點から見れば現內閣の施設果して其當を得て居るや否や大いに疑なきを得ない。特に現內閣が成立の當初、特使を招來せしめて段祺瑞系統と結託せんとし、昨今又交通銀行に借款を與へて北方官僚系の中心勢力たる梁士詒を援くるの結果を生ずるを顧みざるが如き、果して支那の本當の中心勢力を援助する所以であらうかどうか。

一體前內閣は袁世凱に反對して革命運動に同情を表する態度に出でた。袁世凱の逝去するや新たに政界の中心となつた黎總統・段總理が南北妥協、擧國一致の不黨主義を標榜するを信じて、之を援くる事によつて支那其物を援くるの結果を生ずべしとなし、從來の如く專ら南方を援助するの方針を改めた。尤も支那側では曩に南方に同情すると云うた日本政府が、同時に滿蒙の宗社黨運動に何等かの關係を着けたので大いに其不信を疑ひ、後、袁の死と共に突然南方に對する關係も粗略となつたので、日本政府の眞意の何處にあるやを怪んだのである。けれども日本政府の立場としては、滿蒙の事は暫らく別問題として、對革命黨關係に於ては相當の理由と辯明の途とが備つて居つたのである。然るに不黨主義を標榜した段祺瑞が南北を打つて一丸とするの統一政策に成功せず、遂に自ら北方官僚派の代表者となつて南方派に對抗するの形勢を馴致したるが故に、前內閣は名目上の支那全體の代表者たる段政府が、其實支那政界の一部の階級の代表に過ぎざるを見て暫く援助の手を伸べることを差控へた。其中に南北兩派の反目暗鬪はます／＼激しくなる。從つて一方

に助勢するは即ち他方に敵對する結果を生ずるが故に、政府自ら進んで援助の手を伸ばさないのみならず、他の外國の金錢上の援助に對しても同情を持たなかつた。四國大借款の成らんとして成らざりしも亦此邊の關係があつたのであらう。然るに現內閣は何の見る所あつてにや、前內閣の此方針を一擲し、直ちに支那の現政府に出來る丈けの助力を與へ、彼をして民國統一の事業を成就せしめんとして居るやうである。併しながら支那昨今の政情に通ずるものは、現政府は決して支那の國民的政府ではない、少くとも支那の政界は目下官僚軍閥を代表する段政府と、革命黨を代表する國會派と相對峙して居る。而して此間の暗闘反目は隱密の間に激烈を極めて居ることを知つて居る。而して之に外國が多少でも物質的助力を與ふると云ふ事は兩者の勝敗を決する上に非常の關係がある。我々の見地から云へば氣の毒ではあるが、此際全然傍觀の態度を執り、彼等をして自力を以て大いに相爭はしめ、其自然の安定の何れにあるやを見極めて、それから手を出すべきであると思ふ。然るに現政府は先きに特使問題に失敗したるに凝りず、更に北京に於て內密の交渉を進め、遂に差當り金額五百萬圓の所謂交通銀行整理借款なるものを成立せしめた。貸主は我が興業・朝鮮・臺灣の三銀行で、借主はいふまでもなく交通銀行。目的は兌換整理の爲めである。一月八日我代表者の二宮氏と新たに交通銀行總裁となつた曹汝霖の間に調印せられ、廿日に至つて正式の調印を見た。曹汝霖が俄かに總裁となつたと云ふ事は先に特使の選に當つた人丈け此間に何等かの關係あるを思はしめる。日本側は日本人を顧問に入るゝ事と交通銀行の將來の借款に優先權を得るの有利なる二條件を獲得したから、之れ丈けを取つていへば相當の成功といへる。けれども交通銀行の整理を助くる事は取りも直さず梁士詒の財嚢を肥やす事である。而して從來の行掛りから云へば官僚系の運動費を豐富ならしむる事である。先には米國の借款に息吐き、今又此借款を得、而かも更に其上前途により多くの借款の希望あるの結果として、官僚系の鼻

息は大いに荒くなつた。其結果として革命黨系の活動は大いに屏息せしめられて居る。斯くの如きは果して眞に支那の根本的中心勢力を援くる所以なりや否や。革命黨系を壓迫して官僚軍閥を助勢する事の果して日本の利益なりや否や。更に之を個人にしては岑春煊・唐紹儀・孫逸仙乃至張繼等を窮地に陷れて、段祺瑞・梁啓超・梁士詒の徒を跋扈せしむる事の日本の爲めに利益ありや否や。此等の點についても大いに說あるが、今は暫く之を論じない。只現內閣の施設が一視同仁を名として而かも一黨一派を援くるの結果を生ずるの事實を指摘して、名實相反するを責めんとするものである。

支那政界の動搖

十二月初めに方つて大いに勢を盛り返した南方派は今日再び其地位を轉じて逆境に陷つて居るらしく見える。十二月初旬張繼などの畫策に成る南方派大同團結の議が餘程其步を進め、段內閣の運命が旦夕に迫つた模樣が見えたが、之が十二月央に至つて急轉直下の勢を以て形勢の轉變を見たのは、支那の事とはいひながら我々は其常なきの甚しきに驚かざるを得ない。

如何にしてかゝる急激なる變轉を見たか。細かい點はいろ〳〵あらうけれども、其最も主なるものを擧ぐるならば、一つは岑春煊と孫逸仙との十分なる提携を見得なかつたことであらうが、之にも增して重大な原因をなすものは馮國璋の寢返りであらう。馮國璋が初めから首鼠兩端を持して居つた事は申す迄もない。また彼が首鼠兩端を持して居つた事が南北對峙の今日の形勢を作つた一大原因である。何となれば彼が大兵を擁して南京に割據して居る以上は南北の勢力の釣合は常に彼一人の態度によつて左右さるゝからである。要するに彼は天秤の中間に位する心棒である。彼の一擧一動が或は南方を重くし、或は北方を重くすることになる。而して彼の野心はオメ〳〵段の下に屈服するを屑しとせずして密かに款を南方に通じたが、されば

といつて生れつきの革命家でない彼は、最後まで南方と事を共にする決心もない。斯くして彼は或時は南方を助けて北方を抑へ、或時は北方と連絡して南方に當る。斯くの如きは結局に於て彼の爲めに取らざる所であると思ふけれども、兎に角現在に於ては彼は支那政界の歸嚮を決する肝要な要素である。十二月初め頃南方派が猛然として其勢を盛り返したのは實に副總統の好餌を以て彼を味方に引入るゝに成功した結果である。此勢に乘じて彼と上海の唐、岑、孫とを連結して一大政黨を作り、以て北方官僚派を一蹴せんとするの慨を示したのであつた。處が一旦副總統の榮位に上つた馮は最後まで革命黨と道連れになるの愚を敢てしない。間もなく彼は南方派を疎外して北方派に秋波を寄せた。少くとも相當に南方派と交歡した彼は、自己の必ずしも全然南方派の傀儡たらざるを證明せんとにや、舊臘二十二省の督軍省長を連合して、大總統府國務院及び國會にあて、政爭中止の勸告を發した。所謂廿二省連合通電なるもの即ち之れである。其電報の內容は黎總統の下に段內閣を擁護せんことを主張するもので、獨り國會に對して政爭の中止を勸告するものである。此通電については一月央ばに至り馮國璋自身大いに其來歷を辨明し、必ずしも南方革命派に背くの趣意にあらざるを辨じて居るけれども、兎に角之が爲めに民黨の劃策に一頓挫を來たさしめたことは疑を容れない。

之と時を同じうして段內閣が日本の好意を求め得るの希望を抱くに至りしこと、米國の借款を得し事は又著るしく其勢力を恢復するの緣となつた。日本政府が臺灣銀行の廣東借款に對して陸榮廷、李烈鈞などの要求には應ぜず、段祺瑞の廻し者たる朱慶瀾に應托を與へしめた如きも、從來革命派の根據であつた廣東を一轉して官僚派の者たらしめた結果となり、此等の關係が又馮をして餘儀なく北京に秋波を送らしめた原因にもなつたらうと思ふ。十二月十八日の參議院議員の三分の一改選に南方派の失敗したのも金の爲めである。斯くして段祺瑞派は十二月央ば頃より大に勢力を恢復

し、其間梁啓超、徐樹錚の大運動などもあつて着々革命派を窮迫するに成功した。浙江省に於ては豫て相當に段祺瑞派と見られてをつた呂光望に慊らずして、純然たる官僚系の楊善德を以て之に代へた。浙江を手に入れた段祺瑞は、遠からず其姻戚の吳光新を督軍に任じて革命派の根據たる湖南までを全然料理して了ふだらうとさへ云はれて居る。而して他の一方に於ては馮國璋の誕生日の祝宴に參列した各國の代表者が、年の暮から新年にかけて所謂省區聯合會なる名の下に、第二回の徐州會議を開き、官僚派の爲めに犬に氣を吐いて居る。一月初旬の梁啓超の上京を機として內閣改造の風說あり、革命黨中比較的段に近いと忌まれて居つた谷鍾秀、張耀曾、許世英が斥けらるべしと云はれて居る。總統府內の佞人を罷免するといふ名目の下に、黎元洪の左右より革命黨系の人士を斥けんとする陰謀もある。斯くして昨今の支那の政界の狀況は餘程第二革命以前の當時に似て來た。固より段祺瑞は袁世凱の如き辣腕家ではない。革命黨諸君も亦多年の訓練を經て不屈不撓の精神に富む。往年の慘事を繰返すことはなからうと信ずるけれども、支那の政界が昨今著るしく變調を呈して居る事は疑ない。而して此變調が支那の爲めに、將た東洋の爲めに良いか不良いかは暫く論外として、此結果を生じたるにつき現內閣の對支外交方針が多少の關係ある事丈けは之を見逃す事は出來ない。

不信任案の提出と解散後の政界

一月十日國民黨代議士會の決議が、超然內閣反對の態度を以て本期議會に臨むべきことを表明した內部の魂膽が如何なるものであるにせよ、そが意外の波瀾を政界に捲き起し、遂に國民黨をして多年の友黨たる政友會を離れて、久しく、犬猿も啻ならざりし憲政會と隔意なき提携を遂げしめ、斯くして國・憲兩派共同提

出の不信任案が大多數を以て通過すべき形勢を持ち來したことは確かに政界の惰眠を醒ますに足る大事件である。一月廿一日三黨は各々大會を開いて其態度を明白に宣言し、黨員の足並も大體に於て揃つたらしい。いよ〳〵不信任案提出の間際までは尚各方面に於ていろいろ陰險なる運動があるだらうけれども二百二三十名の多數で不信任案の通過すべき見込の立つた事は疑を容れないやうである。而してかゝる形勢の發現は將來我國の憲政の發達の上に如何なる影響を來たすものであらうか。

　不信任案票決の間際に至り、內閣の執るべき態度は二つある。一つは事前に議會に解散を命ずるか、又は不信任案の通過を傍觀するかである。不信任案の通過を傍觀する以上は、普通の行方から云へば內閣の辭職するを當然とするも、又獨逸の帝國宰相の數年前に執つた方法の如、上御一人の信任に尙缺くる所なきに藉口して依然其位に留まると云ふ行方もある。我國の學者の中には此獨逸の遣り方を讃嘆して已まざるものもあつた。飽くまで超然內閣の主義で押し通すと云ふ主義から云へば此行方が寧ろ理窟に合つて居る。若し寺內伯が眞に超然內閣を善しとするの確信ならば不信任案の通過に驚いて蒼皇解散の詔命を請ふの必要はない。然しながら寺內伯に果して此武斷的態度に出づるの勇ありや否や、又我國民は此武斷的解決を默認すべきや否や。予は玆に是非の論を爲すを避け、只事實の趨く所を察して將來を豫測するに、武斷的解決に對する國民の答辯は必ずや所謂憲政擁護運動を起し、事實に於て超然主義の打破せらるゝを見るであらう。併し之は極端な場合の想像で、現政府は恐らく不信任案の通過に先つて議會を解散するの手段に出づるであらう。然らば解散後の政界の形勢は如何に發展するだらうか。之には三つの場合を別々に考ふる必要がある。

　第一に既存政黨が何れも過半數を占めず、否、與黨反對黨の分野の上に於ても双方過半數に達せず、無味無色の中立議員が案外に多數を占むる結果を生ずれば、現內閣は即ち此等小黨の上に巧みに操縱の手を伸

ばして、其後暫くは其存續を維持するであらう。之れ恐らくは現内閣の本當の希望ではあるまいか。或一黨若くは或聯合黨の絶對多數を占むることは決して其希望する所ではない。後藤男が自治團の提唱をなしたのも、又は北里博士と結托して五十餘名の■黨を組織せんとすとの風說あるも、皆小黨分立の形勢を作る事によつて内閣の維持を計らんとする考を語るものである。我國に政黨主義の發達するや否や。超然主義の今後どれ丈け生命を維持するや否やは選擧後の政黨分立の關係に係る事多い。

第二政友會が其希望するが如く現内閣の暗默の擁護の下に絶對多數を占むる事あらんか、政界の形勢は多少の波瀾を見る事なしと限らない。選擧を爭ふ上に政友會が閥族と妥協したといふ汚名を冠するを不利益とするや否や、或は之によつて蒙る損失よりも政府の擁護によつて受くる便益の方が大なるべきや否や、之は少くとも一個の問題である。一月中旬原・後藤の會見ありしといふ說を眞なりとすれば、政友會に政府と默契するを辭せざる考あつたものかも知れない。政府は秉公持平を標榜する以上、政友會と公然提携するを主義として爲し得ざるも、昨今頻りに寺内後藤兩氏の乖離を傳へしめて居る事を邪推して考へれば、政友會と連絡せしめ、萬一之より批難の起つた時には之は寺内を差置いて專斷せる後藤の責任に歸する考でないとも限らん。何れにしても政友會が多數を占むれば、現内閣の基礎に直ちに重大なる動搖を生ずることはあるまい。然しながら多數を占めた政友會は、其儘超然内閣の驅使に甘んじて何等求むるところなくして止まらうか。若し政友會が内閣の改造によつて黨員の爲めに一二席をさかん事を求め、又は現在閣員の入黨を要求するか如き事あれば、變則ながら之れ又政黨主義に一歩を進むるものと言はなければならない。若し夫れ暫く政府の御用を勤め、他日現内閣失脚の際其後釜を讓り受くるを以て甘んずるとすれば、そは我國の政界をして西園寺・桂交歡時代に逆轉せしむるものに外ならない。而かも結局互に政權を爭奪するやうになる結果、

兩者提携するが如くして遂に離反するに至るは亦勢の免れざるところである。

●第三に憲政黨若くは憲政國民兩黨の聯合が絕對多數を占むれば如何。憲政會一黨にして今日の優勢を再び占むる場合は簡單であるが、兩者の聯合が初めて絕對多數を占むる場合は其提携の何時まで續くかゞ一つの問題になるが、兩者交渉の初め從來の感情行掛りを一擲して誠意を以て交渉する旨をクリ返し〳〵述べたるによつて見れば、輕々に背反するものとは見られない。少くとも現內閣に對抗する政戰に於ては、相當に固い結托を續くるものであらう。斯く見て選擧後の成行を案ずるに、內閣の態度としては辭職するか居据はるかの二者其一を選ぶの外はない。辭職は即ち政黨主義に對する屈服である。なぜなれば此際後繼內閣を組織するものは、此多數黨の外にないからである。若し居据るとすれば如何。予輩は茲に必らず所謂憲政擁護運動の起るべき事を想像する。大隈內閣の失政に呆れたればこそ寺內內閣の存在を許したれ、選擧に破れてまで其職に留ることを決して國民は許すまい。況んや一旦議會に解散を命じた事は政府自ら進んで是非の判斷を國民に訴へたものなるに於てをや。自ら挑んだ戰爭に負けてまで恬然として其職に留まるといふ事は我國民の決して默認し得る事ではなからうと思ふ。強ひて居据らんとすれば、即ち其後の事實が恐らく政黨主義の確立を促し來る事になるであらう。（二十二日）

▽次號說苑豫告△

■大杉と別れるまで……堀保子

■新聞記者買收譚……洗足老人

■半生を顧みて妾の樂しかつた事悲しかつた事……閨秀十名家

右三長篇は、本號頁數超過の爲め之を次號に割愛することゝなれり。此旨寄稿家諸氏の御諒恕を乞ふ（編者しるす）

文學博士　松本亦太郎先生新著

▽定價貳圓參拾錢
▽送料八錢中判天金畫入美本

世界漫遊美術紀行

渡り鳥日記

泰西名畫五十餘枚世界藝苑の珍品本書一巻に聚まる！

本書は現代美術評論界の最大權威たる松本博士が十數年に亙りて屢々世界を漫遊し、親しく觀察翫味したる世界の藝術を頗る趣味ある筆を以て描録せるもの、凡て是れ他國に對する同情と、自國に對する愛國心とより流露せられ、彼のテーンの英國見聞録、ゴエテの伊太利旅行記、ペンフイールドの觀近埃及等に比し、更に一段の光彩を添へて陸離たるもの、挿入の繪畫五十餘枚また容易に得易からざる傑作のみ。蓋し出版界近來の驚異として汎く藝術の愛好者に薦む。

東京市京橋區南紺屋町十二番地
實業之日本社
▼振替口座東京三二六番▼

見よ!!內容充實せる二月號

早稻田文學

■苦力(小說)……ロンドン作 花園綠人譯

これ最近物故せるジャック・ロンドン氏が代表作と稱せらるるもの今譯出せられて本號にあり、讀者諸君の一讀を乞ふ。

■下層室(小說)……秋庭俊彥

■大正五年度文藝資料及び一覽

本誌記者の最も忠實に編纂せるもの、大正五年度の文藝界は一目瞭然たり。諸君の座右に一部を備へて參考に供せられん事を望む。

最近思潮欄

■英國昨年度の創作と飜譯
■最近のロシヤ文壇
■シェンキヰッチ
■ジャックロンドン
■チェース畫伯逝く
■コラン氏と我美術界
■國民教育に對する自覺の一端

時評

▼先づ藝術家の氣質を尊重せよ……本間久雄
▼新年の小說……加能作次郎
▼新年の戲曲……島村民藏

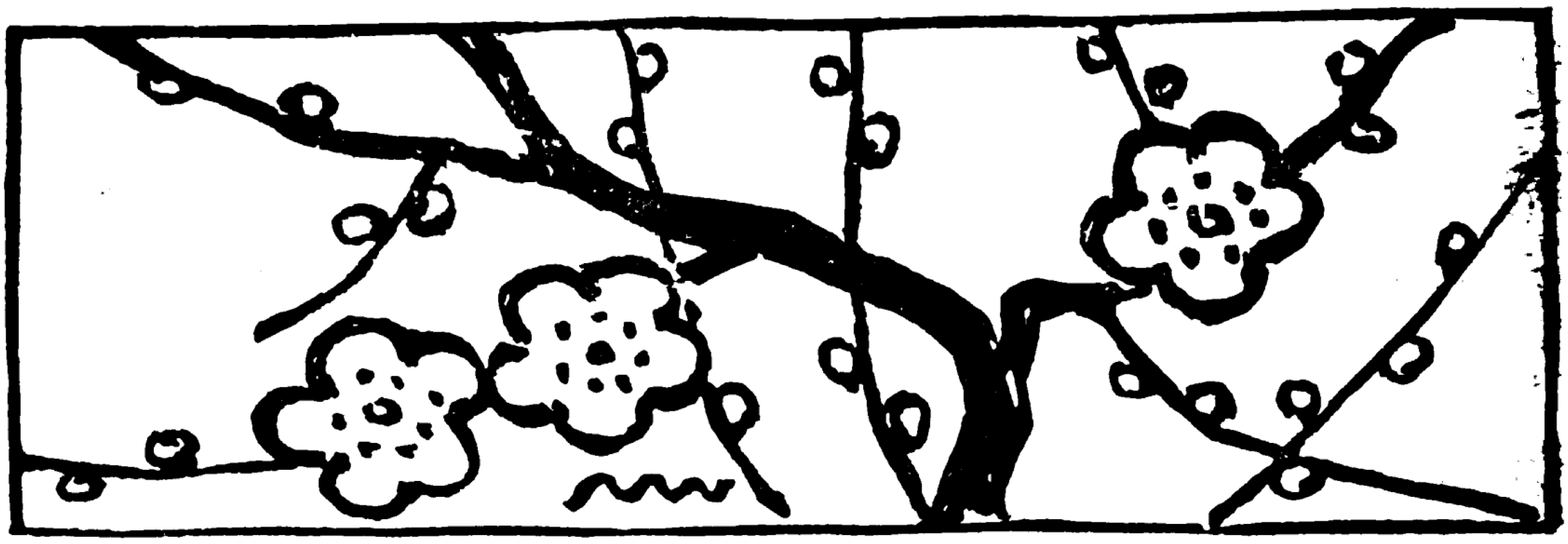
■新舞踊劇論……坪內士行
■ゾルハアレンを憶ふ……三富火の鳥
■德田秋聲論……田中純
■私といふ人間(自敍傳)……德田秋聲
■激浪に襲はれたる北國の町より……相馬御風

△「民衆藝術」に就いて

▼民衆藝術としての演劇……島村抱月
▼民衆藝術としての詩歌……富田碎花
▼民衆藝術としての小說……中村星湖

二月號
—定價廿八錢—
—郵稅一錢半—
東京神田表神保町
東京堂
振替東京二七〇番

(中付二の四)



彼女

野上彌生子

仲子が彼女を知つたのは五六年前の事でありました。彼女は或る用事を持つてよく仲子の家の門を出這りしました。が、その頃にはまだ二人の間には友情とか知人同士の親しみとか云ふものは少しも育つてゐませんでした。彼等の應待はいつも事務的な單簡さで了りました。

「A子さんからこれをことづかりましたから。」

「左樣ですか、どうも御苦勞で御座いました。」

「校正が出ましたから持つて參りました。」

「急ぎますか。なら直ぐ速達でゞも出させませう。」

「それには及びません。午後から又社へ參りますから、その時までに直してゝ下されば出掛けに頂きに參ります。」

玄關での二人の會話は大抵こんな種類の事でありました。仲子はこれに依つて

彼女がS社と呼ばれてゐる若い女達の文學的團體に屬する一人であり、その社から出てゐる雜誌S――伸子もその寄書家の一人でありました――の編輯を助けてゐるらしい事、及び彼女の家が自分の家と極めて近い距離にあるのだと云ふ事が想像されましたが、そんな委しい話に落ちて行く機會も生じませんでした。初めての人に逢つた時一番に知る筈の相手の姓名をさへ當分知らないでゐたのでありました。

「いつものS社の方。」

彼女の存在はたゞこんな名稱に依つてのみ認められてゐたに過ぎませんでした。けれどもこの變則な對人關係は、その底に潛んでゐがちな輕侮や無視から來たものでは決してなくして、すべて伸子の知らない人に對する臆病と拙づい交際術に歸すべきものでありました。その上伸子はひどい近眼であつて、鼻と鼻をつき合はせる程でなくては、相手の細かしい顏立ちなどは大抵分らないですむのでありますから、彼女の例に於ても、その名前を知らなかつたが如く、その顏をも記憶しなかつたのは決して不思議でもなかつたのであります。玄關の土間が、廣い割に乏しい光線をしか入れないのも、伸子の病的な眼をより無能にするに役立つたのでありませう。けれども自分の視覺に自信がないと共にものを見ることを、その危い器官にのみ委せて置きえない、微細な諸神經の焦慮は、反對に鋭い直覺となつて本來の覺束ない視力を助けました。而してその印象は瞬間的にぼんやり網膜に落ちた影像から抽象されて、最後には非常に精神的なものとなるのが常でありました。好きな顏、きらひな顏、善さそうな人、惡者らしい人――人の顏をだん／＼見てゐると伸子の頭には容易にこんな分類が出來上りました。つんぼの早耳に飛んだ聞き違ひの多いが如く、こんな區別は根柢のない下らない考へ方であり、且ついけない癖だと云

ム事を知つてゐながら、伸子の感情は矢張り近眼のその奇妙な印象に支配される傾きがありました。
彼女の場合に於ては幸ひにそれはいゝ印象でありました。碌に顔も分らない前からいゝ人のやうな氣がしてゐました。彼女の聲は太く、調子も粗野でありましたが、それが却つて卒直に響きました。身體は小柄でありました。けれども年齢はお下げにしてゐたり、普通の束髪であつたり、又時には銀杏返しに結つたりしてゐて、その度にすつかり風が違ふので、見當がつきませんでした。お下げで袴をつけてゐる時には高等女學校二三年生位ゐに見え、銀杏返しに袷の着物で、帶を小さく結んで、吾妻下駄を引きずり加減にして玄關の格子戸を這入つて來る様子は、何處かの若いお内儀さんらしいところがありました。
「あの人は幾つ位ゐなのだらう。どこか學校へでも上つてゐるのか知ら。」
伸子はいつとなしに彼女の上に深い好奇心を持つやうになつてゐました。
その時分S社は善惡二様の意味に於て最も活動の目覺しい時代でありました。日本婦人の道徳的社會的覺醒を叫んで、從來の婦徳、習俗に對して鋭い反抗的批判を發表したA子は、世上の一般的感動の對象となりました。あらゆる時代、あらゆる種類の新人の受くべき待遇は彼女の上にも來ました。家々の老いたる父母、伯父伯母は彼女を日本婦人道徳の異端者と呼び、罵り、その型を脱した行動に眉をひそめましたが、彼等の若い娘や姪達は、細目に於て多少の異議はあつたとしても大體から云へば彼女の共鳴者たる事を免がれえませんでした。近代的教育に依つて目覺めた「自我」の自覺と共に女子の獨立的經濟問題や職業問題を實際によく考へなければならなくなつた社會上の狀況は、當時最も盛んに輸入された北歐の、婦人問題を取り扱つた深刻な戯曲文藝の感化と相待つて、從來の日本娘の憧憬の的であつた弟

橘姬の犧牲的愛や、常磐御前の苦しい貞節や、巴、板額の勇氣など、は全然別趣な、或る新らたな婦德の存する事を彼等に敎へました。千八百五十年代の露西亞の家庭に生じたと同種類の暗鬪――日本に於ても男の子と親達との間には維新後一二十年にして既に初まつてゐたところのもの――へ、今若い娘達も引き込まれたのでありました。從つて初めは單なる文藝上の團體であつたに過ぎないS社は、それ等の熱心な新婦人達の結社の如き觀を呈し、雜誌Sはその運動の機關紙として役立ちました。而して雜誌の出資者であり、同時に主なる創立者であつたA子は、その仲間の中心人物として多くの若い崇拜者達に圍繞されながら演說會をするとか、硏究會を開らくとか花やかな活動をしてゐました。

社の一員である事の勸誘を斷はつて、單なる一寄書家の關係でその仲間と淡いつながりを持つてゐた伸子は、彼等の團體としての主張の雄々しく正しい割りに、個人的の行爲には多くの不眞面目と不純な遊戲心の隱されてゐる事に對する非難の心持ちから、それ以上自分をその仲間に近づかせる事を厭つてゐました。が尙ほ彼女は同情者たるを惜みませんでした。而して味方する心と、危ぶみと、同時に嚴しい批評の交つた複雜な感情で、遠くから彼等の群れを眺めてゐたのでありました。さうやつて見てゐると其處には色んな人が色んな眞似をしてゐるらしい事が想像されました。而してそれは彼等の子供らしい氣焰や、無邪氣な樂屋落ちとなつて、雜誌の六號を賑はしました。S、W、K、H、こんな三四人の名前がよく繰り返されました。それ等の人々がA子を取り卷いて主として雜誌の仕事をしてゐるのだと分ると共に、意識の自然の結び付きとして、自分の家へよく來るあの若い女の人は、その內の誰なのだらうと伸子はそれを考へました。Kと云ふのは下町風な意氣な娘さんらしく見えました。伸子は彼女が時々結つ

てゐる銀杏返しをその名に當てはめて見て、彼女がKなのではなからうかと思つてゐました。

そのうちに五月の月半を過ぎると、〆切り日の迫つた雜誌の用事が又彼女をして仲子の家を訪ねさせました。その時も彼女は銀杏返しでありました。仲子は奥から原稿を持つて出て彼女に渡した後で、初めて名前を尋ねやうとしました。

「あなたがKさんでせう。」

「いゝえ、私は柳澤です。」

彼女は微笑しました。而して

と持ち前の底太い聲で答へました。仲子は間違つたのできまりが惡くつて自分も一緒に笑ひました。が、その失策が二人を今までの單なる事務的關係から救つてくれたのでありました。

「いつかゆつくり遊びにゐらつしやいな。」

「お近いのですから又お邪魔に上ります。」

「どちらなのでか。」

「えゝ、すぐそこなのです。」

二人はこんな話をして、別れる時にはこれまでになく、友達らしいさよならを取り交はしたのでありました。殊にそれは夕方であつて、西向きの高窓から落ちた光線の一と束が、土間の彼女の立體の前面に直射した爲めに、今までおぼろげにしか分つてゐなかつた彼女の顏が、初めてはつきり仲子の視覺に映じたのも珍らしい事でありました。同時にそれは意外な美の發見でなければなりませんでした。も

し初めから伸子がその顔を知つてゐたならば、下町娘のKと間違へるやうな滑稽は決してしなかつたでありませう。ことに程彼女の顔は都會の女達の精練された、同時にチピカルな美とはかけ離れたものでありました。寧ろ兩極端に分つべき野生と素朴を持つてゐました。

その夜伸子の家には良人の友達の二三人が集つて晩餐を共にしました。伸子はその席で初めて逢つた人であるかの如き興味を持つて、彼女の事を話し出しました。

「ジプシイの娘と云つたやうな顔つきをした人なんですよ。」

斯う云ひながら全く彼女には今一つマシヤ、イワノーフナとでも云ふ名前がありさうな氣がしてゐました。而して食卓の間を取り持つ主婦の氣輕るなおしやべりとして、その日に燒けた圓い頰や、大膽らしい黒瞳、稍大きな口を蔽うた薄い、健康さうな唇を、李桃だの、野苺だの、林檎だのと云ふ形容詞で並べ立てたので、では要するに千疋屋の店先のやうな顔だと思つてゐれば間違ひはないのだと云ふ事になつて食卓の周圍の男達は面白さうに笑ひました。

「違つたとしても只一點だけでせうね、同じ果物でも水菓子屋の店頭らしではなくして、あの顔は果樹園の枝からもぎ立てのものですわ。」

話はそれからS社の噂へ移つて行きました。異性の批評は苛辣でありました。或る一人は、ショウの或戯曲に於て、反婦人參政論の一貴女が、その反對者の運動に皮肉な評を下して、

「婦人參政運動は本質的に一つの遊蕩運動に過ぎない——普通の女達が士官とじやらついてゐると同じに、彼等は暴徒とじやらついてゐる。」

と云つた言葉を引いて來て、今のS社によく當てはまる批評だと云つて罵倒しました。仲子は自分と同時代の姉妹達――遠い近いの距離はあつても大體に於て同じ精神的向上の途を歩いてゐる人々の上に、本統を云へば一番親しい路連れであるべき若い異性から、こんな輕侮を受け取る事に堪へられませんでした。彼の同情のない言葉を憤りもしました。而してこれ等は一般の男性が、自分達に都合よくのみ出來上つてゐる道德や法律を、破壞させまいとする利己的な敵對の一部の現はれに過ぎないのだと思ふ反感もありました。が、謙抑な心持になつて客觀すると男性をしてこんな反感を抱かせるに至つた多くの缺點を彼女等が持つてゐることも事實でありました。仲子は姉妹の惡口を聞くやうな痛い耳をして坐つてゐました。

「その柳澤さんと云ふのも何か書くんですか。」

今一人の客が仲子に尋ねました。

「よく知らないんですがね。三四度玄關先で逢つたゞけなのですもの。」

「それがおかしいのさ、こいつは近眼なものだから……」

今日まで顏もよく分らないし、名前も知らないで逢つてゐたのだ、といふことを良人が說明したので一層笑話になりました。

「兎に角豪傑ぞろひだからなア、あそこの連中は。」

今まで默つて牛肉ばかりつゝいてゐた哲學科出の一人がにやにや面白さうに笑ひました。

「そうさ、今にその先生も素破らしい婦人參政論かなんか書き出すよ。」

ショオの皮肉を引用した最初の惡口屋は、最後まで鋭い舌を止めませんでした。けれども伸子はその時にはもう平氣に笑つて聞いてゐられました。何故なれば、その嘲罵は假面であり、彼等が彼に有してゐる強い、珍らかな牽引(アトラクシヨン)の變形に過ぎない事が分りましたから。彼の用ひた皮肉を借用して云ひますと、彼等とじやらつく暴徒(モツブ)になり得ないので、反對に惡口を云ふのでありましたから。惡口をでも云はないではゐられない位に、彼等の異樣な出現に好奇心を引かれてゐたのでありましたから。これは彼ばかりではありません、一般の若い異性の彼等に對する秘密な感情であることを思うて、伸子は心の中で微笑みながら、彼の酒に染まつた、赤い大きな顏を見てゐました。

彼女が一人のお客樣として初めて伸子の書齋に通つたのは、それからどの位ゐ後であつたか、伸子の記憶にはその間の時日の連絡が絶えてゐます。が、その日の彼女の顏や、服裝、又話したことなどは可なりはつきり覺えてゐます。彼女は茶つぽいネルの着物に、緋無地のまつ赤な帶を大きくお太鼓に結んでゐました。伸子の見たこれまでの彼女の服裝には、こんな派手な色彩は一度もありませんでした。憚りとなく云ふ地味な、寧ろ見すぼらしい身なりであつたので、その日のまつ赤な巾廣な帶は殊に著しく伸子の目を刺戟したのでありました。同時にその帶の一色が彼女を十四五の小娘のやうに見せました。

「なんて可愛らしい娘さんでせう。」

伸子は斯う思つて彼女のゴム人形のやうにふくれた珈琲色の頰を眺めました。眼もこの前の時より一層底深く水々と澄み渡つてゐました。その二つのものが、如何にも活氣ある若さと熱情に充ちてゐるの

に引き代へて、額には不思議な一抹の翳がありました。而して濃い生へ際の皮膚が生白くたるみ、何か云ふ度に眉根に不似合な深い竪皺を印するのが、頬や目の輝きに反射してその顔を何か分らない、が、非常に深い、真摯な感情の溢れたものにしました。全く仲子は彼女のこの特殊な顔面表情が、何を意味したものだか分らなかつた。たゞ稀れない、顔だとのみ思つて看過したのでありました。が、三四ヶ月後に至つて仲子は初めて知りました。それは彼女がその時初めて經驗しつゝあつた、人間として、女性としての重大な一つの任務に對する、歡喜であり、期待であり、同時に懊惱、爭闘、苦痛の表現であつた事を。

談話は人が初めて逢つた時、誰でもするやうな話材と調子とを以つて進みました。その最初に於て彼女の故郷が仲子夫婦のそれと同じ九州であり、且つ隣縣でさへあつたのを見出した事は、二人に一層の親しみの情を抱かせたのであります。彼等はその海岸固有の風景美、人事、生活などについて語り合ひました。

「ぢやあなたは泳げるでせう。」

「えゝ、あなたは?」

「私も、だけど私は泳ぎは極下手の部類ですよ。」

仲子は全く一丁ほど泳げるか泳げないかでありましたが、彼女にはそれは自信のある技らしく見えました。高い櫓から飛ぶ事も、水に潜る事も男の子に負けずにやつたのだと云つて南國の夏の海に特有な開つ放しの自由な樂しみを追想するやうな熱情を現はして話しました。仲子もその興趣は十分知つてゐ

ました。彼女の生れた町は近傍の港でも殊に水泳の盛んな土地でありましたから、小學校に上る年頃になれば、夏期にはもう水泳教習所の生徒でなければならない順序になつてゐました。そうしないものは、色の黑くなるのを懼れるおやつしからだと云はれて、友達仲間の侮蔑を受けなければなりません。まつ黑になつて、目と齒と爪だけ僅かに白い、第二學期頃の腕白な小學校生徒の群れが、二人の聯想の前に現はれました。彼女も伸子もその仲間の一人であつた筈であります。

「お轉婆だつたのねえ。」

二人は聲を出して、笑ひ合ひました。こんな地方的風俗や享樂の話が說明なしに理解され、又懐しく追懐し合はれると云ふ事が、談話を滑らかにし、活氣づけて、二人はいつとなく長い間知り合つた友達のやうに無邪氣に話し合ひました。けれどもどう云ふものか、彼女は自分の現在の境遇に就いては、多くを云ふのを好まないらしく見えました。その長い對坐の間、僅かに伸子の知り得た事は、彼女は今年十九であり、都下の一女學校の卒業生であり、今はその先生と云ふ人の家に同居してゐるのであると云ふ事、及びS社との關係の話ばかりでありました。順序としてA子の事もよく話の中に出ました。

「あなたはまだ逢つたことはないのですか。」

彼女から聞かれた時、伸子は去年の秋或る展覧會の會場で、少くとも一分以上ではなかつた一瞥の會見を語りました。彼女はその内ゆつくり逢つて見たらいゝだらう、きつといゝ話相手になれる人だからと勸めましたが、伸子は自らそんな機會を作るだけの氣にはまだなれそうもありませんでした。書いたものを通じてのA子は伸子にもよく分るし、その說も理解されました。がA子の本質的傾向に關しては可

なりの疑問と懼れがありました。仲子には彼女はまだ到底一のスフィンクスたるを免がれなかつたのであります。けれども若い嘆美者は熱心でありました。彼女がA子に就いて語る言葉には、深い信頼と妹らしい愛慕がありました。仲子はこれ等の話に依つて、彼女が南國の海岸に育つた娘の多血質の多くの特長と共に、强い智識慾を有して、人生に對する態度にも、年にしては非常に大膽なところのあるのを見ました。が、それは彼女の顏の卒直な表情や、疑念のない快活らしい話ぶりのために調和されて、圖圖しいやうな感じにまでなる事は決してありませんでした。結果は却つて反對でありました。

「今日あの柳澤さんと云ふ人が遊びにゐらしたんですよ。××の人ですつて。正直らしい本統に可愛い人ですわ。」

仲子は夕方歸つた良人を相手に、非常にいゝ印象を持つて晝間の女客の事を話したのでありました。そのうちに彼女がすぐ近所だとか、つい其處だとか云ふあいまいな言葉で示してゐた彼女の家の位置が、近所も近所仲子の家とは垣根一重の裏であつたことが分つたのは、少し意外でありました。それは表からずつと奧へ這入つて、一本の古い椎の古木の下に一廓をなしてゐる、三四軒のちんまりした小家の群れの一つであるらしかつたことがわかりました。それに氣のついた最初の人は仲子の家の女中でありました。表から其處へ達する一筋の石疊の路は、仲子の家の前庭の右の角を折れて、粗い薔薇の生垣に添うて走つてゐるために、その通路を出入する人々の姿が、薔薇の垣根の內側で洗濯物をしたり、水を汲んだりする下婢の目に觸れる機會の多かつたのは自然でありました。斯うして女主人の訪問者——殊に自分と年頃の同いやうな若い女客に對する特別の注意が、素早く彼女がその通路を出入する人である事、そ

の家はその通路に接する奥の家のどれかでなければならない事を發見さしたのでありました。それと共によくオルガンを彈いたり、尺八を吹いたり、歌つたり、男女の賑やかな笑ひ聲を立てたりする一家族が其處いらに住んでゐたことに思ひ當つた時、下婢の胸にはさまざまな好奇氣が湧きました。彼女はその以後先よりも一層熱心に垣根の外の人影と足音に氣をつけ出しました。而して興味ある噂話をして女主人の前にその事を持ち出した頃には、其家には四五人の男女が住んでゐる事、彼女が一人の若い男とよく連れ立つて出て行く事までも知つてゐました。

さう聞けば裏のオルガンや尺八は仲子の耳に親しいものでありました。

「あの家だつたの。そう、ちつとも知らなかつた。先生らしい年取つた人でも見えるかい。」

「どうで御座いますか、何んだか若い方ばかりのやうで御座いますよ。」

下婢は不信用らしい顏つきをして答へました。仲子は或る事を直覺しました。大きな聲をして呼べば聞える程の距離でありながら、彼女が今日まで自分の住む家を正確に知らさなかつた譯も分るやうな氣がしました。それ故、その後一二度逢つた時もその事だけには——可なりの好奇心もあり、又話が何度も其處まで行きそうになつたにも拘はらず——觸れるのを避けました。他人の內生活を尊重するといふ意味から。

けれどもそれは間もなく彼女の上に最近に偶發した一つの事件に聯關して、彼女自身の手で公然とS誌上に發ばかれる事となりました。——彼女の書いたものに依つてよき感銘と幻影を得た一人の男が彼女に逢つて見度いと云ふ一つの手紙を書き送つた。それは若い異性の情熱と感歷と、芽むべき愛の期待

勢ひづけられた魅力ある手紙であつた、それが彼女の心の上に印した感激は、情けなくその申込みを斥けさせ得なかつた。二人の會見が持ち來たされた。男の心には、見た彼女は、見なかつたそれ以上のものである事が分かつた。彼の手紙は今はもう純然たる愛の發表、强請、祈願、となつて現はれた。が彼女の現在の事情は、彼の高潮した情意の前に、よき戀人の役を引き受けるわけには行かなかつた。男の性急な、ひた壓しに壓し迫まつて來る心の進み方は、女には寧ろ驚きでもあり、又苦しい事でなければならなかつた。何故なれば、彼女には戀人があつた、現に今はその戀人と同棲してまでゐるのであつたから。これは彼との會見の時第一に打ち明けて置くべきものであることを彼女は思つてゐた、が、その時の事情でそれを云ひそびれました。この一つの手違ひが事件をこんな悲劇的な舞臺に持ち來たそうとする原因である事を考へたので、彼女は長い〳〵告白の手紙に、今の同棲者との戀愛の成立からの事を書き連ねて、自分を自由な境遇に在る處女と思はないで呉れと云ふ事、及びそれを打ち明け損なつた爲めに、彼の愛をその最初の芽に於て防止しなかつた罪、それを感じる事に依つての自分の苦しい心持ちを訴へました。普通ならば其處で幕が下ろさるべき筈でありました。が、男の執拗な征服的な欲念はその位ゐな故障をば故障としなかつた。そんな事は彼女の自由意志に依つていつでも打ち破らるべきものである。古い酒を捨てゝ新らたな杯を執る事は不可能ではない。たゞ一つ進むべき路は彼女の選擇を待つて前に拓けてゐると云ふのであつた。その威壓的な文字、確信ありそうな態度、强い一本調子な男心が、終に彼女の魂を搖り動かして、彼を愛すると云ふ言葉を奪はなければやまなかつたのです。彼女は自分にも夢のやうな、不意な情熱の洪水に足もとをさらはれて、藻掻き苦みました。斯うなると、男の最初

の手紙を彼女と共に見、返事を出す事を自分から勸めた位ゐの寛大を示してゐた同棲者にも地獄が初まりました。二つの魂は血みどろになつて呻めき苦しみました。若しこの苦い酛がそのまゝに醱酵したならば結果は見えてゐたのであります。が其處には不思議な種子が胎まれてゐました。彼女は手紙の中の男の火のやうに燃え、若い裸體の神の如く雄々しく叫んでゐるに引き比べて、面と向つて見ると、其處には、金縁眼鏡なぞをかけた平凡な、にやけた、一異性しかゐないのに氣づいた時、彼女の幻影は午前十時の霧のやうに薄れて行きました。酒室の酛には水がさゝれたのであります。彼女は終に最後の選擇をしました。彼女は無事に戀人の手に歸つて來たのであります。――一篇の筋は斯うでありました。伸子はその作物の中から様々な事を學びました。彼女の戀人が彼女の上つてゐた女學校の英語教師であり、彼女との關係から今では職を離れてゐるのだと云ふ事、彼女はそれ以前まだ女學校にゐる頃親達の手に依つて取り極められた許婚者が、別にあつた、而して今の戀人と同棲するまでには、その壓制的な結婚に反抗して、苦しい戰ひをして來たのだと云ふ事も知りました。あの子供のやうな無邪氣な頰と目の持主が、こんな複雜な人情の波を潜り抜けて來たのかと思ふと、伸子は不思議な位ゐでありました。同時にそれ等の出來事に對して、彼女が如何にも正直な徹底した態度を現はしてゐるのが伸子の心をひきつけました。善い事も、惡い事も、美も醜も愚も一切を僞はりませんでした。虛飾や胡魔化しに馴れた世間の多くの女達には、想像もされない卒直を以つて自己を解剖臺に投げ出す誠實と勇氣がありました。而してすべての創痕を剝ぎ落した眞新しい素つ裸の身體となつて再び人生のよき一歩を踏み出さうとする確信と希望に燃えてゐました。この態度の前には一つの失敗は一つの經驗であり、負ける事は更に打

ち勝つ事でなければなりません。土に轉ぶ度に新らたな力を握つて立ち上るアンテウスの强さが、彼女の强さでありました。その明るい、開けつ放しな行き方は、重々しく落ちついた、同時に底の測られないやうなＡ子の性格と鮮やかな對照を作る事となつたのでありました。且つその一篇は彼女の内的生活の眞摯とよき傾向を示す一記錄であつた計りでなく、その文學的能才のたしかさを證據立つるものでありました。彼女はもう單なる正直さうな、可愛らしい娘だけではありませんでした。伸子は新たな尊敬を以つて若い隣人を見ました。而して二人の間によき友情の芽ぐみつゝある事を樂しみの目を以つて見てゐました。

秋に於ては彼等はもう最も親しい友達でありました。その交情の發達には順當以上のものがあつたと云ふべきでありませう。個人的ではあるが、女性としての二人に共通な或る重大な出來事を同じ時期に經驗した事が、二人を一つの運命的な友情に結びつけたのでありました。九月の初旬、伸子は二番目の子供を生む爲めに駒込の或る病院へ入院しました。二週間目に新らたな小さい男の子を抱いて家に歸つて來た時、裏の家にも同じく出產のあつた事を耳にしました。

「おやもう產れる頃だつたのかねえ。」

伸子は稍驚きました。彼女が普通の身體でないらしいのに氣付いたのは、ほんの最近のことであつたし、且つそんな方面の觀察には伸子は可なり痴鈍な方なので――これも近眼のせゐだと彼女は思つてゐます――その時も下婢の發見に敎へられたのでありました。

「そんな事はないだらう。」

初め暫くの間は伸子には信じられませんでした。理由なしに、それがあるべからざる事のやうな氣がしました。彼女が情人の家に同棲してゐるのを見てゐながら。これは伸子の心の隅に殘つてまだ滅しきらずにゐる、ロマンチックな一つの愚でありました。いよ〳〵本統であつたのを覺つた瞬間でさへ、傷ましいやうな、惜しいやうな、悲しいやうな氣持をどうする事も出來ませんでした――何故でせう。自分も同じ大きなお腹をしてゐながら。初めて書齋でむき合つた時の特殊な額の表情が思ひ合されました。伸子にはその時すべてが分つたのであります。けれども打ち出して委しい話を聞いたり、したりするまでの親しみはまだなかつたので、その後は逢つてゐても一味の心苦しさを感じないではすみませんでした。伸子はなりたけ氣をつけて、圓くふくれたその帶のあたりへは、視線を向けないやうにしたのでありました。彼女にしても伸子の身體に就いては何事をも知らない風を裝つて居りました。こんな場合に於ける女同士のデリケートな心理を、羞恥や氣取りのみから來る淺薄な禮儀として見るのはまだ本統だとは云はれないでせう。これは來るべき新生命に對する沈默の禮拜であり、その創造の神秘と神聖とを何處までも嚴かに守らうとする人間の敬虔な謹愼でなければなりません。

子供にお湯などを使はしてゐますと、裏の方からも高い威勢のいゝ泣き聲が聞えて來ました。

「赤さんが泣いてるわね、矢張し男の子か知ら。」

「さあ、どうで御座いませう。あの泣き聲で見るとお孃さんらしくも御座いませんですねえ。」

「大變だらうねえ、初めてだのに。あのお若さではね。」

仲子は子供の泣き聲を聞く度に、自分と同じ任務のために、夜も眠らず、自分のあらゆる自由と慾望を犧牲にして世話をしてゐる若い母親が、其處にも一人ゐるのだと云ふ事を痛切に感じました。その結婚が普通の順序を取つてゐない事、それから來るすべての不便を知る故に、且つは自分の初產當時はどんなに無經驗であつたか、それがためにどんなに狼狽へ苦しんだかを知る故に、仲子が垣根一重のこちらから彼女の事を思ふ時には、それはすべて、自然の同情となりました。早く赤ん坊を見度いやうな氣もしてゐました。

仲子の待ち設けはやがて滿足させられました。彼女は或る日子供を抱いて訪ねて來ました。矢張り男の子でありました。

「まあ、大きな目！」

仲子は一と目見るとすぐそう思ひました。取りも直さずそれは母親の目でなければなりませんでした。

「この赤さんは又なんて大きんでせう。」

二人は子供を取つ換へつこして抱いて見たり、名前を聞き合つたり、又は兩方の顏の特長を批評したりして笑ひました。仲子の子供は大きさと重さでは優つてゐたけれども、顏立ちは彼女の子供の方が整つて可愛かつたのであります。

「これで肝が強くて困るんですよ。何か氣に入らないで泣き初めやうものなら、どうしたつて止めやしないのです。」

「お父樣似なんでせうね。」

青い、神經質らしい顔をした彼女の同棲者の顔をば、もう仲子もいつとなしに見知つてゐました。

「おつ母さんなんかさう云ひますよ。」「そつくりだつてね。」

彼女の家には今では姑と妹の夫婦とが同居してゐるのでありました。而して同棲者の事を語る時も、今までの先生と云ふ言葉の代りに、良人の普通の代名詞を用ゐてゐるのが仲子の心を微笑ませました。姉が妹の初めての丸髷を見た瞬間と同じやうな氣持ちで。

實際また間もなく彼女が美しい髷に結つたのを仲子は見ました。その髷は彼女によく似合ひました。束髮だと背中の赤ん坊との釣り合ひが、子守り娘以上には見えない位ゐ、子供〳〵した彼女の顔や身體が、その髮の時にはすつかり變つて、母親らしい威嚴と美を十分に示しました。

「おつ母さんですよ。」

仲子はその言葉に依つて黑人も及ばない上手なその髷が、彼女の姑の手になつたのであるのを知つて驚きました。昔はどんなに美しかつたかと思はれるその老人とも、又面ざしのよく肖通つた若い、美しい娘とも、逢へば言葉をかけ合ふ程の親しみを持つてゐたし、良人同士も知り合ひになつてゐました。而してその人々は江戸の富有な階級に屬して、昔は豪奢な生活をした家であると云ふやうな事もいつとなく分つてゐました。さう云へば善い意味にも惡い意味にもそれ等は江戸文明期末の爛熟しきつた雰圍氣の中から生れた、所謂都會人なるものゝ好典型であるらしかつたのであります。お母さんが彈くのだと云ふ三味線は、植木屋や小役人の家の多い郊外のそこいらの空氣の中で響くべき種類のものではな

さそうでありました。ぢつと聞いてゐますとそんな貧しげな小さい家で奏されてゐる音樂のやうではありませんでした。それ程それは熟達しきつた立派な藝術でありました。その三味線が鳴り始めると、仲子はペンを置いたり、書物をよみさしたまゝにしたりして遠くから耳をすましました。老女の聲は朗々と若やかに響きました。その瞬間の音樂は單に勧進帳や老松ではない。再び返つて來ぬ過去の美と若さと、榮華と夢を戀ひ、思ひ、悲しむ彼女自身の「幻想曲」であるかの如く感じられました。Oさん——にも亦母親に劣らない音樂がありました。それはよく聞こえてゐたあの尺八であります。たま〳〵その二つのものが合奏される時などは、椎の木の下のその小さい家は、零落や窮乏や、すべての物質的苦惱を忘却し去つて、近所のどの家にもない、派手〳〵しい自由な享樂に充されて見えました。

「風變りな面白い家ですわねえ。」

知らぬうちは特別の注意をも引かなかつたのに、今となつては色んな事が耳目に觸れました。仲子の家ではよくこんな好意的の批評をしてゐました。

春が來ました。雪や、みぞれや、霜や、灰色の雲や、陰氣な物詫しいものは悉くその存在を失つて、人間は頭上の青い大きな圓い窓をいつも故障なく仰ぎ得るやうになりました。其處からは冬とは勿論、秋、夏の暑すぎたり、冷やかすぎたりする光線とは全く違つた、一種特別な柔らかい、甘美な魅力に充ちたものが降つて來ました。世界に生を得てゐるすべての物象中、斯る自然的變化に就いては、人間よりも何よりも鋭敏な神經を有してゐる樹木は、いち早くそれを見やうとして細長い青い目を開きました。

花は接吻の爲めにその赤い唇を用意しました。土の肌は肥え、ふとり、河は水量を増して、勇ましい男性的の聲をあげて、春の歡びを歌ふ第一聲となりました。山にも海にも森にも畑にも黒い煤煙の渦捲く都市の上にも、もう著しい變化の起つた事は明らかでありました。山脈の皺は花で飾られてゐました。波も二三ヶ月前の兇暴なうねりを靜めて、蛇使の手にかゝつた巨蛇のやうに、のつたりのつたりと沿岸の岩や岬に戯れてゐました。しん〳〵と雪に降り埋められてゐた森は、茅花取りや虎杖取りの子供の叫びを以つて充され、百姓は爐邊を離れて彼等の神聖な土の祭壇に立ちました。麥は順當な發育を遂げて彼等の現はれるのを待つてゐました。畑を打ち、種を蒔く、肥料をやる。秋の收穫のすべての準備。忙しい仕事に緊張した心は、黒く強いその腕に二倍の力を與へました。大きな黄金色の太陽の直下に、彼等は研ぎすました鍬を高くあげました。その頃には都市に出てゐる彼等の子供や孫が、學校の窓から、商家の店先きから、又は工場の二階から故郷の春を思ひながら、柳、篠懸、銀杏、櫻の行路樹を眺めてゐるでありませう。行きつく先を家にしてさすらひ歩いてゐる放蕩息子にさへ、桃の咲いてゐる草葺屋根を不圖もの懐しく思ひ浮べさせるのは、この時節でなければなりません。全く四季を通じて春程人の心を自然の懐へ連れ歸る時がありませうか。秋は深く考へさせはするかも知れないが、春ほど驚ろかせは致しません。何故でせう？これは。春の世界は特殊であるから。自然の健かに美しい分娩であり、冬の胎にはらまれてゐた天地萬象の新生だからであります。雪の下から一轉して現はれた新らたな光輝、新らたな色彩、天の果てから地の限りまでゆらぎ動く生命の旋律には、電燈の光りに太陽をさへ忘れんとしてゐる程の人間さへも、驚異の目を見張らないではゐられないのでありました。根源の知れざる力に對する讚

昇と憧憬が彼等の心に目覺めます。斯うして尙ほ廣く自由にその生命に觸れんとして、人々は野に出で山に登るのでありました。

『散歩いたしませんか。』

斯う云つて誘ひに來た彼女と連れ立つて、仲子が家から近い森へ行つたのはそんな春の一日でありました。彼女は子供をおんぶしてゐました。仲子は下婢の背中に預けて、その代り四ッの小さい兄の手を引いてゐました。

『何といふいゝ日でせうね。』

『この四五日は又特別ね。』

『鶯がよく啼くぢやありませんか。』

『こんな季節になるとこゝいらに住んでゐるのが本統に仕合せだと云ふやうな氣持がいたしますよ。』

二人は門を出るからこんな感歎詞を連ねながら墓地の方へ歩いて行きました。彼女が案內すると云ふ森は、その墓地の後に當り、附近に廣大な別邸を持つてゐるI男爵の所有地であつて、此處いらでは名高いのだそうだけれども、土地に六七年も住んでゐて、仲子はその存在さへ知らなかつたのでありました。この間その話が出た時は、二人は一緒に、違ふ意味で驚きました。

『まあ、そんなところがあるのですか。』

『あの森をまだ知らなかつたのですか。』

今日の散歩も近いうちにそれを見せやうと云つた彼女の約束に基くものだつたのであります。

森は墓地の東端の一邊に連なる細長い地帶で、石塔や塔婆がまばらになつたと思ふと、それはもう森の入口の松林でありました。其處に達した時、既に彼等の心持ちには、普通の路を歩いて來たのとは、非常に異なつた或ものがありました。いつでも一歩足を踏み入れると共に感ずるその『靈の公園』の特殊な空氣は、彼等を瞑想的にしました。蒲公英があつた、と云ひながら下婢と先に立つて無心に悅んで行く男の子の後から、二人は其處に眠つてゐる幾人かの知人の事などを靜かに話して行きました。

森は樹木の多い割りに明るく、朗らかでありました。午前十一時頃の日光がすく〳〵と立ち並んでゐる樹幹に添うて一直線に降つてゐました。初めは松ばかりであつたが、奥へ入るに從つて、杉、槍、楓、栗、欅の如き樹々が、それ〳〵特長ある幹、枝、葉を以つてその光りの中に現はれました。その他にも雜多な樹と草が、生ひ茂つてゐましたが、名前も種類も仲子には區別のつかないのが多かつた。こんな場合にいつも感じられる植物學の智識の缺乏が、今日も痛切に思はれました。

「私は時々自分は何一つ正確に知つてる事はないのだと考へて悲しくなる事がありますよ。」

深々と草の生へてゐる明るい空地の一つを選んで休んだ時、仲子はあたりの矢張り知らぬ葉、知らぬ枝の群がりを眺めながら云ひました。彼女をして今日殊にこんな氣持ちをさせるのはその頃讀んでゐた書物の影響でありました。彼女はゲーテの「伊太利紀行」を讀みました。而してそれが全部農業誌と地質誌と建築學の考證であると云つてもいゝのに驚いたのでありました。萬有を吸收したと云つてもいゝ位ゐな偉大なその頭の中の世界には、そんな位ゐな事は何んでもなかつたのでありませう。且つそれ程の天才と蟲のやうな自分達を比較して考へる事は寧ろ僣越であるのは分つてゐます。けれども仲子の感

激は純粋でありました。

「うんと勉強してお互ひにえらくなりませうねえ。えゝきつとなりませう。」

二人はその頃話の末にはいつも誓言のやうに云ひ交はすこの言葉を、今日も熱心に繰り返しました。えらくなり度いと云ふ事は、考へて見れば仲子の少女時代からの夢でありました。が、その内容は年と共に變化しました。何がえらいのだか分らなくなつた時期もありました。世間的虚榮がその要素の大部分であつた時もありました。けれども最近に於て本統にえらいもの、えらい事が分りかけた氣がしました。仲子は自分の心の滓がだん／＼と澄んで行くのを見て、悦びと感謝を感じました。此境地を亂されまい、濁すまいとする努力が彼女の不斷の精進でありました。此儘たゞ一心に進んで行けばいゝのだ、最後の目標――眞理――それより外にえらいものはない――を目ざして絶えず考へ、勉强し、實行して行けばいゝのだと決心してゐました。八つ違ひのその若い友達は其處へ丁度いゝ路連れとして現はれたやうな形でありました。初めての子供から得た彼女の複雜な經驗、それに依つて嚴肅にされたその心が、また、未婚者の多い彼女のS社の仲間とは、稍變つた傾向を帶びて來たのは自然であつたと共に、それは又取りも直さず仲子への接近でありました。

長くさし出た栗の枝の下に、彼等は並んで足を投げ出しながら、その日も色んな事を話し合ひました。而し話が最後に人間の衣食問題にまで落ちた時、仲子は初めて彼女とその家庭の間に横はる苦しみの溝を知りました。彼女の良人たるO氏が職を失つたのは、要するに彼女のためでなければならなかつた、それ故彼女はその一家の生活に責任を負ふ義務があると云ふのが、年取つた母親達の考へのやうでありま

した。こんな話を聞いて、彼女の青いやつれの目立つ顔を見てゐると、仲子は悲しい氣がしました。獸はその一枚の毛皮で一生を通す事が出來ます。鳥は樹の上で自由に歌つてゐて、甘美な木の實を樂につひ食みます。それに比べると人間ほど自分の着る物や食べるもの丶爲めに一生を勞しなければならないものがありませうか。良人が讀みさしの書物を閉ぢて急いで洋服を來て表へ飛び出して行く時、すまないやうな心持ちを以つて見送る仲子は、矢張り彼女と共に、獸の毛皮、鳥の木の實を羨む一人でありました。

「鳥が一番純粹な詩人になれる筈ですわねえ。」

仲子は斯う云つて、後ではそんな話はよそ事のやうに二人で快活に笑ひました。とにかくさうやつて森の美しい日光の中に足を投げ出してゐる心持ちは幸福であり、且つそのあたりの光景は、それ以上貧乏話を進めてはゐられない程、輝やかしい、愉快な魅力に充ちてゐたのでありましたから。

此間からメーテルリンク夫人のお伽話を下婢に讀んで貰つて、深い感銘を受けてゐる長男は、今日思ひがけもなくこんな森に連れて來られたので、驚いてはしやぎ廻つてゐました。彼は自ら小さいチルチルを氣取つて、柏大王はゐないかの、おしやべりの白樺は何處だのと一つ〳〵の樹を調べて歩きました。

「白樺はこゝいらにはない樹ですよ。ずつとお寒いところでなくちや、ねえ、お母樣。」

と彼女が仲子を顧みて敎へますと、彼は今度は母親に向ひました。

「ぢやお母樣、青い鳥は？」

「青い鳥はゐますとも。きつとゐませうよ。そこいらの樹の枝をよく探して御覽なさい。」

彼は母親の保證を得て悦んで下婢を促しながら向ふの繁みの方へ走りました。彼の白い前掛と下婢の赤い帶が、樹幹の間にちら〳〵しました。母親と若い伯母さんはそれを見送つて笑ひました。本統はその瞬間の彼等の手に、青い鳥は既に捕まつてゐたのだと思ひながら。

「あの位ゐになるともう世話なしですわね。坊やも早く大きくなつて頂戴。」

彼女は背中から下ろして抱いてゐた子供に笑つて斯う云ひ聞かせました。而してもうお乳の頃だらうと云つて胸をあけました。

「ぢや、あなたにも一つ御馳走しませうね。」

仲子は下婢から先刻受取つて、側の草原におねんねこにくるんで寐かしておいた子供を自分も抱きあげて乳をやりました。子供は二人とも可なり智慧づいてゐました。而して空いた胃袋を充たさうとして乳房に搦む舌の力にも、男性らしい强さがありました。一種の性的感覺であるとまで見なされてゐるその觸覺は、彼等の赤ん坊臭い、甘い皮膚の匂ひと共に母親の胸には、特殊な快さでなければなりませんでした。痛い位ゐ張りきつた乳線が、汐の引くやうに輕く萎えて行くだけもいゝ氣持ちでありました。

その時殆んど天のまん中に冲した太陽は、その栗の枝を通して樹下の若い母達の授乳を照らしました。葉を辷つた光りの斑點が、二人のひろげた胸や、其處に埋めてゐる赤ん坊の頭の上にちら〳〵しました。

「斯うしてゐると何んだか眠くなるわねえ。」

彼女は重い瞼をあげて眩しさうに笑ひました。仲子には今日の風變りな授乳が面白く顧られました。いつもこんないゝお天氣で、そしてこんな野天でのんきに暮らしてゐたら、それこそ一枚の毛皮と木の

實を食べても生きて行かれそうな氣がしました。彼女の聯想は偶然舊約聖書の原始女性の上に落ちて行きました。

「イヴもこんな樹の蔭で斯うやつておつぱいを飮ましたのでせうねえ。」

二人は笑ひ交はしました。而してそれを機會のやうに乳を右から左に代へました。赤ん坊ばかりではありませんでした。計つて見るともう自分達の胃の腑も晝飯を待つてゐる頃でありました。が、伸子はまだ此處を離れ度くない氣がしました。

「ねえ、いゝ事があるわ、此處でお辨當を食べませうよ。」

歸りに花でも買へばと思つて、伸子は二十錢銀貨を一枚帶の間に挾んでゐました。下婢を呼んでそれを渡して、S町の通りに出てパンでも買つて來るやうにと命じました。

「僕も行き度いなア。」

で、子供と二人で行く事になりました。森を墓地と反對の方へ出るとS町の通りはもう間もないので、三十分と待たないうちに使は歸りました。買つて來たのは餡パンでありました。四人で五つづゝの分け前となりました。

「あゝ、おいしい。おいしい。」

歩き廻つたので實際おいしくもありましたが、同時に少しは誇張した悦びを見せて、皆んな笑ひながら、その風變りな場所の風變りなランチをすませました。

「生活難なんて考へやうぢやないでせうか。これだけ食べればとにかく胃袋は一杯なんですものね。」

どうにでもなつて行くものだから、餘り餘計な心配はしないやうに、といふ心で仲子は彼女を慰めました。先刻話に出て來た彼女の苦しい立ち場に就いて、自分も決して富んだる隣人ではないけれども、出來るだけの事はしてあげ度い氣でゐました。仲子のその心持ちは、彼女にもよく分かりました。森を出づる時には、彼等はその半日に依つて、二人の友情に一層の愛と信賴の加はたのを感じました。

その年の初夏、仲子の家は今までのところから五六軒下手の二階家へ引越しました。位置から云ふと彼女の家の丁度後に當りました。先には小路一つだけも隔たつてゐたのに、今度は同じ一廓の地續きで、友達の家の目標として眺めてゐた、あの椎の暗綠色の偉大な毬は、今は書齋になつた二階から、最も親しく目に入るものとなりました。廊下に立てば、彼女の家の中まで見下ろされ、普通な聲で呼んでも、その枝の下に、すぐ聞きつけて覗ける顏を見る事が出來ました。こんな事情が二人をますます親密に結びつけて行つた事は想像されるでありませう。二人は日に何度となく顏を合せ、聲を聞き合ひました。何か急に話し度い事でも出來ると手襷をかけながらでも飛んで行きました。彼女はまた、實際忙しかつた。子供を育てると共に自分自身の人間としての成長をも怠るまいとする努力は、普通の母親の二倍の骨折りでなければなりません。その上家庭の面倒と生活の苦痛がありました。彼女は、でもそれに對して、何處まで辛抱强い、勇氣を示しました。それを見てゐると、仲子は彼女の爲めに一緒に泣いて祈つて上げたいやうな感激を覺える時さへありました。

「あの人をよくしてあげ度い。」

伸子の心持ちにはこれより外の何物もありませんでした。そしてそんな善い友達を手近に持つてゐる自分の幸福をも感謝しました。

その頃には彼女を通してK子も知つてゐたし、若い愛人とすぐ近所に新らしい家を持つことになつたA子とも往き來するやうになつてゐました。遠く離れてゐては知らなかつた、すべての人々のいゝ素質や、優れた點がよく分かりました。而して皆んないゝ人であるのを感じさせられました。伸子は偏見なしに彼等を愛し、親しむ事が出來ました。これは嬉しい事でなければなりません。斯うして友達同士が純な愛情に生き、それ〳〵いゝ目標を目ざして進み行く事は、その愛を更に廣く人類の上に押し擴げ、その大いなる善のために働かうとする一歩でありましたから。

「皆んながこのまゝ仲よく手を引いて進めばいゝのだ。それでいゝのだ。」

伸子は絶えずこんな氣がしてゐました。而して勇氣を感じ、光明を感じ、希望を感じました。伸子は今まで良人を愛する事は知つてゐました。子供を愛する事も知てゐました。親や兄弟やその他の親しい血縁を愛する事も勿論知つてゐました。が、友達と友達――他人と他人がこれ程純一な愛情で結びつき得る事を知つたのは、これが最初の、最も甚大な經驗だと云つてよかつたのであります。これは彼女に依り、彼女を通じて知つた事でありました。而してそれは伸子の心の一面を蔽うて、妙にかたくなに見えさしてゐた殼を打ち破りました。その一と夏の伸子は今まで曾てなかつた程、いゝ、嚴正な意味のソシアブルである事を自分でも氣付きました。友達はみんなよくその家に集まりました。涼しい夏の幾夜を、彼等は愉快な笑聲の中に過しました。

九月になると、でも事情は一變しました。仲子は九州に居る父親の病を聞いて良人と共に家をあげて歸省しなければなりませんでした。仲子は生れて初めて其時人間の死んで行くのを見ました。妻の手が、子供の手が、病床の周圍に祈禱に震え、助け救はんとする願望におのゝきながら、どうする事も出來ないのを見ました。

「人間は終に死ぬのだ。」

この一つの眞理を今まで自分は決して本統に知つてゐたのではなかつた、と仲子は心の底から感じました。それは今初めて分つた事でありました。而してその一つの驚愕は、彼女の頭と身體の中のあらゆるものを奪ひ去つてしまひました。自分と云ふものが空洞になつた氣がしました。夏の間持つてゐた光明や希望や愛や歡び――これ等は今は一として殘つてゐませんでした。

三四ヶ月ぶりでこんな心持ちで仲子が東京に歸つて來た時には、郊外の家の周圍も俄かに淋しくなつてゐるのを見ました。椎の樹の下の友達の家は牛込の方へ越してゐました。A子はその若い愛人と長い旅に出てゐました。K子は結婚して市內の遠い方面に住んでゐました。而して人々の生活がみんなそれぞれ複雜になり、同時に誠實な根柢のあるものになりつゝあるのを感じました。仲子は滅多に彼等に出逢ふ機會もありませんでした。まだ生々しい父の死の影響が、年と共に出無精になつてゐる仲子を一層氣重にしたのであります。彼女は人を訪ねたり、一緒に集まつて話したりする興味を極端にまで失ひました。が、その非社交的傾向は心の底に橫はつてゐる友情を裏切るものではありませんでした。遠く離れてゐるために、滅多に會へないために、却つて友情が純粹化され、理想化されて行くやうに思はれまし

た。彼等の事が絶えず思ひ出されました。出逢つて一緒に下らないお喋べりをしたり、餘計な人の噂さ話をしたり、目的もなく遊び歩いたりするのは、友情を方便に使つた一種の下等な享樂に過ぎません。何年逢はないだつて構はないから、自分のゐるところにしつかりと立つて、めい〳〵が一人々々をよくして行くと共に、その道連れのためにも絶えず禱り、心配する眞情をさへ失はなければ、いつまでも本統のいゝ友達になつて行けるものだと伸子は信じてゐました。中でも比較的出逢ふ機會の多かつたのは、矢張り彼女とでありました。

「やあ、I子さんがゐらしつた。」

そのたま〳〵の訪問は子供達からまで大悦びで受け取られました。彼女の子供ももう小さい靴などを穿くやうになつて、いつも一緒について來ましたので、母親が友達を迎ふる事は、彼等仲間の可愛い社交でもあつたのであります。長男はすべてを記憶してゐまして、その小さいお客樣を愛し、歎待しやうとする兄らしい寛大もありましたが、弟の方は若い叔母さんにこそ親しみは見せても、赤ん坊の時からの友達に對しては、奇妙な小さいもの——子供は自分の小さい事は大概忘れてゐます——が現はれたかのやうな、怪訝らしい顏付をして敵意を示しました。彼等はよくおもちやの奪ひ合ひをしたり、叩き合ひを初めたりして、座敷の母親達を駈けつけさせました。

「此處いらだとほんとうに子供のためにもいゝんですけどもねえ。」

彼女はよく斯う云つて懷しそうにあたりの目馴れた木立を眺め廻しました。椎の木はいつ見ても力强く、がつしりと聳えて、その枝の間からは彼女の元の屋根の瓦が、五六十枚並び透いて見えました。

「又歸つてゐらつしやい。」

いろ〳〵な事情で今のところ六ヶしい事であるのを知りながらも、仲子は矢張り然う云はないではゐられませんでした。

「でもね、雜誌をやつてゐますと、市内の便利な事が初めて分かりますよ。」

「それは然うでせうね。——雜誌は旨く行きさうですか。」

彼女はA子の手から引きついで、S誌を熱心に出して行かうとしてゐるのでありました。彼女の暫くものは幼稚な所があるのを免かれなかつたとは云へ、その態度が眞面目であつたのと、若い彼女が既に母親であり、その一家の生活をさへ背負つて立たうとしてゐる奮闘的な態度が多くの同情を呼び起しました。善き新しい女性として彼女の名にだん〳〵に確かな社會的評價の與へられつゝあるのを、仲子は蔭の方から悦んで見てゐました。

又一年が過ぎました。その間に彼女は第二の子供を産むために、良人のO氏と一緒に長い間その郷里に歸つてゐました。新しい子供を抱いて彼女が又東京へ出て來ますと、今度は入れ代りに仲子の家族が皆んなで歸省しました。而して歸りには上方見物などをして、その四月から初めて小學校へ上る事になつてゐた長男の入學にぎり〳〵で間に合ふやうに東京の家へ歸り着きました。何んとなくあはたゞしい一年でありました。仲子はその間に數へる程も彼女を見なかつたのであります。從つて彼女の思想、傾向にどんな變化が起りつゝあつたかも知りませんでした。併し、いつとなく、又何處からともなく、彼女とその良人のO氏との關係に就いて、或る不安な忌はしい噂を耳にするやうになりました。以前、長

い間、その二人の生活を見る機會のあつた伸子には、それは決して想像され得ない事でもありませんでした。彼等の愛に幾度かの危機の持ち來されたことを伸子は知つてゐました。けれども波はふくれる度に必ずしも船を破壞させはしなかつた。却つて、その度に彼等の愛はより高い水準に持ち上げられてさへ行つたやうでありました。

『Oと私のことは迚も他の人には理解されやしないのですから、心配しないで置いて下さい。』

或人に彼女が斯う誇りがに云つたことを伸子は又聞きに聞きました。が、波は無數でありました。船が本統に安全な岸へ着けるかどうかは危い事でありました。

伸子は彼女に逢つて委しい事を聞き度いと思つてゐました。二人の間にはそれから幾度も友情のこもつた手紙が交換されました。彼女は明日にも訪ねて來て、色んなことを聞いて貰ひたそうに書いて來ました。それでゐた彼女は訪ねて來はしませんでした。

『I子さんはどうしてゐらつしやるのだらう。』

伸子には譯が分らなくなりました。その時一つの斯んな聲が、彼女の耳を脅しました。

『お前は何をそんなに氣を揉んでゐるのだ。あの人達の事はあの人達に任せておけばいゝではないか。お前のお世話なんぞ餘計な事だ。お前がそれを友情だとか愛だとか思つてゐればそれは自分で自分に嘘をついてゐるといふものだ。それは決して好奇心以上に出るものではない。他人の苦痛で、お前が變つた樂しみをしやうと云ふそれは野卑な慾望だ。』

本統に然うだらうか、私のこの感情は擬ひものだらうか。自分にも分らない鍍金なのだらうか。若し

萬一にもそんな不純な分子が混じてゐるとすれば、私はあの人達の中に一言葉をも挾む資格はない。―
―仲子は自分で自分を輕蔑してやり度くさへなりました。
『自分一人をさへ完全に保てないくせに、友情だの、愛だのと思ひ上つたことを考へないがいゝ。馬鹿者！』
仲子は何んだか怖いやうな氣がして書齋の中に小さくなつてゐました。良人と子供とより外には、世間との如何なる交渉をも有つのが厭はれ怖れられました。彼女の感情は極度の窮屈さに壓し縮められました。

四月下旬の或日、仲子の家は、良人の友達が集まつて拵へてゐる謡ひ會の順番に當つて、いつになく朝から多忙でありました。午後三時頃には一と先づすべての準備が整つたので、仲子は來客のないうちにと思つて近くの洗湯へ行きました。歸つて見ますと思ひがけもなく、その留守に彼女が訪ねて來た事を知りました。
『まあ、惡かつたねえ。それで、すぐと歸つて行きなすつたの。』
『これから田端へいらして、お歸へりに又お寄りになると仰しやいました。』
と下婢は彼女の云ひ置きを傳へました。
『それにしても今時分何の用事があつて出掛けて來たのだらう。』
噂の事などを考へ合はせて見ますと、仲子の想像は面白くない方へのみ傾きました。同時に又然う思

ふ事が餘りに不安でもありました。

「氣紛れに思ひ立つて一寸と遊びに來たのかも知れない。」

仲子は斯ひ思ひたかつたのであります。

「お一人？」

「いゝえ、赤さんをおんぶなすつて。」

然う聞いて仲子は何故ともなしに少し安心しました。

日の暮れ方にはお座敷のお客様は皆んな揃ひました。初番はN氏をシテとした「西王母」でありました。地頭として家元が來てゐましたので、堂々たる謡になつてゐました。丁度その時、

「御免下さい。」

と云ふ聞き馴れた高い太い聲が玄關に聞えました。心待ちにしてゐたので仲子は自分で出て行きました。久しぶりの彼女が格子戸の外に立つてゐました。

「お客様でせう。」

彼女は大勢の謡ひ聲と、明るい部屋々々の灯で、自分が折悪るく來た事を感じたらしくありました。

「構ひませんの。雪坊ちやん、早くおあんがなさいまし。おみ大きくなりましたことねえ。」

彼女が背中から下ろした子供を仲子は自分で抱へ取つて、先に立ちましたが、下の部屋はお膳を並べてあつたり、大皷(おほかは)を炮じる控の間になつてゐたりして、みんなふさがつてゐました。ちよい〳〵呼び立てられる用事のある事を思ふと二階の書齋へ上るのも臆劫でありました。

「こんなところで失禮しますよ。御免なさいな。」

仲子は彼女を六疊の子供部屋に案內しました。小形な子供机、お伽話の本の詰つた書棚、一方の壁に、去年のクリスマスの贈物に頂いた石板繪のクリストの首と並んで、雜誌から切り拔いた可愛い猫の繪が張りつけられてあるかと思ふと、反對の側には飛行機、鐵砲、背嚢、ラケツトの類まで雜然と排列されてあるその中に、二人は坐りました。

「もういよ〳〵學校へゐらつしやるのねえ。」

本棚の橫に、月曜――算術、手工、國語、遊戲と云ふ風に書いて貼り付けられてある小學一年生の長男の時間割を彼女は物珍らしげに眺めて云ひました。けれどもそんな呑氣な子供の話などをし合ふために、今日わざ〳〵來たのでない事はその顏色が語つてゐました。彼女はびつくりする程、やつれ疲れて見えました。而して非常に沈んでゐました。

「決心していよ〳〵別れやうと思ふのですよ。」

彼女はとう〳〵持つて來た胸の中のかたまりを話し出しました。これまでの關係上、この言葉は仲子の耳にはさほど意外に響く筈はないのでありましたが、いよ〳〵それを聞くと重大な事の起つたのを思はないではゐられませんでした。仲子は胸が硬くなるのを感じました。

「子供はどうする積りなの。」

やつとこれだけの言葉が出ました。大きい方は家へ置いて、小さい方だけを連れて行く積りだといふことを彼女は云ひました。

『春（彼女の長男）の方はあの通りでお婆さんの子供見たいになつてゐますからね、先の事を考へると二人とも連れて行き度いのですけれど、然うなると私が矢張し勉強もなんにも出來なくなりますしね――。』

『Oさんはそれでもう承諾なすつたのですか。』

『承諾はしました。でもね、又色んな事を云つて私の決心を止めさせやうとしてゐるのです。でもそんな事はもうこれまで何度繰り返したか知れないのですもの。今となつてどんなことを云つたつて、OはOの道しか行かない事は分つてゐますわ。今思ひきり別れて了ふのはOのためにもいゝのです。』

Oのためにもいゝ？それはどうだか分らないとしても、OがOの道を變へないだらうと云ふ事は伸子にも考へられました。本統を云ふと、Oと云ふ人の事は伸子にはまだよく分つてゐなかつたのであります。が、たゞ一つ彼は決して惡型の人間ではなさそうだと云ふことだけは思はれました。けれども江戸文明の頽壞した血を受けて、その多くの特徴を備へてゐる上に、彼の私淑してゐると云ふスチルネルあたりの自由主義が惡く影響して、自墮落な、安易な、一種のデカダンであるらしく見えました。彼女との戀愛事件に關して職を失つてからの生活難が、彼のその傾向を著しくさせたのでありませう。且つ精神病者であつたと云ふ父方の遺傳は、彼の容貌にも幾らか現はれてさへゐました。若いのだか年寄りだか分らないやうな、不思議な表情の昏迷、暗い額、長い青い顏をした小柄な身體は、一と目見て彼が陰性の弱い人間であり、激しい生存競爭に飛び込む勇氣のない、懼れた厭世家であるやうに思はれました。同時にその厭世的傾向は、都會人本來の素質たる反對の色々な傾向に裏付けられてゐるために、それは眞摯な強い執着となる代りに、極めて不徹底な、卑怯な、胡魔化しに墮する事を免かれなかつたのであ

ります。彼の吹く尺八はいつも悠々と響いてゐました。家賃が滯つて家を立ち退かなければならなくなつた時でも。明日のパンを心配しなければならない夕方でも。

彼のこの傾向が、一圖に強いもの、美しいものを讃美したがる熱情の並みすぐれて強い南國生れの女の智的に伸びんとする欲望の前に、だん／＼と距離が出來て來たのは、仕方のない成行であつたかも知れません。愛はあるが儘に愛するのが自然だと云はれてゐます。けれども、或る場合にはそれは一種の墮落ではないでせうか。謙遜な態度で、良人が妻に、妻が良人に或る注文を持つ事が惡い事でせうか。寧ろ、二人の愛の成長、向上は、その一點から持ち來されるものではないでせうか。その心の充されない長い歎きを仲子は彼女に見ました。その他の事に就いても――たとへば、O氏の或る無反省な戀愛事件を、仲子は彼女の口から聞いてゐました――今日まで彼女がよく宥し堪へてゐた事は事實であります。仲子の同情は彼女の上にのみありました。

「不幸な事だけれども、仕方がないのねえ。」

深い歎息と共に仲子は矢張り斯う云ふより外ありませんでした。けれども彼女の膝の上にすや／＼と眠つてゐる赤ん坊を見ると、悲しく、氣の毒に思ふ心で一杯になりました。出來るだけの事をして慰めてあげたかつた。いよ／＼別居と定まると同時に必要な經濟上の事までも考へられました。

その時仲子はふと或る事を思ひ出しました。彼女が或る社會主義者と親密な關係を持つてゐると云ふ噂でありました。それはつい二三日前、仲子の耳に這入つた事でありました。が、仲子はその時は氣にも留めませんでした。――或る種類の男性の群の好奇心に迎へられてゐた彼女に、ともすれば附隨させ

やうとされてゐた取りとめもない茶話の一つとして。それ故、伸子は冗談のつもりでそれを云ひ出しました。

「あなたはMさんと大層仲のいゝお友達だつてことを聞いてよ。本統ですか。」

「何を云つてるのですかね。下らないこと。」

一言の許に斯う笑ひ捨てられるのを豫期しながら。――すると結果は意外でありました。彼女の青く疲れた顔が瞬間にぱつと赤く染まつて、まごついたやうな目ばたきをしました。而してそれは斯う云ふ譯だと話し出しました。一と月ほど前、彼女の家でM氏と彼女と偶然二人だけで逢ふ機會がありした。その時M氏が出しぬけに彼の愛を打ち明けました。彼女は驚きました、が、M氏と知つてからの自分の心の過程をよく調べて見ると、彼を愛する芽の存在してゐた事を拒むわけには行かなかつたと云ふのでありました。

伸子はそれを聞くと、今まで不幸には相違ないが、理由は簡單なこととのみ考へられてゐた彼女の別居問題が、急に重大な一事件であつたことを知つて非常に驚きました。伸子は、その瞬間自分の頭の中が不意に冷靜になつたのを感じました。友達の秘密に對するひそかな興味も起りました。伸子はもう先刻膝の上の子供を見た時のやうな涙を目に湛へてはゐませんでした。まだそれ以上隱されてある何物かを嗅ぎつけやうとするやうに、彼女の青い顔を見詰めました。而して伸子ははき〲した聲で、聞けるだけの事を聞いて見ました。

「ぢや今度の別居問題はもと〱それに關係して起つた話なのですね。」

「決してそうぢやありませんの。」

彼女は強く否定しました。且つ、M氏には長く同棲してゐる妻もあり、その上矢張りS社にゐた事のある或る婦人記者H子とも親密な交渉を有つてゐるのだから、容易く彼に許すやうな事は決してしないと答へました。

「Mさんも、H子さんとの關係は不聰明な事だと、自分で認めてゐるんですけれどもね。」

彼女は斯う云つて默つて了ひました。

「お話を聞いてゐると、何んだか大變な渦が湧き上つてるやうな氣がして怖ろしくなりますよ。」

別居のことは別居として、第二の問題は怖ろしいワナである事を忘れてはならない。芽は吹くでせう。が、すべての芽が皆育つわけではないと思ひます。M氏に對するその感情が彼女自身に本統に正しく解剖されるまでには、まだ一年二年の月日を待たなければならないと思ひます。

「私に忌憚なく批評さして頂けば、あなたの第一の結婚はそんな意味から考へて隨分無反省なものだつたと思ひますよ。――初戀と云ふものはまあ誰もそんなものでせうけれど。――でも、今のあなたはもうその時の十八ぢやありませんし、殊に、そんな點には普通の婦人以上に自覺した新しい婦人として立つてゐられるのですからね。だいちあなたの別居だつて、誰のために計畫した事でせう。皆んなあなた自身の成長のために、もうちつと、しつかりした根柢を造りたいために、面倒な家庭的葛藤を離れるといふのが目的だつたぢやありませんか。ね、然うでせう。それに戀なんかしてゐる隙があつて?」

伸子は思ふ通りのことを遠慮なしに云つて笑ひました。

「子供までも一人は犧牲にしやうとしてゐるのぢやありませんか。本統にしつかりしなくちやいけませんよ。この際思ひきつてエゴイストにおなんなさい。自分自身の成長のために。Mさんだつて誰だつて、あなた自身よりも大切なものがあなたにありまして？」

「どうぞ心配しないで下さい。私だつてその事は十分考へてゐるのですから。」

彼女はしほらしい程沈んでゐました。仲子はMと云ふ人の性格や學識に就いては何んにも知らなかつたけれど、彼が社會主義者の勇敢な戰士の一人であるといふ事を思つた時、彼女がそれに引きつけられたのではないかと、それを必然な理由として考へないではゐられませんでした。彼女が異性の如何なる特質に渇きを感じてゐるかを、仲子はよく知つてゐましたから。而してそれは彼女が良人から得ることに失望してゐたものであることを推察し得ましたから。

「あの人は强い所のある異性にならば、誰にだつて負かされる可能性があるのだ。Mだつて、Nだつて同じことなのだ。」

三年前の一靑年との插話がまた思ひ合されました、あの時彼女が妊娠中でなかつたならば、事件はどう發展してゐたゞらうか、と不圖考へた時、仲子は非常に不快な壁にぶつつかつたやうな氣持ちがしました。仲子は彼女に對して夢にも抱いたことのない險しい、或る感情をその時經驗しました。

それはでもほんの一瞬間に過ぎませんでした。目の前の彼女の子供を抱いて、如何にも母親らしい思ひしほれた姿をしてゐるのを見ると、仲子の感情は又忽ち一轉しました。

「この人に何の罪があらう。あの時はまだ若かつたのだ、今だつても若い、やつと二十三だもの。もし

何かの過失が生じたとしても、その一事に依つて宥されてもいゝ筈だ。」

仲子はまだ〳〵彼女を信じてゐました。今度の事もきつと怜悧に反省して行くに相違ないと思はれました。

其處へ座敷から仲子を呼びに來ました。「櫻川」のシテを勤むる筈になつてゐた某氏が不參したので、代りに謠へと云ふのでありました。迷つてゐると彼女も勸めました。

「待つてゐますから謠つてゐらつしやいよ。」

仲子は座敷へ行きました。人買ひに身を賣つた我子を尋ねて、日向の國からはる〳〵迷ひ出た昔の狂女の物語が、今一人の子供を殘し、一人の子供を抱いて家を出やうとしてゐる母親のかなしい心持ちに思ひ比べられました。同時にそれ程の大事を相談するためにわざ〳〵尋ねて來た友達を部屋へ置きつ放しにして、大きな聲を出して謠など謠ふ氣になつた自分が如何にも輕薄のやうに顧みられました。待つてゐる彼女に對してすまない氣がしました。仲子は役をすますと早々に座敷を辷り出て元の部屋へ歸りました。が、其處に見出した彼女の顏の表情には、その瞬間の仲子の心持とはそぐはない或物がありました。彼女は仲子とさし向ひに座つてゐた先刻よりもずつと晴れ〳〵しい樣子をして、夕飯代りに出した「重箱」の辨當を甘さうに食べてゐました。而して仲子が部屋へ這入つて來るのを見ると、

「あなたの聲は本統にいゝ聲ね。」

と誇張した調子で褒めました。仲子は厭な氣がしました。而して思ひました。

「今の大事の場合にこの人は何故あんなお世辭見たいな事を空々しく云へるのだらう。」

と。さう云へば牛込の方へ行つてからの彼女には、世間的にくだけた態度が見えて、調子のいゝ話をしたりする場合のあるのが思ひ合はされました。すべてが生活上の弱味から生じた事だらうと思ふと、それも矢張り咎められない氣もしました。

「これからはきつとよくなるだらう。自分と赤ん坊位のパンなら何をしたつて手に這入ることは六づかしくはあるまい。さうやつて四五年もみつちり勉强すればだん〳〵とよくなつて行くに相違ない。」

仲子はそれを信じてゐました。

「I子さん、これから小學校一年生の積りにおなりなさい。私はいつでもさう思つてゐますよ。御互ひにさうやつて怠けずにやつてゐれば、きつと行けるところまで行けますわ。」

彼女もそれを誓ひました。

歸る時仲子は一緒に門を出て小牛丁先きの植木屋の角まで見送りました。星の暗いおぼろ夜でありました。二人は其處で別れました。夜の冷えを思つて仲子が赤ん坊の上からかけてやつた大きなおねんねこにくるまつて、停車場の方へとぼ〳〵と歩いて行く後姿を仲子は立ち留つて見送りました。而してその友達が今どんなに大事な轉機に臨んでゐるか、又これから先どれ程險しい色々な道に出逢はなければならないかを思ひました。仲子は彼女を愛する心と、その上によき運命を祈る心で一杯になりました。

中一日おいて再び訪ねて來た彼女を二階の書齋で見たのはいよ〳〵昨日家を出てしまつたと云ふ朝でありました。彼女には一昨日の晩のしほれた、哀れげな樣子はもう微塵も殘つてゐませんでした。血色のいゝ元氣さうな顏をして、

「何んだかせい〳〵したやうな氣がしますのよ。」

と云つて笑つてゐました。三年前のあのジプーシー・ガールじみた野生美の魅力――それは久しくその顔から薄れたやうに見えたもの――が俄かに顔ぢゆうに溢れて來たかの如くでありました。伸子はその著しい變化に驚かされました。而して目の前の彼女の自由な、氣輕さうな樣子とは反對に、自分の心持ちはだんだん重く沈み込んで行くのを感じました。友達は久しく望んでゐた道に出たのであります。自分自身の成長のために、苦しい血の戰ひに勝つて來たのであります。一人の親友として一番に悦んでやる人になつてい丶筈の伸子が、その時はどうしてもそんな氣になる事は出來ませんでした。

「あなたのなすつた事は、今では大變な事だつたと思はれますよ。これからが六づかしいんですね。」

其所へ丁度日曜でのんきに遊んでゐた長男は、お馴染の若い伯母さんと久しぶりでふざける積りで梯子段を蹈み鳴らして上つて來ました。彼は母親がいつになくきつい顔をしてゐるのを見ました。が、此の伯母さんの前では少し位ゐ我儘をしたつて叱られないことを知つてゐますので、母親のそんな顔付なぞは無視してゐました。彼は大膽にテーブルへ近づいて彼女に甘へました。而して何度も尋ねました。

「何故春ちやん（彼女の長男）を連れて來ないの。え？いつ連れて來る？僕雪ちやんなんか來たつてつまらないや。おば丶臭くつて僕赤ん坊大きらひ。」

彼は斯う云つて彼女の膝の上の赤ん坊を輕蔑しました。昨日彼女が家を出たのは、姑が兄の春雄を連れて外出した後であつたと云ふ話を聞いたばかりのところでありましたから、伸子は彼の無心な質問を彼女に對して氣の毒に思はないではゐられませんでした。

「春ちやんはおばあ様と何處へかお遊びにゐらしたのですつて。」と取りなすと、ではこの次ぎには雪ちやんをお婆樣へお預けして、兄の春雄を連れて來るやうにと頼みました。

仲子は彼女の顔を見ました。而してその顔が俄かに暗くなつたのを感じました。

彼女は下谷の友達が經營してゐる下宿屋へ一と先づ居るのだけれども、近いうちに何處か靜かな海岸へでも行つて頭を落ちつける積りだと云つてゐました。而してそれまでには又ゆつくり訪ねて來て委しい相談もしたいと云つて、持つて來た一寸とした用事を果すと、そは〱と歸つて行きました。仲子はいろ〱考へた事もあつたし、話して置き度い事もあつたのでしたが、他の機會のある事を思ひました。而してその機會の僅かは、明けの日彼女から受け取つた一つの手紙に對する返事の中に捕へる事が出來ました。仲子は求められた少しの金を使の者へ渡すと共に書きました。婦人が或る主張、必要に迫られて家を見捨てた時、門の外一歩には何が一番に待つてゐるかを考ふる事は、その際何より大切な事でなければならないと云ふ事を。

「ノラはあれから何をして生きたどらう。惡くすると賣春婦になつたかも知れない。」と書いた或る米國の婦人評論家の言葉を、仲子は痛切に考へたのでありました。海岸から歸つて來たならば彼女はすぐ職業を持たなければいけない。仲子は良人に頼んで彼女のために何か收入の道を探して貰ふ事を考へました。仲子は色んな用事で彼女を待ちました。明日にも訪ねて來るとあつた手紙の中の言葉を信じて。

けれども仲子は再び彼女を見る事は出來ませんでした。而して一日二日の後仲子が實際に待ち受け得たものは、意外な打撃、驚愕、羞恥のみでありました。都下の新聞紙は彼女が良人と一人の子供を捨てゝ新たな情人たるM氏の許へ走つた事を報じました。今はその人とK海岸で彼女は一緒に暮らしてゐる事を仲子は知りました。

「お前は本統に馬鹿だよ。あんなに逢つてゐてこの事に氣がつかなかつたのかい。これならもう職業問題もなにもありはしないぢやないか。」

仲子の言葉を信じて彼女に對して常に同情者であつた良人は妻のお人よしを笑ひました。

「I子さんは一體どうなすつたのでせう。あなたは少しも知らなかつたのですか。」

彼女との親しい間柄を知つてゐる他の友達は、仲子の顔さへ見れば、それを一番に尋ねました。仲子はその度に新たな苦痛を感じさせられました。

「私は知らなかつた、が、例へ知つてゐたとしても私の力でどうする事が出來やう。」

斯う思ふ事は自分に何等の責任はないのだと云ふ自分自身への辯解にはなりました。が同時に友情だの愛だのと云つてそれが何にならう。他の一つの強い慾望の前には無造作に投げ出され、蹈みにじられて何等の權威もない悲しみを見ました。

「それにしても彼女は何故あんないゝ加減な嘘で胡魔化してゐたのだらう。あの晩正直に何故打ち明けられなかつたのだらう。」

打ち明ける勇氣のない程自分の行動を間違つたものに思つてゐたのだらうか。間違つたものに思つて

ゐながら、矢張りその中に巻き込まれて行つたのだとすれば……一人の男と三人の女の渦。それはスキラの口をやつと逃れた彼女に取つては、最も怖ろしいカリブディスでなければならなかつたのであります。嚴しい倫理問題は暫く措いて考へたとしても、それは彼女の成長の道では決してありません。彼等が海岸をさして旅立つた時、戀愛の勝利者を以つて誇つてゐたと云ふ噂は、斯う考ふる時の伸子の心を一層嚴正にしました。

「戀愛の勝利者！何んて愚な事を云つてゐられるのだらう。それは十八世紀の女性が、望樓の上で"Sœur Anne……"でも歌ひながら考へる幻影に過ぎない。それが最も進んだ社會革命者と現代の新婦人を以つて任じてゐるもの丶夢なのか。」

伸子は何んだか情けないやうな氣がしました。

海岸からは一二度短い便りがあつて、伸子に對して彼女が非常にすまなく思つてゐると云ふ事が書いてありました。

「……私に對してすまない位ゐは何んでもないではありませんか。たゞあなたが自分自身に對してすまなくないやうになさる事が一番大事だと思ひます……」

伸子はこんな意味の長い手紙を書きました。而して今のあなたには苦い言葉かも知れませんが、兎に角私の意見だけは申上げておきますと云つて、彼女の今度の行動に就いて不贊成な點とその理由を書き連ねました。が、何等の返事も來ませんでした。

時は過ぎて行きました。伸子はもう最初の驚きや亢奮を取り返して冷靜になつてゐました。それと共

に彼女に就いて今まで知らなかつた新たな智識を持つ事が出來ました。人が又伸子の愚を憐むやうにいろいろ數へてくれました。それに依つて伸子があれほど大事がつてゐた友情なぞは彼女に取つては何んでもなかつたらしい事が分りました。

「よくあなたの惡口を聞かされましたよ。」

斯う云つて笑つた人もありました。

「伸子さんのところへ行くと、あれは旨くいゝ子になつてゐるのだ。」

と良人のO氏が或人に話したと云ふ事も伸子の耳に這入りました。

「お前は近視眼なのだから駄目だよ。人間の本統のところが分るものか。」

良人は云ひました。伸子はこれ等の言葉の前に驚いたり、怒つたり、まごついたりしました。それはみんな本統だらうか。彼女が自分の前で話したり、云つたりした事は、本統の彼女から出た言葉ではないのであらうか。この數年の彼女との友情は、空な虛僞だつたのであらうか。向ふはそれ程思つてもゐないのに、自分一人親友ぶつていゝ氣になつてゐたのだらうか。

「さうだ。私を欺ますのは一番わけはない。時々訪ねてくれて、私の氣に入りさうな事を云つたり、私の云ふ事に感心して耳を貸してくれたり、私のきらひな人の惡口を一緒に、否え、私より少し熱心に云つて見せたりしさへすればその人はすぐ私のいゝお友達なのだ――馬鹿者!」

伸子はその時ほど自分をいやな、淺薄な、己惚れやの、お人よしに感じた事はありませんでした。その時、相手から如何に輕蔑され、おめで度く思はれたどらう、と思ふと堪まらぬ程恥しい氣がしまし

た。が、彼女が私のそんな友達だつたのだらうか。いつかの春の森の半日がその瞬間はつきりと仲子の記憶に再現されました。美しい太陽、栗の木、青い草、その草の上に寝されてゐた子供達。それにお乳を飲ませながら熱心に話し合つた談話、母親の愛、自己の成長の希望、天地の大きな力に對する敬虔な崇拜。その圓い輝やかしい、光明的な顔！その時の彼女は今何處に行つたのだらう、と思ふと、驚きも失望も欺かれてゐたと云ふ輕い憤りも、すべてが溶けて、初めてセンチメンタルな悲しみになつて行くのを感じました。

その内に仲子は彼女が小さい子供まで漁夫の家へ預けてしまつて、東京へ歸つてM氏と同棲してゐると云ふ事を知りました。それと共に他の二人の女とのもつれが、だん〳〵複雜に悲劇的になりつゝあつたのは自然の成行でなければなりませんでした。様々な噂が流布されました。彼等の所謂自由戀愛に就いて眞面目な激しい議論や批評の發表されるのも見ました。仲子は今はもうそれ等の事件に對しては何處までも冷靜になる事が出來たし、興味もない位ゐでありましたが、その自由戀愛なるものは隨分おかしなものだと思はないではゐられませんでした。理論はどんな理論でも工夫されます。けれどもその理論を載せ得べき土臺を作る事は多くの困難を要します。一夫多妻にしろ、一妻多夫にしろそれを容れ得べき社會的條件さへ備はつてゐれば何んでもない事であります。プラトーンの理想國に於ては、婦女の共有も兵役も、乃至小兒共養さへも必要な事でありました。が、彼等自由戀愛論者は、その理論を實行し得べき理想國を何時、何處に建設したのでせう。どんな立派な壯麗な大伽藍であつたとしても、土臺がなければ、崩壞は免がれない事であります。すべては長い目で見られなければなりません。彼女はその

黒い髮が白くなつた時、而して母親の顏も見覺へない、一人の漁夫の若者と向き合つた時、初めて自分の通つて來た道の正邪を悟るでありませう。その瞬間に感ずる母親の悲しみと悔ゐほど、痛ましい、悲慘なものが他にあるでせうか。仲子は今はもう侮蔑と憐みより外の何ものをも彼女に對しては感じられないやうな氣がしてゐました。

秋の一日でありました。仲子は二三日前から少し冷えて來た空氣に感じて風邪を引いて寢てゐました。其處へ良人宛の一つの電報が來ました。自分で開いて見ると或る新聞社にゐる友達から、或人の住所を聞きによこしたものでありました。電報で來た位だから急ぎの用事だと云ふ事が察せられました。兎に角良人へこの事を知らせなければならないと思ひましたので、仲子は起きて支度をいたしました。熱があると見えてふら〳〵するから、車を呼びにやつて、それに乘つて六七丁計りの距離にある自働電話まで出掛けました。良人は或る私立大學へ講義に行つてゐる日でありました。

一體仲子は自働電話にはいつもまごつかされる一人でありました。交換手特有の冷たい、叱るやうな事務的な聲が、自働電話だと殊にひどく感じられて、びく〳〵するのでありますが、その日は意外に成効でありました。仲子は其の學校の番號を云つて、大した面倒もなしに、一枚の白銅を小さい隙間に投げ込むところまで行きました。が、いつも其の學校へかける時はそれから先きが又一と骨でありました。電話口に出た事務員に名前を云つてから、良人の講義をしてゐる遠い教室まで給仕か何かゞ呼びに行つて吳れるまで、可なりの時間をその箱の中で待たなければならないのでありましたから。仲子は今日もそれを豫期して居りました。ところが電話口に待ち受けてゐたかと思はれるほど早く、事務員と入

れ代りに良人の聲が受話器を通して聞えて來たのであります。
「なんだ電報かい。あゝそれなら今Y君から電話がかゝつて來たばかりのところだ。……」
斯う云つてその後に何か數語をつぎ足したやうな氣がしましたが、その時箱の外を荷車が大きな音をとゞろかして通つたので、仲子にははつきり聞き取れませんでした。
「何んですつて、え？」
「Mが殺されたそうだ。」
「どうして？まあ、誰に？」
「誰だか分らない。」
「I子さんぢやないでせうか？」
「そうかも知れない。」
仲子はもうそれ以上とても通話が出來ないほど聲が震へてゐました。胸がどき／＼鳴りました。棍棒かなにかで頭をがんとぶんなぐられたやうな氣がしました。仲子はよろ／＼して這ひ込むやうに車の中へ隱れました。M氏に最近第四の女友達が現はれて彼女との間が初めのやうでないと云ふやうな噂を耳にした事が思ひ浮べられました。
「もしそうだつたとしたら……」
彼女の熱情的な性情、家まで、子供まで、尙大事な自分自身の成長の過程までも投げ捨てゝかゝつた戀愛を、裏づけてゐる狂暴な盲目的な力を思ふと、場合によつてはどんな事もしかねまいといふやうな

氣持もしました。

「彼女であつてくれなければよいが。どうぞ、さうではないやうに。」

斯う念ずると共に、何故ともない涙が胸の底から込みあげて來ました。伸子は幌の中で聲を立てゝ泣きました。二三日弱り味の出てゐる身體には、この感動が餘りに激し過ぎたと見えて、伸子は輕い腦貧血を感じました。胸がむかむかして眩暈がし出しました。伸子は水を欲しいと思つて幌の間から覗くと、一軒の水菓子屋の鮮かな林檎の色が、だるい目を刺戟しました。伸子は車を停めさしてその林檎の幾つかを買ひました。而して鼻水と涙を一緒にすゝり上げながら、幌に隱れて百姓の子供のするやうに丸かじりに果物の爽快な液汁を吸ひました。自分の心の中に如何に深く彼女が這入つてゐるかを感じながら。

（一月二十一日脫稿）



鶯姫（一幕五場）—A FAIRY PLAY—

谷崎潤一郎

時　第一場と第五場——現代
　　第二場より第四場まで——王朝時代

所　京都

登場者

（現代の部）

大伴先生　女學校の國語の教師

壬生野春子　女學校の生徒、公卿華族の姫君

鈴木道子　女學校の生徒

木村常子　同

中川文子　同

其の他女生徒多勢

（王朝時代の部）

壬生左大臣

鶯姫

冷泉親王

京極大納言

町尻中納言

梅小路三位

藏人命婦

春日少將

阿部晴明

羅生門の鬼

雷神

其の他隨身、童、雜色等

第一場 京都の南の郊外にある女學校の構内。やゝ上手寄りに校舍の建物の一部が見えて、前方の運動場に臨んで居る。建物は輕快な卵色のペンキを塗つた、新しい西洋館で、教室の硝子窓の外にはゆつくりとしたヱランダが附いて居る。ヱランダの程よき所に、運動場へ降りる石の階段がある。建物の下手側面に滿開の櫻が二三本植わり、その後ろに綠瓦塀が續いて塀の向うにはうらうらと晴れた紺青の空の中に、愛宕山が髣髴と霞に煙つて居る。

ちやうど午後の休憩時間の最中で、多勢の生徒のガヤガヤと戲れ騷ぐ聲が、いかにも陽氣らしく構内に響き渡つて居る。暖かさうな、ぽかぽかした春の日光が、ヱランダの倚子に腰かけて居る大作教授の横顏へ、くつきりと照り付けて居る。教授の年齡は五十五六歲、古ぼけた紺の背廣服を着た、痩せた小柄な人物で、カーライルの肖像をもつと貧相に、もつと愚鈍にしたやうな、皺だらけの正直らしい薄穢い老翁である。今しも午の辨當を濟ま

せて、睡氣ざましに此處へ出て來たところらしく、重ねた膝の上へ兩手を置いたまゝ、ぼんやりと運動場を眺めて居る。

下手の櫻の木の蔭で、四五人の女生徒が、「オイチ、ニ！」と掛け聲をしながら、繩飛びをやつて居る。時々、鬼ごつこをして居る三四人の生徒たちが、上手から下手、下手から上手へ、きやつきやつと笑ひ興じながら、追ひつ追はれつして通り過ぎる。女生徒の或る者は銘仙の綿入れに海老茶の袴を穿き、或る者は瀟洒とした洋服を着て、一樣に派手なリボンを髮に結んで居る。いづれも十二三歲から十五六歲の少女である。

大伴老人は、未だに餘念もなく運動場を視詰めて居る。斜めにさし込む朗かな光線を滿身に浴びながら、折々眩しさうに眼瞼をしばだゝいて、無邪氣な少女等の蝶々のやうに飛び廻る樣子を、うつとりと見惚れて居るらしい。少女等の嬉々たる笑ひ聲が聞える度毎に、老人の、皺の多い、黃色い兩頰に微笑が浮かんで、象の眼のやうな細い瞳には、得も云はれぬ愛嬌が輝いて見える。

十三四の、桃色の洋服を着た少女の一が、片手にラッケットを持つて、息を切らせつゝ上手から駈けて來る。

（少女の一）大伴先生！　あたしたちと一緒にテニスをなさいませんか。

老人は何とも答へず、唯にこにこと笑つて少女の姿を打ち眺める。

（少女の一）ねえ先生！　彼方(あつち)へいらしつて、一緒にテニスをなさいませんか。あたし先生をお誘ひに參りましたのよ。

老人は何か云はうとして、口元をムヅムヅさせたが、再びにやにやと間の拔けた薄笑ひに紛らせてしまふ。

（少女の一、焦れつたさうに肩を振りながら）よう先生！　それとも先生はテニスがお嫌ひなんですか。

（老人）わしかい？　わしはな、文久生れの老人で、テニスなどゝ云ふ西洋の遊びは、好きにも嫌ひにもやつた事がないから、お附き合ひが出來ないのだよ。折角誘ひに來て下さるのは有り難いが、わしは斯うやつて日にあたりながら、皆さんの遊戲を見物して居るの

が一番面白い。

(少女の一)だつて、外の先生たちは誰方だつてテニヲをなさるんですもの。お出來にならなければ私が教へて上げますから、兎に角彼方へ入らつしやいましな。

(老人)いやいや、わしのやうに耄碌すると、何も彼も覺えが惡くなつてな。それに體は利かなくなるし、眼は遠くなるし、此のやうに年を取つては人間もおしまひだよ。まあまああなた方のやうな若い時代が人生の花だ。わし見たいな老人を相手にせずと、子供はやつぱり子供同士で遊んだ方がつきづきしいだらう。(此の老人は、話の中に時々古語を交へる癖がある。)

(少女の一)先生、つきづきしいッて、何のことですか。

(老人)つきづきしいと云ふのは、昔の言葉で似つかはしいと云ふ事だ。枕の草紙などによくある言葉だが、三年級の讀本には出て居なかつたかな。

(少女の一)そんな言葉はまだ教へて頂きませんわ。私は三年生ぢやございませんもの。

(老人)はてな、あなたは三年生ぢやなかつたかな。

(少女の一)えゝ、二年生ですわ。

(老人)さうだつたかね。わしは此の通り耄碌して居るからなう。

(少女の一)ですが先生は、話の中に時々昔の言葉をお使ひなさるんですね。

(老人)うん、大方人間が舊弊だから言葉まで古代になるんだらう。あはゝゝゝ。

(少女の一)それぢやあたし、彼方へ行つて誰か外の人を誘つて來ますわ。

(老人)あゝさうなさい、さうなさい。

少女の一、ばたばたと下手へ走り去る。

老人は又暫く運動場を眺めて居たが、やがてチヨツキのポツケツトから取り出した鐵縁の老眼鏡をかけて、上着の内隱しに入れてあつた小型の書物を膝の上に開きな

から、靜かに讀書に耽り始める。しかし、一ペエヂばかり讀んで居るうちに、だんだん夢魔に襲はれて來るらしく、二三度こくりこくり居睡りをしたかと思ふと、いつの間にやらだらしなく首を項垂れて、ほんとうに寢込んでしまふ。

　その時まで、側面の櫻の木蔭に繩飛びをして居た四人の生徒等は、次第にヹランダの前の方へ飛んで來る。中で一番年嵩なのは、鈴木道子と云ふ四年級の生徒で、十六七歳の、お轉婆らしい少女である。その次ぎは十五六歳の木村常子と中川文子。最年少者は二年生の壬生野春子。四人のうち三人は和服を着、春子だけが純白の淸々しい洋裝をして居る。中高の瓜實顏の、際立つて眉目の秀麗な、十四五歳の少女で、背丈のスラリとした、優雅な體つきの何處か知らに、名門の姫君らしい高貴な品威が備はつて居る。

（鈴木道子、ふと大伴老人の寢姿に心付き、繩飛びの手を休めて三人に目くばせする。）ちよいと、しつ！　しつ！　皆さんお靜かになさい。大伴先生が又此れを（居睡りの眞似をする。）なすつて居らつしやるわよ。

　三人、遊戲を止めてそつと石段の下に歩み寄る。

（木村常子）あら、ほんたうよ。まあ何も知らないで、いゝ心持ちさうに、すやすやと眠つて居らつしやるのね。

（壬生野春子、中川文子）おほゝゝゝ。

　兩人手を口へあてゝ、くすくすと忍び笑ひをする。

（鈴木道子）しつ！　しつ！　お靜かになさいつてば！　何か徒らをして驚かして上げようぢやありませんか。

（中川文子）そんな事をして、後で先生に叱られると大變だわ。

（鈴木道子）大丈夫よ中川さん。私いつでも先生を驚かして上げるけれど、叱られた事なんぞありやしないわ。大伴先生はもう耄碌して居らつしやるんですもの。

（木村常子）えゝさうよ、もう老い惚れて居らつしやるのよ。だから毎日日向ぼつこをして、こつくりこつ

くり居睡りばかりなさるんだわ。

(壬生野春子、中川文子)おほゝゝゝ。

(鈴木道子)あ、いゝ事がある。中川さん、あなたね、そうッと先生の眼鏡を外しておしまひなさい。

(中川文子)外してもいゝこと、ほんたうに叱られやしなくつて?

(木村常子)大丈夫よ、文子さん。

中川文子、足音を盗んでヹランダへ上り、密かに老人の眼鏡を外して來る。

(木村常子)それから、其の本も隠してしまひませう。(文子の後から上つて行つて、老人の膝の上の書物を浚つて來る。)

(鈴木道子)おほゝゝゝ、まだ先生は氣が付かないで眠つてらつしやるわ。まあ何て云ふ氣樂な方でせう。

(中川文子)誰方か此の眼鏡を預かつて頂戴な。あたし持つて居るのは嫌だわ。

(鈴木道子)あ、さう、さう、壬生野さんに預けるのが一番いゝ。さ、その本と眼鏡を此方へお出しなさい。(常子と文子から二つの品を受け取つて、春子を手招ぎする。)ね、壬生野さん、あなたに此れを預けますから、ポッケットへ入れてヂッと隠して居らつしやい。壬生野さんは大伴先生のお氣に入りだから、見付かつたつて叱られやしないわ。

(壬生野春子、至極無邪氣に、)えゝいゝわ。あたし預かつて居て上げるわ。大伴先生なら、恐くも何ともありませんもの。(眼鏡と本とを受け取つて、ポッケットに入れる。)

(木村常子)壬生野さん、それからね、あなた先生の後ろへ廻つて、眼隠しをして御覧なさい。いくら先生が老い惚れて居らしつても、さうすればきつと眼をお覺ましになるわ。

(中川文子)およしなさいよ。そんな事をしちや、なんぼなんでもあんまり悪いと思ひますわ。

(木村常子)いゝ事よ。壬生野さんなら何をなすつて

も、大伴先生はお怒りにならないの。
(壬生野春子)いゝわ、面白いからやつて見るわ。
(鈴木道子、いやに大人振つた、生意氣な句調で、)ほんとに壬生野さんは無邪氣だわねえ。

壬生野春子、拔き足差し足にてヱランダへ上り、ちよこちよこと老人の背後へ廻つて、可愛らしい掌を伸べて老人の兩眼を塞ぐ。

(老人、漸く眼を覺ました樣子で、)誰だ、私の眼を塞ぐのは誰だ。(少女の手頸を捕へ、うるさゝうに首を振る。)

少女等どつと笑ふ。

(老人)こら、こら、徒らをしてはいかん。誰だ、誰だ。
(壬生野春子)先生、私よ、…………誰だかお分りになつて?
(老人、それと心付きながら、わざと惚けて彼女の手頸を撫でゝ居る。)はてな、誰だらうな。
(壬生野春子)おほゝゝゝ。
(鈴木道子)先生のお氣に入りの方よ。ね、先生、お分りになつたでせう。
(壬生野春子)おほゝゝゝ。
(木村常子)あの笑ひ聲がお分りにならなければ、先生は餘つぽどどうかして居らつしやいますわ。
(老人)わしの氣に入りの生徒と?はてな、誰かな。
(壬生野春子)私よ、先生。

と云つて、いきなり兩手を放し、ヱランダを威勢よく駈け出して、上手へ逃げ込んでしまふ。

(老人、眼をしよぼしよぼさせながら、)こら、こら、誰か私の眼鏡を隱したな。おやおや、本もなくなつて居るわい。(立ち上つて、椅子の周圍をウロウロと捜し廻る。)

少女等手を叩いて哄笑する。

(中川文子)先生、御本も眼鏡も春子さんがお持ちになつて居らつしやいますの。たつた今、彼方へ逃げて

いらつしやいましたわ。

(老人、嬉しさうに、)ほゝう、また壬生野さんの徒らかね。あの兒の御轉婆にも困つたものだよ。

(鈴木春子)だつて壬生野さんは、先生の御氣に入りですから、少うしぐらゐ徒らをなすつても仕方がありませんわ。

(文子、常子、互ひに顔を見合はせて嘲けるやうに、)おほゝゝゝ。

(老人、うろたへて、)鈴木さん、そんな事を云ふものではありませんよ。あなたは何だか、私が壬生野さんを贔屓にして居るやうに思つて居らつしやる。

(鈴木道子)でも同級生の方が皆さう云ひますわ。先生は敎場に入らしつても、壬生野さんばかりちやほやなさるんですつて。

(老人)それはな、少しはさう云ふ事があるかも知れんがな。――わしは壬生野と云ふ名前がなつかしくて、それで彼の兒を大切にして居る。壬生野と云ふと、何となく遠い古の、殿上人を想ひ浮べるのでな。

(鈴木道子)それぢや先生は、壬生野さんが華族様のお姫様で、お公卿様の御子孫だから、それで御贔屓になさいますの。

(老人)さう云つては語弊がある。何も華族様の姫君だからと云ふ譯ではない。

(木村常子)いゝえさうだわ。華族様のお孃様だから大事になさるのよ。

(中川文子)平民の子は詰まらないわねえ。

(鈴木道子)ほんとねえ。

(木村常子)ほんとねえ。

(老人)これ、これ、あなた方は生徒の癖に、わしを年寄りだと思つて馬鹿にするのだね。

少女等笑ふ。

(老人)わしは長らく國文の敎師をして居るせゐか、兎角古風な、平安朝の昔を慕ふ癖があつてな。王朝時代の俤の殘つて居るものは何でも好きだよ。壬生野さ

んの樣子を見ると、名前ばかりか顔つきなどにも、何處となく大宮人の血が傳はつて居るやうでな。やつぱり血統と云ふものは爭はれぬて。

（中川文子）そんなら先生は、古風な物は何でもお好きなんですね。

（老人）うん、まあさうだ。私は第一に此の京都と云ふ土地が好きだ。私の故鄕は關東の相模の國でな、昔ならばむくつけき東夷の生れだが、京都が好きなばつかりに、此の學校の敎師になつて、もう彼れ此れ二十年も奉職して居る。どうせ死ぬなら、私は此の都の土になりたいと思つて居るよ。

（木村常子、冷やかすやうに、）死ぬなんて、先生はまだお若いぢやありませんか。

（老人）あはゝゝゝ。木村さんは私の耄碌して居る事を知つて居ながら、なか／＼人が惡いなう。

（鈴木道子）ほんたうですわ。先生はまだお若くつて居らつしやいますもの。耄碌なすつたなんて、いみじき僻事ですわ。

（老人少女一同）あはゝゝゝ。

（老人）あなた方は、多分歷史の先生に敎へて頂いて、よく知つて居るでせう。――平安京の昔には、今ちやうど、此の學校の立つて居る近所に、あの有名な羅生門と云ふのがあつてな。それから此の西の方に、（老人夢みる如き瞳を擧げて、西の空を指す。）西寺の塔があつて、東寺の塔と向ひ合つて居たのだ。此處から北の方へ一直線に、廣さ二十八丈の朱雀大路が續いて居て、朱雀門、應天門、大極殿と連つて行く。（眼を閉ぢて、瞑想に耽るが如き樣子をする。）わしは今でも、あの時分の都の樣がまざまざと見えるやうな心地がする。緋の生絹の水干を着た童を從へて、此の邊を徘徊して居る大宮人の風流な姿が、夢のやうに眼の前へ浮かんで來る。……（依然として瞑目したまゝ、譫語の如くに云ふ。）わしのやうに年を取ると、此の世の中には何の興味もなくなつてしまふが、わしはたゞ、過去の幻を夢に

見るのを樂しみにして生きて居るのだ。

老人が眞面目になつて獨り語を云ふ樣子の不審さに、少女等は呆然として其の顏つきを眺めて居たが、やがて一同くすくす笑ひながら下手へ逃げ去る。

壬生野春子鶯を入れた鳥籠を兩手で捧げながら、愉快さうに上手より走つて來る。

(壬生野春子) 先生! 大伴先生!

(老人、漸く我に復つたやうに眼を開いて) はい、はい、何だね。大さう急き込んで居るぢやないか。

(壬生野春子) 先生、私ね、彼處の櫻の木のところで鶯を摑まへて參りましたの。

(老人) まあ可哀さうに。そんな物を摑まへないで早く逃がしておやりなさい。

(壬生野春子) でもね、大伴先生は小鳥がお好きだから、先生に差し上げようと思つて、籠へ入れて參りましたのよ。

(老人) その籠は何處にあつたんだね。

(壬生野春子) 此れですか、此れはね。いつか先生が教員室に飼つて居らしつたカナリヤの籠でございます。先生のカナリヤが死んでしまつたので、小使さんが此の籠を取つて置いたのですつて。——ちやうど彼處の櫻の枝に、二羽の鶯が止まつて居たのを、私漸うの事で、一羽だけ摑まへましたわ。

(老人) 摑まへるなら二羽とも摑まへてやればいゝに。番(つが)ひの鳥が一羽にされては、嘸かし籠の外が戀ひしいだらう。可哀さうだから空へ放しておやりなさい。

(壬生野春子) 二羽の鶯が一羽になると、なぜそんなに可哀さうなんですか。ねえ先生。

(老人) はゝゝゝ。あなたはまだ子供だから、さう云ふ理窟は分るまいがの。——しかしあなたももう直きに、物の哀れを知り初めるだらう。はゝゝゝ。(薄氣味惡く笑ふ。)

(壬生野春子) でも先生、私が折角摑まへて來て上げたのですから、カナリヤの代りに飼つておやりなさいましな。先生が可愛がつておやりになれば、鶯だつて

可哀さうな事はありませんもの。

（老人）さうかな。あなたが其れ程に云ふのだから、飼つて置くとしようかな。

老人、鳥籠を受け取つて、椅子の傍に据える。授業の知らせの鐘が鳴る。

（老人）さあ、さあ、授業が始まつたから彼方へお出で。私は此の時間は隙だから、また本でも讀むとしよう。（ポッケットを捜つて急に思ひ出し）お、さう、さう、壬生野さん、あなたは何か、私の物を隱して居るだらう。

（壬生野春子）おほゝゝゝ。先生御免なさい。

春子、老人の膝の上に眼鏡と本とを投げ出して、慌しく下手へ馳せ行く。

老人は相變らずにこにこしながら、春子の後ろ影を見送つた後、眼鏡をかけて再び讀書に耽り始める。二階のガラス窓の中は音樂の教室と見えて、オルガンの音と共に多勢の女學生の合唱が、陽氣に慵げに聞えて來る。

（唱歌）春の彌生の曙に、四方の山邊を見渡せば、花盛りかも白雲の、かゝらぬ隈ぞなかりける

…………

此の唱歌が、幾度となく繰り返されて、長く長く續いて居る。階下の教室には地理の授業が始まつた所らしく、一人の生徒の、直立の姿勢で教科書を朗讀する樣子が、ガラス越しにちらちらと隱見する「京都市は、山城平野の北隅にあり。行政上、上京下京の二區に分る、市街極めて端正なり。此の地は桓武天皇奠都以來、一千有餘年の帝都たりし處、京都御所を始め、神社、佛閣、名所舊蹟多く、山水明媚にして近傍形勝の地に富む。就中、嵐山高雄山最も名高し。………」など讀み上げる聲が、折々鮮明に洩れて來る。遠くの方で體操をする生徒等の掛け聲が、「一、二、一二、………」と、のどかに響き渡る。稍西に傾きかけた光線が、いよいよ麗らかに老人の姿を照らして居る。

老人はいつの間にか又居睡りをし始める。遂には膝の書物を床に落して、伸び伸びと椅子に凭れたまゝ、ぐつすり寢入つてしまふ。唱歌、朗讀、體操の掛け聲が、まだぼんやりと聞えて居る。

エランダの上手から一匹の青鬼が現れて、老人の寢息を窺ひつゝ傍に近寄り、ちやうど先刻の少女のやうに眼鏡を外して眼隱しをする。

(老人) 誰だね、また徒らをする者は？　壬生野さんかね。

(青鬼、からからと笑ふ。) おい爺さん、今度は相手が違つて居るよ。

(老人、訝しさうに眉を蹙め)、はてな、つひぞ聞き馴れない聲のやうだが、あなたは一體誰方かな。

(青鬼) 己かい？　己は鬼だよ、青鬼だよ。嘘だと思ふなら己の手頸に觸つて見ろ。(老人、眼を塞がれながら、おづおづと鬼の手頸を撫でる。)どうだ、壬生野子爵のお孃さんの手とは、大分違つて居るだらう。第一己の手には指が四本しかない。それに鷹のやうな爪が生へて、熊のやうな毛がもぢやもぢや附いて居るだらう。

(老人、俄かにガタガタ顫へ出す。)た、た、たすけてくれ。私は鬼に取り兇かれるやうな惡い事をした覺えはない。

(青鬼) あはゝゝゝ。覺えがないとは云はせないぞ。お前はいゝ年をして、おまけに學校の先生でありながら、あの無邪氣な壬生野子爵のお孃さんに懸想して居るだらう。

(老人) と、と、とんでもない事だ。わしは唯、過去の夢に生きて居る人間なのだ。わしはあの女の兒を、古の物語にある姫君のやうに想像して、そつと喜んで居るだけだ。いくら學校の教師だつて、そのくらゐの事は許してくれてもいゝだらう。

(青鬼) いや、いや、何と云つてもあのお孃さんに懸想して居る。爺さんの癖に、お前はなかなか嘘をつくのが上手だな。

(老人) 私は決して嘘は云はない。——正直を云ふと私は遠い古の夢の中で、あの兒に懸想して居るかも知れない。平安朝の昔に、わしが殿上人の公達に生れた

と想像して、あの美しい春子姫のやうな、やむごとない娘御に、紅梅の小袿を着せ、精好の袴を穿かせて、古風な戀を樂しんだら、どんなに世の中が面白からうと、そんな妄想に耽ることはあるかも知れない。だがもう其れは、至つてたわのない、ほんの一時の幻なのだ。

（青鬼）はゝ、だんだん本音を吐いて來たな。――ところで爺さん、お前は平安朝の昔の物なら、何でも好きだと云つたつけな。

（老人）まあ大概は好きな積りだが。

（青鬼）すると爺さんは己を嫌ふ譯には行くまいぞ。己は此れでも、平安朝の時代から、此の近所の羅生門に巣を喰つて居た鬼なのだ。ほら、お前は覺えて居るだらう。――むかしむかし、都良香に朗詠の下の句を敎へてやつたと云ふ、有名な羅生門の鬼は己の事なのだ。

（老人）はゝあ、あの朗詠の下の句は何とか云つたな「氷消浪洗舊苔鬚」――と云ふのだつたかな。

（青鬼）うんさうだ。よく覺えて居てくれたな。耄碌してもさすがに爺さんは國文の敎師だけある。あの時己は、都良香が困つて居たから、ちよいと下の句を附けてからかつてやつたのだ。何と此れでもなか〳〵えらい詩人だらう。――己は其の後あまり人間を馬鹿にしたものだから、とうたう渡邊綱と云ふ恐ろしい奴に捆まつてな。腕を片つ方斬り取られて、非道い目に會はされたが、直きに取り返して、また元の通りに體へくつ着けてしまつた。こんな重寶な眞似は、人間には出來ないだらう。

（老人）ではお前さんは、其の時分から今日まで生きて居なさるんだね。

（青鬼）さうともさ。己が棲んで居た羅生門も、立派だつたのは僅かの間で、弘仁七年の八月の大風に倒れてからは、再建しても碌な物は建たなかつたよ。己も王朝の末の頃には、時々姿を現はして人間界を騷がし

てやつたが、それきり今日まで徒らを止めて居たんだ。しかし爺さんがあんまり昔を戀ひしがるから、つひ氣の毒になつてな、王朝時代の鬼の姿をお前に見せにやつて來たのだ。――さあ爺さん、別にお前を取つて喰はうと云やあしないから、氣を落ち着けて、とつくりと己の樣子を見るがいゝ。(眼を塞いで居た手を放す。)どうだ、己の此の恰好は、そつくり昔の繪卷物にある通りだらう。

(老人、鬼の姿を見上げ見下ろして、つくづくと感心する。)成る程なあ、お前さんがさうやつて立つて居ると、地獄草紙の古畫からでも拔け出して來たやうだなあ。――たとへ鬼だらうが蛇だらうが、王朝時代の遺物だと思ふと、私は嬉しくつて體がぞくぞくして來るよ。

(靑鬼)爺さん、お前が其れ程昔の世の中に憧れて居るなら、一番己の神通力で、王朝時代の都の景色を、此處へ出現させてやらうか。

(老人)えっ、お前さんにそんな事が出來るのかい。

(靑鬼)おい、おい、爺さん。あんまり己の能力を見縊つて貰ふまいぞ。己はな、斯う見えても人間以上の自在力を持つて居るのだ。望みとあらば、過去の世界でも未來の世界でも、立ち所に眼の前へ作り出して御覽に入れる。

(老人)わしの望みは未來にはない。たゞもう過去の幻にあるのだ。

(靑鬼)よし、よし、そんなら過去を見せてやらう。だが、己がお前に見せるのは幻ではないのだぞ。實際にあつた過去の世界なのだぞ。つまりお前が王朝時代の人間に生れ變つて、その頃の平安京に住んで居るのだと考へれば、間違ひはないのだ。

(老人、歡びの餘り身を慄はせて、)えっ、そ、そんな不思議な事が出來るのかね。

(靑鬼)出來なくつてどうするものか。さ、己の云ふ事を聽いて、もう一遍眼を潰つて御覽。(再び老人の眼

を塞ぐ。)――いゝかな。お前が今、斯うして休んで居る學校の廊下は、王朝の昔に、ちやうど羅生門のあつた所なのだ……いゝかな。お前はもう、千年ばかり前の時代に溯つて、羅生門の樓閣の上に、鬼ど一緒に住んで居るのだぞ。……

此の言葉と共に舞臺だんだんに薄暗くなる。

第二場、 舞臺は王朝時代の平安京の光景となる。中央に巍然たる羅生門の建物。門は丹艧粉壁の二重閣。屋蓋には碧瓦を葺き、頂上に黄金の鴟尾を飾り、簷に青銅の風鐸を吊るす。「羅生門」の額の懸つた正面に石の階段を設け、階段の前に一條の溝があつて、其れに石橋が架せられる。門の後ろは其の當時の京都の市街。兩側に柳の行路樹を植ゑた朱雀大路の遠景。

時刻は第一場と同じく、春風駘蕩たる卯月の日の午後。麗日煕々として斜に樓門を照らす。

女學校の唱歌、朗讀、體操の掛け聲等が、恰も夢の中で聞くやうに、何處からともなく未だに微かに洩れ傳はる。老人は依然として眼を塞がれたまゝ、鬼と一緒に樓上の丹塗りの勾欄に凭れて居る。門前の石橋のほとりに、賤民の童どもが、伴大納言の繪卷にあるやうな服裝をして、腹這ひになつたり、あぐらを搔いたりして遊んで居る。彼等は不思議にも一樣に默々として、菓子をムシヤムシヤと頰張りながら、靜かに群がつて居る。時々、上手或ひは下手から、男女の庶民が通り過ぎる。

(青鬼) さあ爺さん、もう眼を明いても大丈夫だ。(眼隱しの手を放す。)どうだい、見晴らしがいゝだらう。かう云ふ天氣に此處から眺めると、都の景色は一と眼に見渡せる。ほら、彼處に高く聳えて居るのが東寺の塔。此方にあるのが西寺の塔。(順々に空の四方を指さす。)それから今度は此方を御覽。(兩人立ち上つて、側面の勾欄の方へ步いて行き、小手を翳して遙かに朱雀大路を望む。)――此れが有名な朱雀大路だ。それ、其の右に見える町が宣風坊、左の方のが宣義坊、それからもつとズッと手前の、大路の右側にちよいと立派な邸があるだらう。

（老人）ふん、ふん、

（青鬼）あれがな、以前は六孫王經基の住んで居た邸なのだ。

（老人）あの、ずつと向うの左側に、長い長い築土の塀を繞らした、嚴めしい御殿の甍が見えるが、あれは誰方のお邸かな。

（青鬼）あゝ、あれか。あれは朱雀院と云つて、上皇樣のお住まひになる御殿だよ。あの築土は四町四方もあるのだから長い筈さ。はてな、今日は内裏に何かお祝ひでもあるのかな。朱雀門の前の廣場に、大分牛車が立て込んで居るわい。

（老人）どれ、どれ、何處に朱雀門があるんだね。

（青鬼）ほら、此の大路を眞直ぐに行つた突きあたりに、丹塗りの柱がちらちらと霞んで見えるだらう。

（老人）はゝあ、成る程大分遠方だな。惜しい事に霞が深くつて、私にはよくは分らんが、あの門の屋根の上に、ぴか〱と金色に光つて居るのは何だらう。

（青鬼）あれは樓門の鴟尾が、日に反射して輝いて居るのだ。あの先に又應天門があつて、それから蒼龍樓、白虎樓、大極殿となるのだが、爺さんにはとても見えまい。さあ彼方へ行つて、往來の風俗でも見る事にしよう。

兩人、再び正面へ戻つて勾欄に肘をかける。軟風がそよそよと吹いて、檐の風鐸を鳴らす。

（青鬼）何だかいやに生暖かい風が吹くな。春は此れだから睡くなるよ。

（老人）おや〱、其處の橋のところに子供たちが日向ぼつこをして居るやうだ。鬼の居るのが恐くないのかね。

（青鬼）なあに彼奴等には知れやしない。己は忍術を使つて、お前と己の姿を、人間の眼に映らないやうにして居るのだ。

（老人）それにしても此の子供たちは、先から馬鹿に大人しいな。さすがに平安朝の童は違つたものだ。

（青鬼）あはゝゝゝ、つまらない事に感心するな。彼奴等は物を喰つて居るから、それで大人しいんだよ。

（老人）子供の喰つて居るものは、あれは何だらう。

（青鬼）あれはつばい餅と云つてな、椿の葉ッぱに餅をくるんだ菓子なんだ。

（老人）そんな物がよく喰へたものだな。金鍔や羊羹をたべさせてやりたいな。

（青鬼）おつと爺さん、さつきの約束を忘れてはいけないよ。お前は何處迄も王朝時代の人間なのだ。大正の世の中の女學校の先生ではないのだよ。

（老人）おゝさうだつけ。わしはすつかり忘れて居た。

其の時まで無言の狀態を續けて居た童共が、急に勢よく語り始める。

（童の一）おい、おい、此の羅生門に鬼が居ると云ふ噂だが、本當か知ら。

青鬼、びつくりして思はず首を縮める。

（童の二）嘘さ、嘘に極まつて居るさ。だつて誰も見た者がないぢやないか。

（童の三）馬鹿を云へ、見た人間は多勢居るぞ。内の親父はな、此の間東の市の棚へ紵を買ひに行つてな、晩に遲く此處を通つたら、あすこの勾欄のところに、（門を指さす。）たしかに鬼が一匹居たとよ。

（童の四）鬼なんぞ己はちつとも恐くはないぞ。己は今に賴光樣の家來になつて、鬼退治をしてやるんだ。

（童の五）法螺を吹くのもいゝ加減にしろ。お前のやうに嘘をつく奴が、却つて鬼に浚はれるんだつて、己の知つて居る仁和寺の坊さんがさう云つたぞ。

菜を賣り歩く販婦、野菜の籠を頭に載せて、賣り聲高く呼ばゝりながら、下手より上手へ通る。

（販婦）菜はいらんかな。――すゞな、すゞしろ、あしなづな、せり、はくべら、みつばせり、――菜はいらんかな。

販婦と入り違ひに、上手より壺裝束の一人の貴婦人が右の手に山吹の枝を携へて緩やかに歩み出で、市女笠を傾けて西の空の日脚を眺めながら、羅生門をくゞつて下手へ去る。

(老人)今此の門をくゞつて行つたのは、何處の女だらう。

(青鬼)さやうさ。いづれ上つ方の御殿に仕へて居る女房か何かだらう。此の近所のお寺へでも、お參りに行くところらしいな。

(老人、うつとりとして女の方を振り返りながら、)わしは壺裝束と云ふものを初めて見たが、或る程風流なものだなあ。あゝして片手に山吹の花を提げて、都の大路をしとやかに歩んで行く樣子は、まあ何と云ふ奥床しい風情だらう。わしはどうやら、嬉しくつて懷くつて、涙がこぼれて來る。

下手より苧垂衣を着た女が、雜色の男をつれて歩いて來る。羅生門の下まで來ると、女はさもさも疲れたやうに石階に腰うち掛け、衣の間から臈たけた美しい眉根を露はして子供等に尋ねる。

(女)なう、なう、其處に居る童たち。妾は都の神泉苑のほとりまで、所用があつて行くのぢやが、道が分らいで難澁して居る。どうぞ教へて賜らぬかいな。

(童の一)何だつて、神泉苑へ行くのだつて？そんな所は己あ知らないや。

(童の二)知つて居るけれどまだまだ道のりが餘つぽどあるぞ。此れから此の路を東へ行つて南へ曲つて、西へ行つて北へ廻つて、五里も十里も先の方だぞ。あつはゝゝゝゝ。

(雜色)やい、やい、此の餓鬼共は己が御主人を嬲るのだな。

(女、手もて隨身の男を制する。)これ、これ、そのやうに强う云ふものではない。――なう、其處なお子たち、妾はな、播磨の國の飾磨の里から、はるばると都へ上つて來た者ぢや。どうぞ路を教へて賜れ。

（童の三）ふゝん、それぢやお前は田舍者だな。

（童の四）田舍者には都の廣さは分るまい。神泉苑へ行く迄には、大路小路が何本もある。針小路、梅小路、鹽小路、北小路、綾小路、具足小路……

（童一同）わッはゝゝゝゝ。

（雜色）この餓鬼めら！云はせて置けばいゝ氣になつて馬鹿にし居る！えゝ、斯うしてくれるわ……（いきなり一人の子供の頭を擲る。）

（女）これ、これ、手荒な事をするではないぞ。

（雜色）いえ、いえ。私に任せてお置きなされい。

（子供の一）畜生！よくも己を擲りやあがつたな。

（子供の二）やつつけちまへ。

雜色と子供等と入り亂れて喧嘩をする。上手から、一人の隨身らしい男、細纓の冠に緌を附け、闕腋の袍を着て胡籙を負ひ、弓を抱へつゝ急ぎ足に出て來る。

（隨身）こら、こら、何をそのやうに騷いで居る……壬生の大臣の姫君さまのお通りぢや。退らぬか、退らぬか。

（女）おゝ、それ、それ、大臣の姫君のお通りぢや、早う彼方へ行かうわいな。

苧垂衣を着たる女、雜色の手を曳いて下手へ退場。その後から子供等がバラバラと逃げて行く。

（老人、樓上に腕組みをして考へる。）はてな。

（青鬼）爺さん、何を考へて居るんだね。

（老人）こんな事を云ふと、又お前さんに怒られるかも知らないが、壬生の大臣の姫君なら、若しや彼の春子姫の御先祖ではあるまいか。

（青鬼）あはゝゝ。まだお前は春子姫を覺えて居るね。――いかにも爺さんの云ふ通り、壬生の大臣は春子姫の御先祖だよ。今此處をお通りになる姫君と云ふのは、鶯姫と云つてな、顏立ちと云ひ、氣象と云ひ、年恰好と云ひ、春子姫にそつくり其の儘のお孃樣さ。

（老人、勾欄に掴まりながら、夢中になつて上手を見込む。）あゝ、彼處へやつて來る車の中に、姫君が乘つ

て居らつしやるのだな。だが殘念な事に、御簾が垂れて居て、お姿がまるきり見えない。――何とかして、一と眼でもいゝから拜む譯には行かないかな。ほんたうにたつた一と眼、姫のお姿を拜ましてさへ頂ければ私はどんなに仕合はせだらう。

（靑鬼）そんなにくよくよしないでも大丈夫だ。あの車が此處を通る時、きつと姫君は御簾の隙から顏をお出しになるだらう。己には其れがちやんと分つて居る。

（老人）うまくお顏が拜めさへすれば私は死んでも本望だ。――あゝ早く車が此方へ來ないかな。馬鹿に挽き方がのろいぢやないか。

（靑鬼）あの車の中にはな、姫君の外にもう一人、藏人の命婦と云ふ、お附き添ひの乳人が乘つて居る筈だ。

　鶯姫の乘りたる手車しづしづと上手より挽かれて來る。車の前後には、以前の隨身の外に柳さびの烏帽子を附け、白い狩衣を着た雜色共が七八人護衞して居る。姫の行列の一團が將に羅生門の前を過ぎて、殆んど下手へ入らんとする時、空の彼方からけたゝましい杜鵑の啼き聲が落ちて來る。

（藏人命婦の聲、車の中より）もし、姫君樣、ほとゝぎすが啼きますぞえ。

　同時に車の後方の御簾がさつと打ち上げられて、中から姫と命婦とが顏をさし出す。姫は全く壬生野春子と同人らしく見える。

（鶯姫）おゝ、ばあや、彼處を御覽。あれ、あれ、彼處の雲の中に、ほとゝぎすが飛んで行くぞいな。

　姫愛らしい瞳を開いて、暫くの間恍惚と空を眺める。

（藏人命婦）ほんにまあ珍しい、今年は此れが初めてでござんする。

（鶯姫）あのほとゝぎすの聲を聞いたら、妾は野遊びがしたうなつた。今日のやうな麗かな日に、此のまゝ家へ歸るのは、殘り惜しいわいな。

（藏人命婦）いえ、いえ、其れはなりませぬ。今日は母君の御代參で、石淸水の八幡宮へ詣うでたのではござりませぬか。あまりお歸りが暇取つては、大殿樣に叱られまする。

（鶯姬）いやぢや、いやぢや、妾はどうでも歸るのはいやぢや。野遊びが惡くば船遊びをする程に、早う嵐山へ連れて行きや。

（藏人命婦）はて、さて、姬君には又しても、なぜ其のやうにおむづかりなさるのでござります。おゝ、さうぢやさうぢや、今宵は內の大殿樣が、姬君の婿えらびに、それはそれは美しい、うら若い公達の方々を、お邸へお招ぎ申して、饗宴のおん催しがある筈ではござりませぬか。早うお歸り遊ばして、その御用意をなさらねばなりませぬぞえ。

（鶯姬）婿えらびなぞどうでもよい。妾は野遊びがしたいのぢや。

（藏人命婦）いえ、いえ、さうは參りませぬ。これ方方、早う車をやつて賜。

（雜色一同）畏まつてござります。

藏人命婦、姬を車の奧へ抱き込んで御簾を卸す。姬、尙も「いやぢや、〳〵」と云ひ募りながら、下手へ挽かれて行く。

（靑鬼）あはゝゝゝ。どうだ爺さん、あの無邪氣な樣子は、壬生野子爵のお孃さんに生き寫しだらう。

（老人）うーん。（呻るやうな聲を出して感服する。）

（靑鬼）婿えらびなぞどうでもよいと云ふところは、ほんたうに可愛いゝぢやないか。

（老人）それにしても今宵の饗宴に招かれる公達は、何と云ふ果報者だらう。私もさう云ふ身の上に生れて來ればよかつたが、考へて見ると運がないなあ。

（靑鬼）おい、おい、冗談ぢやないぜ。姬のお顏を一と眼拜んだら、死んでもいゝと云つた癖に、だんだん望みが殖えて來たな。

（老人）でもなあ、つく〳〵な自く分が情なつて來る

からなあ。
(青鬼) それぢや爺さん、いつその事かうしたらどうだらう。お前なんざあ、どうせ人間の數にも足りない男だから、思ひ切つて今日限り人間を止めてしまつて、己たちの仲間へ這入らうと云ふ氣はないかね。
(老人) お前さんたちの仲間と云ふと、鬼になるのかね。
(青鬼) うん、まあさうだ。
(老人) えゝ、めつさうな。そいつばかりは眞つ平御免だ。
(青鬼) 何もそんなに恐がる事はないだらう。人間ならこそお前は運が惡いのだが、鬼になれば己のやうな神通力が備はつて、好きな眞似が出來るんだぜ。早い話が饗宴の席へ忍び込んで、人間共が知らない間に、鶯姫を浚つて來たつて、誰も何とも云ふ者はありやしないぜ。
(老人) 成る程、さう云はれると其れもさうだな。
(青鬼) だからよ、惡い事は云はないから、鬼になつてしまひなさい。第一お前、人間と違つて千年でも二千年でも生きて居られて、自由自在に世の中を渡れるだけでもどんなに得だか分りやしない。――どうだ爺さん、得心が行つたかね。
(老人) 全くお前さんの云ふ通りだ。しかし何かね、鬼になるには、餘程手數がかゝるか知らん。
(青鬼) なあに譯なしだ。お前の決心が着きさへすれば、己が此の場で直ぐに禁厭を施してやる。
(老人) それでは早速お前さんに賴むとしよう。わしは鬼になり次第、此れから直ぐに鶯姫の邸へ出掛けて見る積りだ。
(青鬼) よし、よし、そんならちよいと此方へ來なさい。

鬼、老人を伴うて樓の背面に隱れる。

(青鬼の聲) さあ、爺さん、お前は青鬼になりたいか赤鬼になりたいか。
(老人の聲) わしは赤鬼になりたい。……………

舞臺暗くなる。

第三場　壬生大臣の邸内、泉殿の場。舞臺やゝ上手に、池に臨んだ泉殿があつて、下手の廊に續く。池の汀の前栽の櫻花が、盛りを過ぎて折々ちらほらと風に散つて居る。

今しも酒宴の最中で、殿上の正面から上手側面の坐席へかけて、冷泉親王、梅小路三位、春日少將、京極大納言、町尻中納言など、五人の客人が居流れる。いづれも二十歳前後の、花やかな若々しい公達揃ひで、紅梅、二藍、蘇芳、濃紫など思ひ思ひの色目の直衣に指貫を穿く。下手側面の疊に、主人役の壬生左大臣が控へて居る。四十歳ぐらゐのでつぷりと太つた、緒ら顔の鷹揚らしい男振りである。

既に全く日が暮れて、庭の面は暗くなつて居る。殿上の四隅に燈臺を据え、主客の前には酒肴を載せた折敷、高杯が置かれて、卯花の汗衫を着た女童が物を運んで居る。一同酒に醉ひしれて、管弦を弄び朗詠を歌ひ、大分御機嫌の體である。一番上座の冷泉親王は琵琶を彈じ、梅小路三位は横笛を吹き、春日少將と京極大納言とは拍子を打ちつゝ詩歌を吟じ、町尻中納言は鼓を鳴らして居る。

何處やらで、微かに遠山寺の梵鐘の音が聞える。

(春日少將、少し仰向き反り返つて、眼を潰りながら朗詠を歌ふ。)巫女廟花紅似粉。昭君村柳翠於眉。

(京極大納言)いや、お見事、お見事、今度は某が吟ずる番ぢや。えつへん!(と云つて、同じやうに眼を潰つて反り返る。)花明上苑輕軒馳九陌之塵。猿叫空山斜月瑩千巖之路。

(壬生大臣)やんや、やんや! 少將殿も大納言殿もなか〳〵御立派なお聲ぢやな。

(高倉三位)おぢやが大臣には御油斷をなされますな。二人とも此の聲で女子を欺し居るのぢやわい!

(一同)わッはゝゝゝゝ。

(冷泉親王)それはさうと、鶯姫はいかゞなされた。早うお顔を見たいものぢや。

（町尻中納言）そのこと、そのこと、いかにも美しい姫君でも、あまり大事に隠まうて置かれると、遂には黴が生へまするぞ。

（一同）わッはゝゝゝ。

（壬生左大臣）ほんに姫は何をして居るのぢや。これ、これ、早う行つて呼んで參れ。

（女童）はゝあ。

女童下手の廊を走り行く。

（春日少將）鶯姫が見えるやうに、ちと鶯の朗咏でも吟じませうかな。

（京極大納言）いかさま、其れが宜しからうて。

（春日少將）誰家碧樹鶯啼而羅幕猶垂。幾處華堂夢覺而珠簾未ゞ卷。

（京極大納言）どれ、どれ、今度は某、一つ鶯の催馬樂を歌ひ申さう。――「梅が枝に來居る鶯ャ、春かけてハレ、春かけて啼けどもいまだャ、雪は降りつゝ、あはれそこよしャ、雪は降りつゝ。」

鶯姫、葡萄色の唐衣に白綾三重襷の裳を着け、衵扇をかざしながら、藏人命婦に手を曳かれて、不承無精に廊を歩み來る。

（藏人命婦）もし、姫君、あれをお聞きなさりませ。あの通り皆様が鶯の歌をうたうて、姫のお越しをお待ちなされて居られまする。さあ、さあ、そのやうにおむづかりなさらずと、早うお出でなさりませいなあ。

（鶯姫）いやぢや、いやぢや、妾は聟えらびなどするのはいやぢや。

其の時、一匹の赤鬼が姫の跡を追うて廊を走り出で泉殿の下手の簀子にあぐらを掻いて、酒宴の模様を眺めて居る。人々一向に心付かず。

（藏人命婦）いえ、いえ、なんと仰つしやつても、今宵の宴會に姫君がお越しなさらいでは、大殿様のお顏が潰れてしまひまする。（無理やりに姫を引き擦つて、泉殿の入り口の御簾の前まで連れて行く。）それ、それ、ちよいと此處から中の様子を御覧なさりませ。何とま

あ、お綺麗な公達ばかりが、お揃ひなされたではござりませねか。あれ、彼處の上座に琵琶を彈じて居らせられるのが、忝くも冷泉親王でござりまするぞえ。それから其の右に控へておゐでなさるのが梅小路三位、左のお方が春日少將、あの、向うの席に居らつしやるのが京極大納言、そのお隣りが町尻中納言――まあほんに誰方樣も、雛のやうに美しい方々でござんすわいな。なう姫君、あのお五方のうちで、誰方が一番お好きでござりまする？

(姫君) 妾はあのやうな酔拂ひは大嫌ひぢや。みんな氣味の惡い人たちぢや。

姫が隙見をするのを知らずに、一同ますます酩酊して騷ぎ喚いて居る。管弦や催馬樂の調子が、だんだん雜亂に奔放になつて來る。

(春日少將の催馬樂) 我家はとばり帳をも垂れたるを、大君きませ聟にせん、御肴に何よけん、………

(壬生大臣、少將に釣り込まれて、一緒になつて歌ふ。)鮑栄螺子をかゝせよけん。

(一同) わッはゝゝゝ。

(藏人命婦、袖を口にあてゝ、)おほゝゝゝ。

(鶯姫) あれ、あの樣を見やいなう。父上までが御一緒に、淺ましう酔ひしれて居るぞいな。

(梅小路三位) さあ、さあ、もつと歌はうではござらぬか。今度は某がやる番ぢや。――「西寺の老鼠若ねずみ、御裳摘んづ袈裟摘んづ、法師に申さん師に申せ。」

(鶯姫) おほゝゝ、あの方々は、どうやら氣違ひのやうぢやわいの。

(町尻中納言、ぐたぐたに酔ひ崩れて直衣の襟を外し、前後左右へ體を搖す振りながら、)よし、よし、では某も歌ふといたさう。――「酒をたうべて、たべ酔うて、たんところんぞまうで來る。よろぼひぞまうで來る。」

藏人命婦が我を忘れて隙見をして居る間に、姫は欠伸

を二つ三つして、飽き飽きしたやうに下手の廊へ逃げて來る。例の赤鬼が得たりと姫の傍へ馳せ寄つて、輕く彼女の袂を捕へる。

(赤鬼) 姫君樣、姫君樣。

(鷲姫) 妾を呼ぶのは誰ぢや。

(赤鬼) へい、へい、私はな、都の羅生門に長年棲んで居りまする、赤鬼でござりますが、ちとお姫樣へ申し上げたい事があつて、此れへ姿を現はしました。

(鷲姫) なに？羅生門の赤鬼ぢやと？

(赤鬼) へい、へい、さやうでござります。

(鷲姫) さうして其方は、妾に何の用事があるのぢや。

(赤鬼) 私はな、姫君樣を、よい所へお連れ申して上げようと存じまして、推參いたしたのでござります。――姫君樣には、野遊びがしたいと仰つしやりましたな。

(鷲姫) おゝさうぢや。妾は野遊びがしたいわいの。

(赤鬼) 船遊びもお好きでござりまするな。

(鷲姫) おゝ、船遊びも大好きぢや。

(赤鬼) あの醉ひどれの客人たちは、皆お嫌ひでござりませうな。

(鷲姫) ほんに氣味の惡い人たちぢや。妾はあのやうな男子たちが強い嫌ひぢや。

(赤鬼) よう仰せられました。何と云ふお悧巧な姫君樣でござりませう。――もし、もし、それではな、私と御一緒によい所へお越しなされませ。私に附いておいでになれば、野遊びでも船遊びでも、お好み次第でござります。

(鷲姫) そなた、ほんたうに好い所へ伴うて賜るかえ。

(赤鬼) えゝえゝ、なんで私が僞りを申しませう。嵐山でも嵯峨野でも、姫君樣のお好きな所へ、きつとお供を致しまする。

(鷲姫、雀躍りして喜ぶ。)それが本當なら嬉しい、嬉

しい。これ赤鬼、早う妾を連れ行きや。

(赤鬼) よろしうござります。さあ、さあ、おいでなさりませ。

赤鬼、不意に姫の襟頸を捕へ、荒々しく小脇に抱へて廊から庭に飛び降り、下手奥の闇に消行く。鶯姫の「あれエ！助けてエ！」と叫ぶ聲が、ほのかに二三度聞えて來るが、誰も氣が付きたる様子なし。女童、あはたゞしげに酒宴の席へ駈け付けて、左大臣に注進する。

(女童) 申し上げまする。唯今阿部晴明さまが、急な御用でお越しなされてござりまする。

(壬生大臣) 晴明が參つたとな。はて何事であらう。

女童の後から、阿部晴明が同じく蒼惶として駈け付ける。

(阿部晴明) 何事とは迂濶千萬。某唯今御門前を過ぎたるところ、一匹の赤鬼が、此のお邸へたしかに忍び入つたるけはひ。捨てゝ置いては一大事でござりまするぞ！

(壬生大臣) えゝ、赤鬼が！

大臣を始め主客一同眞青になる。此の時再び、遠く遠く、鶯姫の悲鳴が聞える。

(藏人命婦、始めてハッと心付き、)おゝ大變ぢや。姫君のお姿が見えませぬ。姫君様、姫君さまいなう！(狂氣の如く簀子の周圍を馳せ廻る。)

(阿部晴明) うむ、さては鬼めが、姫を浚つて行つたと見ゆる。

(生壬大臣、勾欄の角に立ち上つて、大音に呼ばゝる。)姫よ、姫よ、鶯姫は何處へ參つた。——こりや、衛士の者どもは居らぬか。早う松明を燈して參れ。

下手より五六人の衛士の面々、手に手に松明を打ち振りつゝ現はれ、庭の隅々を隈なく照らして見る。

(藏人命婦) 姫君様、姫君様、姫君様さまいなう！

(壬生大臣) 姫よ、姫よ、姫は何處ぢや。父の聲が聞えたら答へてくれい！

(藏人命婦) もし、晴明さま、姫は何處へおいでなさ

れたか、占うて下さりませい。
(阿部晴明)されば某按ずるに、はや姫君は此の邊にはおはしませぬ。鬼に捩はれて、東の空を高う高う翔つて、今しもちやうど東寺の塔の頂邊に、引き据ゑられて居られまする。
(冷泉親王)東寺の塔の頂邊ぢやと?
(阿部晴明)さやうでござります。
皆々簀子に立ち出で丶、もどかしさうに東の空を打ち仰ぐ。
(梅小路三位)東寺の塔の頂邊では、太刀も逹かず矢も及ばぬ、はてさてお傷はしい事ぢやなう。
(藏人命婦)なう晴明さま、其方は日本一の陰陽師ではおはしませぬか。どうぞ其方の御修法の力で、姫君樣をお救ひなされて下さりませ。
(阿部晴明)其の仰せを待つ迄もござりませぬ。鷲姫の御命は、しかと某がお引き受け申すでござらう。
(壬生大臣)おゝ、忝い忝い。姫の命を救うてくれたら、丹波の國の身が莊園を、殘らず其方に取らするぞよ。
(阿部晴明)有り難う存じまする。——某たゞ今此の場に於いて呪文を唱へ、天上の雷神を呼び出して、塔上の鬼を退治させるでござりませう。
(藏人命婦、空に向つ合掌しながら、)姫君さま、姫君さま、どうぞ御無事でお歸りなされませ。
(阿部晴明庭前の池の汀に降り立ち、瞑目して印を結び、口の中で厳かに咒文を唱へる。)唵、啡啰囉啤、摩訶鉢羅、很那哿、吻什吻、……
忽ち一陣の風が吹き起つて、殿上の燈火を消す。見る見るうちに四面暗澹となり、雨滴の音がぱらぱらと響く。
(衞士の一)やや、今迄空が晴れて居たのに、大粒の雨が落ちて來た!
(衞士の二)雨だ!雨だ!大雨だ!
(阿部晴明、尚も呪文を續けて居る。)微咭微、摩那柄、

鳴深暮、嘔嘩吽吽、泮泮泮、婆訶。…………

大雨沛然として到る。暗夜を劈く電光。雷鳴。——

第四場、 東寺の塔の頂邊。舞臺一面に暗黒。稻妻のはためく影に、塔の頂上の甍のあたりが纔かに見える。赤鬼が屋根瓦に腹這ひながら、鷲姫の袴の裾をしつかりと摑んで、ぐいぐい引張つて居る。姫は一生懸命に九輪へしがみ着いて、頻りに悲鳴を放つ。

（赤鬼）さあ、己の云ふ事を聽かないか。聽かなければ此處から下へ突き落してしまふぞ！ 此の塔の高さは、十八丈八尺二寸あるのだ。此處から落ちれば粉微塵になつてしまふぞ！

（鷲姫）あれエ！助けてくれエ！

（赤鬼）えゝ、何と云ふ剛情なあまつちよだ！ さあ己の云ふ事を聽け。聽きさへすれば、お前の好きな野遊びでも船遊びでもさせてやるのだ。

（鷲姫）いやぢや、いやぢや。其方は妾を欺したのぢや。どうぞ妾を父上の許へ歸して賜れ。いやぢやわいなう。

（赤鬼）よし、よし、此れ程云つても聽かなければ、いつその事頭から嚙をつけて、齧つてしまふぞ！

（鷲姫）あれエ！ 助けてエ！

赤鬼、屋上に立ち上つて鷲姫を喰ひ殺さうとする。更に激しき雷鳴と電光が起る。

上手の空から太皷を背負つた雷神が、黒雲に乘つて屋根へ降りて來る。

（雷神）やい赤鬼！こいつ不埒な奴だ！

雷神、二人の間に分けて入つて鬼を突きのけ、鷲姫を背後に庇ふ。

（赤鬼）なんだ貴樣は？ 人の仕事の邪魔をしやがつて、一體何處からやつて來たんだ。

（雷神）己は天に居る雷神だが、日本一の陰陽師の阿部晴明に賴まれて、鷲姫を救ひに來たのだ。己が此の場へ這入つたからは、もう姫君に指一本でも指させは

しないぞ。

（赤鬼）雷神でも風神でも、己の仕事の邪魔をする奴は斯うしてくれる！

（雷神）この赤鬼め！　生意氣云ふな！

赤鬼、雷神を相手に猛烈な格鬪を演じた揚句、とうとう負かされて右の腕を捻ぢ上げられる。

（雷神）さあ、どうだ、參つたらう。

（赤鬼）あいたゝゝゝ。あやまつた、あやまつた。

（雷神）いくら詫つても、貴樣のやうな奴を生かして置く譯には行かないのだ。此處から下へ突き落すから觀念しろ。

（赤鬼）きやッ。

と叫んで、塔上から眞つ倒まに落される。

第五場、舞臺がパッと明るくなると、第一場と同じ女學校のヱランダに、大伴老人が以前の如く倚子に腰かけて眠つて居る。何か惡夢に魘されて居るらしく、うんうん呻りながら手足を藻搔く。

上手から壬生野春子が駈けて來て、老人の寢姿を見守る。

（壬生野春子）先生、先生、（肩を押して搖り起す。）まだ寢つて居らつしやるんですか。もう三時でございますよ。

（老人）うーん、うーん、

（壬生野春子）先生、どうしてそんなに呻つて居らつしやいますの。先生、先生つてば！

老人、あまり體を藻搔き過ぎて、バッタリと倚子から轉げ落ち、眼を開くや否や、

（老人）おゝ鷲姫！（と云つて、突然春子にかじり着き、ふと氣が付いて極まりが惡さうに。）うん、あなたは壬生野さんだつたか。

壬生野春子、さもさも氣味が惡さうに默つて老人の顏を見詰める。

（老人）壬生野さん、勘忍して下さいよ。わしは夢を

見てな、寢惚けて居たものだから、あなたに飛んだ失禮をしましたわい。

（壬生野春子）先生、私何だか先生が恐くなりましたわ。

（老人）なあに恐い事も何もありません。今は寢惚けて居たんですよ。はゝゝゝ。

（壬生野春子）ねえ、先生、その鶯を私に返して下さいましな。私考へて見たら、やつぱり籠の外へ放してやつた方がいゝと思ひますわ。

（老人）おゝ、成る程、此の鶯が傍に居たので、私はあんな夢を見たのだ。さあ、さあ、あなたに返して上げませう。

少女、老人より籠を受け取り、蓋を開いて鶯を放してやる。

鶯、喜ばしげに囀りながら、翩々として空高く舞ひ上る。老人と少女とが其の影を見送つて居る。

（幕）



或る生活の一片

里見弴

　どうしたものか、直ぐに肩がこつて仕方がなかつた。盆の窪の兩側の所に、赤錆の鐵棒（ボオト）を二本差し込まれてゐるやうに一寸でも首を動かすと、不愉快な鈍痛が頭に響けた。按摩をとつてみても、翌る日はまた同じことだつた。體中（からだぢう）の血がネットリと重湯のやうになつてゐるのではあるまいかと思はれるほど、體を動すのも大儀なれば、腦のはたらきも鈍つて了つた。そこへ、二つの雜誌に書く約束の原稿の締切がドン／＼迫つて來た。何よりもそれが氣になつてゐながら、どうしても、書かうと云ふ氣――或は書かずにはゐられない氣が起つて來なかつた。一寸した亢奮が來た時に直ぐ机に向つてみても、丁度夢のなかで非常な哲理などを考へついて、これだ！と思つたのが、朝になつてから考へてみるとまるで取り止まりのないことであるやうに、亢奮が去ると同時に、その書きかけは破らずにはゐられないやうなものになつて了つた。

こんな時いくら悶掻いたつて何が出來るものか、かう思つてせめて一つの方だけでも斷らうとした。賴まれるとか催促されるとか云ふ外からの刺戟でも、よい作を生むいくらかの助けになる場合も少くない。だが今度はとてもいけない。――一體なんのために書くのだ？

で、電話口に呼び出したT君は、一體、暮れも新年號のを書き終えて間もなくに見えたのだ。その時、

「どうです、今年のうちにもう一つ。正月になると、何んのかんのつて遊んぢまひますぜ」

と云つてくれたが、新年號の原稿では、書きながら机の上へ突伏して了ふやうな無理をした上句なので、いづれ一休してからと思つてゐるうちに、かう云ふ惡い腦の狀態が來て了つたのだ。それほど充分な時日を與へられてゐながら、今更、差し迫つてから斷りを云ふのだから氣がひけた。電話口に立つて、

「どなたのかあるんでせう？　今度は一つ、先に延ばして下さいな」こんな風に云ふのだから先方でも、

「いや實際ないんです。貴方のはもう出來てる時分だと思つて當てにしてゐたんですから」などゝ云ふので、結局無理押しつけに押しつけられて了つた。

もう一つのは、申込はそれよりも後だつたが、十二月號を無理を云つて斷つてゐる義理があるので、この方は電話をかけてみる勇氣もなかつたし。よしさうした所で同じ結果より得られまいと思つて今りて了つた。

幸に、月にいくらかづゝ稼がなければ食つて行けないわけでもないのだから、義理や人情にからまれて、出來ないものを無理やりにへり出す必要はない。必要がない所ではない、そんな墮落は許されな

い。雜誌の編輯人に不信用になつて、原稿の賣り道を失ふのと、惡い仕事をするのと、——まるで比べものにならない！

然し、書けない書けないで苦しむでゐたのが、締切間際の死物狂で、俄かに道が開けたやうに、正しい所へ頭からのめり込むだおぼえもある。沒義道に斷り切れないのは、あながち編輯人の信用を失ふのが恐いわけでもなく、みす〳〵人の困るのを見てゐられない弱い性分からばかりでもない。今度と云ふ今度は愈々駄目か、それとも、背水の陣を敷いたら、また案外な結果が得られるか、それは實際あたつて見なければ解らない。所がそのぎり〳〵決着まで引ッ張つて置いて斷るとなつたら、編輯人の迷惑は一層甚だしいわけだ。結局編輯人にその迷惑を忍むで貰ふか、こつちがいゝ加減な所で見切をつけるかの問題だ。

赤銹の鐵棒を盆の窪に差し込まれた狀態のまゝでこんなことを考へたり、机に向つて「死物狂ひ」の心持に這入らうと努めてみたりしながら、また四五日たつた。

或る晩、非常に潔癖な中年の男が好意を寄せてゐる女主人の不潔癖に堪えられなく感じて自分の片腕を切る話を書かうとしてゐた。その晩はまた特別に腦が惘然してゐて、筆が、いくら沈めやうとしても、水中の木片のやうに、すぐ表面へ浮いて了つて、どうしてもものになりさうもなかつた。筆を擱つて考へやうとすれば、それもまた表面に浮き上つて了つた。その話はよしてもう一つのかきかけの方を試みたりしてゐる時に、階段を上つた所の障子がスウッとあいて、「旦那さん」と、心細げな聲をかけられた。

ドキッとして振り返つて見ると、寢間着姿の妻が寒さうに立つてゐた。

「どうした」

「少し痛い」

妻は臨月だつた。ちつとも興の乘らない、澁り切つた筆を擱く立派な理由が出來たことが、第一に氣持を明るくしてくれた。

「さうか、大分痛むか」

「えゝ、まだそんなでも……」

「俺の床へ這入つて寢てゐろよ」

まだ机の前は動けないと思つた。しかし、一二時間出ないうちに、仕事のことなんぞ、自然と吹き飛ばされて了ふやうな時が來ると云ふ考に安心して、もうそろ／＼上の空になりかけてゐた。妻は床に這入ると同時に、腹痛をこらえるやうな息づかひをした。

「大分痛むやうだね。電話をかけて來やうか」

「まだ／＼。まだ大丈夫ですよ」

「さうか？」

「今何時です？」

「四時二十分過ぎだ。だけど、郵便局からかけるから、ちつとも遠慮することはないよ」

「でもまだ早やござんすよ」

妻は床のなかでカタ／＼震えてゐた。

「何んだ、恐がつてるな。ちつとも心配することはないぢやないか」

「寒いんです」

「湯たんぽを取つて來てやらうか」

「よござんすよ」

「よかないよ」から云つて机の前を立つた。もう仕事のことは忘れてゐた。生死の大役を目前に控えてゐる妻の不安な心持が、いぢらしく、可愛かつた。階下の妻の寢床へ湯たんぽを取りに下りた序に下女を起して、第一に火を起し湯を沸すやうに云ひつけた。案外痛みの鎮つてゐる間が短いので、もう妻の云ふやうに落ちついてはゐられないと思つた。

枕頭に座つて容子を見てゐると、ふいと、妻がこの產で死にはしまいかと云ふやうな考が浮んだ。死んだ長女の產の時には、それは、その同じことは、全く「考」と云ふやうなものではなくつて、胸に喰ひ込むやうな不安な「心持」だつたが。――妻の死後を考へた。仕事に勞れて惘然した腦で、明け方の身に染む寒さに懐手をして、大した不安も感じずに、ポツネンと枕頭に座つてゐた、妻の死ぬ數時間前の自分自身の姿を妻の死後に思ひだしてゐる自分――さう云ふものが第一に腦に浮んだ。その感じは、眠つて目が覺めてみたら、もう自分は死んでゐたので、あゝさうか、もう死んだのかと云ふやうな氣で、寺の本堂のやうにガランとした冷い疊の上に一人で座つてゐる――さう云ふやうな、落寞として、人間味の遠いものだつた。その次に、妻でない女、(或る女ではない)男子席から女子席を見渡したやうに、一と塊に向ふに眺めた妻ではない女と云ふものが考へられた。すると、急に肚の底まで人臭くなつた。そ

れでも、別にその思ひがけない結果に慌て、「前言を取り消す」と云ふやうな心持は起らなかつた。その代りにその「人臭い」心持もそれ以上跳梁を極めるやうなこともなく、消えて了つた。――凍死しかけてゐる人が感じさうな安易が、總ての感情をボヤ〳〵と湯氣のやうに包むでゐた。たゞ目の玉の奥の方が妙に痛かつた。

子供が死んだら――さう思ふと急に、ハッとなつた。前のこと――と云つてそれは何んだつたかもう忘れたが――それとは比べものにならないほど、これは重大なことだ――さう云ふ風に考へられた。

「オイ、もう電話をかけやうよ。ちつとも遠慮することはないぜ、先方はそれが商買だもの」

「さうですか、寒いのにお氣の毒さんですね」

「このまゝで行かう。まさか泥棒と間違へられもしまい」厚いどてらのまゝで戸外へ出た。大きな月が殘つてゐて、カチ〳〵になつた往來が青白く明るかつた。

二階の八疊を産室ときめて置いたので、そこへ寢床を移したりしてゐるうちに、産婆の助手が來た。大きな庇髪を疊の上へペタリとつけたので、圓がその六分の一ほどの弧を失つたのを見て、随分丁寧なお辭儀をする人だと思つた。それからだん〳〵狭い家のなかゞガタつきだした、良人と云ふものがだんだん Out of place になつて來て、女中などの方が重大な人間になつて了つた。良人はうつかり産室にも這入れないで、マゴ〳〵してゐた。夜があけてから、買ひ調へて置くのを忘れてゐた火燵を買ひに行つて、荒物屋を叩き起した。薄い寢着のまゝで潜をあけた小僧に、殆ど呪ひに近ひ目付で睨まれた。大きな火燵櫓をかつぎつゝ、「良人の存在が、このやうな役目に於てのみ發揮される時」を苦笑ひながらも、

厭々しくは感じなかつた。長女の時には？あゝ、どんなにその役目を幸福に感じたらう。さうしてこの次の時は、そのまた次の時は……。人はこのやうにして感情の新鮮を失つて行く。失つたもの、或はそれ以上を何かで取り返してゐるだらう。然し、どんな結構なものとそれを取り代へたとした所で、兎に角それを失ふことは、それ自身緩慢な老耄作用に違ひない。必ずしも老耄を惡いとは云はない。當歳より二歳の嬰兒は老耄してゐる。たゞこの老耄を、「智慧」または「經驗」だと感じて、自ら矜持するに至つては、愈々老耄も第三期の慢性に這入る。——何年來朝と云ふ時間を寢て暮す習慣になつてゐたのが久し振りで爽かに霜の氣にうたれたせいか、大分氣持がハッキリして來て、こんなことを考へながら歸つて來た。

程なく産婆が來た。手傳の女が來た。良人は階下の間で新聞でも讀むより仕方がなかつた。八時頃嬰兒の泣聲がした。が、氣のせいだらうと思つて、また座つて讀み續けてゐた。二十分ほどすると二階がドシ／＼と騷々しくなつた。矢つ張りさうだつたな、と思つて二階の上り口へ行つてみると、上からお辭儀の丁寧な助手が、

「お坊つちやまでございます」と、潛めた聲で知らせてくれた。茶の間に引き返して、直ぐ電報を書かうとして、産婦はどうだつたらうと氣がつくと、頭でも掻きながら云はるべき言葉のやうな調子で、老耄老耄、と肚のなかで云つた。これも至極元氣で、案じてゐた心臟へもちつとも障りがないことが分つた。

二階へ上つて行つた時には、嬰兒は湯を濟ませて着物を着せて貰ふ所だつた。一目で、大變丈夫さう

であるのが何よりも嬉しかつた。生れたての嬰兒の顔は、大抵の子好きでも餘り可愛らしいとは思はないが、現に、長女の時がさうだつたが、今度は、これが、どう云ふ顔に育つて行くかもう分つてゐる上に、そのまゝで充分可愛らしく思へた。人は銘々の想像を云つたが、男とも女とも、まるで見當をつけてみやうとも思はなかつたが、「フウム男か」と思つて眺めると、また特別な嬉さがこみ上げて來た。かう云ふ嬉さが、そのまゝ一滴もあまさず、そこで、目の前で、クン／＼と仔犬のやうに鼻をならしてゐるものゝ可愛さだつた。その可愛さは、そのまゝ一滴もあまさず、また、親たちの嬉さだつた。自分を愛すると云ふことが、そのまゝピッタリ人を愛することである美しい例がこゝにある！炭がダイヤモンドであると云ふ例が。

子供が生れる不思議は、造化の妙より何より、一つのものが二つになると云ふ點にある。各のものが、己と他の一つのものとを等しく愛し得なくなる點にある。子が、親のもので、彼自身のもので、死神のものである點にある。一つのものから分れた多くのものが、騙し合ひ、虐め合ひ、擲り合ひ、大砲を撃ち合ふ點にある。――分れたてのもの等、親たちと嬰兒とは、そんなことはし合はないのに……。

兄の所へ電話をかけて行つた留守に、兄はもう生れた頃だらうと思つて出かけて來てくれた。臺所口から這入つてみると、いきなり兄が、

「おめでとう！」と云つた。

不意を食つて、あぶなく涙が溢れさうになつた。

「ありがとうございます」と頭を下げた時に、父がもう少し生きてゐてくれたら、と、初めてさう思つ

た。正確に云へば、一と月と六日。ぼんやりしてゐれば直ぐ經つて了つたそれだけの日かずが食ひ違つたゝめに、祖父と孫とがこの世で會へなかつた。この誕生を心から喜むでくれる人が一人へつて了つた――が、その時にはもう心を甲ふてゐたから、そんなことを考へてゐると云ふやうな顔もしなかつた。どう云ふ必要から？　どう云ふ目的で？　センティメンタルな光景を嫌つて....さう手輕に扱つてくれるな。どんづまりの、もとはと云へば、一つのものが二つになつた不思議から生れて來たことだ。

產婦が落ちついてから、差し向ひの折、こんな話をした。

「えらかつた〳〵。よく心棒したね」から言はれると產婦は、謙遜と得意とが、申分のない程よい分量で盛り合はされた、嬉しさうな顔をした。

「男の子で、あんた嬉しいでせう？」

「お前は女の子の方がよかつたか」

「わたしやどつちでも....」

「夏繪（長女の名）の時俺がもの足らなく感じた程度で、今度はお前がもの足らないかな？　さうでもないだらうな、女親と云ふものは....」

「えゝ、だけど少し大きくなつたら、男の子はあんたにつくわね」

「さうでもないだらう」と答へたが、小學校も碌に出てゐない妻が、十四五の悴の云ふことが解らなかつた時の氣まづさで、今からもうひけた心持になつてゐるのが可哀想だつた。そんなことは親子の間でちつとも差支ないことだが、さてさう云ふ不安な豫覺を未來に有つた身になつてみれば、矢張り、女の

子であつたらば、と思つてゐるかも知れない。

「何んて名にしやうね」と話題を變へた。それから、いろんな名前を云ひ合つた。

その日は、祝に來てくれる兄弟たちや友達の間々を、晝のうち少しづゝ寢て置いて、夜はまた氣の進まない机に向つた。時々、隣の部屋で嬰兒が泣きだした。

「フギャア〳〵、フギャア〳〵」

筆をとめて聞き惚れて了つた。ちよつとでも看護婦の起きやうが遲いと、それをいゝことにして、直ぐ机の前を立つて行つた。平家蟹のやうな顰め面を眞赤にして、餘り美音でもない聲を振り立てゝゐるのだが、よくつてたまらないのだから不思議だ。頰を動かして乳首に吸ひついてゐる樣が、いくら見てゐても見飽きないのだから不思議だ。――手放しで嬰兒の惚氣はヒドい、などゝ誰かに云はれさうだが、こゝらで毒消しに、子供に醉ッぱらつてゐるオヤヂの背後をドヤして、正氣づかすやうな皮肉な云ひ草もないではないが、それはよさう。勢一杯本氣で、自慢の咽を程よく聞かせたあとが、「オヤ〳〵、大さう赤くなつて來ましたぜ」などゝ、直ぐに毒を消して置く柳家小さんは利口者だ。どこへ行つてもてさうなことを書いて、雨のやうにラブ・レタアを貰つたのは明治の小說家で、大正になつてからは、振られた話を書いた方が功果を擧げると云ふ。いくら相手が嬰兒でも、手放しの惚氣は藝道のコツを知らぬと云ふものだが、別段人氣も恐くはない。「オヤ〳〵、たうとう居直つたぜ」とまた誰かと云ふだらう。「誰か」又の名を「自分自身のうちに潛む氣の弱い神經質」と云ふ。最もケチな根性だ。

ヒドく腦の具合の惡い時だつたが、嬰兒の顏を見詰めてゐる方が、机の前にコビり附いてゐるよりも

數倍樂しい時だつたが、まだ仕事は斷念しきれなかつた。僅かな原稿料が欲さでもない。名聲を落したくないからでもない。(その目的のためならば、こんな時なまじ惡作を公にするより、靜かに養つてゐた方が得策だ)二人の編輯人に合す顏がないからでもない。何んでもかでも机に向つてゐなければ不安ならでもない。それ等の總ても僅かに一部の要素には違ひないが、第一には、まだ何かに成るかも知れないと思つてゐたからだ。嬰兒の泣き聲と云ふ不思議な誘惑に打ち克ち〱盲めつぽうに書いた。

大きなカンヴアスに、一生懸命な筆で、遠くの山、近くの流れ、手に取るやうに描てある「努力の作」。山野を跋涉して場所を撰定し、そこへカンヴアスを運搬し、廣い空の部分を塗りつぶすなどの勞働を「努力」のなかゝら差引くと、そこに何が殘るかと危ぶまれるやうな作。――いくら骨ばかり折つたつて、あれになつちやア困る、どこかに掘り當てやう、かう思ひながら、明け方電車が通り始める時分に階下の寢床へ寢に下りて行つた。床のなかで考へてゐると、いつか考を考へてゐることになつて、何んにも本當のことに觸れてゐないのも知らずに、一生懸命に考へ續けて、やがて、死んだやうになつて寢て了つた。

或る朝、といつても十一時半頃、新聞を見てゐると、新年號に書いた小説の批評が出てゐた。その小説のなかの主人公が、「金を單に金と考へて、その金とは人間生活の如何なるものが形を變へて表はれてゐるものであるかを充分に考へるだけの深さのないことが、その作の根柢の嚴肅を崩させて了ふ」由が非難してあつた。これには驚いた。充分どころか、それに就ては、あの小説を書いてゐた間一度でも考へ及むだことはなかつたので、改めて注文された點を、充分でもよいが、考へてみた。さうしたら、その筆者の謂ふ「根柢の嚴肅」と云ふものが、どう云ふものであるか、凡その見當がついた。嘘か本統か知らな

いか、その人は禁治産者だと聞いていたが、それを假に事實だとして考へてみると、一層成る程と合點がいくやうな氣がした。これが誠に虚を衝かれたと云ふのだらう。一本參つた！と云ひたくなつた。然し參つても口惜しくはなかつた。こつちで構えてゐる所には一と刀も打ち込むで來られない人なら、ほつておけと思つて、そして、「根柢の嚴肅」の上げ底が落ちたら、或はあの作の肉身が見えるだらうと思つて。そのあとに、作家は濫作を愼まなくてはならないことが忠告してあつた。この一句は慥かに應えた。毎晩机に嚙り附いて、赤銹の鐵棒を盆の窪に背負つてゐるのが勉強でもあるまいと思ひ始めた時なので、編輯人には氣の毒だが、もう斷然兩方とも斷つて了はうと思つた。が、まだ思ひ切り惡く、その晩も嬰兒の泣き聲を聞きながら、コツ〳〵書いた。

小さな家庭に、下女の外に、看護婦と云ふものが這入つて來てゐた。北部九州の產で、言葉に强い訛が殘つてゐた。この女は來るとすぐ、「お襁褓の洗濯」と云ふ仕事と、「奧樣の召上りもの」と云ふ仕事とを交換するやうに、下女に强談してるのを聞いた。然し臺所の仕事は、矢張り下女でなければ分らなかつた。食後の果實を請求したり、風呂を沸す日を指圖したりすると云ふ話を、下女が、唯の噂話としての裏に、烈しい憤慨を藏して產婦のところへ持つて來た。下女も下女らしい。

神田あたりにある看護婦會の氣風と云ふものが、この女を見てゐると略思ひやられた。夕方の忙しい時分にまた尋ねて來る女があつて、それも上り込む。使へるやうな部屋は、三間よりない家では、主人が茶の間から二階へ食膳を持つて上らせると、そのあとで二人の女が悠々と話し込むでゐる。「オヽ寒、さむ〳〵、〳〵」とかけ聲をして階段をバタ〳〵駈け上つて來て「階下は隨分お寒うございますわね」——夏目氏が「硝子戸のなかより」に書いゐた、茶を淹つて寄こして、富士山の繪に讚をするやうに賴むで來た

男を思ひ出した。天眞爛漫とか、無邪氣とか、粗朴とか云つてゐられないたちの露骨ほど始末の惡いものはない。僞善者の神經は彼等のより練磨されてゐるだけでも、表面の交際には遙かに結構なものだ。

「旦那様のお机の上にある黒い表紙のご本は、旦那様のご著書ですか」

「さうです」

「拜見いたしてもよろしうございますか」

遊女に客を撰擇する權利はあつても、作家には讀者を否む方法すらないのが情なく思はれた。かう云ふ人も買つて行くかと思ふと身震ひがしさうだつた。

「面白くないから、よした方がいゝでせう」

「まア、ご謙遜！」

然し、これと似たりよつたりの女が、少し綺麗な布を體にくつつけて、恣な氣持と酒との雰圍氣のなかに現はれて來れば、相應に興がるのだ。偶々愛兒の溺愛の傍に、不格構な白いものを着て、色氣のない漢語を使はれるので、恐れ震え上つてゐるのは、神經の我が儘に過ぎない。或る時には、無恥である故に、露骨である故に、彼等を好むではないか。さうしてより嗜みよい女、或はそのやうに振舞ふ女を喜ばないではないか。嫌ふなら、どんな場合にも嫌ひたいものだ。好むなら、どんな場合にも好みたいものだ。無關心になれるなら、いつでも無關心でゐたいものだ。この三つのうち、どれかに就かなければならないのだぞと、何か、閻魔様のやうな恐い奴に睨まれたとすると、「ヘイ」と云つたきりで、まだ、いつになつたら、それに即答が出來るやうになるかも分らない。たゞ、まだ〳〵無關心などにはなりたくない氣がしてゐる。それ所か、かう云ふ女の總ての點が許せて、博い愛の心で接することの出來るやう

な人は、一寸想像も出來ない。この女に相應した戀の相手や、彼等の間の愛は想像できるが――。誰でもを愛したい心持は有つてゐるつもりだ。が、恰もそれとは別問題のやうに、嫌な奴はまたどうすることも出來ない。

嬰兒に、一定の時間を隔いて乳を哺む習慣をつけるために、いくら泣いてもほつて置かなければならない時があつた。さう云ふ時に口に銜ませる護謨の乳首を、看護婦に頼まれて買つて來た。硼酸水を入れたコップのなかに、それを水母のやうにプカ〳〵浮かしたのが、枕頭に置いてあつた。或る時、時間前に泣き出したが、そこらに誰もゐなかつたので、立つて行つて、自分の手で初めてそれを口のなかに入れてやつた。嬰兒はコク〳〵咽をならして、一生懸命でそれを吸つた。そこから、空腹を充す液體が出て來ることを信じ切つてゐるやうに。

「最初の嘘だね。可愛想に」

「何んです？」

「いゝえね、生れて初めて騙されるんだよ。ソラ〳〵、もうこいつ、世の中には贋ものがあるつてことを覺えちまつた。自分で舌の先で出すよ。一生懸命ほんものを探してら」

妻には、それが冗談のやうにも、本氣で云つてゐるやうにも聞えた、云つてゐる方でも、もうこんな護謨の乳首なんぞ捨てちまへ、と思ふほど、何んでも信じるものを詐ることが苦々しいとも思はれ、またかやうに思慮深く、消化不良などから、何んにもわけの分らないものを保護してゐる仕方を、どうしやうもないと思ひもした。

「生れて一日か二日もすると、もう親が嘘を数へて置きながら、後になつてから、何んだ、親を騙しや

アがつて、ふてえ奴だ、を喰はせるんだから慨はないね」
「だつて、そりや仕方がないわ」
「なぜ」
「なぜつて……」
「仕方がないと云ふのは親の云ひ草さ。その「仕方がない」は、後に自分達が騙された時にもそのまゝ報つて來る「仕方がない」だ。さうだらう？」
「だつて、まだ西も東も解らないうちですもの」
「西や東は解らなくつても、膣ものならほき出すし、本ものなら吸ひつくよ」
「いゝえ、まだ何んにも解らないから、こつちで時間を計つて、ちやんとしてやらなきやア」
「解らなかないよ。嬰兒が解らないことは、六十になつたつて七十になつたつて、矢つ張り解らないことなんだ」
「負惜み……。それぢやア、泣いたらいつでもドン〳〵哺ませますよ」
「いけないよ」
「それごらんなさいな」
「いけないわけはね、腹がすいた時ばかり泣くんぢやアないからね、その見分さえつきやアいゝんだよ。それが解らないのは、お前の方が惡いんだよ」
「おやァあんたにお願ひするわ」
「そんなことは女の役だよ。兎に角俺は、その護謨を銜えさせることだけはご免かふむるからね」

ほかの者がするのは仕方がないとして、自分の手は穢したくないやうな氣がした。「仕方がないとして」と云ふ點で、心が穢れることは餘り氣にならないで。

仕事は相變らず纒まらなかつた。

どうも可怪しいと思ひ出した。これには何か原因がある。

この正月は、父の忌中であつたにも拘らず、以前の放蕩生活に逆戻りをしたやうな、大分ヒドいまねをした。平凡ではあつたが、次第に或る厚みを加へやうとしてゐた生活が、一時ガタ／＼と來たやうな氣がした。

商賣人ではない女と、初めて遇つて四五時間も經つか經たないに、一つの床のなかで寢たり、醉ッぱらつて、外套や襟卷をどこかで失なして來たりした。餘ッ程矯め直したつもりのだらしのない性分が、醉つてみると、まだそのまゝの形で、肚のなかの直ぐそこいらに潛むでゐた。

常から、自分で自分の行爲を吟味するのに二つの定木があつた。一つは、亡つた祖母と自由に話が出來るやうな心持になつた時に、種々とこつちのことを話してゐるうちに、ふと口を噤まなければならないやうに感じる場合がある——その、死んで、時代の道徳や善惡の標準などから超越して了つた最愛の祖母にすら、後めたくて話し憎いやうなこと、これが仕てはならないことだ。もう一つは、自分の自叙傳を書く時に、七十になつても、八十になつても、それぱかりは書けまいと思はれるやうなこと、これも、よせばよかつたと後悔することだ。——一言に、くだらなく云つて了へば、「自分で許せないこと」に外ならないのだが、然しそれを、死んだ祖母やいつ書くか分らない自叙傳の前まで必ず持つて行つてから吟味するのは、癖でもあり、また自分で自分を詐ることの出來ない、自分用の「お白洲」へ自

分で自分を引き出すことだつた。——勿論この正月の出來事などは、どつちの「お白洲」へ持ち出しても、大して驚くやうなことではなかつたが、「妻」の前にはどうしても具合の惡いことだつた。妻と自分とは、何んと云つても、遠い以前に分れた二つのものだつた。「妻」を自分用の「お白洲」へ引き出すことはあつても、「妻」が「お白洲」の正面、奉行席に着席するには、彼女はあまり生きた人間すぎた。——そこに、自分の心では「無罪」でも、妻の前には恥かしいと云ふやうな、矛盾した感じを抱かなければならない場合が生じた。勿論押しつめて考へれば、自分はどこまでも「お白洲」の判決に就く。「妻」が喜ぶことでも「お白洲」で「有罪」を申し渡されるやうなことはしまいし、いくら「妻」に咎められても「お白洲」で「無罪」なことは少しも恥じないでいゝわけだ。言葉を換えて、「お白洲」を「自己」と呼ぶなら、「妻」は「世間」が最も自己に近づいて來てゐる末梢と云つてもいゝ。色で云ふなら中間色ではあらうが、兎角に、自分と云ふものをそこに建てゝ考へれば、それに對する世間と云ふものとの、最も近い接觸點が「妻」だ。元來世間と云ふものは儘にならない、わからずやと相場がきまつてゐる。いくら「妻」でも、自分とは別なもの、二つのものである以上は、「世間」と云ふものゝ血をも享けてゐて、「儘にならない」特性を有つてゐる。かう云へば、「彼には妻をさえ己に同化させる力も根氣もない」と考へる人が多いだらうと思ふ。然し何んと云はれても、今の所、自分にとつては「妻」を「お白洲」の奉行席に坐らせるやうに仕立てるには、彼女を殺すより外に道がないやうに思はれる。二つのものゝ一つをなくして、彼の、祖母のゐる淸々とした世界に送り屆けるより外に、自分のうちにソックリ彼女を取り入れることはむづかしい。自分の「お白洲」は相應に嚴格であり、彼女はまだ〳〵多量に「世間」の血を有つてゐる。

嬰兒よ！Aから分れたばかりのAよ！Aのなかで哺むだものを、胎便として有つたまゝ出て來て、まだそれを排泄すらし切らないうちに、もう既にお前がAであることの不思議さよ。お前も、親のものであり、お前自身のものであり、さうして死神の掌中のものだ！

仕事のことを話しかけて、これは、全く違つた方へ來て了つた。

此間ぢうはだらしのないことをした。それは自叙傳に書けないやうなことではなかつたが、その報ゐは矢ッ張り現はれて了つた。どんな生活でも仕事の內容にはなる。けれども、惡い生活がよい仕事のモチィフにはならない。生活がそのまゝ仕事だ。云ふ迄もなく、生活と云ふ言葉は、云つたり仕たりしたことばかりを指すのではない。見ず知らずの女と寢たことは重大なことではない。それについて、どう考へたか。そのことをどの程度の深さで「生活」したか。それが問題だ。

妻は、永い間心棒よく養生をして、健康な嬰兒を生むだ。

良人はだらしのない生活のあとで、難產をした。まだそれが、一人前の子であるかどうかも解らない。

健康な、よいAを生むためには、Aは常に健全であらねばならない。それは、女が子を生む時にも、男が仕事を生む時にも、全く同樣に必要な條件だ。

女は、よい仕事を生むためのよい男、或はそれを生むためのよい女を生むでくれる。男は專心によい仕事を生む――これは、間違ひもなく、人の道だ、自然の意思だ。

嬰兒はどう育つて行くだらうか。

父親の仕事はどうなつて行くだらうか。

髮兒は、遂には死神のものだ。

仕事は？父の仕事は？子の仕事は？そのまた子の仕事は？

六年一月作

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區銀座三丁目	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　北區東梅田町	宮内立盛堂
京都市七條停車場前	三共社
仝　間之町七條	大盛社

○定價　金參拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	内國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
	以上郵税共	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

廣告取次店

送金注意

一 誌代郵税　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一 郵便爲替　にて御送金の場合は指定を本郷區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盗取さるる虞なし

一 振替貯金　口座は東京三十四番なり

一 郵券代用　必ず一割増の事

一 集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢　及送料共）

一 受領證請求　は必ず返信料を要す

大正六年一月二十九日印刷納本
大正六年二月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地
中央公論社
電話下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

OCHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6.80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.